岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 200

南　方　遺　跡

広島高裁岡山支部･岡山地家簡裁
庁舎建て替えに伴う発掘調査

２００６

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

岡山市のほぼ中心を南北に流れる旭川の沖積平野には、早くから人々が住みはじめ、その生活の痕跡である多くの遺跡が知られています。その始まりとなる縄文時代の遺跡と、その後の弥生時代から古墳時代にかけての大規模な遺跡が形成されていることが、これまでの調査で明らかになっています。

南方遺跡は、戦前から広く知られ、当地区から出土する土器は、東瀬戸内地方における中期の編年標準型式となっています。南方遺跡が具体的に明らかになったのは、昭和34年の国立岡山病院建設工事で出土したことが最初であり、以降新幹線市道部分、済生会病院建設等に伴う調査で、弥生時代中期の大規模な集落であることが明らかにされてきています。

平成12年南方遺跡の南東部にあたる岡山地家簡裁の改築が計画され、岡山県古代吉備文化財センターでは、新築予定地を同年に試掘調査を実施しました。その結果、微高地と低位部とみられる堆積層が認められ、微高地上には遺構の存在が把握できたのです。

このたびの調査では、従来の弥生時代中期のほかに、まだ確認されていなかった弥生時代末の遺構が多数検出されました。この遺構は、袋状土壙と呼ばれるもので、県下では、これまで弥生時代後期初めのものは多くの調査例がありますが、この時期の袋状土壙が176基を超えて検出されたことはありませんでした。その性格は貯蔵穴として一般的に認識されています。しかしながら、南方遺跡の袋状土壙は、その内容から従前の貯蔵穴という性格について、あらたな問題を提起する重要な資料と考えております。

本書が文化財の保護･保存に活用されるとともに、今後の地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、地域住民の皆様をはじめ、最高裁判所ならびに広島高等裁判所岡山支部、岡山地方裁判所、岡山家庭裁判所、岡山簡易裁判所からは多大な御協力を賜りました。記して深甚の謝意を表する次第です。

平成18年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長　松　本　和　男

例　　言

1　本書は、岡山県教育委員会が、広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁庁舎建て替えに伴い、最高裁判所と岡山県との委託契約に基づき実施した、南方遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

2　南方遺跡は、岡山市南方１丁目 8-42 に所在する。

3　発掘調査は、平成 16 年４月～ 10 月下澤公明・小松原基弘・水田貴士、同 11 月を下澤が担当して実施した。面積は 3,398.49㎡である。

4　本書の作成は、平成 16 年 12 月～同 17 年３月に実施し、下澤が担当した。

5　本書の執筆は、岡田博・下澤・小松原・水田が担当し、文責は、文末に記した。全体の編集は、下澤が行った。

6　自然科学的分野における鑑定、同定については次の機関に依頼し、成果については報告をいただいている。

・　種実の同定	株式会社　古環境研究所
・　材の樹種同定	株式会社　古環境研究所
・　植物遺体分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
・　土壌理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

7　本文に掲載した遺構写真は、調査担当者が撮影した。遺物写真については、整理担当者の指示により江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

8　本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻 1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は、海抜高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。遺跡の調査に用いた座標値は、日本測地系に準拠しており、抄録に記載した経緯度についても同じである。

2　本書記載の遺構および遺物断面図の縮尺は、次のように統一している。例外については、挿図に縮尺率を図示もしくは明記している。

遺構

袋状土壙：1/60　　溝：1/30　　土壙：1/40

遺物

土器：1/4　　土製品：1/3　　石製品：1/2　　木製品：1/6

3　規模の数値は、遺構プラン検出時の値である。

4　本書記載の遺構配置図に示した遺構名は、次のように省略している。

袋状土壙：袋　　土壙：土

5　本書記載の挿図番号は、遺構番号、遺物番号とも通し番号である。

遺物番号は、土器以外のものについてはその素材を示すため番号の前に次の略号を付した。

石製品：S　　土製品：C　　木製品：W

6　本書記載の土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

7　本書記載の土層断面図・土器観察表などに使用した土色について、記号化して表記しているものは、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。

8　本報告書に用いた時期表記は、津寺遺跡２（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 98）の編年に準拠し、その内容については、各執筆担当者の解釈による。

9　第７・８図は国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「岡山北部」「岡山南部」を複製・加筆したものである。

本　文　目　次

序
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査の契機と経緯 …… 1
　第１節　発掘調査の契機 …… 1
　第２節　発掘調査の経緯と体制 …… 2
　　１　調査の経緯 …… 2
　　２　調査の体制 …… 5
　　３　日誌抄 …… 5
　　４　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 7
第２章　遺跡をとりまく環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 10
第３章　調査の概要 …… 13
　第１節　第Ⅰ調査区 …… 13
　　１　第ⅠＡ調査区 …… 13
　　２　第ⅠＢ調査区 …… 27
　第２節　第Ⅱ調査区 …… 50
　第３節　第Ⅲ調査区 …… 64
　第４節　第Ⅳ調査区 …… 73
　第５節　第Ⅴ調査区 …… 97
第４章　結語 …… 112
　第１節　袋状土壙について …… 112
　第２節　讃岐系土器について …… 115
　第３節　袋状土壙出土の木器について …… 118

図　目　次

第１図　調査位置図(1/2,000) …… 2
第２図　調査区位置図(1/2,000) …… 2
第３図　基本層序(1/50) …… 3
第４図　10層下出土遺物(1/4) …… 3
第５図　調査区遺構配置図(1/600) …… 4
第６図　遺跡の位置(1/20万) …… 9
第７図　周辺遺跡分布図〔昭和28年〕
(1/25,000) ……11
第８図　周辺遺跡分布図〔昭和63年〕
(1/25,000) …… 12
第９図　第ＩＡ区 遺構配置図(1/300) …… 13
第10図　袋状土壙1(1/40)・出土遺物(1/4) … 14
第11図　袋状土壙2(1/40)・出土遺物(1/4) … 14
第12図　袋状土壙3(1/40)・出土遺物(1/4) … 15
第13図　袋状土壙4(1/40)・出土遺物(1/4) … 15
第14図　袋状土壙5(1/40)・出土遺物(1/4) … 16
第15図　袋状土壙6･7(1/40)・出土遺物(1/4) … 17
第16図　袋状土壙8(1/40)・出土遺物(1/4) … 18
第17図　袋状土壙9(1/40) …… 18
第18図　袋状土壙10(1/40)・出土遺物(1/4) … 19
第19図　袋状土壙11･12(1/40)・出土遺物(1/4) 20
第20図　袋状土壙13(1/40)・出土遺物(1/4) … 20
第21図　袋状土壙14(1/40) …… 21
第22図　袋状土壙15(1/40)・出土遺物(1/4) … 21
第23図　袋状土壙16(1/40) …… 21
第24図　袋状土壙17(1/40)・出土遺物(1/4) … 22
第25図　袋状土壙18(1/40)・出土遺物(1/4) … 23
第26図　袋状土壙19(1/40)・出土遺物(1/4) … 23
第27図　袋状土壙20(1/40)・出土遺物(1/4) … 24
第28図　袋状土壙21(1/40)・出土遺物(1/4) … 25
第29図　袋状土壙22(1/40)・出土遺物(1/4) … 25
第30図　袋状土壙23(1/40)・出土遺物(1/4) … 26
第31図　土壙1(1/40) …… 26
第32図　土壙2(1/40) …… 26
第33図　ＩＢ区 遺構配置図(1/300) …… 27
第34図　袋状土壙24(1/40)・出土遺物(1/4) … 27
第35図　袋状土壙25(1/40)・出土遺物(1/4) … 28
第36図　袋状土壙26･27(1/40)・出土遺物(1/4) 29
第37図　袋状土壙28(1/40) …… 30
第38図　袋状土壙29(1/40)・出土遺物(1/4) … 30
第39図　袋状土壙30(1/40)・出土遺物(1/4) … 30
第40図　袋状土壙31(1/40)・出土遺物(1/4) … 31
第41図　袋状土壙32(1/40)・出土遺物(1/4･1/2)
…… 31
第42図　袋状土壙33(1/40)・出土遺物(1/4) … 32
第43図　袋状土壙34(1/40)・出土遺物(1/4･1/2)
…… 32
第44図　袋状土壙35(1/40)・出土遺物(1/4) … 33
第45図　袋状土壙36(1/40) …… 33
第46図　袋状土壙37(1/40)・出土遺物(1/4) … 34
第47図　袋状土壙38(1/40)・出土遺物(1/4) … 34
第48図　袋状土壙39(1/40)・出土遺物(1/4) … 35
第49図　袋状土壙40(1/40)・出土遺物(1/4) … 35
第50図　袋状土壙41(1/40)・出土遺物(1/4) … 36
第51図　袋状土壙42(1/40)・出土遺物(1/4) … 36
第52図　袋状土壙43(1/40) …… 37
第53図　袋状土壙44(1/40)・出土遺物(1/4) … 37
第54図　袋状土壙45(1/40) …… 37
第55図　袋状土壙46(1/40) …… 37
第56図　袋状土壙47(1/40)・出土遺物(1/4) … 38
第57図　袋状土壙48(1/40) …… 38
第58図　袋状土壙49(1/40) …… 38
第59図　袋状土壙50(1/40)・出土遺物(1/4) … 39
第60図　袋状土壙51(1/40) …… 39
第61図　袋状土壙52(1/40)・出土遺物(1/4) … 39
第62図　袋状土壙53(1/40)・出土遺物(1/4) … 40
第63図　袋状土壙54(1/40) …… 41
第64図　袋状土壙55(1/40)・出土遺物(1/4) … 41

第65図　袋状土壙56(1/40)…… 41
第66図　袋状土壙57(1/40)・出土遺物(1/4) … 42
第67図　袋状土壙58(1/40)・出土遺物(1/4) … 42
第68図　袋状土壙59(1/40)・出土遺物(1/4) … 43
第69図　袋状土壙60(1/40)・出土遺物(1/4) … 43
第70図　袋状土壙61(1/40)・出土遺物(1/4) … 44
第71図　袋状土壙62(1/40)…… 44
第72図　袋状土壙63(1/40)・出土遺物(1/4) … 45
第73図　袋状土壙64(1/40)・出土遺物(1/4) … 45
第74図　袋状土壙65(1/40)・出土遺物(1/4) … 46
第75図　袋状土壙66(1/40)・出土遺物(1/4) … 46
第76図　袋状土壙67(1/40)…… 46
第77図　袋状土壙68(1/40)…… 47
第78図　袋状土壙69(1/40)・出土遺物(1/4) … 47
第79図　袋状土壙70(1/40)・出土遺物(1/4) … 47
第80図　袋状土壙71(1/40)・出土遺物(1/4) … 48
第81図　袋状土壙72(1/40)…… 48
第82図　袋状土壙73(1/40)…… 48
第83図　土壙3(1/40) …… 49
第84図　土壙4(1/40) …… 49
第85図　溝1(1/40)・出土遺物(1/4) …… 49
第86図　溝2(1/40) …… 49
第87図　第Ⅱ調査区遺構配置図(1/300) …… 50
第88図　袋状土壙74(1/40)・出土遺物(1/4) … 51
第89図　袋状土壙75(1/40)・出土遺物(1/4) … 51
第90図　袋状土壙76(1/40)…… 52
第91図　袋状土壙77(1/40)・出土遺物(1/4) … 52
第92図　袋状土壙78(1/40)…… 52
第93図　袋状土壙79(1/40)・出土遺物(1/4) … 53
第94図　袋状土壙80(1/40)…… 53
第95図　袋状土壙81(1/40)…… 53
第96図　袋状土壙82(1/40)・出土遺物(1/4・1/6)
…… 54
第97図　袋状土壙83(1/40)・出土遺物(1/4) … 55
第98図　袋状土壙84(1/40)・出土遺物(1/4) … 55
第99図　袋状土壙85(1/40)・出土遺物(1/4) … 56
第100図　袋状土壙86(1/40)・出土遺物(1/4) … 56
第101図　土壙5(1/30)・出土遺物(1/4) …… 57
第102図　土壙6(1/30)…… 57
第103図　土壙7(1/30)・出土遺物(1/2) …… 57
第104図　土壙8(1/30)…… 57
第105図　土壙9(1/30)…… 58
第106図　土壙10(1/30) …… 58
第107図　土壙11(1/30)・出土遺物(1/3) …… 58
第108図　土壙12(1/30) …… 58
第109図　土壙13(1/30) …… 59
第110図　土壙14(1/30) …… 59
第111図　土壙15(1/30) …… 59
第112図　土壙16・17(1/30)
・出土遺物(1/4・1/3・1/2) …… 60
第113図　土壙18(1/30) …… 61
第114図　土壙19(1/30) …… 61
第115図　土壙20(1/30) …… 61
第116図　土壙21(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)
…… 62
第117図　土壙22(1/40)・出土遺物(1/4) …… 62
第118図　柱穴1(1/30)…… 63
第119図　柱穴2(1/30)・出土遺物(1/2) …… 63
第120図　柱穴3(1/30)・出土遺物(1/2) …… 63
第121図　たわみ(1/40)・出土遺物(1/4・1/2)… 63
第122図　第Ⅲ調査区遺構配置図(1/300) …… 64
第123図　袋状土壙87(1/40) …… 65
第124図　袋状土壙88(1/40) …… 65
第125図　袋状土壙89(1/40) …… 65
第126図　袋状土壙90(1/40)・出土遺物(1/4)
…… 65
第127図　袋状土壙91(1/40) …… 66
第128図　袋状土壙92(1/40) …… 66
第129図　袋状土壙93(1/40) …… 66
第130図　袋状土壙94(1/40)・出土遺物(1/4)
…… 67
第131図　袋状土壙95(1/40)・出土遺物(1/4)
…… 67
第132図　袋状土壙96(1/40)・出土遺物(1/6)
…… 68
第133図　袋状土壙97(1/40) …… 68

第134図　袋状土壙98(1/40)・出土遺物(1/4) … 68
第135図　袋状土壙99(1/40) …… 69
第136図　袋状土壙100(1/40)・出土遺物(1/4) …… 69
第137図　袋状土壙101(1/40)・出土遺物(1/4) …… 69
第138図　袋状土壙102(1/40) …… 70
第139図　袋状土壙103(1/40) …… 70
第140図　袋状土壙104(1/40)・出土遺物1(1/4) …… 70
第141図　袋状土壙104出土遺物2(1/4) …… 71
第142図　袋状土壙105(1/40) …… 71
第143図　袋状土壙106(1/40)・出土遺物(1/4) …… 71
第144図　袋状土壙107(1/40)・出土遺物(1/4) …… 72
第145図　溝3(1/20) …… 72
第146図　溝4(1/40)・出土遺物(1/4・1/2) …… 72
第147図　第Ⅳ調査区遺構配置図(1/300) …… 73
第148図　袋状土壙108(1/40) …… 73
第149図　袋状土壙109(1/40)・出土遺物(1/6) …… 74
第150図　袋状土壙110(1/40) …… 74
第151図　袋状土壙110出土遺物(1/4) …… 75
第152図　袋状土壙111(1/40)
・出土遺物(1/4・1/6) …… 75
第153図　袋状土壙112(1/40)・出土遺物(1/4) …… 76
第154図　袋状土壙113(1/40) …… 76
第155図　袋状土壙113出土遺物(1/4) …… 77
第156図　袋状土壙114(1/40)・出土遺物(1/4) …… 77
第157図　袋状土壙115(1/40)・出土遺物(1/4) …… 78
第158図　袋状土壙116(1/40)・出土遺物(1/4) …… 78
第159図　袋状土壙117(1/40)・出土遺物(1/4) …… 79
第160図　袋状土壙118(1/40) …… 79
第161図　袋状土壙118出土遺物(1/4) …… 80
第162図　袋状土壙119(1/40)・出土遺物(1/4) …… 80
第163図　袋状土壙120(1/40)・出土遺物(1/4) …… 81
第164図　袋状土壙121(1/40)・出土遺物(1/4) …… 82
第165図　袋状土壙122(1/40) …… 82
第166図　袋状土壙122出土遺物(1/4) …… 83
第167図　袋状土壙123(1/40)・出土遺物(1/4) …… 83
第168図　袋状土壙124(1/40)・出土遺物(1/4) …… 84
第169図　袋状土壙125(1/40) …… 84
第170図　袋状土壙126(1/40) …… 85
第171図　袋状土壙127(1/40)・出土遺物(1/4) …… 85
第172図　袋状土壙128(1/40)・出土遺物1(1/4) …… 86
第173図　袋状土壙128出土遺物2(1/4) …… 87
第174図　袋状土壙129(1/40)・出土遺物(1/4) …… 87
第175図　袋状土壙130(1/40)・出土遺物(1/4) …… 88
第176図　袋状土壙131(1/40)・出土遺物(1/4) …… 88
第177図　袋状土壙132(1/40)・出土遺物(1/4) …… 89
第178図　袋状土壙133(1/40)・出土遺物(1/4) …… 90
第179図　袋状土壙134(1/40)・出土遺物(1/6) …… 90
第180図　袋状土壙134出土遺物(1/4) …… 91
第181図　袋状土壙135(1/40)・出土遺物(1/4) …… 91
第182図　袋状土壙136(1/40)・出土遺物(1/4) …… 92

第183図　袋状土壙137(1/40) …… 93
第184図　袋状土壙138(1/40)・出土遺物(1/4) …… 93
第185図　袋状土壙139(1/40)・出土遺物(1/4) …… 94
第186図　袋状土壙140(1/40)・出土遺物(1/4) …… 94
第187図　袋状土壙141(1/40) …… 95
第188図　袋状土壙142(1/40) …… 95
第189図　袋状土壙143(1/40)・出土遺物(1/4) …… 95
第190図　袋状土壙144(1/40)・出土遺物(1/4) …… 96
第191図　袋状土壙145(1/40) …… 96
第192図　袋状土壙146(1/40) …… 96
第193図　第Ⅴ調査区遺構配置図(1/300) …… 97
第194図　袋状土壙147(1/40) …… 97
第195図　袋状土壙147出土遺物(1/4・1/6) … 98
第196図　袋状土壙148(1/40) …… 98
第197図　袋状土壙149・150(1/40) …… 99
第198図　袋状土壙151(1/40)・出土遺物(1/4) …… 99
第199図　袋状土壙152(1/40)・出土遺物(1/4) …… 100
第200図　袋状土壙153(1/40)・出土遺物(1/4) …… 101
第201図　袋状土壙154(1/40) …… 101
第202図　袋状土壙155(1/40) …… 101
第203図　袋状土壙155出土遺物(1/4・1/6) … 102
第204図　袋状土壙156(1/40)・出土遺物(1/4) …… 103
第205図　袋状土壙157(1/40)・出土遺物(1/4) …… 103
第206図　袋状土壙158(1/40) …… 104
第207図　袋状土壙159(1/40) …… 104
第208図　袋状土壙160(1/40)・出土遺物(1/4) …… 104
第209図　袋状土壙161(1/40)・出土遺物(1/4) …… 104
第210図　袋状土壙162(1/80)・出土遺物(1/4) …… 105
第211図　袋状土壙163(1/40)・出土遺物(1/4) …… 106
第212図　袋状土壙164(1/40)・出土遺物(1/4) …… 107
第213図　袋状土壙165(1/40) …… 107
第214図　袋状土壙166(1/40) …… 107
第215図　袋状土壙167(1/40)・出土遺物(1/4) …… 108
第216図　袋状土壙168(1/40)・出土遺物(1/4) …… 108
第217図　袋状土壙169(1/40)・出土遺物(1/4) …… 109
第218図　袋状土壙170(1/40)・出土遺物(1/4) …… 109
第219図　袋状土壙171(1/40) …… 110
第220図　袋状土壙172(1/40) …… 110
第221図　袋状土壙173(1/40) …… 110
第222図　袋状土壙174(1/40)・出土遺物(1/4) …… 111
第223図　袋状土壙175(1/40)・出土遺物(1/4) …… 111
第224図　搬入土器の諸形態(1/12) …… 117
第225図　掘り棒の類例(1/8～1/6) …… 119

図　版　目　次

図版１　１　第ＩＡ調査区南壁土層断面（北から）
　　２　第ＩＢ調査区全景（北西から）
図版２　１　第Ⅱ調査区全景（北から）
　　２　第Ⅲ調査区全景（西から）
図版３　１　第Ⅳ調査区全景（西から）
　　２　第Ⅴ調査区全景（西から）
図版４　１　袋状土壙１（北東から）
　　２　袋状土壙２（南から）
　　３　袋状土壙４（南から）
　　４　袋状土壙５（北東から）
　　５　袋状土壙９（西から）
　　６　袋状土壙10（南から）
　　７　袋状土壙11（北西から）
　　８　袋状土壙13（南西から）
図版５　１　袋状土壙14（西から）
　　２　袋状土壙15（南西から）
　　３　袋状土壙16（東から）
　　４　袋状土壙17（北から）
　　５　袋状土壙22（東から）
　　６　土壙１（東から）
　　７　土壙２（南から）
　　８　袋状土壙25（東から）
図版６　１　袋状土壙26（北から）
　　２　袋状土壙29（南から）
　　３　袋状土壙31（南から）
　　４　袋状土壙32（南西から）
　　５　袋状土壙37（南から）
　　６　袋状土壙38（東から）
　　７　袋状土壙41（東から）
　　８　袋状土壙42（東から）
図版７　１　袋状土壙42（北東から）
　　２　袋状土壙42（北から）
　　３　袋状土壙45（東から）
　　４　袋状土壙46（西から）
　　５　袋状土壙47（南から）
　　６　袋状土壙49（北から）
　　７　袋状土壙52（西から）
　　８　袋状土壙53（北から）
図版８　１　袋状土壙54（東から）
　　２　袋状土壙55（北から）
　　３　袋状土壙56（東から）
　　４　袋状土壙59（南から）
　　５　袋状土壙60（東から）
　　６　袋状土壙61（南東から）
　　７　袋状土壙64（北から）
　　８　袋状土壙64（北から）
図版９　１　袋状土壙65（北から）
　　２　袋状土壙69（西から）
　　３　袋状土壙70（西から）
　　４　袋状土壙71（南から）
　　５　袋状土壙72（南から）
　　６　袋状土壙73（東から）
　　７　溝１（南から）
　　８　溝２（南から）
図版10　１　袋状土壙74（北から）
　　２　袋状土壙74（北から）
　　３　袋状土壙75（東から）
　　４　袋状土壙77（北から）
　　５　袋状土壙78（南から）
　　６　袋状土壙79（北から）
　　７　袋状土壙80（南から）
　　８　袋状土壙81（南から）
図版11　１　袋状土壙82（南から）
　　２　袋状土壙82（南から）
　　３　袋状土壙82（南から）
　　４　袋状土壙83（南から）
　　５　袋状土壙84（東から）
　　６　袋状土壙85（南から）

	7	袋状土壙86(南から)
	8	袋状土壙87(南から)
図版12	1	袋状土壙88(北から)
	2	袋状土壙89(北東から)
	3	袋状土壙90(北西から)
	4	袋状土壙91(東から)
	5	袋状土壙92(北東から)
	6	袋状土壙93(北から)
	7	袋状土壙94(南東から)
	8	袋状十壙96(北から)
図版13	1	袋状土壙96(東から)
	2	袋状土壙97(北から)
	3	袋状土壙98(北西から)
	4	袋状上壙99(西から)
	5	袋状土壙100(南西から)
	6	袋状土壙101(南から)
	7	袋状土壙102(東から)
	8	袋状土壙103(南西から)
図版14	1	袋状土壙104(南から)
	2	袋状土壙104(南から)
	3	袋状土壙106(北西から)
	4	袋状土壙107(東から)
	5	袋状土壙107(東から)
	6	袋状土壙108(北西から)
	7	袋状土壙109(東から)
	8	袋状十壙109(東から)
図版15	1	袋状土壙110(西から)
	2	袋状土壙111(北から)
	3	袋状土壙111(北から)
	4	袋状上壙111(北から)
	5	袋状土壙112(西から)
	6	袋状土壙113(南から)
	7	袋状土壙113(南から)
	8	袋状土壙114(南から)
図版16	1	袋状土壙115(北東から)
	2	袋状土壙116(北から)
	3	袋状土壙117(北から)
	4	袋状土壙118(北東から)
	5	袋状土壙118(北西から)
	6	袋状土壙118(南西から)
	7	袋状土壙119(南から)
	8	袋状土壙120(北から)
図版17	1	袋状土壙121(北から)
	2	袋状土壙122(北西から)
	3	袋状土壙122(西から)
	4	袋状土壙123(北から)
	5	袋状土壙124(北から)
	6	袋状十壙125(西から)
	7	袋状土壙126(北西から)
	8	袋状土壙127(南西から)
図版18	1	袋状土壙127(南から)
	2	袋状上壙128(西から)
	3	袋状土壙130(北から)
	4	袋状土壙131(西から)
	5	袋状土壙132(東から)
	6	袋状土壙133(南から)
	7	袋状土壙134(北から)
	8	袋状土壙134(北西から)
図版19	1	袋状土壙135(西から)
	2	袋状土壙135(西から)
	3	袋状土壙136(北西から)
	4	袋状土壙137(北西から)
	5	袋状土壙138(西から)
	6	袋状十壙139(西から)
	7	袋状土壙140(東から)
	8	袋状土壙140(西から)
図版20	1	袋状土壙141(西から)
	2	袋状上壙142(北から)
	3	袋状土壙143(西から)
	4	袋状土壙144(西から)
	5	袋状土壙147(北西から)
	6	袋状土壙147(南から)
	7	袋状土壙147(南から)
	8	溝1(南から)
図版21	1	袋状土壙148(西から)
	2	袋状土壙149(南から)

3　袋状土壙150(南から)
4　袋状土壙151(南から)
5　袋状土壙152(西から)
6　袋状土壙153(南から)
7　袋状土壙153(南から)
8　袋状土壙153(南西から)
図版22　1　袋状土壙153(南東から)
2　袋状土壙154(北西から)
3　袋状土壙155(南東から)
4　袋状土壙155(南東から)
5　袋状土壙157(南から)
6　袋状土壙158(南東から)
7　袋状土壙159(西から)
8　袋状土壙160(東から)
図版23　1　袋状土壙161(東から)
2　袋状土壙162(北から)
3　袋状土壙162(北から)
4　袋状土壙162(北から)
5　袋状土壙162(南東から)
6　袋状土壙162･164(東から)
7　袋状土壙162･164(南東から)
8　袋状土壙165(北東から)
図版24　1　袋状土壙166(西から)
2　袋状土壙168(北東から)
3　袋状土壙169(西から)
4　袋状土壙170(東から)
5　袋状土壙171(南から)
6　袋状土壙172(北から)
7　袋状土壙173(南から)
8　袋状土壙174･175(北西から)
図版25　1　袋状土壙175(南東から)
2　袋状土壙175(北東から)
3　袋状土壙176(東から)
4　第Ⅲ区包含層遺物出土状態(北から)
出土遺物１
図版26　出土遺物２
図版27　出土遺物３

表　目　次

第１表　調査工程表 …… 2
第２表　木製品一覧表 …… 120

第１章　発掘調査の契機と経緯

第１節　発掘調査の契機

南方遺跡は、岡山市街地のやや北寄りに位置する弥生時代の集落遺跡として知られ、古くは①山陽新幹線建設に伴う発掘調査をはじめ、②旧国立岡山病院の諸施設拡充に伴う発掘調査等を経て、弥生時代中期を中心とする集落遺跡の実態や広がりが明らかにされてきた。

①については、昭和 44（1969）年から翌 45（1970）年にかけて発掘調査が実施され、『山陽新幹線敷設による市道移転工事に伴う緊急発掘調査報告書』（岡山市遺跡調査団：昭和 46 年３月刊行）にその成果が収載されている。

また②については、まず地方循環器病センター建設に伴う昭和 54（1979）年から翌年にかけての発掘調査が岡山県教育委員会によって実施され、次いで昭和 55（1980）年、看護婦宿舎建設に伴う発掘調査が実施された。これらの発掘成果については、昭和 56（1981）年に、それぞれの発掘調査報告書が刊行されている。さらに、南方遺跡の南東部に当たる岡山地家簡裁・検察庁などの最高裁・法務省管轄の諸施設についても、増改築等行われる場合、事前の確認調査や試掘調査を実施してきたところである。たとえば、昭和 53（1978）年、岡山地家簡裁の敷地において、岡山市教育委員会による確認調査の立会確認が行われ、旧水田層・湿地埋土層が確認されているものの、埋蔵文化財包蔵地ではないと報告されている。

平成 12（2000）年、岡山地家簡裁庁舎の老朽化に伴い、庁舎の大幅な建て替えが計画され、同年７月、岡山県古代吉備文化財センターにより試掘調査が実施された。その結果、弥生時代の微高地が存在することが明らかとなり、この周辺一帯に広がる南方遺跡の一部である可能性が指摘された。新庁舎の建設予定場所は、構内の南東部分で、すでに既存の庁舎が存在していた箇所でもある。

発掘調査の実施は、最高裁判所と岡山県教育委員会との契約に基づき、平成 16 年度に実施する方向で進められた。平成 15 年度の事前協議では、具体的な発掘調査の方法、表土の処理、排水対策、プレハブ事務所等の設営場所等、条件整備について綿密な打合せを重ねた。

最終的な発掘範囲、すなわち新庁舎の設計がほぼ確定したのは平成 16（2004）年２月で、最終的に２月 12 日に条件整備等について確認を行った。発掘調査範囲については、岡山市教育委員会が確認調査を実施した際、遺構の存在が確認できず、埋蔵文化財の包蔵地ではないと断定した先述のいきさつがあり、新庁舎の北西側の発掘調査実施については、当初の計画からは除外した。

３月 19 日には、最高裁事務総局経理局営繕課作成の着工オリエンテーリング資料に基づき、発掘調査実施の諸条件整備や、発掘調査によって生じる排出土を場内処理するための行程が確認された。３月末日には、年度当初の発掘調査開始時期の決定、それに基づく発掘資材搬入計画やプレハブ事務所の建築、地裁周辺の町内会長への挨拶回り（３月 30 日）を地裁関係者とともに実施した。

さらに、発掘担当が決定した時点で発掘予定週報・月報を提出し、４月８日から発掘調査を開始する運びとなった。（岡田）

第２節　発掘調査の経緯と体制

１　調査の経緯

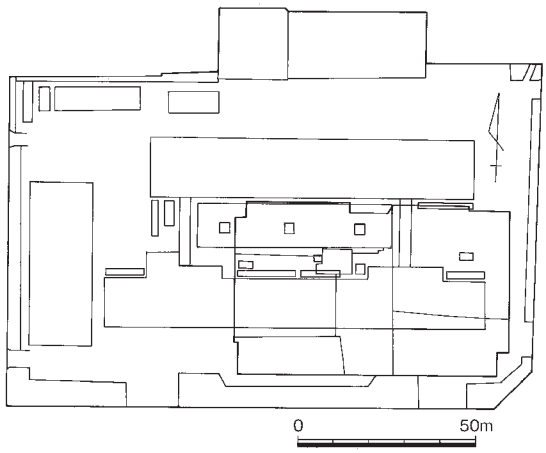
調査対象地点は、第１図に示した裁判所敷地内の南東側に位置する。当初計画においては、第Ⅰ～第Ⅲ調査区を９月までの６か月間、担当者３名で調査に入った。しかしながら、遺構の広がりから調査の終了をみたのは11月末になってであり、その調査工程は表に示したとおりである。

調査区の現状は、第Ⅰと第Ⅱ調査区が条件整備ということで既存の建物を撤去し、表土から190㎝まで掘り下げが行われていた。この190㎝の高さは、掘り下げて高さを均した状況であった。このことは、当該地区の既存建物撤去に伴う関係から、その高さよりも下げられていたことは明らかであった。この190㎝の高さは、平成12年度に実施した確認調査で認められている中世の水田と想定される面の上層に相当する第３図の第８層中である。

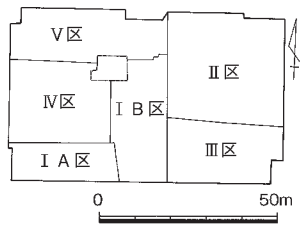
調査区＼月	4	5	6	7	8	9	10	11
１区	━━	━━	━━	━━				
２区			━━	━━	━━			
３区					━━	━━		
４区							━━	
５区								━━

第１表　調査工程表

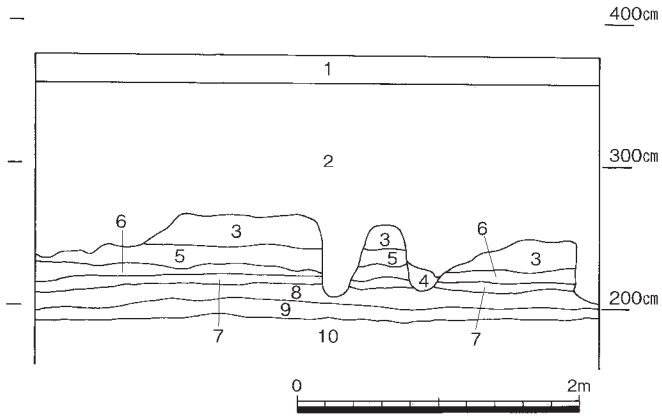
調査区の基本的堆積層序は、第３図に示した。表土が20㎝前後の厚さの舗装面で被われており、以下120㎝の間は、近現代もしくは近世に至るまでの掘りこみの影響から水平堆積が認められない。先に示した図の第３層からは、水平堆積を復元できる状況で認められている。これら第８層までの堆積土は、砂を主としたものであり、旭川の影響が想定される。第８層下の第９層が中世の水田層と思考され、この第９層からの調査を行う予定にしていた。しかしながら、先に示したように掘り下げの段階ですでにその面にまで達していたことから、この影響のない実質的な遺構検出面は海抜高170～180㎝である。このようなことから、水田面の調査は上層の観察を確認することのみとなった。当該水田層は、調査対象地



第１図　調査位置図（1/2,000）



第２図　調査区位置図（1/2,000）



1　舗装コンクリート
2　近現代撹乱
3　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
4　黄褐色土砂質土（2.5Y6/3）
　［焼土・炭含む］
5　にぶい橙色粘質微砂（10YR7/4）
　［微量炭含む］
6　浅黄色粘質微砂（2.5Y7/3）
7　黄褐色粘質微砂（2.5Y5/3）
8　にぶい黄褐色粘質微砂（2.5Y6/3）
9　灰白色粘質土（7.5Y7/1）
10　黄褐色粘質微砂（2.5Y5/3）

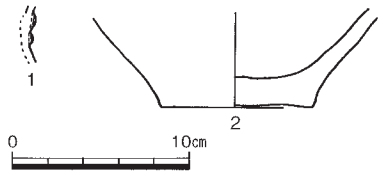
第３図　基本層序（1/50）

全てに、ほぼ同じ海抜高で確認している。

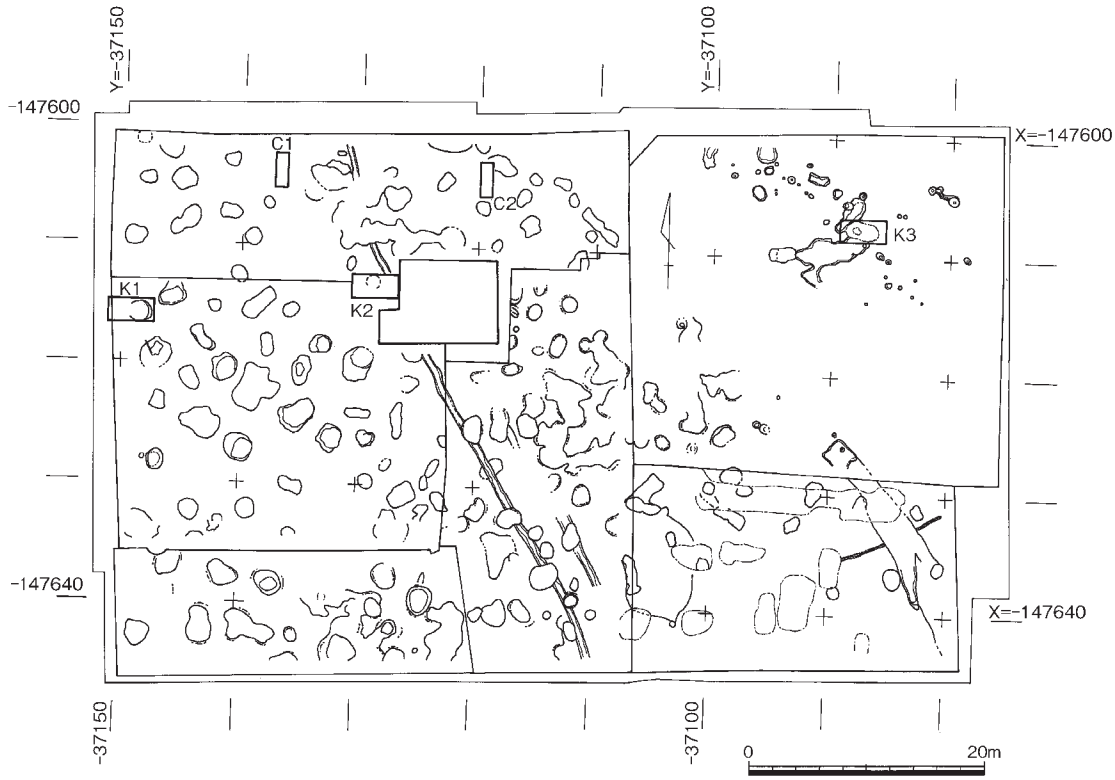
第Ⅰと第Ⅱ調査区の設定および調査着手は、確認調査の結果から微高地が南西方向に下がると想定し、遺構の少ないと思われる第Ⅰ調査区から実施した。遺構のプラン検出は、黄褐色粘質微砂層中からであるが、その確認には難渋を極めた。遺構は、平面からの掘り下げで土層観察から一応の底面を判断し、実測等の処理を行っていた。しかしながら、土壙埋土と判断していた土が底面よりもさらに下に入り込むとともに、判断面の観察から外に広がる内容を示していた。遺構の性格が明らかとなったのは、土壙40の判断面が巾着状の形状を示していることを把握した段階であるが、第Ⅰ調査区の調査がかなり進んだ４月後半であった。これを受け調査を終了していた遺構について調査をやり直したのである。これにより、調査工程から勘案すれば、予定どおり調査を終了させることがおぼつかない状況に至った。このようなことから、平面での掘り下げを断念し、幅60cmのトレンチで断ち割り、土層断面での調査を行うこととした。

調査は、第Ⅰ調査区において多数の袋状土壙が重複して検出された。第Ⅱ区は、確認調査K3のトレンチで竪穴住居と想定される落ち込みを確認している。当該区は、明瞭な黄褐色土が存在し、遺構埋土が黒色土であることから遺構検出は比較的容易であった。検出された主な遺構は、土壙とピットである。遺構は、いずれも浅く削平を受けていることが認められ、遺存状態は良くない。遺構は、北東側に広がる様相を示している。これら遺構の検出途上周辺からは、サヌカイトのチップが認められた。時期は、遺物と埋土の内容から弥生中期と判断される。また、確認調査K3で認められていた遺構は、たわみであることが把握された。第Ⅰと第Ⅱ区の遺構の状況から第Ⅳ区（調査時は拡張区と呼称）に広がることが想定され、第Ⅳ区の調査の必要が出てきたのである。

第Ⅲ区は、第５図に示した一点破線が近世以降の掘り込みである。西側に袋状土壙が確認されたが、東に行くにしたがいい黄褐色粘質微砂の下層に認められる黒褐色土が厚くなる状況を呈する。この層中から第４図の弥生前期の遺物を検出している。土器の出土状態は、図版25-4に示すようにほぼ平面に広がる状況を呈していた。この黒褐色土の堆積は、東に行くにしたがい厚さを増すが、検出した遺物はその上面



第４図　10層下出土遺物（1/4）



第５図　調査区遺構配置図（1/600）

からであり、それ以外に遺物の包含は認められなかった。

第Ⅳ区は、事前協議の段階で遺構が北側に広がるようであれば調査可能との了解を得ていた。調査は、条件整備が整わず作業を一時中断して再開した。再開は、９月後半に入ってからであり当初の調査期間では終了できない状況であることから、調査期間の延長がなされた。先の調査区と同様に、中世水田下まで条件整備により排土されていた。条件整備の排土面をすき取るためさらに 20㎝下げ、170㎝で遺構検出を行った。検出の結果は、第５図に示すように全面にわたって袋状土壙が確認された。K1 と K2 に示したのは、試掘調査の部分である。K1 は袋状土壙 112、K2 では記録をしていないが、袋状土壙を検出している。遺構は、コンクリート面から 210㎝ほど下げて検出することが可能である。しかしながら、試掘調査では、幅の狭いトレンチによる確認であり、深くなるにとともに更に狭くなる。まして、200㎝を越えて掘り下げていることから、やもうえないと思考される。

第Ⅴ区は、昭和 53 年に岡山市教育委員会により実施した確認調査において、埋蔵文化財包蔵地でない旨が裁判所に通知されている。このことにより、調査の対象になっていなかった。しかしながら、第Ⅳ区の調査が進むにつれ第ⅠＢ区の成果を検討すると、当然のごとく袋状土壙の広がりは変化することなく連続することが想定された。これを受けた協議の結果、11 月末までに終了させることで調査に入った。しかしながら、第Ⅳ区の調査の時と同様に条件整備が整わず 10 月中旬から 11 月初旬にかけて調査を中断した。調査が再開できたが、実質調査期間は１か月を切っていた。このことから条件整備後の重機使用では、明確に遺構を確認できる面まで下げることとし、通常の人による遺構確認面までの掘り下げを行わなかった。ともかくも、側溝あるいは調査区境と盛土の関係から調査ができなかった遺構を除き、その概要を把握することができたのである。　（下澤）

２　調査の体制

平成16年度

岡山県教育委員会

教育長　宮野　正司

岡山県教育庁

教育次長　釜瀬　　司

文化財課

課　長　芦田　和正

参　事　田村　啓介

総括副参事

（埋蔵文化財班長）　平井　泰男

主　任　小林　利晴

主　事　秋山　良樹

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　正岡　睦夫

次　長（総務課長）　内田　　猛

参　事　松本　和男

参　事　伊藤　　晃

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）　笏本　弘忠

主　任　小坂　文男

主　任　小川　紀久

〈調査第一課〉

課　長　岡田　　博

総括副参事（第二班長）　江見　正己

副参事　下澤　公明

（調査・報告書担当）

主　査　小松原基弘

主　事　水田　貴士

（調査担当）

３　日誌抄

平成16年4月1日～2日

発掘準備

4月5日～9日

発掘調査準備、１区側溝掘り下げ。

4月12日～16日

１区側溝掘り下げ、重機掘削面清掃。

4月19日～23日

１区南断面写真、実測。弥生時代遺構面の検出、掘り下げ。

4月26日～30日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

5月6日～7日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

5月10日～14日

１区包含層と弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

5月17日～21日

１区包含層と弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

5月24日～28日

１区包含層と弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。２区側溝掘り下げ。

5月31日～6月4日

１区包含層と弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影と実測。

6月7日～11日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。２区重機による排土。

6月14日～18日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ。２区重機による排土、側溝掘り下げ。

6月21日～25日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。２区遺構検出。

6月28日～7月2日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

7月5日～9日

１区弥生時代遺構面の検出、掘り下げ、写真撮影、実測。２区重機面の清掃、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

7月12日～16日

２区重機面の清掃、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

7月20日～23日

２区重機排土立ち会いと同面の清掃、及び遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

7月26日～30日

２区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

8月2日～6日

２区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。３区重機による表層除去。

8月9日～13日

２区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。３区重機による表層除去、同面の清掃、及び遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

8月16日～20日

３区側溝掘り下げ、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

8月23日～27日

３区重機面清掃、側溝掘り下げ、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

8月30日～9月3日

２区東側壁面清掃、写真撮影、実測。３区重機面清掃、側溝掘り下げ、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

9月6日～10日

３区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測、及び全景写真撮影。

9月13日～17日

３区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。整理作業。

9月21日～24日

整理作業。

9月27日～10月2日

整理作業。拡張区重機による表層除去、同面の清掃。

10月4日～8日

拡張区重機による表層除去、同面の清掃、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

10月12日～15日

拡張区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

10月18日～22日

拡張区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測、及び全景写真撮影。

10月25日～29日

拡張区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

11月1日～5日

拡張区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。整理作業。

11月8日～12日

整理作業。5区側溝掘り下げ。

11月15日～19日

5区重機による表層除去、同面の清掃、遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。

11月22日～29日

5区遺構検出、掘り下げ、写真撮影、実測。撤収準備。

11月30日

現場撤収。

4　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周地外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第136号 H12.7.17	周地外	集落跡・水田 南方遺跡	岡山市南方 1丁目8-42	24	裁判所庁舎建設	有	岡山県古代 吉備化財セ ンター所長	重根弘和	H12.7.3～ H12.7.7

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第58条の2）

文書番号 日付	周知・ 周地外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第83号 H16.4.4	周地	集落跡 南方遺跡	岡山市南方 1丁目8-42	2,271.49	裁判所庁舎建設	有	岡山県教育 委員会教育 長 宮野正司	下澤公明 小松原基弘 水田貴士	H16.4.1～ H16.11.30

埋蔵文化財発見通知（法第 59 条）

文書番号 日付	物件名	出土地	出土面月日	発見者	土地所有者	現保管者
教文埋 第 544 号 H12.7.12	弥生土器 ビニール袋１	岡山市南方１丁目８-42	H12.7.3 ～ H12.7.7	岡山県教育委員会 黒瀬定夫	最高裁判所	岡山県古代吉備文化財センター

埋蔵文化財発見通知（法第 59 条）

文書番号 日付	物件名	出土地	出土面月日	発見者	土地所有者	現保管者
岡吉調 第 224 号 H16.11.30	弥生土器・木製品・整理箱 60 箱	岡山市南方１丁目８-42	H16.4.8 ～ H16.11.30	岡山県教育委員会 宮野正司	最高裁判所	岡山県古代吉備文化財センター

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

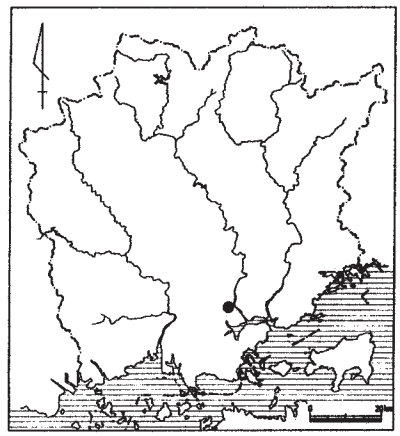
南方遺跡は、南方１丁目から５丁目にかけて広がり、旧小字名の蓮田・宝崎・関場・番町などが含まれる地域である。今回、調査対象となった地点は、岡山市街地の交通量の多い番町交差点の北西コーナーにあたる。調査地点から東に500mほど行くと、旭川が北から南へと流路をとる。旭川は、岡山県下３大河川の高梁川・吉井川の内の一つで、真庭市（旧真庭郡川上村）に源流がある。そこから、県の中央部を南下して吉備高原南端の龍ノ口山塊と半田山山塊との間から市街地に出てくる。市街地が形成されている岡山平野は、この３大河川によりもたらされたのである。

旭川の流路は、第８図に示されるように鶴見橋と月見橋の間で90度に屈曲して南流する。この流路は、16世紀後半まで第８図の右上の中島竹田橋あたりの百間川分流から操山山塊に沿って南下していたのである。これが、今日みられるような流路となったのは、宇喜多時代の改修の結果[1]によるものである。

旭川の旧河道は、岡山市街地に姿を現す龍ノ口山塊の南東端の祇園地区から入り、その祇園と賞田地区を南東に流れる北旧河道と、さらに南に下がつた中旧河道の流路が認められている。しかし、これらの他に、その痕跡が知られている。この旧河道は、祇園用水に沿うように第７図に見られる西川原から相生橋方向への南旧河道がある[2]。この南旧河道から今回の調査地点は、現在の流路よりも西に離れていることが把握される。また、流路の位置からは、調査地点がその縁辺部にあたることが判断することが可能であろう。

第７・８図の北西側に竹田、西川原の名が見られる。この地区は、明治22年に宇野村（昭和６年に岡山市）となるまで竹田村と西川原村であった。この竹田村と南方村との間に〈竹田の渡し〉があったことが知られ、一昔前の南方近くにおける旭川の様子をうかがい知る。

旭川は、この龍ノ口山塊と半田山山塊を抜けると、先に述べたように３方向の旧河道が存在していた。北と中旧河道は、流路を南東にとり旭川東側の水田地帯に入っていく。これにより、微高地が形成され、山陽新幹線や百間川改修による発掘調査が実施されてきている。一方、西側は、第７図の昭和28年修正図と同63年との図で理解できるように、市街化が進みその中に埋もれた感がある。しかしながら、その反面調査する機会が多くもたらされ、周辺遺跡分布図に示すように主要な遺跡を構成する微高地が認められ、その概要が把握されてきている。南下する南旧河道は、当時の汀線で多くの微高地が確認されている。付近周辺遺跡分布図では、岡山城が主要遺跡となるが近年の調査で、その域内で弥生期の包含層が認められている。（下澤）



第６図　遺跡の位置（1/20万）

第２節　歴史的環境

今回の調査地点である南方遺跡は、江戸時代に城の西北、外堀にあった侍町の一部に含まれる。その当時では東の一番町から西の八番町まであり、町の拡大とともに名が付され、このうち七番町が当該地点に相当する[3]。第３図の第２層に見られる掘り込みの一部は、第５図第Ⅲ調査区部分の一点破線まで達するものがあり、ここからは報告していないが江戸期の遺物を多く検出している。

周辺遺跡分布図に示した南方遺跡の範囲は、「Ｔ」の字状に広がっている。遺跡は、戦前から先に記した旧小字から遺物が出土し、土器は東瀬戸内地方中期の編年標準型式となっている。南方遺跡の内容が具体的に明らかになったのは、1959 年の国立岡山病院建設工事に伴ってであるが、正式に調査し記録に残されたのは、1970 年の山陽新幹線設置の付帯工事である市道設置道路敷部分の調査からである。その後、国立病院の循環器病センターや看護婦宿舎[4]、済生会病院建設[5]などの規模の大きい調査が行われ、この他に、岡山市が周辺小規模工事の立会により、その概要が把握されている。

弥生時代前期は、新幹線市道部分・看護婦宿舎・循環器センターで前期中葉段階から検出され、循環器センターからは遺構も確認されている。過去の岡山病院建設工事で調査記録されなかった本体部分は、同病院移転に伴い平成 16 年にＮＰＯ法人に移管するための耐震工事が実施[6]され前期の遺物を検出している。中期になると遺跡の北西側にあたる済生会病院建設に伴う調査では、同時期の豊富な資料が出土している。遺跡の西縁辺部と考えられる付近の調査では、この期の遺構が検出されている。

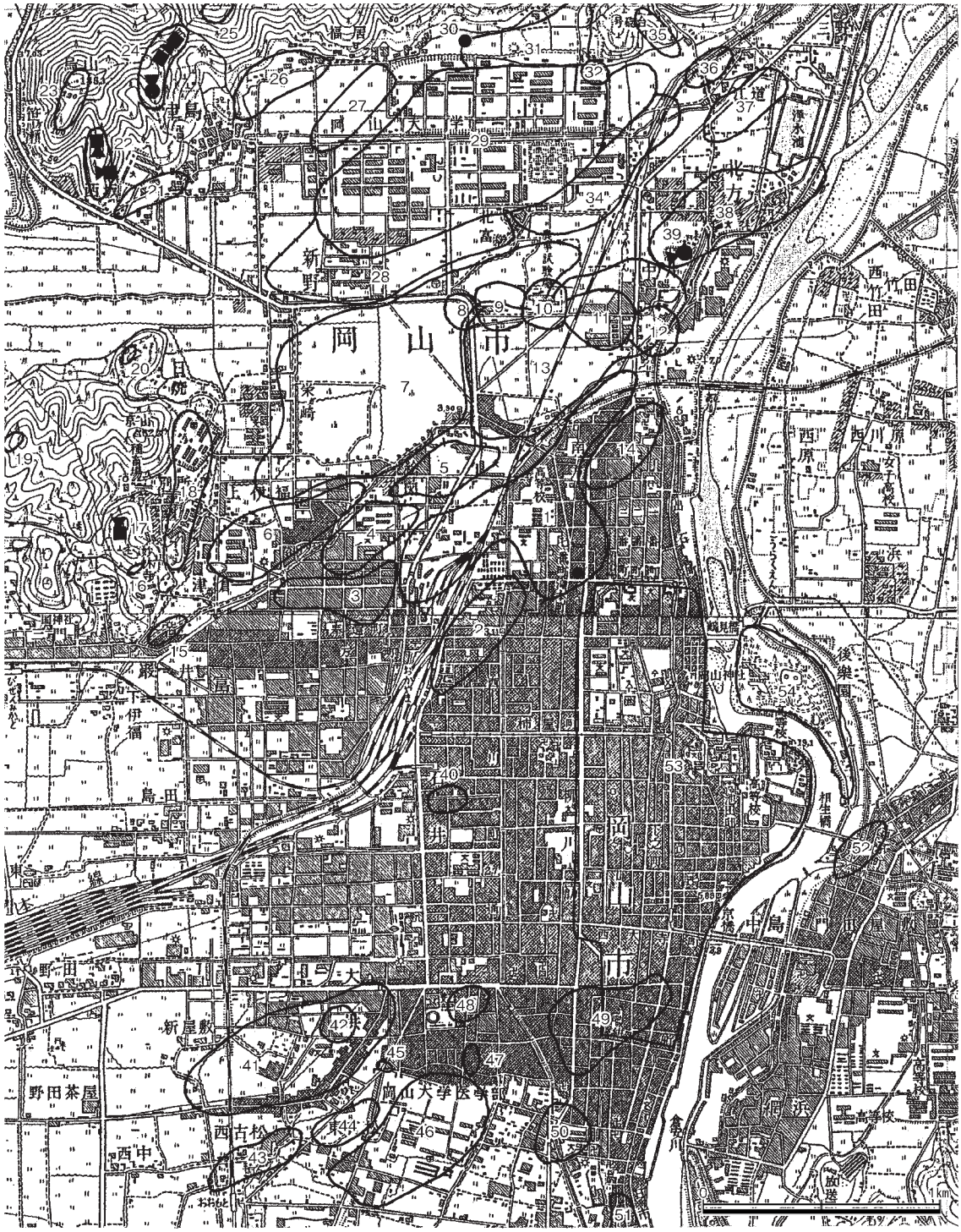
前期から中期にかけては、旧国立病院から北西側かけて、遺構の密度が濃く伴う遺物も多いことが明らかにされているが、後期になるとその様相は大きく異なるのである。南方遺跡で後期に入る遺構は、確認されていない。遺物は、先の看護婦宿舎において若干の土器が報告されている。しかし、古墳時代になると竪穴住居が認められ、その他の遺構も検出されている。この時期になって、広範囲に当該期の面が把握されている。

今回調査した地点は、昭和 53 年と平成 12 年の確認調査で極めて遺構密度の低い部分になると想定されていた。当該地点から北へ 80m ほどの地点の調査では、中世水田と微高地上の遺構が確認されている。先の NPO での遺構確認面は、230㎝であり中世水田は認められていないが、裁判所の南西側には２m 前後で水田が広がり、低くなっていることが理解される。このようなことから、当該地点は微高地の高位地区ではなく、その縁辺に相当すると判断される。

いずれにしても、旭川の東側の百間川周辺及び北西側の津島遺跡周辺では、微高地と旧河道のあり方が詳細に報告されている。しかしながら、その南西側の旧国立病院と済生会に跨る南方遺跡は、調査されながら未だ報告を見ていない。このことから、報告の内容により前述した内容が大きく変わる可能性があり、その報告を待ちたい。　（下澤）

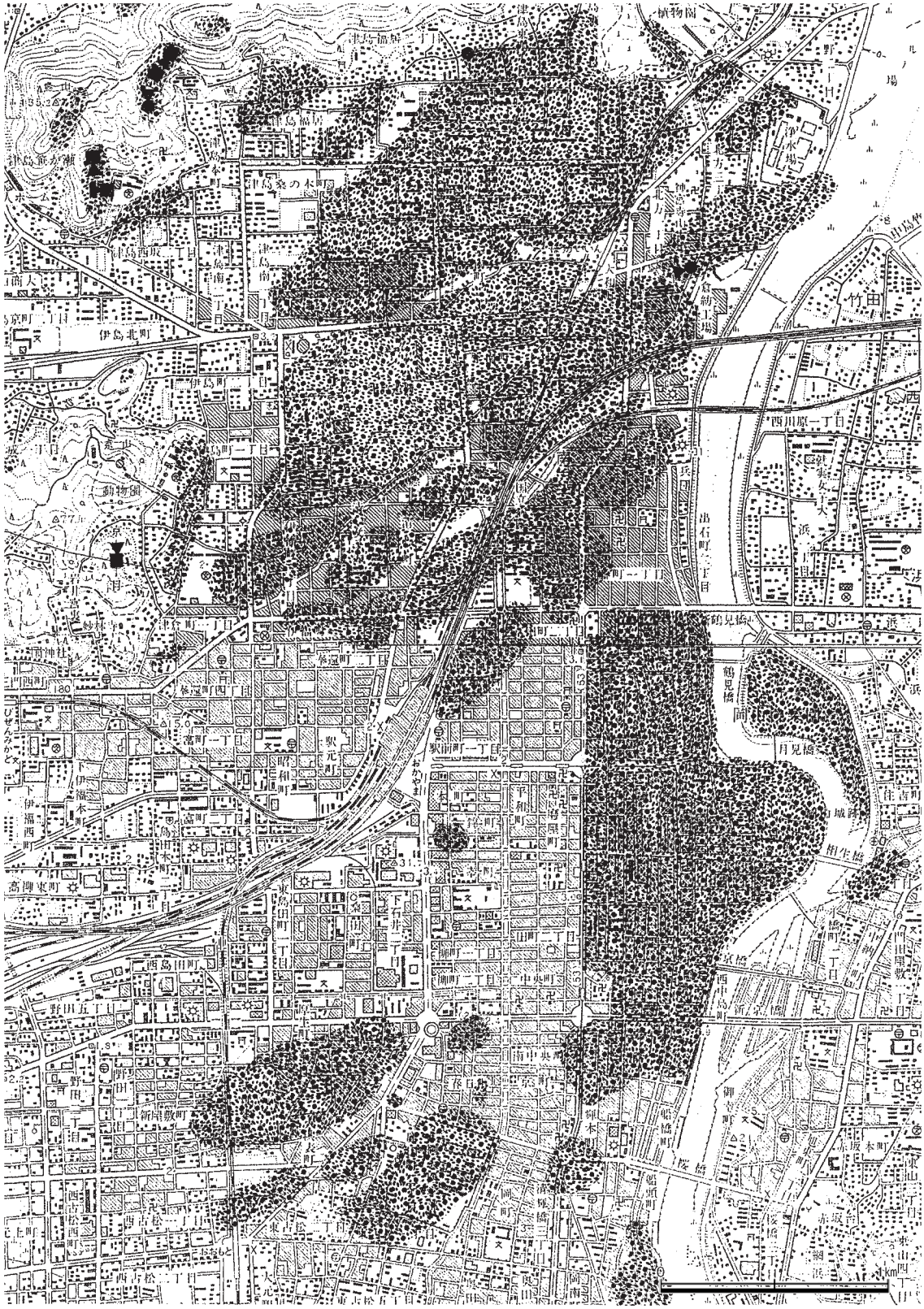
註

（1）石田寛　『岡山の地理』　福武書店　昭和 33 年６月
（2）下澤公明　「弥生時代後期末の吉備南部社会について」『古文化談叢』　九州古文化研究会 2000
（3）岡山市　『岡山の地名』　岡山市　平成元年４月
（4）この間の遺跡の状況は岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団　『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』1981 年３月に記されている。
（5）1992 年から調査を始めているが、その内容は現地説明会資料や展示会のパンフレットであることから、そこからの認識に止まっている。
（6）岡山県教育委員会が平成 16 年に調査



１南方遺跡（●印今回調査地点）　２集落跡　３上伊福（立花）遺跡　４上伊福遺跡　５絵図遺跡　６上伊福遺跡・伊福定国前遺跡　７津島遺跡　８北方下沼遺跡　９北方横田遺跡　10 北方中溝遺跡　11 北方地蔵遺跡　12 北方蔵之内遺跡　13 北方上沼遺跡　14 広瀬遺跡　15 津倉遺跡　16 妙林寺遺跡　17 津倉古墳　18 上伊福西遺跡　19 散布地　20 古墳　21 散布地　22 七つ塚古墳群　23 烏山城跡　24 都月坂墳墓群　25 半田山城跡　26 津寺居福遺跡　27 散布地　28 津島新野遺跡　29 津島岡大遺跡　30 お塚様古墳　31 津島東遺跡　32 朝寝泉貝塚　33 散布地　34 津島江道遺跡　35 散布地　36 鍵田遺跡　37 二野宮之段遺跡　38 北方長田遺跡　39 神宮寺山古墳　40 散布地　41 散布地　42 大供東浦遺跡　43 散布地　44 鹿田遺跡　45 散布地　46 鹿田遺跡　47 散布地　48 大供中道遺跡　49 天瀬遺跡　50 新道遺跡　51 二日市遺跡　52 散布地　53 岡山城　54 後楽園

第７図　周辺遺跡分布図〔昭和 28 年〕（1/25,000）



第８図　周辺遺跡分布図〔昭和 63 年〕（1/25,000）

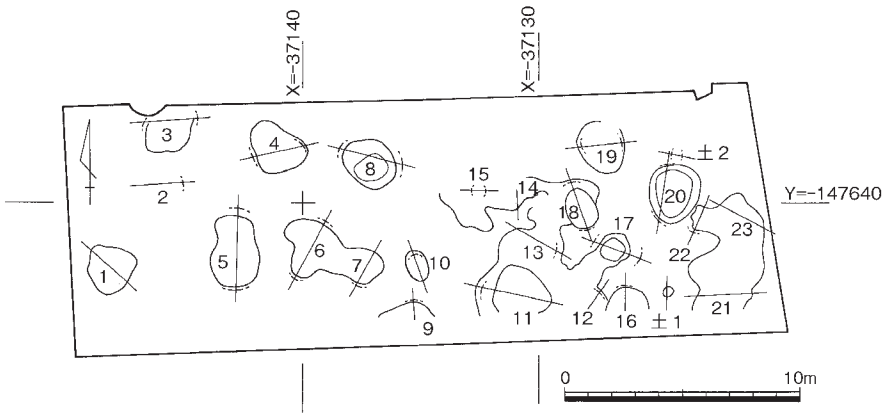
第３章　調査の概要

第１節　第Ｉ調査区

第Ｉ調査区は、裁判所南棟の位置にあたる。当該建物の基礎となるのは、コンクリートパイルが２ｍの範囲に７本認められたことから、この単位で設けられたことが把握できた。この基礎は、打ち込みによることから影響はパイル部分のみであった。しかしながら、これ以前の建物の基礎と想定される箇所が、袋状土壙１と５の間と袋状土壙 15 の北側に一辺４ｍ前後の木枠が確認されている。これ以外に、遺構に影響を与えるものは認められず、遺存状態の良い地区である。　（下澤）

１　第ＩＡ調査区

調査時には、第Ｉ区として矩形に設定していたが、報告書作成段階で第ＩＡ区とした。西側よりは、遺構確認面のグライ化から調査開始時に遺構の内容が把握出来ていなかった。東側は、比較的安定した黄褐色の基盤が把握できたため明らかになった時点で再度調査をしなおした状況である。このことから、西側の遺構の密でない状況は、確認が不十分な可能性もある。　（下澤）



第９図　第ＩＡ区遺構配置図（1/300）

（１）袋状土壙

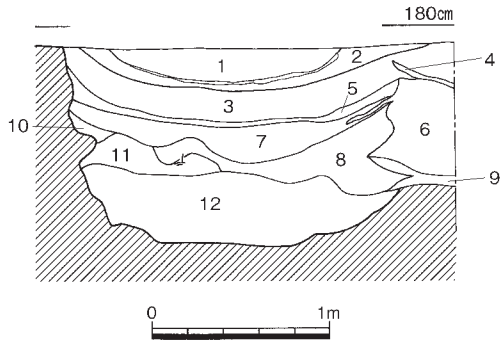
調査区全面に認められ、西側では重複関係が密な状態ではない。東側には、単独のものが見られるが、多くは重複関係で連続した状態で検出している。調査区中程やや東よりの袋状土壙は、重複の内容が把握できるが、東側については十分把握できなかった。

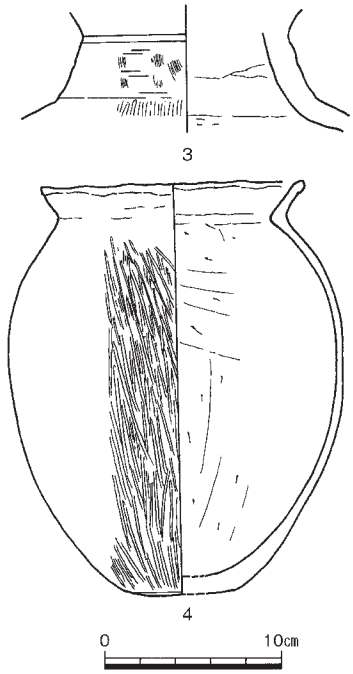
袋状土壙１（第 10 図、図版 4-1）

袋状土壙５の西側に位置する。調査当初は、浅い土壙と考えられたが、再度の確認の掘り下げで袋状を呈することが明らかとなった。深さは、海抜 56㎝を測る。最下層の第 12 層は、40㎝ほどの厚さを示すが、レンズ状の堆積を示さない。これより上層の埋土は、レンズ状を示している。第２層は薄い炭層であり、その上層部分の密度が濃く、第１および３層中には、灰白色の細砂が筋状に認められ

る。平面では確認できなかったが、断面図に示すように西側で重複している。

出土遺物は、第 11 層から３と４が検出されている。３は、「ハ」の字状に開く頸部を有する壺の破片である。頸部には、沈線の施文が認められる。４は、口径 14.7㎝、底径６㎝、器高 23㎝を測る甕である。器面調整は、ハケの後細かいヘラミガキ、内面はヘラケズリが施される。全面に煤が付着している。（下澤）



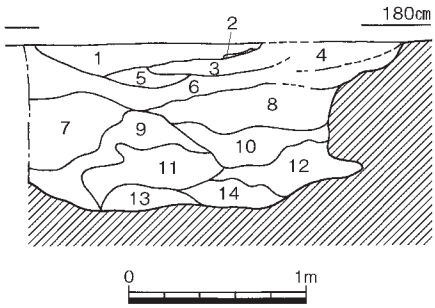


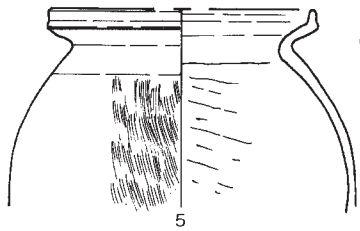
1　にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）［炭少含む］
2　灰黄褐色粘質土微砂（10YR6/2）［炭含む］
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
4　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
5　灰色粘質土微砂（5Y6/1）［炭少含む］
6　褐灰色粘質土少砂（10YR6/1）
7　灰白色粘質土（10Y7/1）［炭含む］
8　灰色粘質土微砂（7.5Y6/1）
9　明青灰色粘質土少砂（5BG7/1）［地山ブロック含む］
10　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
11　オリーブ灰色粘質土微砂（2.5GY5/1）
12　暗オリーブ灰色粘質土微砂（2.5GY4/1）

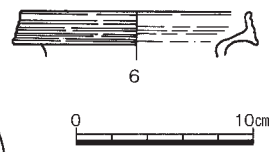
第 10 図　袋状土壙１（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙２（第 11 図、図版 4-2）

第ⅠＡ区の袋状土壙３の１ｍ南に位置する。大半が近代の破壊を受けており、平面形は不明確である。高さ 95㎝ある壁面は垂直気味に立ち上がり、中程で外傾に転じて開口部にいたる。底面はやや中央が窪んでおり、最深部の海抜高は 75㎝を測る。埋土は 14 層に区分できる。下層の第 12 ～ 14 層は地山ブロックの混入がみられる。土壙内は第７・８層を切って、第１～６層が堆積しており、二次的な掘削が想定できる。甕５は胴部外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。甕６は、口縁部を上方に拡張し、外面には煤が付着している。（水田）







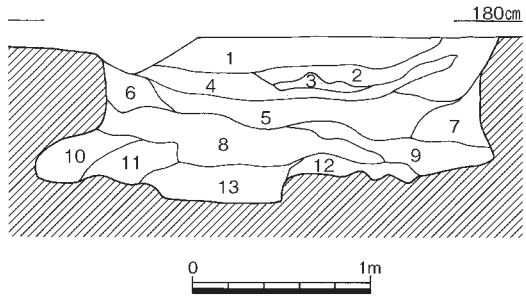
1　灰白色砂質土（10YR7/1）
2　灰白色粘質土微砂（2.5Y8/2）
3　灰黄色粘質土細砂〈微〉（2.5Y7/2）
4　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
5　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
6　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
7　灰色粘質土微砂（5Y6/1）
8　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
9　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
10　褐灰色粘質土（10YR4/1）
11　灰色粘質土微砂（5Y4/1）
12　灰オリーブ色粘質土（5Y4/2）［地山がブロック含む］
13　オリーブ灰色粘質土（2.5GY5/1）［地山ブロック含む］
14　灰色粘質土（7.5Y4/1）［地山ブロック含む］

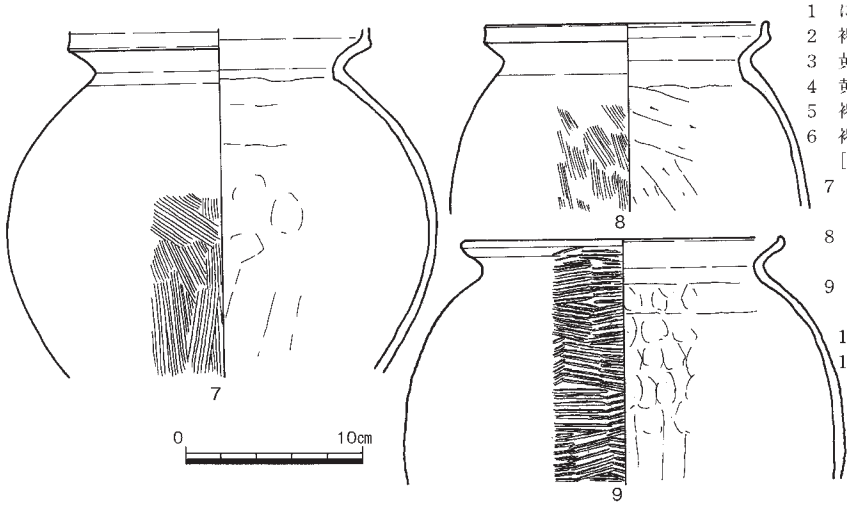
第 11 図　袋状土壙２（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙３（第 12 図）

調査区の北西隅、袋状土壙２の北に位置する。残存径約 200㎝、残存する深さは最深部で 94㎝を測る。土層断面から計測できる底面の海抜高は 77 ～ 92 ㎝で、少なくとも３基以上の重複が想定できるが、切り合い関係は不明。土壙の下半は基盤層の土がブロック状に堆積しており、短期間の埋め戻しが想定できる。

出土遺物は**７**・**８**のほか、胴部外面に叩き痕を残す甕**９**などである。これらの遺物から土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



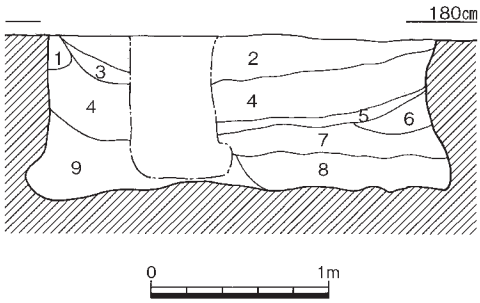


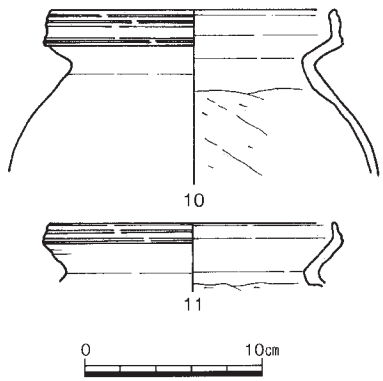
1　にぶい黄橙色砂質土（10YR7/2）
2　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
4　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
5　褐灰色粘質土（10YR5/1）
6　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）［地山ブロック含む］
7　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）［地山ブロック含む］
8　暗灰黄色粘質土微砂（2.5Y5/2）
9　灰色粘質土微砂（7.5Y5/1）［地山ブロック含む］
10　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
11　暗灰黄色粘質土微砂（2.5Y5/2）
12　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y5/2）
13　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）

第 12 図　袋状土壙３（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙４（第 13 図、図版 4-3）

第ⅠＡ区の袋状土壙８の西側２ｍに位置する。平面形は不整円の形を呈し、その規模は 250 × 180 ㎝を測る。断面形は袋状を呈する。検出面からの深さは 92㎝、平坦な底面の海抜高は 80㎝を測る。埋土は９層に区分できる。第１層は崩落土とみられる。下層第７～９層はブロックを含む埋土であり、埋め戻しが想定される。甕 **10** と **11** は、口縁部を上方に拡張し、口縁部には擬凹線文を施す。（水田）





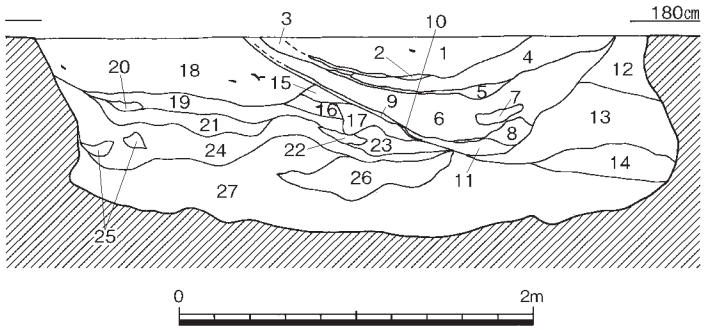
1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）［地山の崩落か］
2　灰黄褐色粘土（10YR4/2）［暗灰黄色粘土ブロック含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
4　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
6　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　灰色粘土（7.5Y4/1）
9　灰色粘土（10Y4/1）

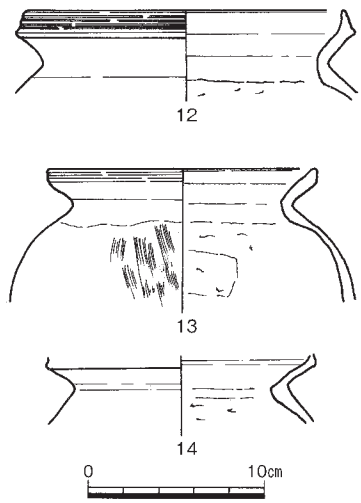
第 13 図　袋状土壙４（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙５（第 14 図、図版 4-4）

第ⅠＡ区の袋状土壙１から５m東に位置する。当初は土壙（第１～ 21層）として調査を進めたが後に袋状土壙と判明した遺構である。平面形は不整円形を呈し、その規模は300× 200㎝を測る。断面形は袋状を呈している。検出面からの深さは114㎝、床面は平坦な形状を呈し、海抜高は57㎝を測る。埋土は第１～ 27 層に細分できる。最下層の第 26・27 層は基盤層のブロックの混入があり、ほぼ水平に堆積している。第 25 層は粘質土ブロックの混入である。袋状土壙は第 12 と 18 層までの埋積後に、掘り返しが行われ、第１～ 11 層が堆積したと考えられる。

遺物は１層目から **12**・**13** 弥生土器が出土している。甕 **12** は口径 17.8㎝を測り、外面にはわずかに煤の付着がみられる。甕 **13** は口縁部が上方に摘み上げられている。外面はタテハケ、内面はヘラケズリが施されている。甕 **14** は口径 14.9㎝を測る。土壙の時期は、弥･後･Ⅳに比定できる。（水田）





1　明黄褐色砂質土（10YR7/6）
2　褐灰色砂質土（10YR5/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
5　灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
6　黄灰色粘質微砂（2.5Y4/1）
7　黄灰色微砂（2.5Y5/1）
8　黄灰色粘土（2.5Y5/1）
9　灰黄色粘土（2.5Y6/2）
10　灰黄色粘土（2.5Y6/2）
11　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
12　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
13　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
14　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y5/2）［砂が多い］
15　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
16　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
17　黄灰色砂質土（2.5Y5/1）
18　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
19　灰色粘土（5Y4/1）
20　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
21　灰色粘土（5Y4/1）
22　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
23　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
24　オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）
25　黄灰色粘質微砂（2.5Y4/1）
26　灰色粘質土（5Y5/1）［地山ブロック含む］
27　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）［地山ブロック含む］

第 14 図　袋状土壙５（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙６（第 15 図）

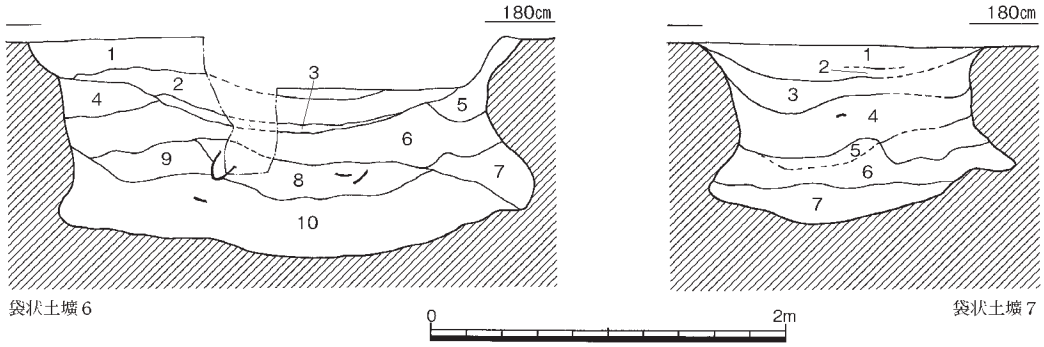
第ⅠＡ区の袋状土壙５から２m 東に位置する。当初土壙（第１～６層）として調査を進めたが後に袋状土壙と判明した遺構である。規模は、南北で 245㎝を測るが、東西で袋状土壙７と重複しており、単独では不詳であるが、440㎝を測る。平面は不整円形であり、断面形は袋状を呈している。検出面からの深さは 124㎝、底面は中央部に窪みが認められ、最深部の海抜高は 46㎝を測る。

埋土は、10 層に区分できる。堆積状況は、下層の第８～ 10 層で粘土ブロックを含んでいる埋土が水平に堆積をしており、人為的に埋め戻されていることが考えられる。第４と５層は、壁面が剥落した崩落土とみられる。

遺物は、第８・９層から **21**・**22** の弥生土器が出土している。**21** は甕の底部である。外面はハケ、内面は底部にユビオサエ・ヘラケズリが施され、やや張り出し気味となる。外面には、黒班がみられる。甕 **22** は、胴部中央付近から底部にかけて残存しており、残存高 17.6㎝を測る。外面はハケ調整後ヘラミガキ、内面はヘラケズリがみられる。時期は弥・後・Ⅳに比定できる。（水田）

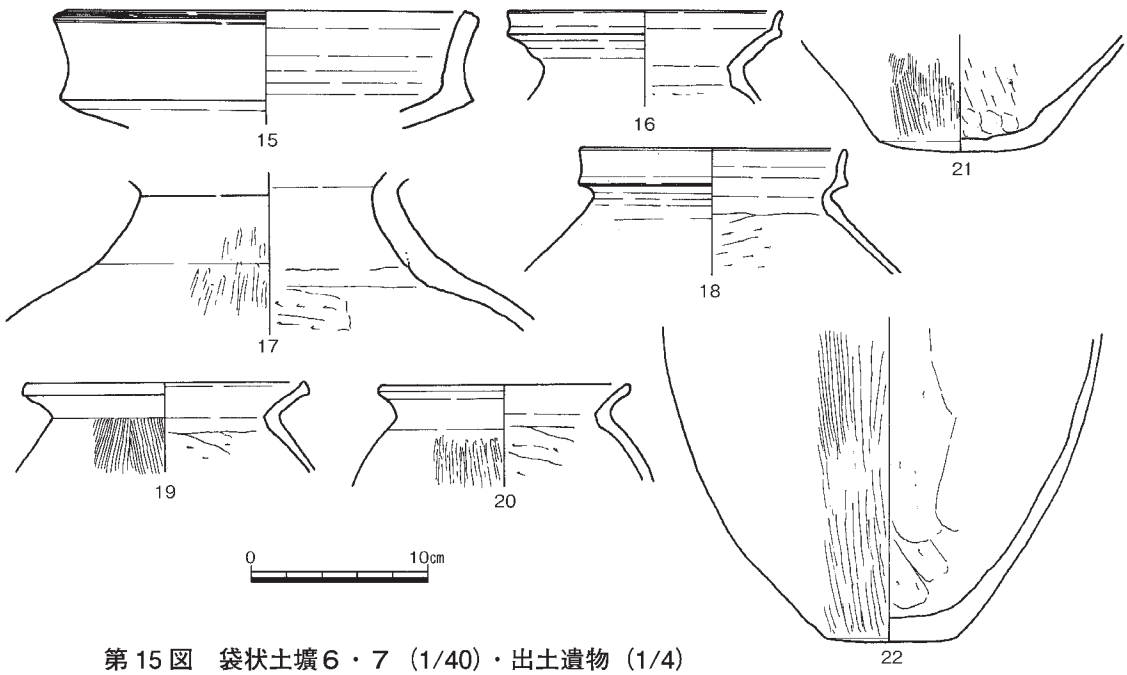
袋状土壙７（第 15 図）

第ⅠＡ区の袋状土壙６の東に位置し、袋状土壙６とは重複している。平面形は不整円形であり、断面形は壁面の上部が外傾し、両端に抉りを持つ袋状を呈している。検出面からの深さは 101㎝、底面海抜高は 69㎝を測る。土壙内の埋土はほぼ水平に堆積しており、７層に分けられた。遺物は、**15** ～ **20** の弥生土器が出土している。**15** ～ **17** は壺である。**15** は大きく立ち上がる複合口縁をもつ壺で口縁端部に櫛描文が施されている。**16** は口径 15.3㎝を測る。**18** ～ **20** は甕である。**18** は口縁部を上方に拡張し、**19**・**20** は「く」の字状の口縁部をもつタイプである。**19** は口径 15.9㎝を測る。**20** は外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施される。時期は弥・後・Ⅳに比定される。（水田）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
3　褐灰色粘土（10YR4/1）
4　褐色粘土（10YR4/4）［地山崩落ブロックか］
5　褐色粘土（10YR4/4）［地山崩落ブロックか］
6　黒褐色粘性微砂（2.5Y3/2）
7　暗灰黄色粘性微砂（2.5Y4/1）
8　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
［灰オリーブ色粘土ブロック含む］
9　暗灰色粘性微砂（2.5Y4/2）
［オリーブ褐色粘土ブロック含む］
10　灰色粘土（7.5Y4/1 ～ 10Y4/1）
［暗オリーブ灰色粘土ブロック含む］

1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
4　黒褐色粘性微砂（10YR3/1）
［暗灰黄色粘質土ブロック含む］
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
6　黒褐色粘性微砂（10YR3/1 ～ 2.5Y3/1）
［暗灰黄色粘土ブロック含む］
7　灰色粘土（10Y4/1）
［緑灰色粘性微砂ブロック含む］

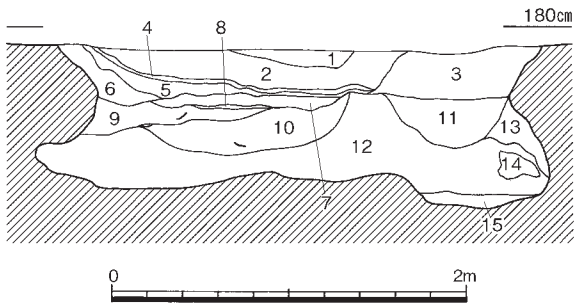


第 15 図　袋状土壙６・７（1/40）・出土遺物（1/4）

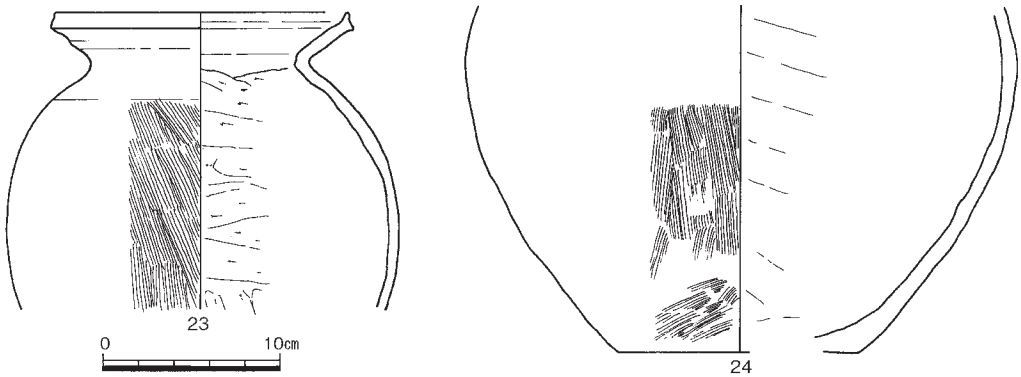
袋状土壙８（第 16 図）

調査区の中央北、袋状土壙４の東隣に位置する。長径 140㎝、短径 110㎝のいびつな円形を呈する。残存する深さは最深部で 93㎝を測る。底面の海抜高は 76 ～ 97㎝で、少なくとも３基以上の土壙が重複していると考えられるが、切り合い関係は不明である。堆積土の下半は基盤層の土がブロック状に堆積しており、人為的な埋め戻しが想定できる。また、第 10・11 層など、埋め戻しされた後改めて掘り返されたともとれるような層序が確認できる。第１・２層と４・５層は埋め戻した土が沈み込んだ後のレンズ状の自然堆積と思われる。

出土遺物は **23・24** などである。第９・10 層や 15 層からの出土で、埋め戻し中に廃棄されたものと考えられる。これらの遺物の特徴から土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
2　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
4　黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
5　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
6　暗灰黄色粘質土微砂（2.5Y5/2）
7　灰色粘質土（5Y4/1）［少量炭を含む］
8　灰色粘質土（7.5Y5/1）
9　灰色粘質土（5Y4/1）
10　灰色粘質土微砂（10Y4/1）［地山ブロック含む］
11　灰色粘質土（7.5Y5/1）
12　暗オリーブ灰色粘質土（2.5GY4/1）［地山ブロック含む］
13　灰色粘質土（7.5Y4/1）
14　緑灰色粘質土微砂（7.5GY5/1）
15　オリーブ灰色粘質土微砂（2.5GY6/1）［地山ブロック含む］



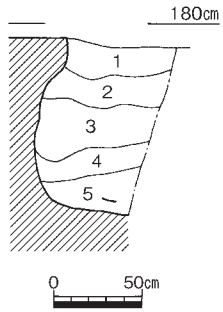
第 16 図　袋状土壙８（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙９（第 17 図、図版 4-5）

調査区の中央南端で、袋状土壙７の南東２m に位置する。土壙の大部分は側溝・調査区外に広がるため平面形は明らかでない。断面の形状は北側しか明らかでないが、地表下 20㎝あたりから外側に抉れる状況がみて取れるので、袋状土壙と考えてよい。残存する深さは 100㎝を測る。底面の海抜高は 72㎝である。堆積土の下半は基盤層の土がブロック状に入る水平堆積で、人為的かつ短期間の埋め戻しが考えられる。

図示できる遺物はないが、周囲の状況から見て、この土壙は他の土壙と大差ない時期のものと考えて差し支えない。

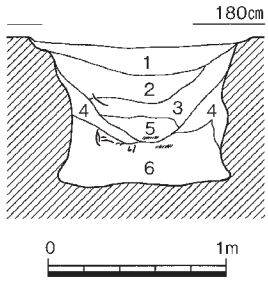
（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　にぶい黄灰色粘質土微砂（10YR4/3）
3　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
4　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
5　灰色粘土（10Y4/1）［地山ブロック含む］

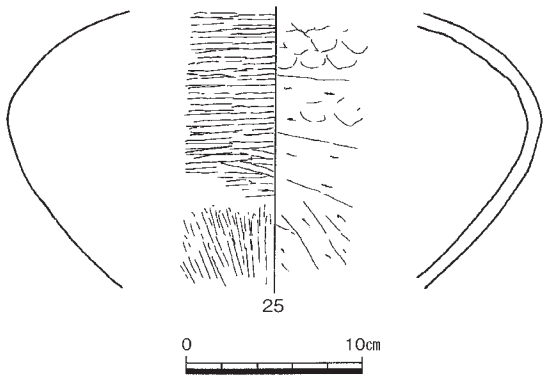
第 17 図　袋状土壙９（1/40）

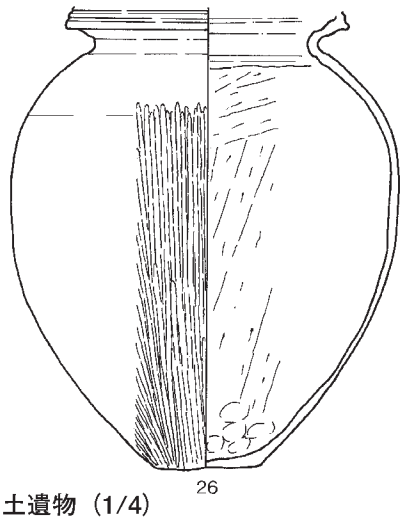
袋状土壙 10（第 18 図、図版 4-6）



1　灰白色粘質上微砂（10YR7/1）　4　黄灰色粘質上（2.5Y5/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）　5　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
3　褐灰色粘質土（10YR6/1）　6　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）

第ⅠＡ区の袋状土壙９の 1m 北に位置する。平面形は 120 × 90cmの楕円形を呈する。断面形は袋状を呈している。検出面からの深さ 80cm、平坦な床面は海抜高は 90cmを測る。埋土は６層に区分できる。最下層の第６層目は水平堆積を示す。第１～３・５層は二次的に掘り直されたものとみられる。遺物は、壺**25**と甕**26**である。(水田)





第 18 図　袋状土壙 10（1/40）・出土遺物（1/4）

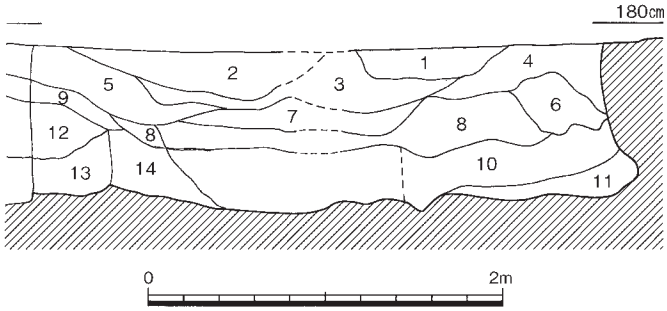
袋状土壙 11（第 19 図、図版 4-7）

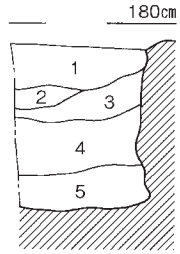
袋状土壙９の東側に位置する。当該袋状土壙は、連続したプランで確認されていることから単独の内容で把握できなかった。深さは、海抜 72cmを測る。断面図では、北西側で外側に張り出しているが、第６層が地山ブロックの崩落土であることから、復元すると現状よりも深く抉られていることが推測される。単独の袋状土壙としては規模が大きく、また、埋土の堆積状況が北西側と南東側で様相が異なることから、重複が考えられるが判断しがたい。明確に重複が認められるのは、第 12 と 13 層の埋土を有するものが、当該土壙に切られる内容の重複が示されている。

出土遺物は、壺と甕が検出されている。**27** は、口縁部の破片で外面に沈線が施文されている。**28** は、口縁部外面に凹線が施される。外面には、煤が付着している。**29** は、口径 15.3cm、底径 5.2cm、器高 21.8cmを測る。器面外面の肩部まではナデが施され、底部は張り出している。外面調整は、ナナメのタタキの後タテヘラミガキ、内面は頸部屈曲部下から胴部下半にかけヨコからナナメ、底部にかけてはタテのヘラケズリが施されている。底部は、押圧痕が施され、その凹凸が認められる。器面には、煤が付着している。（下澤）

袋状土壙 12（第 19 図）

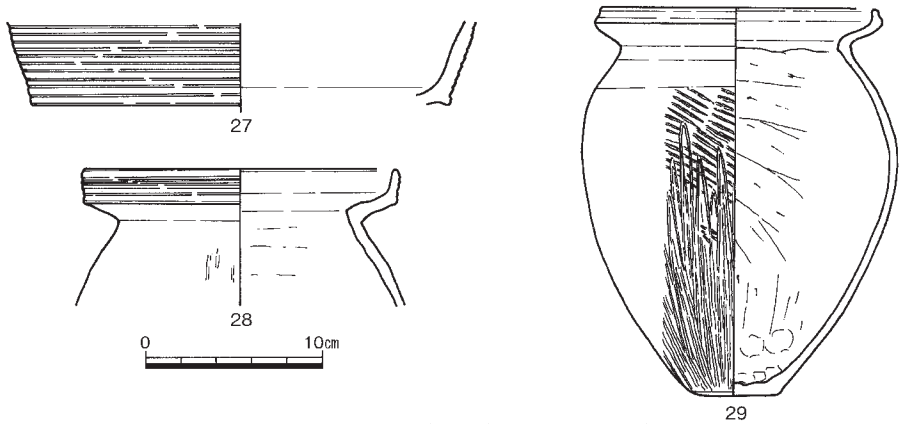
袋状土壙 11 の東側に位置する。当該土壙は、連続したプランの一部である。深さは、海抜 74cmを測る。断面図の北東側は、掘り込みのプランを把握できたが、南西側は第９図に示すように連続した袋状土壙のプラン内での作図のため不詳である。断面からは、抉りが若干認められる。埋土は、第４と５層は水平で、これより上層はレンズ状堆積である。（下澤）





1　造成土
2　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
3　灰色粘土（5Y4/1）
4　黒褐色粘質土（10YR3/2）
5　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［にぶい黄褐色粘土ブロック含む］
6　暗褐色粘質土（10YR3/4）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
9　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
10　灰色粘土（5Y4/1）［灰色粘土ブロック含む］
11　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［灰色粘土ブロック含む］
12　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［灰色粘土ブロック含む］
13　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［灰オリーブ色砂質土粒含む］
14　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）

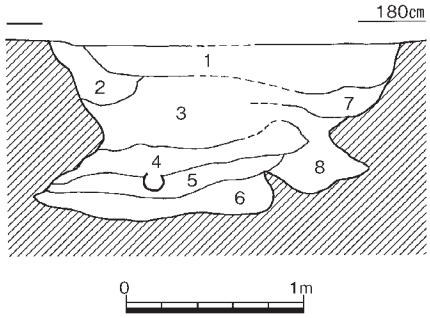
1　にぶい黄褐色粘質土微砂（10YR5/4）
2　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
3　灰色粘質土（7.5Y5/1）
4　灰色粘質土（10Y4/1）［砂ブロック含む］
5　暗オリーブ灰色粘質土微砂（2.5GY4/1）



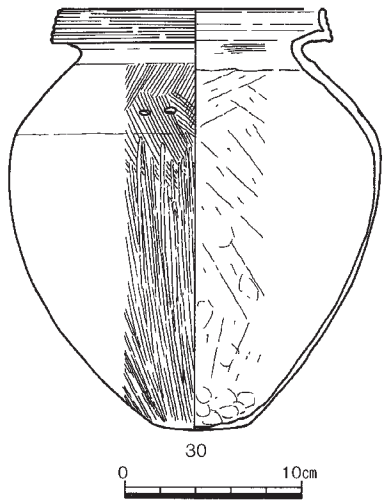
第 19 図　袋状土壙 11・12（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 13（第 20 図、図版 4-8）

袋状土壙 11 の北側で、連続して重複しているプランの中に位置している。深さは、海抜 68 と 83 ㎝を測る。前者の深さのものは、第１～６層の埋土を有する土壙に伴う。後者は、第８層に伴うものである。当該土壙は、断面から３個の切り合いが想定される。このうち最も古いのは第８層の埋土



1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
2　灰黄色粘質土微砂（2.5Y6/2）
3　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
4　灰色粘質土微砂（5Y4/1）［地山ブロック含む］
5　明緑灰色粘質土多砂（10G7/1）
6　灰オリーブ色粘質土微砂（7.5Y4/2）［地山ブロック含む］
7　灰色粘質土（10Y5/1）
8　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）［地山ブロック含む］



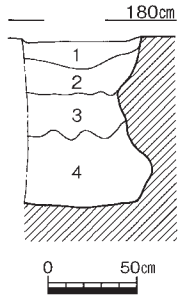
第 20 図　袋状土壙 13（1/40）・出土遺物（1/4）

で、それを切る状態で第４と５層が堆積する。そして、第７と１層が第３層を切る状況が調査時を含め断面の抉りの内容から、その可能性が指摘される。

出土遺物は、第５層から **30** の甕が検出されている。口径 14.7㎝、底径 5.5㎝、器高 23.6㎝を測り、器面には、煤が付着し、吹きこぼれ痕が認められる。（下澤）

袋状土壙 14（第 21 図、図版 5-1）

袋状土壙 13 の北側で、連続して重複しているプランの中に位置している。深さは、海抜高 75㎝を測る。南側部分は、抉りを確認したが、北側は袋状土壙の埋土中で止まっている。第３層と４層は水平堆積で、地山ブロックを含んでいる。（下澤）



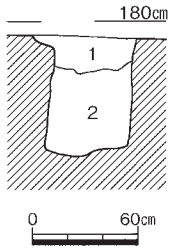
1　灰白色粘質土微砂（10YR7/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）［地山ブロック含む］
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）［地山ブロック含む］

第 21 図　袋状土壙 14（1/40）

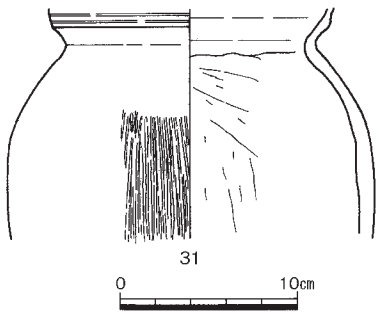
袋状土壙 15（第 22 図、図版 5-2）

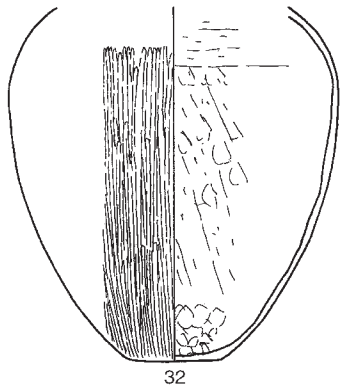
袋状土壙８の南東下側に、連続して重複しているプランの中に位置している。深さは、海抜 104㎝測る。断面では、両側の壁が確認できた。プランは、両壁とも抉りの形状を示さず、ピット状となるが、西側壁が掘り方よりも外になるのと、埋土の状況等から袋状として考えている。

出土遺物は、図版 5-2 に示すように第２層の上層から **31** と **32** の甕が検出されている。**31** は、口縁部外面に凹線文が施されている。**32** は、底部が張り出し、ヘラミガキが施される。（下澤）



1　造成土
2　灰色粘質土（7.5Y4/1）
［地山ブロック少量含む］

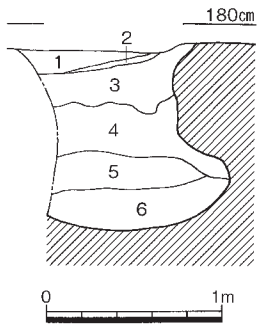




第 22 図　袋状土壙 15（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 16（第 23 図、図版 5-3）

袋状土壙 12 の東に接し、連続しているプランの南端に位置する。海抜高は、63㎝を測る。プラン検出時では、袋状土壙 12 を切っていることが認められている。断面で確認されている北側は、掘り方より外側に抉られた形状が明確に認められた。埋土は、第４層中に炭が纏まっている部分が認められる。第２層は、灰白色の砂で、水が流れた後に堆積する砂の状況を呈する。（下澤）



1　褐灰色砂質土（10YR6/1）
2　灰白色砂質土（2.5Y8/2）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
4　灰白色粘質土微砂（10Y7/1）
［炭少含む］
5　灰色粘質土（7.5Y5/1）
［明緑灰色砂ブロック含む］
6　灰色粘質土（10Y4/1）

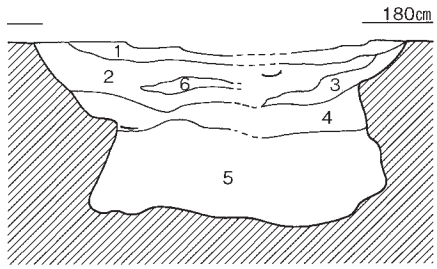
第 23 図　袋状土壙 16（1/40）

袋状土壙 17（第 24 図、図版 5-4）

袋状土壙 12 の北上側に位置する。当該袋状土壙は、連続したプランで確認されている。深さは、海抜 63㎝を測る。連続したプランの中で確認されているが、プラン確認時では、東西 100 ×南北 95 ㎝の円形を示したが、断面観察から確認できた南北の掘り方は 210㎝を測る。断面からの形状は、中程部分で外側に抉って掘り込まれている。

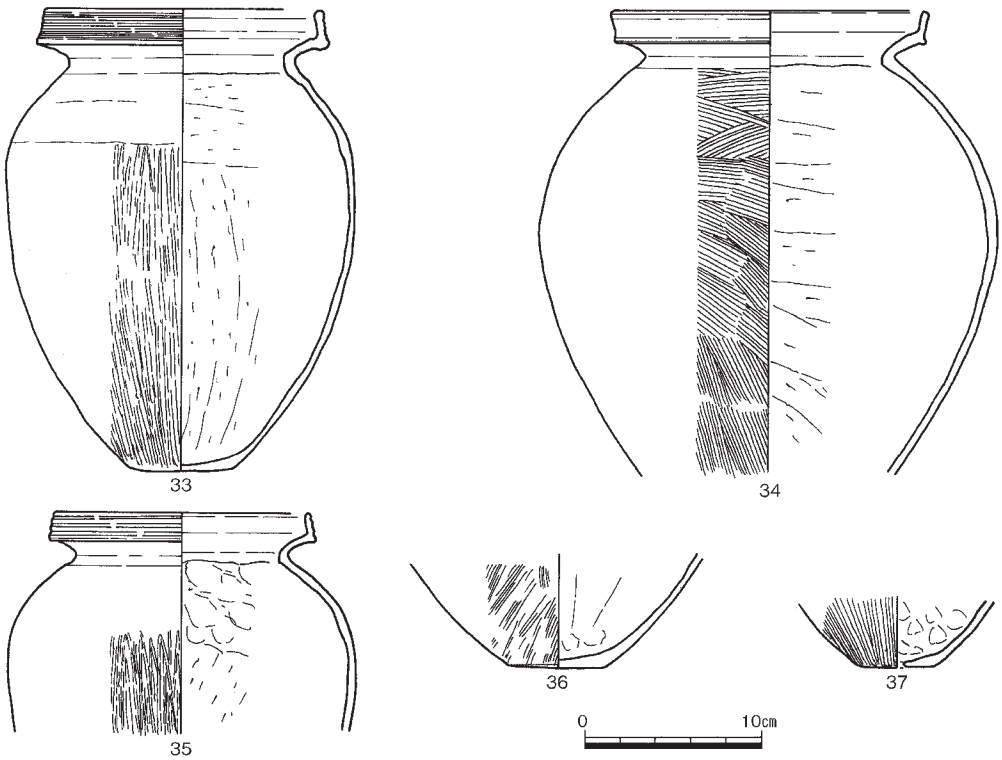
埋土は、第４層までレンズ状堆積を示しているが、第５層は厚さ 50㎝の堆積が認められる。この堆積は、自然に埋没した状況ではなく、人為的に埋められた内容を呈していた。遺物は、第５層から上からの検出であり、この第５層からの遺物は確認することはできなかった。第８図で示したプランは、灰白色砂が円形に認められたものである。

出土遺物は、**33** ～ **37** の甕である。**33** は、口径 15.5㎝、底径 6.1㎝で、器高は胴部下半と底部部分との接合面がないことから復元推定である。口縁部外面は、凹線文が施される。外面調整は、肩部下半までナデ、以下ヘラミガキ、底部もヘラミガキを施す。内面は、肩部下半までヨコ、以下タテヘラケズリを行っている。外面には、煤が付着する。**34** は、口径 17.7㎝を測る。外面調整は荒いハケ、内面はヨコヘラケズリを施している。**35** は、口径 14.2㎝を測る。口縁部は、３本の凹線文を施す。**36** と **37** は底部片で、**37** には穿孔が認められる。　（下澤）



0　1m

1　灰白色粘質土微砂（10YR7/1）
2　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
4　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
5　灰色粘質土（5Y4/1）
6　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）



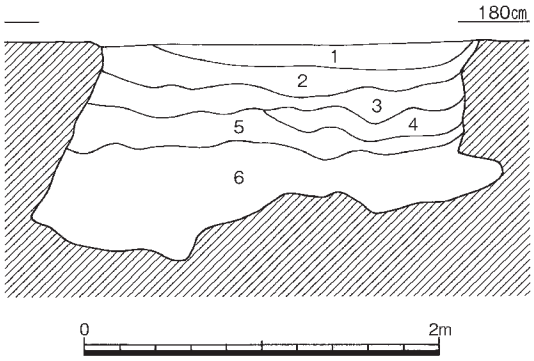
第 24 図　袋状土壙 17（1/40）・出土遺物（1/4）

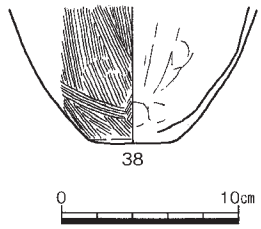
袋状土壙 18（第 25 図）

袋状土壙 14 の東側に位置する。当該袋状土壙は、連続したプランで確認されている。深さは、海抜 63㎝を測る。連続したプランの中で確認されているが、第９図で示すようにこれらのプランを切って設けていることを把握している。プラン確認時では 170 × 130㎝、断面では 210㎝を測る。深さは、底の状態から 46㎝と 72㎝を測る。

埋土は、最下層の灰色粘質土ブロックを含む第６層が厚く、水平の堆積を示している。

出土遺物は、**38** の底部片である。底径 5㎝を測り、外面調整は粗いハケ、内面にはタテヘラケズリと押圧痕が認められる。（下澤）





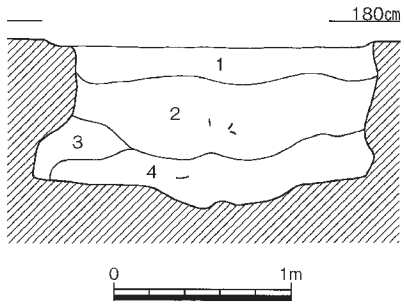
1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［暗灰黄色粘土ブロック含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
6　灰色粘土（5Y4/1）［灰色粘質土ブロック含む］

第 25 図　袋状土壙 18（1/40）・出土遺物（1/4）

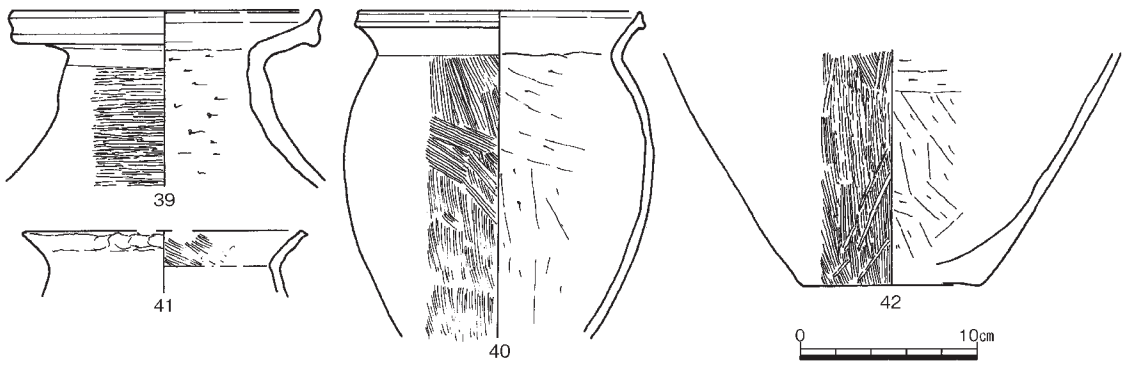
袋状土壙 19（第 26 図）

調査区の北東部、袋状土壙 18 の北東 1ｍに位置する。長径 230㎝、短径 200㎝の楕円形を呈している。残存する深さは 92㎝を測り、底面の海抜高は 76㎝である。第２～４層は基盤層の土がブロック状に入る水平堆積層で、人為的な短期間の埋め戻しが想定できる。

出土遺物は **39** ～ **42** などである。遺物の時期には若干幅があるようだが、この土壙の廃絶時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［地山ブロック含む］
3　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
4　灰色粘土（7.5Y4/1）

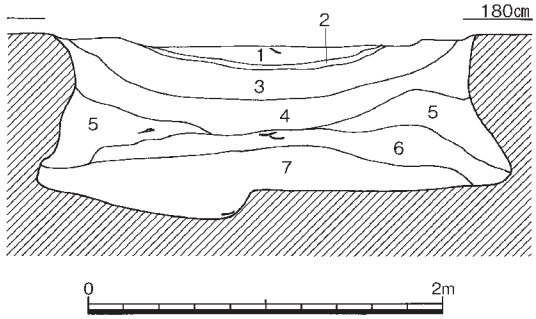


第 26 図　袋状土壙 19（1/40）・出土遺物（1/4）

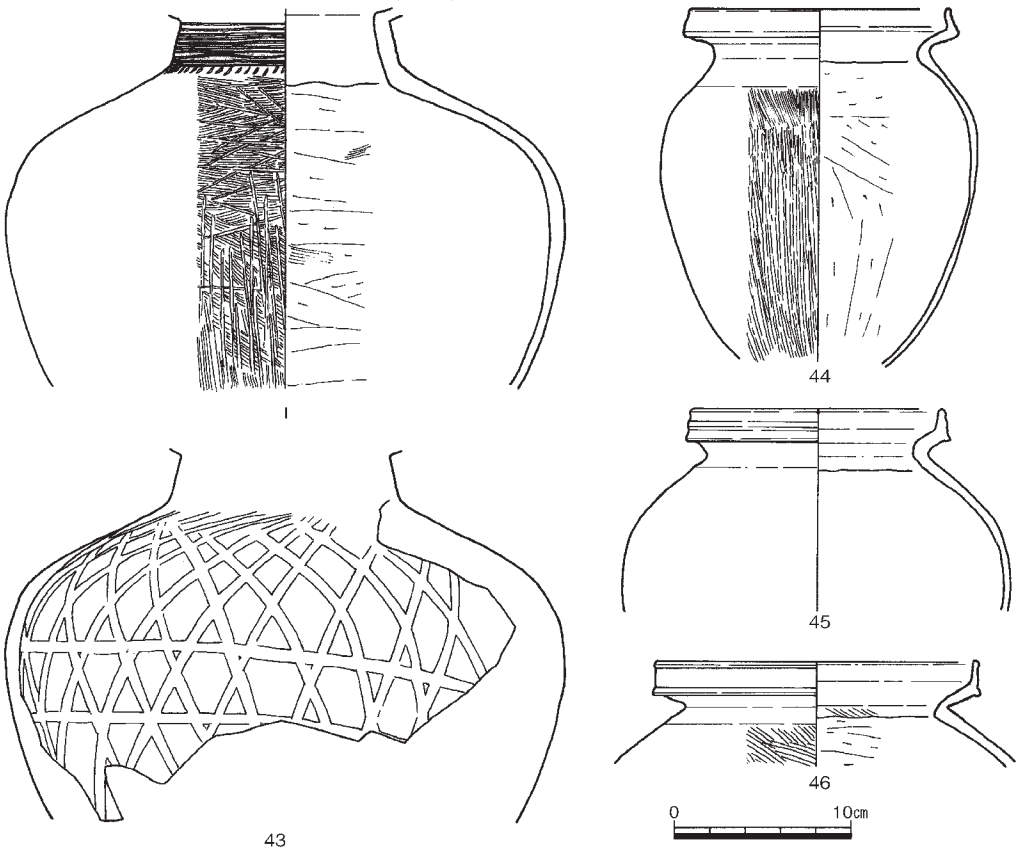
袋状土壙 20（第 27 図）

第ＩＡ区の袋状土壙 19 の３m 南東に位置する。平面形は、260 × 220㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 104㎝、底面は中央部で約 10㎝の段差をなし、最深部の海抜高は 69㎝を測る。埋土は７層に区分できる。最下層の第７層は地山ブロックが含まれた埋土が厚く水平堆積しており、埋め戻しが考えられる。第１～３層は、第４層が堆積した後に二次的に掘削され、再び埋積したとみられる。

遺物は、第５～７層から弥生土器が出土している。壺 **43** は、頸部にヘラガキ沈線、頸部下には列点文が施されている。外面は、ハケ調整後ヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリを施す。また、胴部全体を籠目痕跡が、比較的明瞭に残されている。**44** ～ **46** は甕であり、いずれも口縁部を上方に拡張するタイプである。**44** は外面をハケメ後ヘラミガキ、内面をヘラケズリによって調整される。口径は 14.6㎝を測る。外面に煤が付着している。**45** は外面に黒斑がみられる。口径は 14.0㎝を測る。**46** は外面を斜め方向の粗いハケメが施されている。時期は、弥・後・Ⅳと考えられる。（水田）



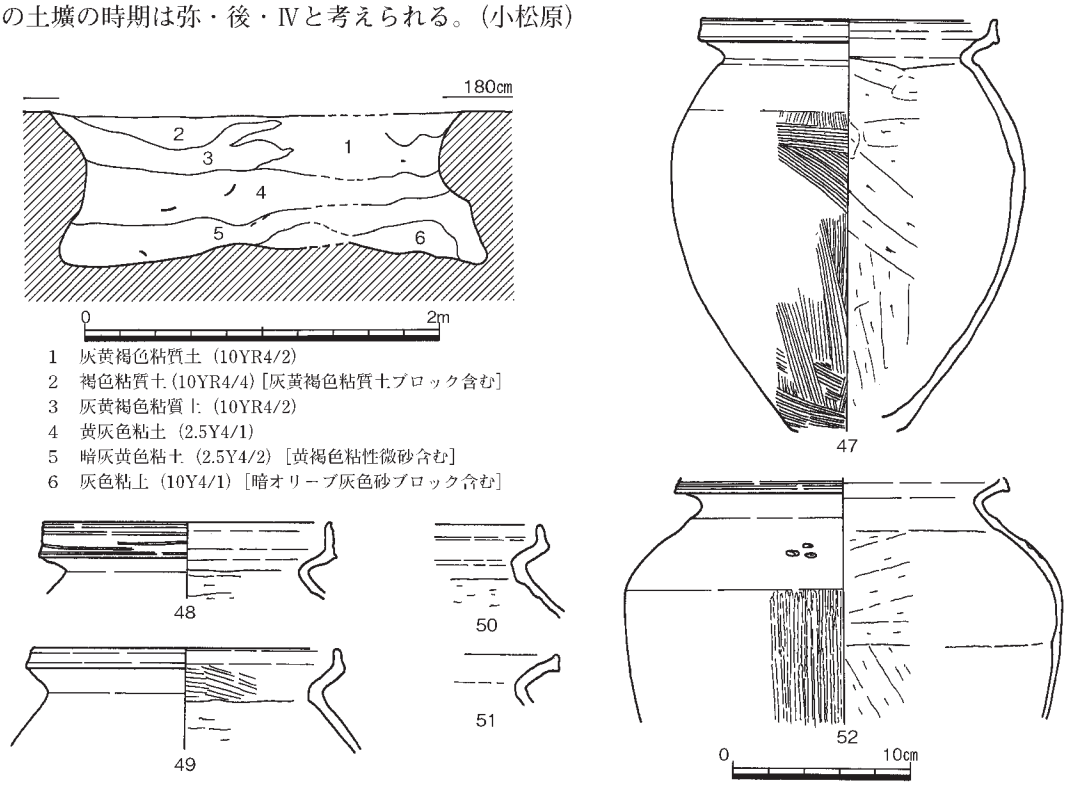
1　褐灰色粘質土（10YR6/1）［明黄褐色砂ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR6/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
4　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
5　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）［灰白色ブロック含む］
6　灰黄色粘質土微砂（2.5Y7/2）
7　灰色粘質土微砂（7.5Y5/1）［青灰色砂質土ブロック含む］



第 27 図　袋状土壙 20（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 21（第 28 図）

調査区の南東隅に位置する。平面の形は不定で、その形状から袋状土壙 22・23 を含めて５～６基以上の重複が考えられるが、切り合い関係は不明である。残存する深さは 88㎝を測り、底面の海抜高は 85㎝である。堆積層のほとんどは基盤層の土をブロック状に含んでおり、短期間での埋め戻しが考えられる。出土遺物は **47** ～ **52** などで、第４・５層からの出土が多い。出土遺物から見て、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）

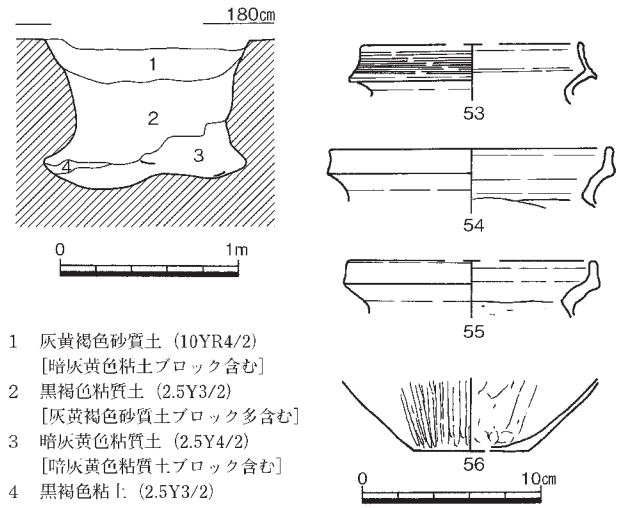


第 28 図　袋状土壙 21（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 22（第 29 図、図版 5-5）

袋状土壙 20 の東に位置する。平面は不整形であり、断面形は袋状を呈する。検出面からの深さは 92㎝、床面の海抜高は 88㎝を測る。埋土は４層に区分できる。埋土中には基盤土ブロックが含まれており、短期間に埋め戻されたとみられる。

遺物は、第３層から弥生土器が検出された。**53** は口縁端部に６条の凹線文を施す。**54**・**55** の口縁端部は、強いナデにより凹線状に窪んでいる。**56** は底部である。時期は弥・後・Ⅳに比定できる。（水田）

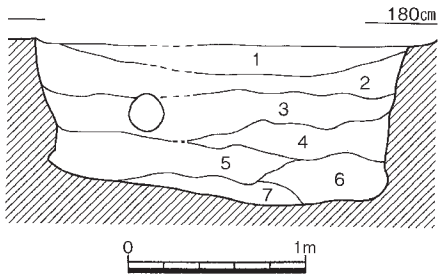


第 29 図　袋状土壙 22（1/40）・出土遺物（1/4）

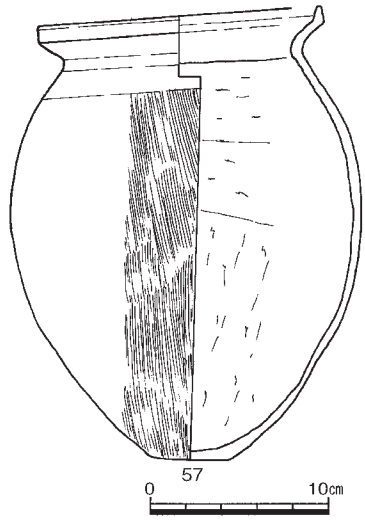
袋状土壙 23（第 30 図）

調査区の東端、袋状土壙 22 の東に位置する。残存する深さは 95㎝を測り、底面の海抜高は 76㎝である。検出時の平面形状からは２基以上の重複が想定できたが、断面観察から切り合い関係はわからなかった。堆積土のうち第２層～７層まで基盤層の土がブロック状に入っている。人為的な埋め戻しが窺われる。第１層は自然堆積と考えられる。

出土遺物の 57 は甕で、第３層からの出土である。この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられ、袋状土壙 21・22 とほとんど時期差なく埋め戻されたと思われる。（小松原）



1　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
2　褐色粘質土（10YR4/4）
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［黄褐色ブロック含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
5　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）［黄褐色粘性微砂ブロック含む］
6　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
7　灰色粘土（10Y4/1）［暗オリーブ灰色砂ブロック含む］



第 30 図　袋状土壙 23（1/40）・出土遺物（1/4）

（２）土壙

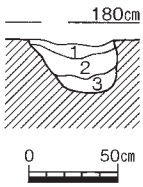
土壙は、調査区東寄りに検出されている。２基検出されているが、その内の１基は、細長いプランで認められた。しかし、北側部分建物基礎の影響で不詳であり、溝の可能性もある。（下澤）

土壙１（第 31 図、図版 5-6）

第ⅠＡ区の袋状土壙 16 の１m 東に位置する。平面形は径 70㎝の円形である。検出面からの深さは 30㎝、底面の海抜高は 140㎝を測る。埋土は３層に区分できる。最下層には砂質土ブロックを含む。出土遺物が皆無なため時期は不明である。（水田）

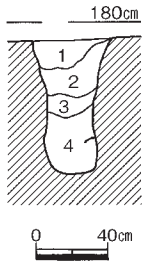
土壙２（第 32 図、図版 5-7）

第ⅠＡ区の袋状土壙 20 の１m 北に位置する。土壙は袋状土壙 20 に切られている。平面は楕円形であり、検出面からの深さは 76㎝、底面の海抜高は 94㎝を測る。出土遺物は最下層から土器片が出土している。時期は埋土から周辺の袋状土壙の時期に近いと想定できる。（水田）



1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
3　灰色粘質土（7.5Y4/1）
［明緑灰色砂質土ブロック含む］

第 31 図　土壙１（1/40）



1　褐灰色砂質土（10YR6/1）
［灰白色砂ブロック含む］
2　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
3　灰色粘質土微砂（5Y4/1）
［地山ブロック含む］
4　黒褐色粘質土（10YR3/1）

第 32 図　土壙２（1/40）

２　第ＩＢ調査区

調査当初は、第Ｉ区としていたが後に同区をＡＢ２区に分けた南北方向の調査区である。第ＩＡ調査区から続く部分は、先の既存建物の影響を受けていなかったが、それより北側は、コンクリートパイルが打ち込まれていた。

遺構は、調査区全域に粗密なく認められている。検出遺構は、袋状土壙が主であり、北西から南東方向の溝も２条認める。（下澤）

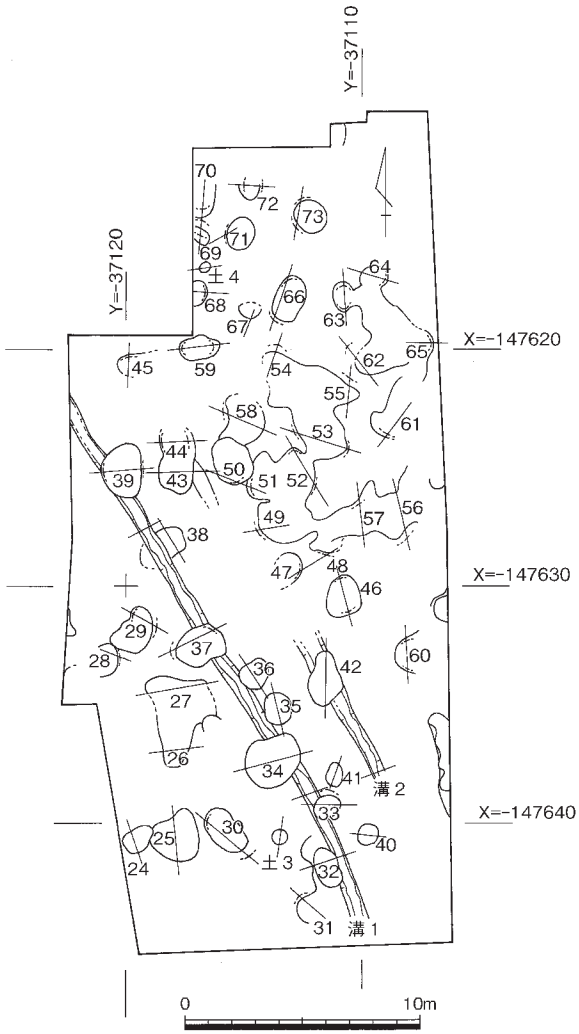
（1）袋状土壙

単独のプランで検出されるが、断面の観察から重複の土壙が多く認められている。また、第ＩＡ区で認められた連続するプランは、調査区中央北東よりで検出されている。（下澤）

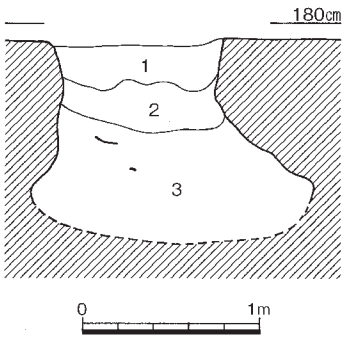
袋状土壙 24（第 34 図）

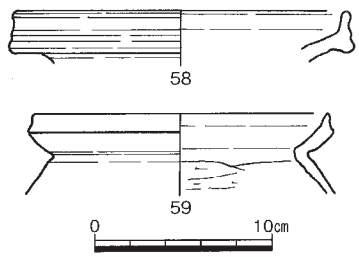
調査区の南西隅に位置する。長径 140㎝、短径 100㎝、残存する深さは推定で 110㎝を測る。底面の海抜高は 55㎝程度と思われる。遺構検出時の観察から、この土壙が重複する袋状土壙 25 を切って掘られていることがわかる。基盤層の土がブロック状に入る水平堆積層が観察できる。第２・３層がそれにあたり、短期間での埋め戻しが想定できる。

遺物は主に第３層から出土している。時期は弥・後・Ⅳと考える。（小松原）



第 33 図　第ＩＢ区遺構配置図（1/300）





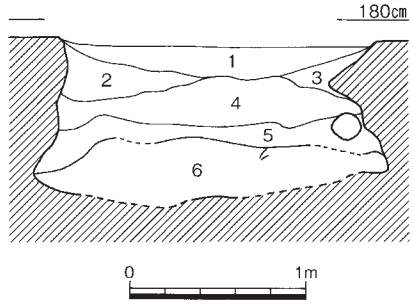
1　褐灰色砂質土（10YR5/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）［灰色砂ブロック含む］
3　灰色粘質土微砂（10Y4/1）［明緑灰色砂ブロック含む］

第 34 図　袋状土壙 24（1/40）・出土遺物（1/4）

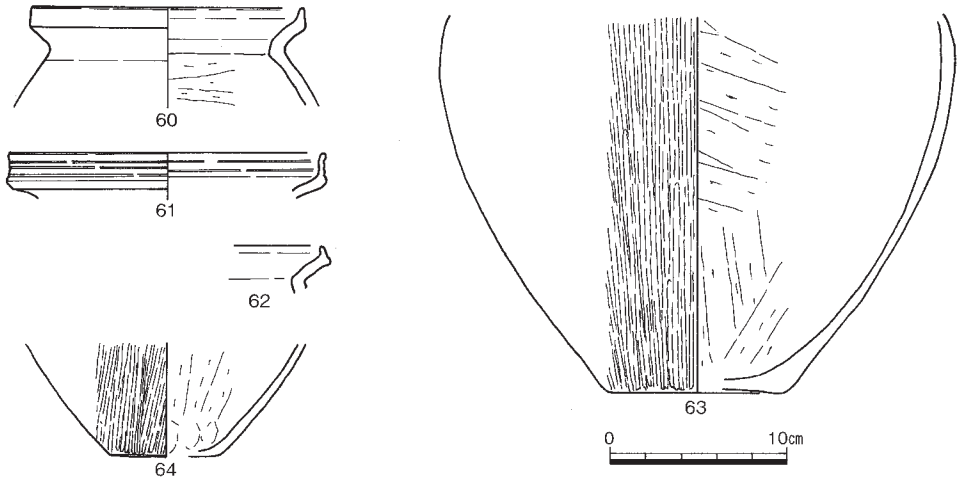
袋状土壙 25（第 35 図、図版 5-8）

調査区の南西隅、袋状土壙 24 の東に位置する。残存する深さは推定で 95㎝程度、底面の海抜高はおよそ 75㎝と思われる。２～３基の重複が想定できるが、切り合い関係は不明である。第４～６層まで短期間に埋め戻され、第２・３層が堆積して浅いくぼみとなった後、第１層が自然に堆積したと考えられる。

遺物は、第４層以下から多く出土した。**64** は断面図の第５層に見える甕の底部である。この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
4　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）［灰黄色砂質土粒含む］
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
6　灰色粘土（7.5Y4/1）



第 35 図　袋状土壙 25（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 26（第 36 図、図版 6-1）

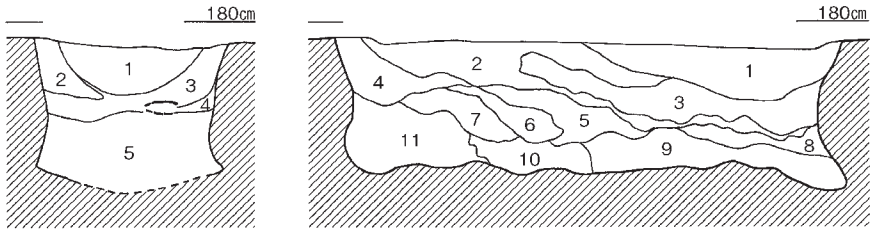
第ⅠＢ区の袋状土壙 25 の北に位置する。袋状土壙 27 とは重複している。平面形は不明確である。検出面からの深さは 82㎝、底面は中央がやや窪み、最深部の海抜高は 88㎝を測る。埋土は、５層に区分できる。最下層の第５層は粘土が厚く堆積しており、短期間に堆積したものとみられる。第１層は、第２層が堆積した後に掘り返されていると考えられる。出土遺物は、弥生土器の甕 **67**・**68**・**70**・**71** が検出された。いずれも口縁部を上方に拡張している。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。

（水田）

袋状土壙 27（第 36 図）

第ⅠＢ区の袋状土壙 26 の北に位置し、袋状土壙 26 と重複している。平面形は不明確である。検出面からの深さは 84㎝、底面は凹凸な面がみられ、海抜高は 86㎝を測る。埋土は９層に区分できる。下層の第５～ 11 層は、粘土と地山ブロックを含む粘土が水平堆積をしている。

出土遺物は、最下層から壺 **65**、上層から甕 **66** が検出された。**65** は、頸部下半の沈線の下にヘラ先による刺突文が施されている。外面はハケメ後にタテ方向のヘラミガキ、内面は肩部にヨコ方向のヘラケズリ、下半はタテ方向のヘラケズリを施す。**66** は、口径 17.3㎝を測る。外面はタテハケ、内面はタテヘラケズリを施す。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。（水田）

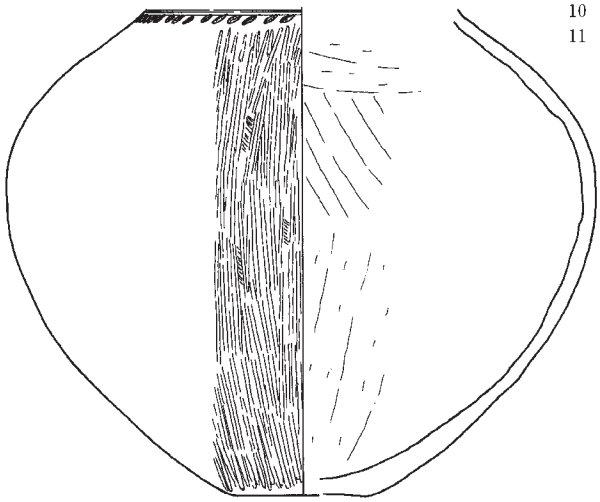


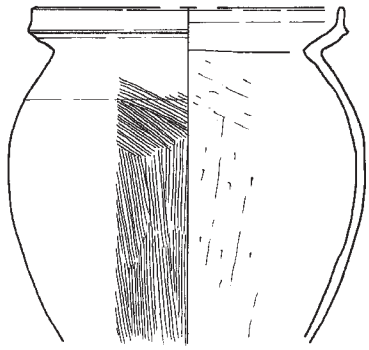
袋状土壙 26　　袋状土壙 27

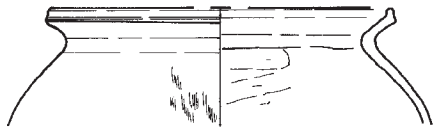
0　2m

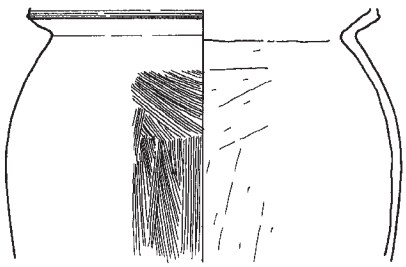
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
2　褐色粘質土（10YR4/4）
3　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）［黄褐色砂質土粒含む］
4　黒褐色粘性微砂（2.5Y3/1）
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）

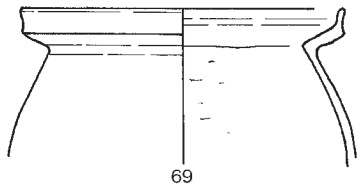
1　暗褐色粘質土（10YR3/3）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
4　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
5　黒褐色粘土（2.5YR3/1）［微砂ブロック含む］
6　黒色粘土（2.5Y2/1）
7　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［微砂ブロック含む］
8　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［グライ化地山ブロック含む］
10　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
11　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［地山ブロック含む］

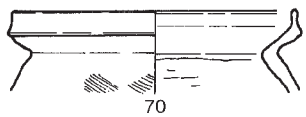










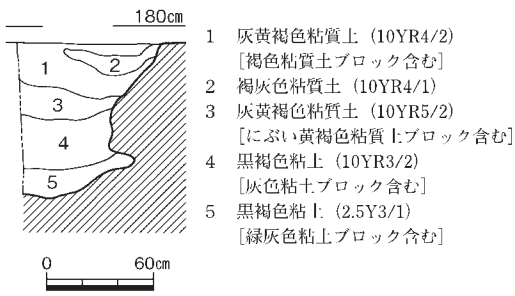


0　10cm

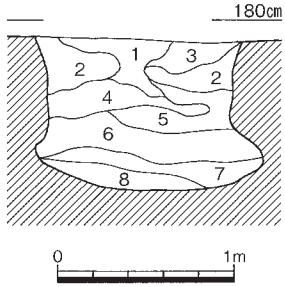
第 36 図　袋状土壙 26・27（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 28（第 37 図）

調査区の中央部西端に位置する。残存する深さは 88cm、底面の海抜高は 83cmである。埋土は水平に堆積しており、人為的な短期間の埋め戻しが想定できる。図示できる遺物はないが、この土壙の時期は周辺の土壙と大差ないと考えられる。（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
［褐色粘質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
4　黒褐色粘土（10YR3/2）
［灰色粘土ブロック含む］
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
［緑灰色粘土ブロック含む］



1　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
3　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
4　灰色粘質土微砂（5Y4/1）
5　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
6　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）
7　暗オリーブ灰色粘質土
（2.5GY4/1）
8　暗緑灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）
［ブロックで含む］

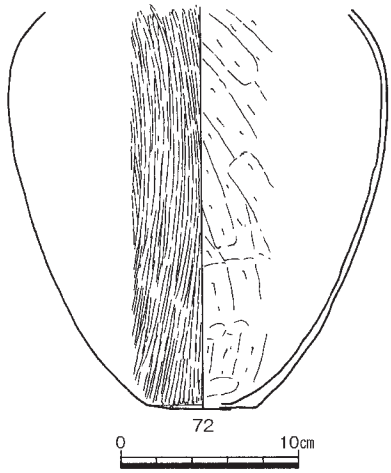
第 37 図　袋状土壙 28（1/40）

袋状土壙 29（第 38 図、図版 6-2）

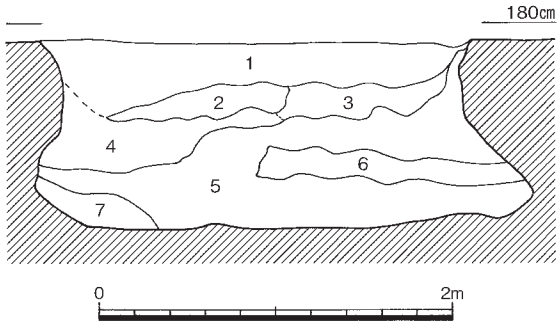
調査区の中央部西端、袋状土壙 28 の東に接して位置する。不定な平面の形から３基以上の重複が想定できるが、詳細は不明。残存する深さは 86㎝、底面の海抜高は 84㎝である。時期は弥･後･Ⅳと考えられる。（小松原）

袋状土壙 30（第 39 図）

袋状土壙 25 の東側に位置する。プラン確認時は、北西から南東 210㎝、断面では 480㎝を測る。深さは、海抜 64㎝を測る。埋土の堆積状態からは、第１～４層の内容から重複を思考する。出土遺物は、第４層から **73** と **74** を検出する。（下澤）

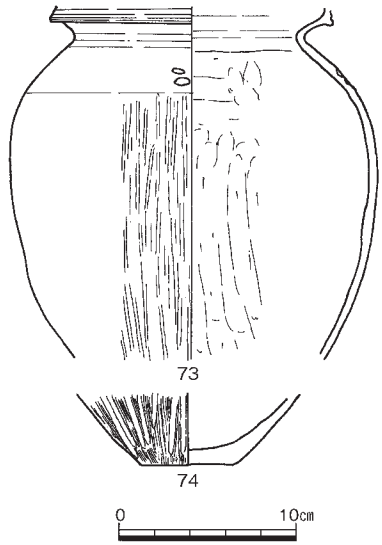


第38図　袋状土壙29（1/40）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
4　灰オリーブ色粘質土（5Y5/2）
5　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）［地山ブロック含む］
6　灰色粘質土微砂（10Y4/1）
7　青灰色粘質土微砂（5BG6/1）［地山ブロック含む］

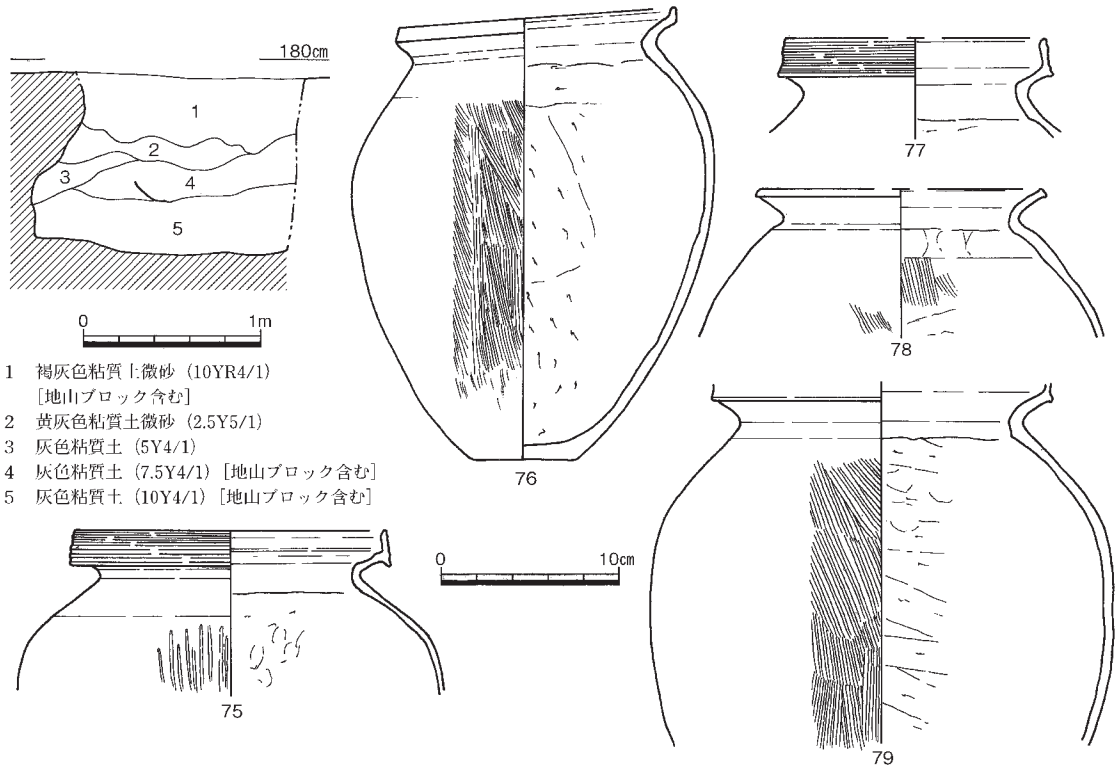
第 39 図　袋状土壙 30（1/40）・出土遺物（1/4）



袋状土壙 31（第 40 図、図版 6-3）

第ⅠＢ区の袋状土壙 30 の３m 南東に位置する。南東部は調査区外に続くとみられる。平面形は不整円形で、断面は海抜 130㎝で中央が狭まる袋状を呈している。検出面からの深さは 98㎝、底面は平坦であり、海抜高は 72㎝を測る。埋土は５層に区分できる。第４・５層には基盤土の混入がみられ、第５層は水平堆積をしており、埋め戻しと考えられる。

出土遺物は、第４層から **75**～**77**・**79**、第２層から **78** が検出された。甕 **75** は口縁部を上方に拡張し、凹線文を施す。甕 **76** は外面をハケメ、内面をヘラケズリを施す。甕 **78** は、口縁部が「く」の字に外反している。外面には、煤の付着がみられる。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。（水田）

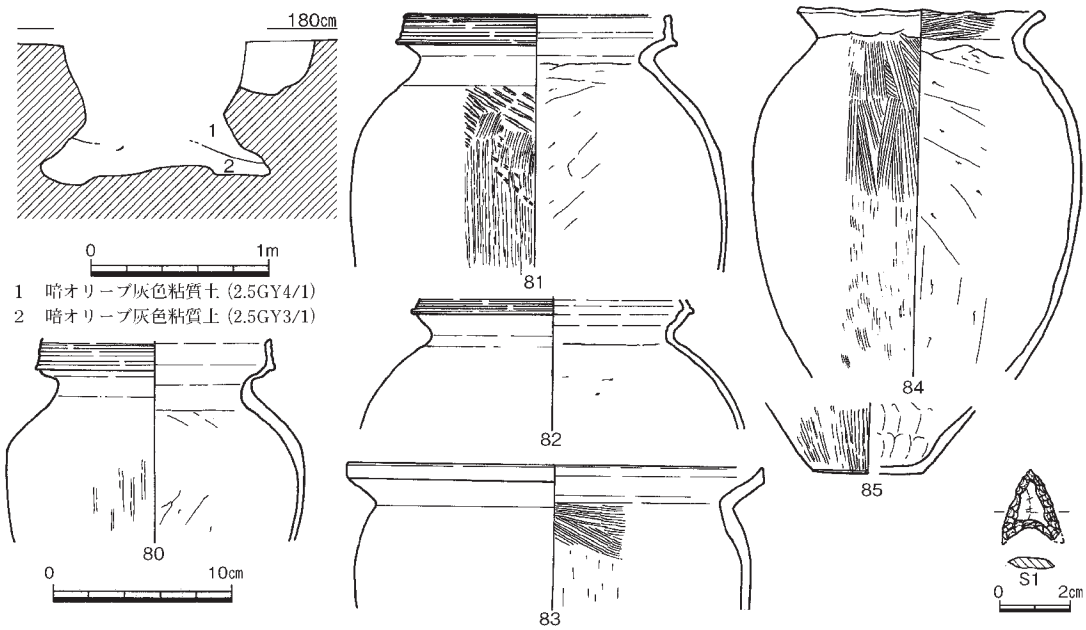


第 40 図　袋状土壙 31（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 32（第 41 図、図版 6-4）

第ⅠB区の袋状土壙 31 の北東に位置し、溝 1 を切る状態で検出された。平面形は 170 × 90㎝の楕円形を呈する。断面は袋状を呈している。検出面からの深さは 100㎝、底面の海抜高は 70㎝を測る。

出土遺物は、弥生土器の甕が検出された。甕 **81** ～ **82** は、口縁部を上方に拡張し、数条の凹線文を施す。**84** は口縁部を「く」の字状に外反する。**S1** は、サヌカイト製の石鏃である。　（水田）

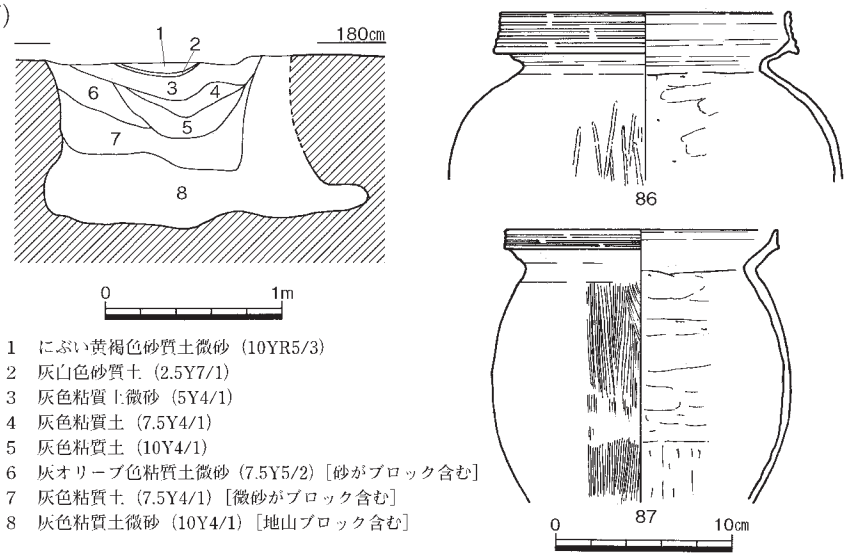


第 41 図　袋状土壙 32（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

袋状土壙 33（第 42 図）

第ＩＢ区の袋状土壙 32 の 2ｍ北に位置する。平面形は円形を呈している。検出面からの深さは 80㎝、底面海抜高は 90㎝を測る。

遺物は、弥生土器の甕 **86・87**、桃の種が検出された。時期は弥・後・Ⅳに位置づけられる。　　（水田）



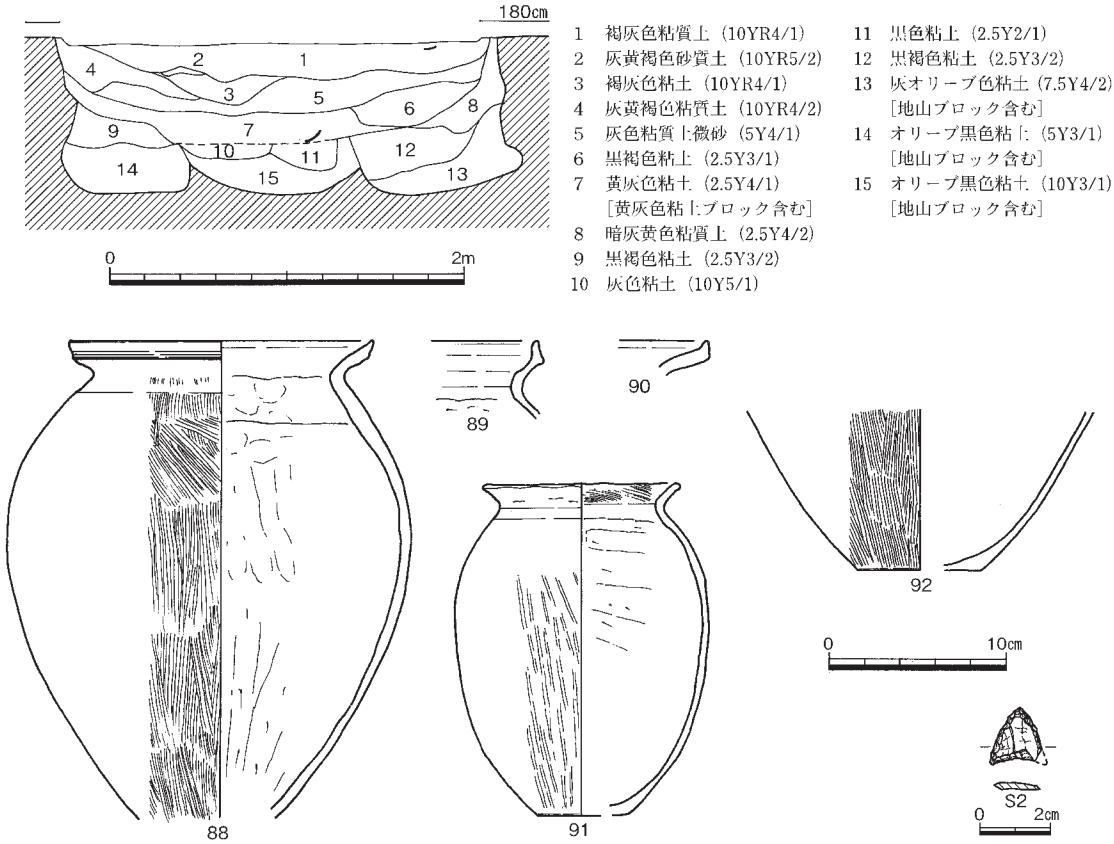
第 42 図　袋状土壙 33（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 34（第 43 図）

調査区の南半、袋状土壙 33 の北西 3ｍに位置する。長径約 240㎝、短径約 205㎝、残存する深さは 90㎝を測る。底面の海抜高は 80㎝である。溝１を切って掘られており、断面観察から東西方向には３基重複していると考えられる。西から東に向かって３回の掘削と埋め戻しを繰り返したと思われる。

S2 は石鏃、サヌカイト製で、長さ 1.7㎝、幅 1.5㎝を測る。土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。

（小松原）

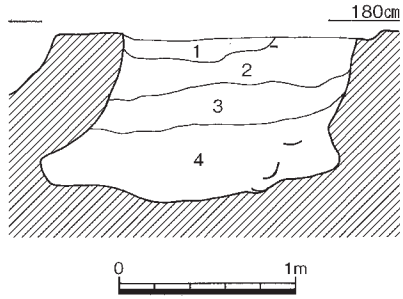


第 43 図　袋状土壙 34（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

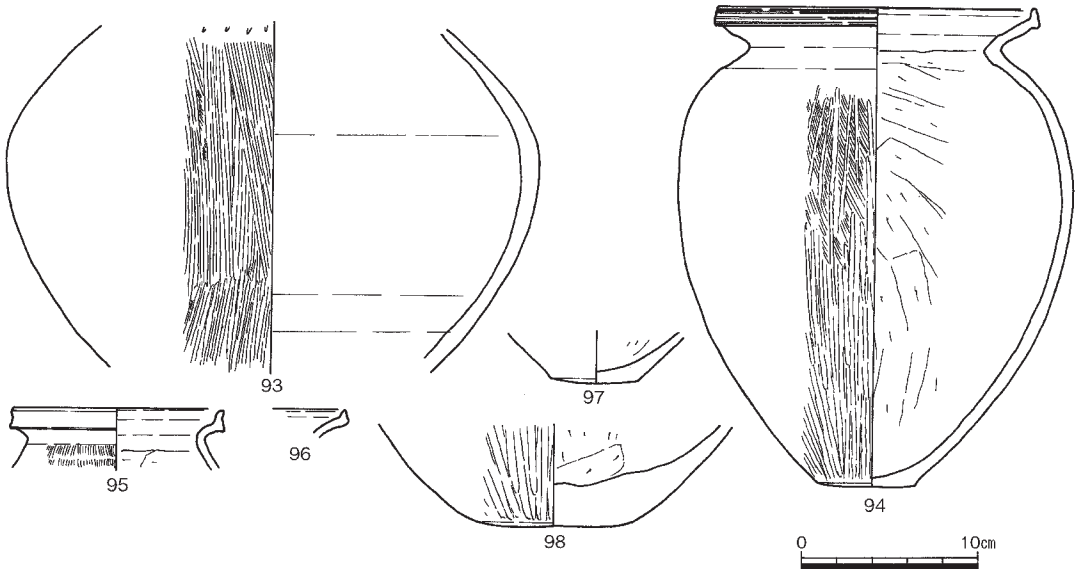
袋状土壙 35（第 44 図）

袋状土壙 34 の北に位置する。深さは、海抜 79㎝を測る。断面北側はわずかに抉るが、南は大きく抉る状態を呈していた。断面図南の下がりは、袋状土壙 34 である。埋土は、水平堆積状を示す。

出土遺物は、**93** と **97** が第４層から検出されている。**93** は、肩部下に刺突が施される壺である。**94** は、口径 17.8㎝、底径 5.8㎝、器高 26.9㎝を測る。口縁部は凹線、底部にはミガキが施される。器面に煤が付着している。**95** は、口径 11.7㎝を測る甕で、煤の付着が認められる。（下澤）



1　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
3　灰色粘質土微砂（5Y4/1）
4　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）［地山ブロック含む］



第 44 図　袋状土壙 35（1/40）・出土遺物（1/4）

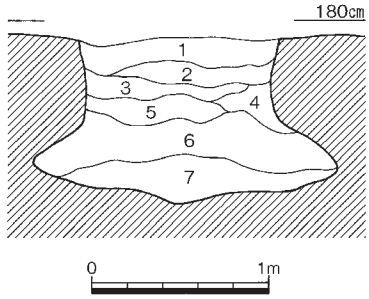
袋状土壙 36（第 45 図）

袋状土壙 35 の北側に接して位置し、溝１と重複している。溝との関係は、当該土壙が切っている。断面からの形状は、深く形の整った抉りの内容を呈している。

埋土は、下層の第６と７層が比較的厚く見られ、水平堆積の状況を示している。上層部分は黄褐色、最下層には砂とオリーブ灰色粘土のブロックを含んでいるのが観察された。（下澤）

袋状土壙 37（第 46 図、図版 6-5）

袋状土壙 29 の南東側に位置する。深さは、海抜 83㎝を測る。抉りの形状は、西側で明確な内容を示していないが、東側については曲線を描く抉りを呈している。



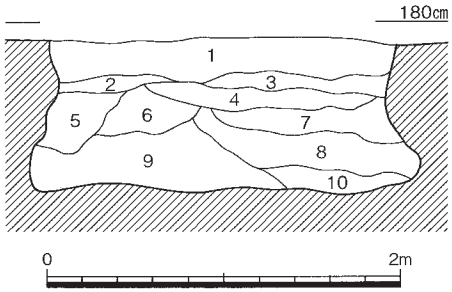
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
3　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）［黄褐色砂質土ブロック含む］
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）［黒色粘土ブロック含む］
5　黒褐色粘土（2.5Y3/2）［黄褐色砂質土粒含む］
6　灰色粘土（5Y4/1）
7　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［緑灰色砂、オリーブ灰色粘土ブロック含む］

第 45 図　袋状土壙 36（1/40）

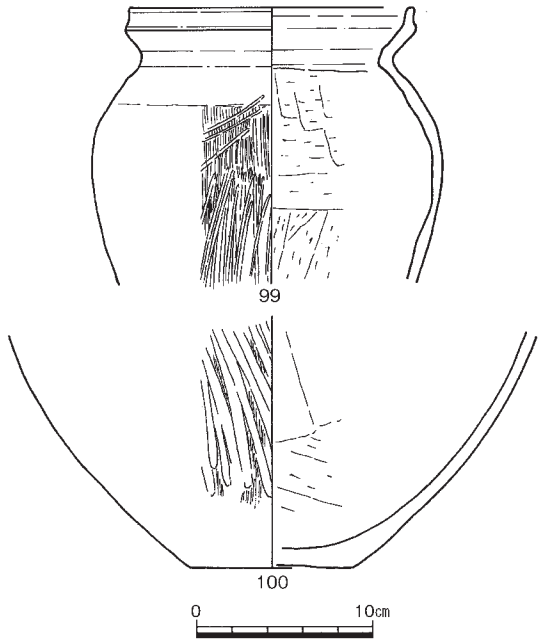
埋土は、第５・６・９層と第４・７・８・10 層で堆積の内容が異なる様相を示す。このことは、断面図で示した抉りとも合わせ、土壙の重複が考えられ、前者を埋土とする土壙が新たに掘られたと思考される。しかしながら、これまで見られてきた土壙内最下層の埋土は、厚い単純層の傾向からして、後者に認められないこと、最上層である第１層の堆積が水平であることからして、これ以上の重複を考えても許されると判断される。

出土遺物は、**99** の口径 15.8㎝を測る甕で、器面に煤が付着する。**100** は、底部径９㎝を測る壺でる。

（下澤）



1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［にぶい黄橙色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
4　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
5　灰色粘質土（5Y4/1）
6　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y5/2）
7　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）
8　灰色粘質土微砂（10Y4/1）
9　灰色粘質土（10Y5/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
10　オリーブ灰色粘質土（2.5GY5/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］

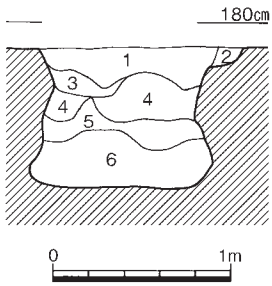


第 46 図　袋状土壙 37（1/40）・出土遺物（1/4）

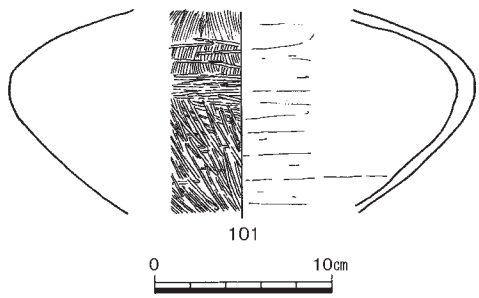
袋状土壙 38（第 47 図、図版 6-6）

袋状土壙 29 の北に位置する。深さは、海抜 86㎝を測る。検出時の規模は、210 × 120㎝であるが、断面図は長軸がコンクリート・パイルの影響により傷んでいることから短軸を作図した。埋土は、最下層の第６層が厚く水平堆積の状況を呈している。

出土遺物は、最下層から **101** が検出されている。　（下澤）



1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）［砂質ブロック含む］
2　灰白色砂質土（2.5Y7/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
4　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）［砂質ブロック含む］
5　灰色粘質土（5Y4/1）［砂質ブロック含む］
6　灰色粘質土（7.5Y4/1）［砂質ブロック含む］



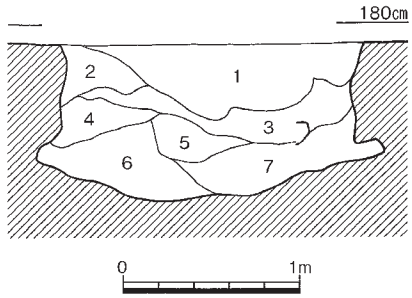
第 47 図　袋状土壙 38（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 39（第 48 図）

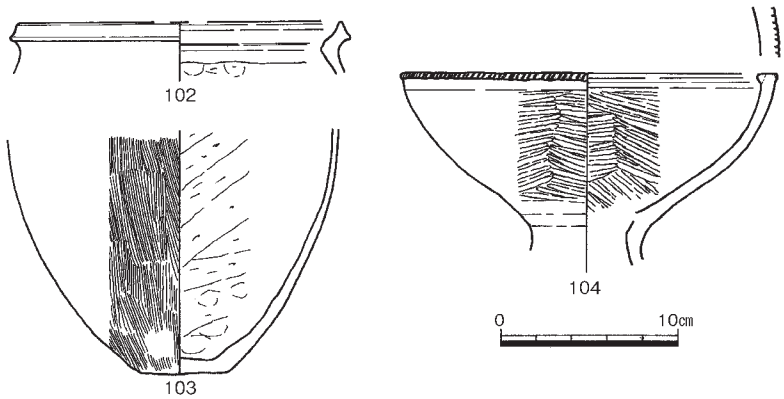
調査区の北西部、袋状土壙 38 の北西 3m に位置する。長径 225㎝、短径 170㎝、残存する深さは 90㎝を測る。底面の海抜高は 79㎝である。基盤層の土がブロック状に入り込んでおり、人為的な埋め戻しがみて取れる。

104 は弥生時代中期の高杯であるが、土壙外から流れ込んだものと思われる。しかし、磨滅はあまり見られず、周囲に弥生時代中期の遺構を窺わせる資料である。この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。

（小松原）



1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）［黄褐色砂質ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
4　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
5　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［黒色粘土ブロック含む］
6　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）［灰色粘性微砂ブロック含む］
7　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）［灰色粘性微砂ブロック含む］

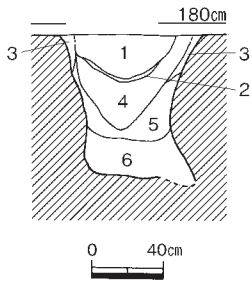


第 48 図　袋状土壙 39（1/40）・出土遺物（1/4）

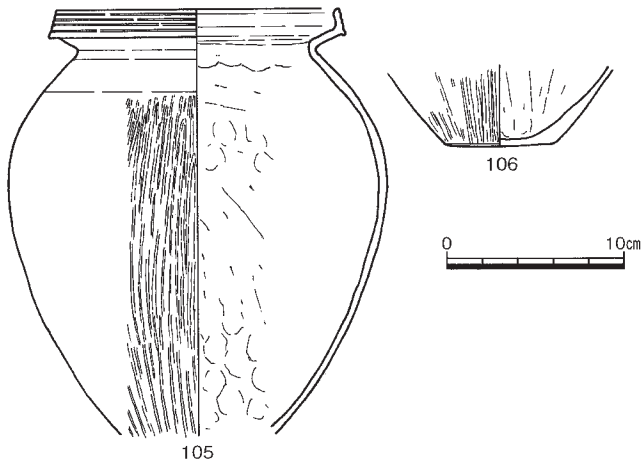
袋状土壙 40（第 49 図）

調査区の南東部、袋状土壙 32 の北東 2m に位置する。径 90㎝、残存する深さは推定で 85㎝を測る。底面の海抜高は約 90㎝である。第１層と４層の間に薄い灰白色の微砂層が観察できる。**105** などの遺物から見て、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。

（小松原）



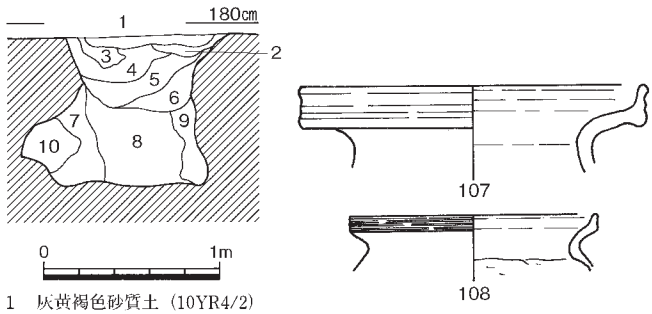
1　黒褐色粘質土（10YR3/2）［炭含む］
2　灰黄褐色粘土（10YR5/2）
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　褐灰色粘質土（10YR4/1）
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［炭含む］
6　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［炭含む］



第 49 図　袋状土壙 40（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 41（第 50 図、図版 6-7）

調査区の中央南側、袋状土壙 33 の１m 北に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は 100 × 60㎝を測る。検出面からの深さは 86㎝、底面の海抜高は 84㎝を測る。当初は、土壙（第１～５層の埋土）としての調査を進めていたが、後に袋状土壙と判明した。埋土は、上下の２層に大別できる。下層は、第７・９層で基盤土を含む埋土がみられる。第８層は粘土が厚く堆積をしており、短期間で埋没したと考えられる。上層の第１～６層は、レンズ状の堆積をしており、袋状土壙の埋積後に別の土壙として掘り直されているが、その目的については明らかではない。



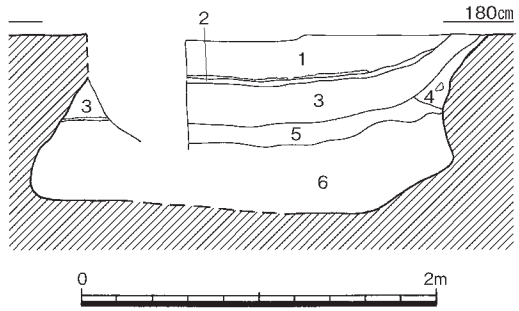
1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
2　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）
4　暗褐色粘質土（10YR3/3）
5　黄灰色粘質微砂（2.5Y4/1）
6　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
7　灰色粘土微砂（10Y4/1）［地山ブロック含む］
8　暗オリーブ灰色粘土（2.5GY4/1）
9　灰色粘土微砂（7.5Y4/1）［地山ブロック含む］
10　灰色粘土（7.5Y4/1）

第 50 図　袋状土壙 41（1/40）・出土遺物（1/4）

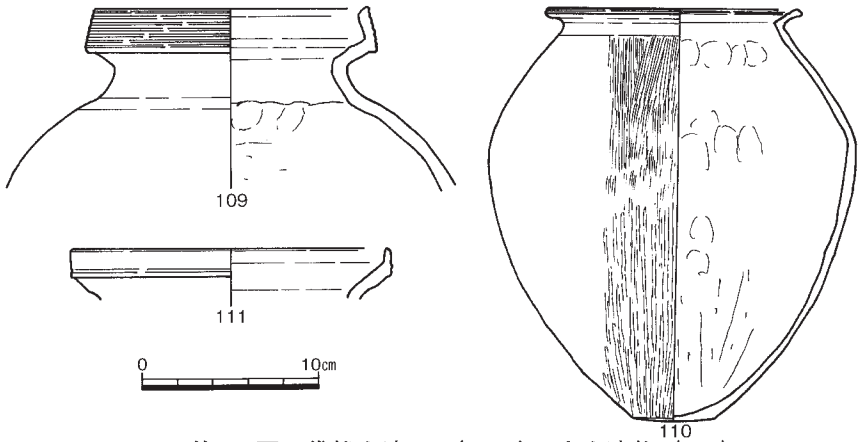
遺物は、最下層から検出された。壺 107 の口縁部に凹線を施す。甕 108 は、口縁部に凹線文を施す。内面の上半に横方向のヘラケズリがみられる。時期は、弥・後・Ⅳに比定される。（水田）

袋状土壙 42（第 51 図、図版 6-8、図版 7-1・2）

第ⅠＢ区の袋状土壙 41 の３m 北に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。検出面から深さは 104㎝、底面海抜高は 66㎝を測る。埋土は６層に区分できる。第６層はブロックを含む埋土が厚く堆積しており、埋め戻しとみられる。また、第１・２層の間、第３と５層の間には、当年性と考えられる小枝が流れ込んだとみられる希薄な層が認められる。遺物は、第１層から壺 109 が検出された。また、最下層から出土した甕 110 は、讃岐地域からの搬入品とみられる。（水田）



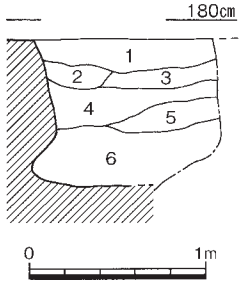
1　褐灰色粘質土微砂（10YR6/1）
2　灰白色砂質土（2.5Y8/2）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
4　黄灰色粘質土（2.5Y4）［炭微量含む］
5　灰色粘質土（7.5Y4/1）［炭多含む］
6　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）［明緑灰色砂質土ブロック含む］



第 51 図　袋状土壙 42（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 43（第 52 図）

調査区の北西部、袋状土壙 39 の東隣に位置する。残存する深さは 83㎝、底面の海抜高は 86㎝である。土層断面観察中にサブトレンチの一部が崩落したため、西半しか実測できなかったが、東西方向に２基以上の重複が考えられる。図示できる遺物はないが、この土壙の時期は周辺の土壙と大差ないと考えられる。（小松原）

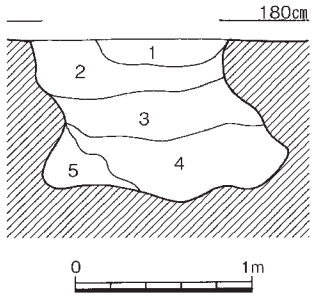


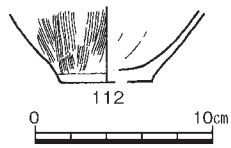
1　暗褐色粘質土（10YR3/3）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
2　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［灰黄褐色粘質土ブロック含む］
3　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
5　灰色粘土（5Y4/1）［灰色砂ブロック含む］
6　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［灰色粘性微砂ブロック含む］

第 52 図　袋状土壙 43（1/40）

袋状土壙 44（第 53 図）

調査区の北西部、袋状土壙 43 の北に重複して位置する。残存する深さは 92㎝、底面の海抜高は 78㎝である。基盤層の土がブロック状に入り込んでおり、人為的な埋め戻しが窺える。この土壙の時期は弥･後･Ⅳと考えられる。（小松原）





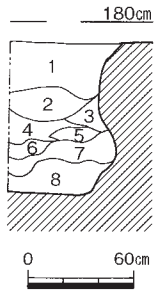
1　灰色粘質土微砂（7.5Y5/1）
2　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）
3　灰色粘質土（10Y4/1）
4　オリーブ黒色粘質土（10Y3/1）
5　オリーブ灰色粘質土微砂（2.5GY6/1）

第 53 図　袋状土壙 44（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 45（第 54 図、図版 7-3）

第ⅠＢ区の袋状土壙 44 の北西３ｍに位置する。遺構は建物の基礎の影響を大部分が受けており、平面形は不明確である。検出面からの深さは 86㎝、平坦な底面の海抜高は 84㎝を測る。第１・５・８層は基盤土をブロック状に含むことから人為的な埋め戻しとみられる。

時期は、周囲の袋状土壙から弥生後期後半に比定できる。（水田）



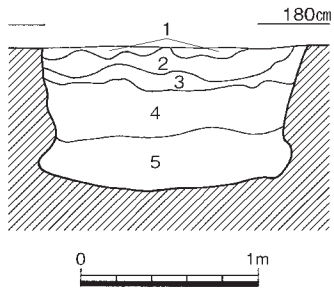
1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
　［下層に灰白色砂質土地山ブロック含む］
2　灰色粘質土微砂（5Y6/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
4　灰色粘質土（7.5Y4/1）
5　灰色粘質砂質土（7.5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
6　オリーブ灰色粘質土微砂（2.5GY6/1）
7　灰色粘質土微砂（10Y4/1）
8　灰色粘質土多砂（10Y5/1）
　［ブロック多含む］

第 54 図　袋状土壙 45（1/40）

袋状土壙 46（第 55 図、図版 7-4）

調査区の中央やや南寄り、袋状土壙 42 の北３ｍに位置する。径 155㎝、残存する深さは 81㎝を測る。底面の海抜高は 86㎝である。第３～５層は基盤層の土がブロック状に入っている。また、第４・５層は水平堆積である。これらの堆積の特徴から、短期間のうちに人為的に埋め戻されたと考えられる。第１・２層は自然堆積であろう。

図示できる遺物はないが、周辺の土壙の状況から見て、この土壙の時期は周辺の土壙と大差ないと考えられる。（小松原）



1　褐灰色砂質土（10Y6/1）
2　褐灰色砂質土（10Y5/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
4　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
5　灰色粘質土（7.5Y4/1）

第 55 図　袋状土壙 46（1/40）

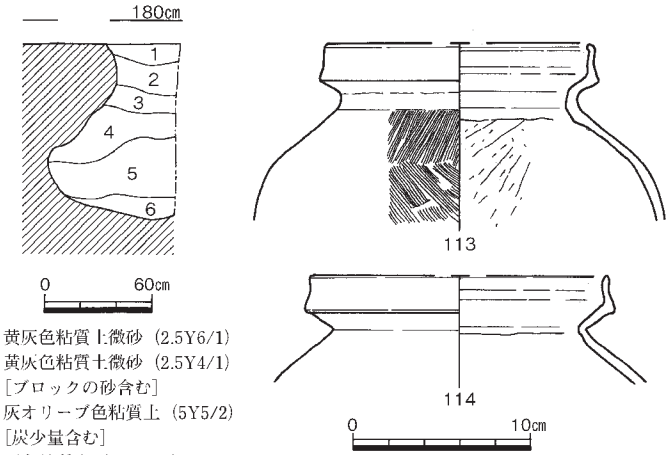
袋状土壙 47

（第 56 図、図版 7-5）

第ＩＢ区の袋状土壙 46 の北西２m に位置する。遺構は建物の基礎の影響を大部分が受けている。平面形は不明確である。検出面からの深さは 100㎝、やや中央が窪む底面の海抜高は 70㎝を測る。埋土は６層に区分できる。第５層は中央が盛り上がっており、本来の袋状を呈していたとみられる。第３層は炭が包含される。

出土遺物は、第５層から甕 113・114 が検出されてる。

（水田）

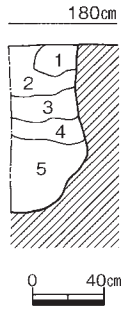


1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
　［ブロックの砂含む］
3　灰オリーブ色粘質土（5Y5/2）
　［炭少量含む］
4　灰色粘質土（7.5Y4/1）
　［ブロックの砂含む］
5　灰色粘質土（10Y5/1）
6　灰色粘質土（7.5Y5/1）
　［ブロックの砂含む］

第 56 図　袋状土壙 47（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 48（第 57 図）

第ＩＢ区の袋状土壙 47 の北東１m に位置する。平面形は不明確で、断面は袋状を呈する。検出面からの深さは 94㎝、平坦な底面の海抜高は 73㎝を測る。壁面は海抜 100㎝で大きく抉り込み、垂直に立ち上がる。埋土は５層に区分できる。下層の第４・５層は地山ブロックを含むことから埋め戻されたとみられる。埋土には遺物はなく、周囲の袋状土壙から弥生後期後半に比定できる。　（水田）

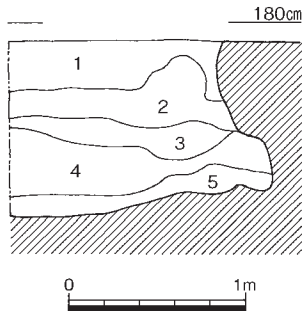


1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
　［地山ブロック含む］
2　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）
　［炭微量含む］
3　灰色粘質土細砂粒（7.5Y5/1）
4　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y5/2）
　［地山ブロック含む］
5　灰色粘質土（10Y4/1）
　［地山ブロック含む］

第 57 図　袋状土壙 48（1/40）

袋状土壙 49（第 58 図、図版 7-6）

第ＩＢ区の袋状土壙 47 の北に位置する。平面形は不明確で、断面は袋状を呈する。検出面からの深さは 100㎝、中央が窪む床面は海抜高 70㎝を測る。壁面は海抜高 120㎝で大きく抉り込み、内傾し立ち上がる。遺物は出土していないが、周囲の土壙から時期は弥生後期後半とする。　（水田）

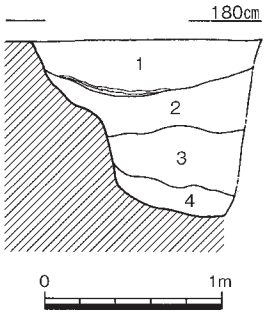


1　暗灰黄色粘質土微砂（2.5Y5/2）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
　［ブロックの砂含む］
3　灰色粘質土（5Y4/1）
　［ブロックの砂含む］
4　灰色粘質土（10Y4/1）
5　明オリーブ灰色粘質土微砂
　（5GY7/1）

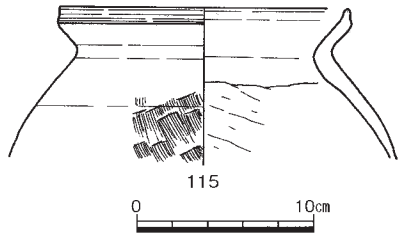
第 58 図　袋状土壙 49（1/40）

袋状土壙 50（第 59 図）

第ＩＢ区の袋状土壙 43 と 44 の東に位置し、袋状土壙 51 を切る状態で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は 200 × 170㎝を測る。壁面は、海抜 130㎝より下方で垂直に落ち込む。検出面からの深さは 100㎝、中央部がやや深くなる底面の海抜高は 68㎝を測る。埋土は第３・４層で地山ブロックを含む埋土が水平に堆積しており、人為的に埋められたとみられる。甕 115 は、口縁部をわずかに摘み上げ、口縁部から肩にかけて煤の付着がみられる。時期は弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［灰黄褐色砂質土含む］
2　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
　［にぶい黄橙色粘性微砂粒含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
4　灰色粘土（5Y4/1）
　［緑灰色砂ブロック含む］

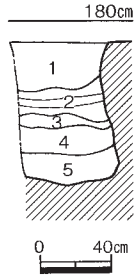


第 59 図　袋状土壙 50（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 51（第 60 図）

第ＩＢ区の袋状土壙 50 の南東に位置する。袋状土壙に切られた状態で検出された。平面形は不明確で、断面は筒形を呈している。検出面からの深さは 81㎝、底面の海抜高は 87㎝を測る。埋土は５層に区分できる。第１・５層でブロックを含む埋土が水平に堆積しており、人為的な埋め戻しとみられる。

出土遺物はなく、袋状土壙 50 との切り合いから、時期は、弥生後期後半の範疇に比定できる。（水田）



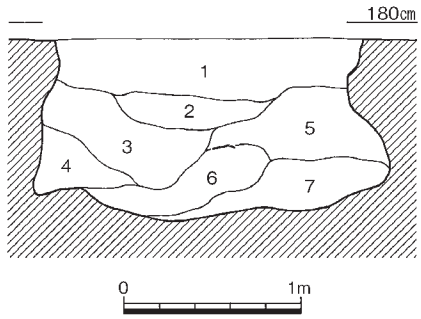
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［灰黄褐色砂質土ブロック含む］
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
3　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
　［にぶい黄褐色粘土粒含む］
4　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［灰黄色粘土粒含む］
5　灰色粘土（5Y4/1）
　［青灰色砂質土ブロック含む］

第 60 図　袋状土壙 51（1/40）

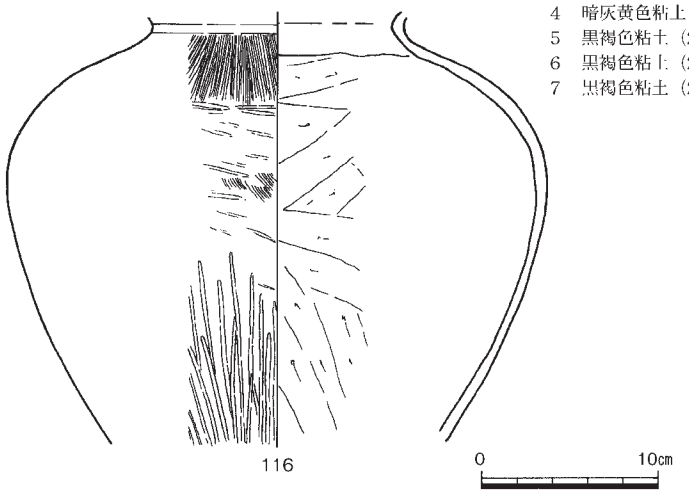
袋状土壙 52（第 61 図、図版 7-7）

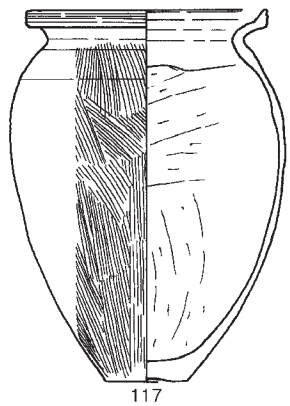
第ＩＢ区の袋状土壙 51 の北東に位置する。平面形は不明確である。検出面からの深さは 104㎝、底面の海抜高は 66㎝を測る。埋土は７層に区分できる。第５～７層が埋積した後に第３・４層が掘り直されている。また、第３層の堆積後に第１・２層が掘削されたとみられる。埋土の中にはブロックを含むことから、埋め戻しと考えられる。出土遺物は、第５層の下位から甕 **116・117** が検出された。

（水田）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
2　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
3　灰黄褐色（10YR4/2）
4　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）［黄褐色砂質土ブロック含む］
5　黒褐色粘土（2.5Y3/2）［灰色粘土ブロック含む］
6　黒褐色粘土（2.5Y3/2）［緑灰色砂ブロック含む］
7　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［緑灰色砂ブロック含む］



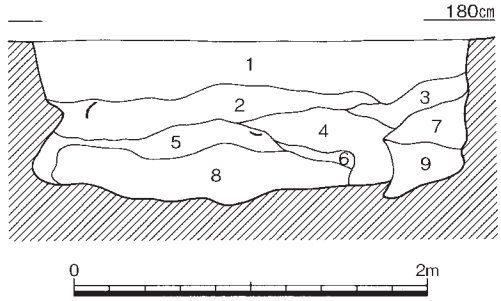


第 61 図　袋状土壙 52（1/40）・出土遺物（1/4）

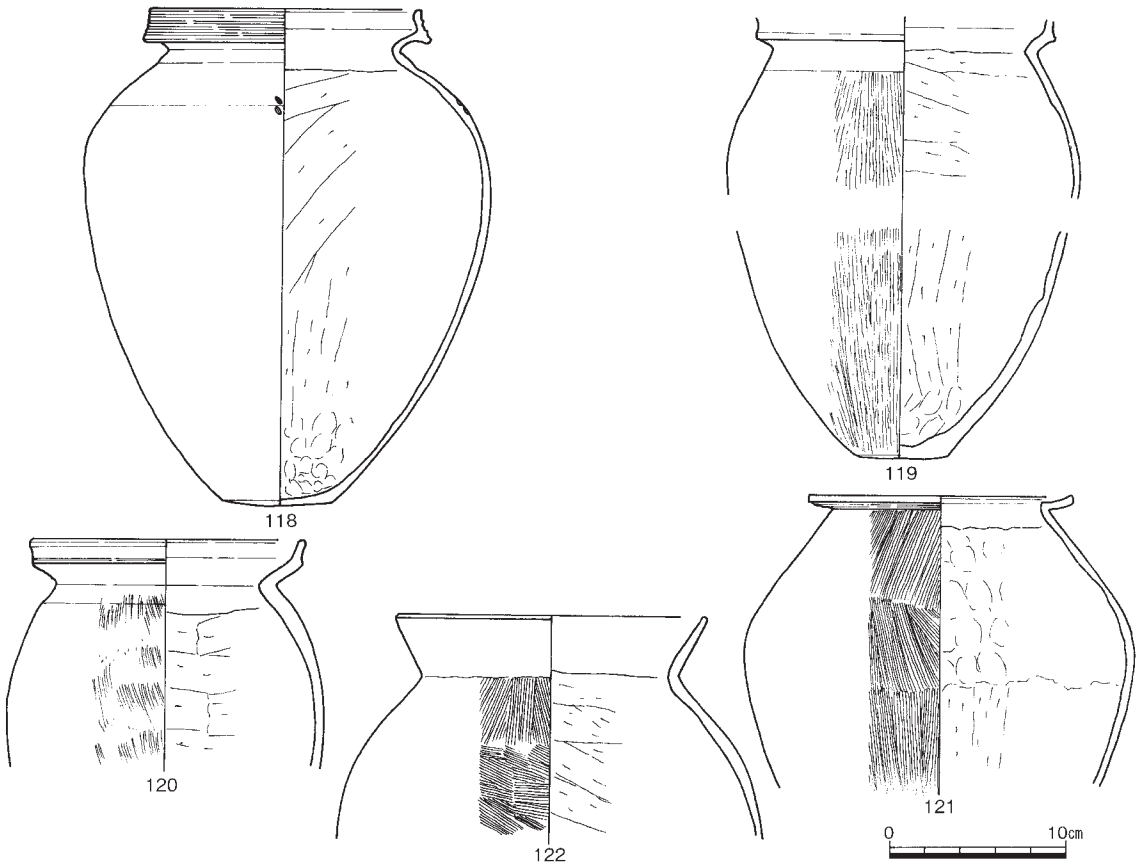
袋状土壙 53（第 62 図、図版 7-8）

第ＩＢ区の袋状土壙 52 の北東に位置する。平面形は不明確である。断面形は、北西側において海抜 130㎝で中央が緩やかに狭まる袋状を呈するのに対して、南東側は検出面から垂直に落ち込む。検出面からの深さは 92㎝あり、底面は中央部で凹凸がみられ、海抜高は 76㎝を測る。埋土は９層に区分できる。第１・３・５・８層で埋土中に基盤層のブロックが認められる。また、南東部側の第３・７・９は壁の崩落土とみられ、本来は袋状をなしていたと想定できる。

出土遺物は、第２層から **118** ～ **121**、第５層から **122** が検出された。甕は口縁を上方に拡張するもの **118**・**119**、口縁部端部をつまみあげるもの **120**、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの **122** に大きく分けることができる。**118** は肩部に米粒状の刺突文がみられる。**121** は外面を下位から上位にかけて細かなハケ、内面上半部に指頭圧痕、下半部にヘラケズリを施す。讃岐地域からの搬入品とみられる。**122** は外面調整を胴部上半下位をヨコ、上位をタテハケ、内面にヘラケズリを施す。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。（水田）



1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）［黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘土（10YR4/1）［にぶい黄褐色粘性微砂粒含む］
3　褐灰色粘土（10YR4/1）［黄褐色砂質土ブロック含む］
4　灰黄褐色粘土（10YR4/2）
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［黄褐色砂質土ブロック含む］
6　灰色粘土（5Y4/1）
7　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）［黄褐色粘性微砂粒含む］
8　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［緑灰色砂地山ブロック含む］
9　黄褐色粘質土（2.5Y5/3）

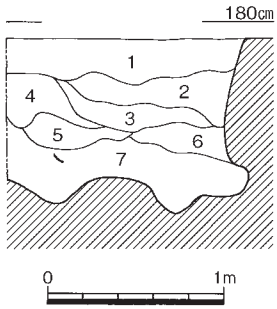


第 62 図　袋状土壙 53（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 54（第 63 図、図版 8-1）

第ⅠＢ区の袋状土壙 53 の北西に位置する。平面形は不明確であり、断面は海抜高 100㎝で中央に緩やかに狭まる袋状を呈している。検出面からの深さは 98㎝、床面は凹凸を呈し、海抜高は 72㎝を測る。

出土遺物は、最下層から弥生土器の甕が出土している。　（水田）



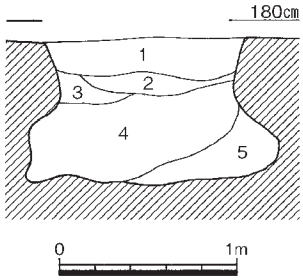
1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
4　黒褐色粘土（10YR3/1）
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［黄褐色粘土粒含む］
6　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
7　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
　［オリーブ褐色粘土ブロック含む］

第 63 図　袋状土壙 54（1/40）

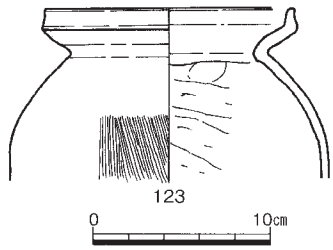
袋状土壙 55（第 64 図、図版 8-2）

第ⅠＢ区の袋状土壙 53 の北東に位置する。平面形は不明確であり、断面形は海抜 130㎝で中央に狭まる袋状を呈する。検出面からの深さは 83㎝、平坦な底面は海抜高 87㎝を測る。堆積状況は第１・２・４・５層で基盤層の土をブロック状に含む埋土がみられる。

出土遺物は弥生土器のほかに下層から桃の種が出土している。甕 **123** は、口径 14.0㎝を測り、口縁部に強いヨコナデによる条線が施されている。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［褐灰色粘質土ブロック含む］
3　褐灰色粘土（10YR4/1）
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［暗灰黄色砂質土ブロック含む］
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［暗灰黄色砂質土ブロック含む］

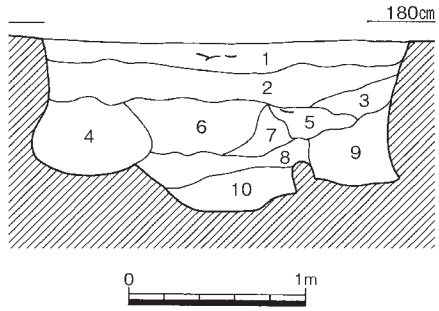


第 64 図　袋状土壙 55（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 56（第 65 図、図版 8-3）

第ⅠＢ区の袋状土壙 57 の 2m 東に位置している。平面形は不明確であり、断面形は袋状を呈する。検出面からの深さは 95㎝、床面は凹凸を呈しており、海抜高は最深部で 72㎝を測る。埋土は 10 層に区分できる。埋土の堆積状況は第１・２層、第４層、第３・５・９層と第６～８・10 層の間にそれぞれ断絶があり、人為的に埋め戻された後に別の土壙として再度掘り直されている可能性がある。第１・２・６・８・10 層には、地山ブロックが含まれていることから埋め戻されたとみられる。切り合いから、少なくとも３回の掘削が短期間で行われていたと考えられる。

出土遺物は、第１・５層から弥生土器の甕の小片が出土している。また、掘り下げ中に土器の他に貝が１点出土しているが、遺骸の残存状況が悪く種の特定にはいたっていない。時期は、出土遺物や周囲の袋状土壙などから弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）



1　灰黄褐色粘質土(10YR4/2)［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［灰色砂ブロック含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
5　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
6　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［灰色粘性微砂ブロック含む］
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［緑灰色砂ブロック含む］
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
10　暗灰色粘土（n3/1）［緑灰色粘土ブロック含む］

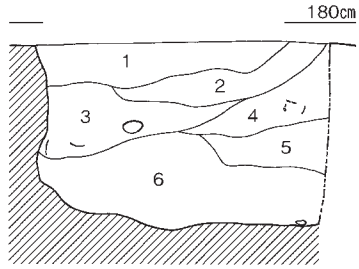
第 65 図　袋状土壙 56（1/40）

袋状土壙 57（第 66 図）

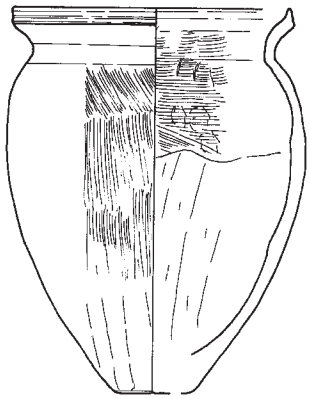
第ＩＢ区の袋状土壙 56 の西に位置する。平面形は不明確である。検出面からの深さは 106㎝、底面の海抜高は 62㎝を測る。埋土は６層に区分できる。壁面は、海抜 120㎝にて緩やかな抉りが認められる。第６層は中央が盛り上がりをみせる堆積をしており、本来袋状をなしていたと想定できる。

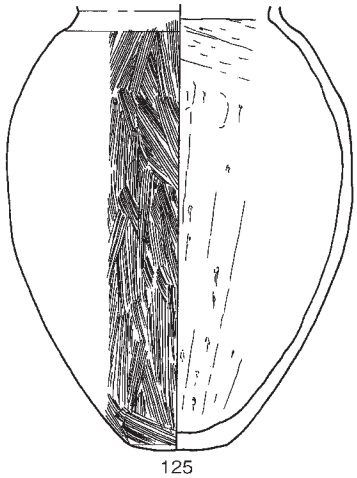
遺物は弥生土器の甕が、第３・４層から出土している。**124** は平底を残す。外面はタテ方向のハケメ、内面下半にヘラケズリ、上半に指オサエの後にヨコ方向のハケメを施す。**125** は外面に細かいハケメ、内面にヘラケズリを施す。**126** は、外面をハケメ、内面はナデを施す。

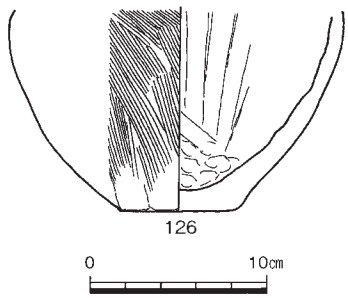
調査区の中央に位置する袋状土壙 48 ～ 57 は掘削・埋め戻しが短期間に行われたとみられる。結果、平面的には不整形として捉えられ、他にも複数の袋状土壙の存在があるものとみられ、極めて集中的な一群をなしていると考えられる。　（水田）



1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［にぶい黄色粘性微砂粒含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［暗灰黄色粘性微砂ブロックと
　にぶい黄色粘性微砂粒含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色粘性微砂ブロックと
　にぶい黄色粘性微砂粒含む］
5　灰色粘土（5Y4/1）
　［オリーブ灰色粘性微砂ブロック含む］
6　灰色粘土（10Y4/1）
　［基盤砂層境に緑灰色粘ブロック含む］



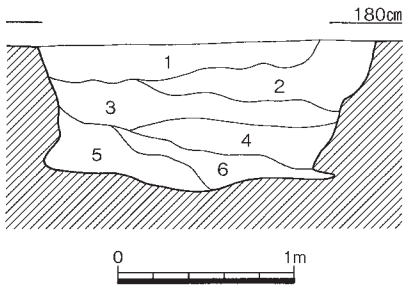




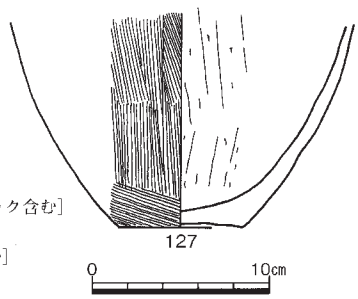
第 66 図　袋状土壙 57（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 58（第 67 図）

第ＩＢ区の袋状土壙 50 の北に位置し、切り合いをみせる。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは 84㎝、底面の海抜高は 86㎝を測る。埋土は６層に区分できる。出土遺物は、第３層から甕 **127** が検出された。　（水田）



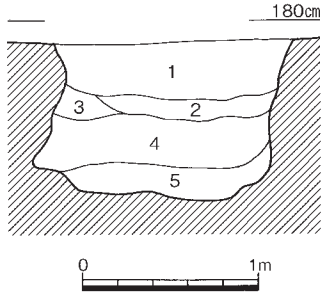
1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）［黄褐色砂質土ブロック含む］
2　にぶい黄褐色粘性微砂（10YR4/3）
3　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）［にぶい黄色砂質土粒含む］
4　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
5　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
6　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［灰色砂質土ブロック含む］

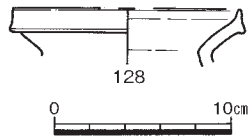


第 67 図　袋状土壙 58（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 59（第 68 図、図版 8-4）

調査区の北西隅、袋状土壙 45 の東 2m に位置する。長径約 150㎝、短径約 90㎝、残存する深さは 90㎝を測る。底面の海抜高は 79㎝である。堆積土の下半は基盤層の土がブロック状に入る水平堆積で、人為的な短期間の埋め戻しが行われたと考えられる。この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）





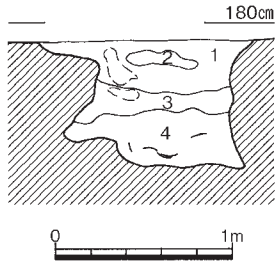
1　褐灰色砂質土（10YR5/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）［炭微量含む］
3　灰色粘質土微砂（5Y4/1）
4　灰色粘質土微砂（10Y5/1）
5　灰色粘質土（10Y4/1）

第 68 図　袋状土壙 59（1/40）・出土遺物（1/4）

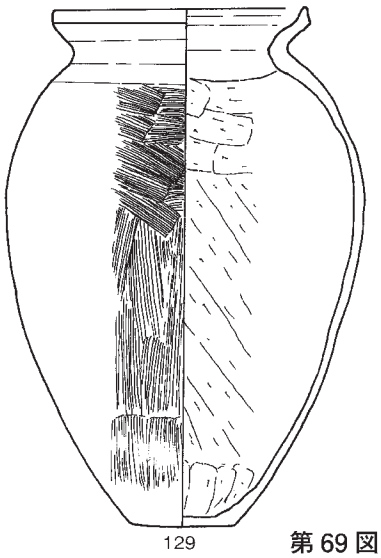
袋状土壙 60（第 69 図、図版 8-5）

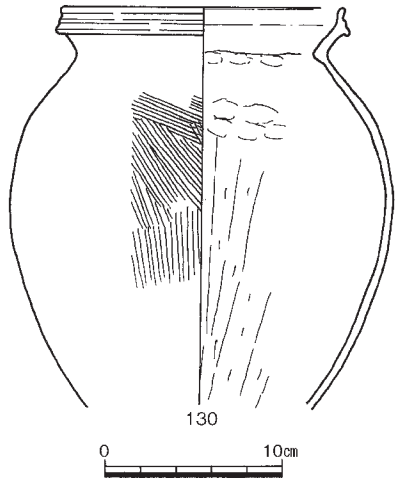
第ⅠB区の袋状土壙 42 の 3m 東に位置する。土壙の一部は調査区外に続く。平面は不整円形、断面は裾広がりの袋状を呈する。床面は平坦であるが、約 10㎝高い位置には段がみられる。検出面からの深さは 99㎝、底面の海抜高は 97㎝を測る。埋土は４層に区分できる。第３・４層は地山ブロックを含んでおり、人為的な埋め戻しとみられる。

出土遺物は、最下層から甕 **129**・**130** が検出されている。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。（水田）



1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）［炭少含む］
2　灰黄色粘質土微砂（2.5Y6/2）
3　灰色粘質土（5Y4/1）［炭を少、砂ブロック含む］
4　灰色粘質土（10Y4/1）［砂ブロック含む］



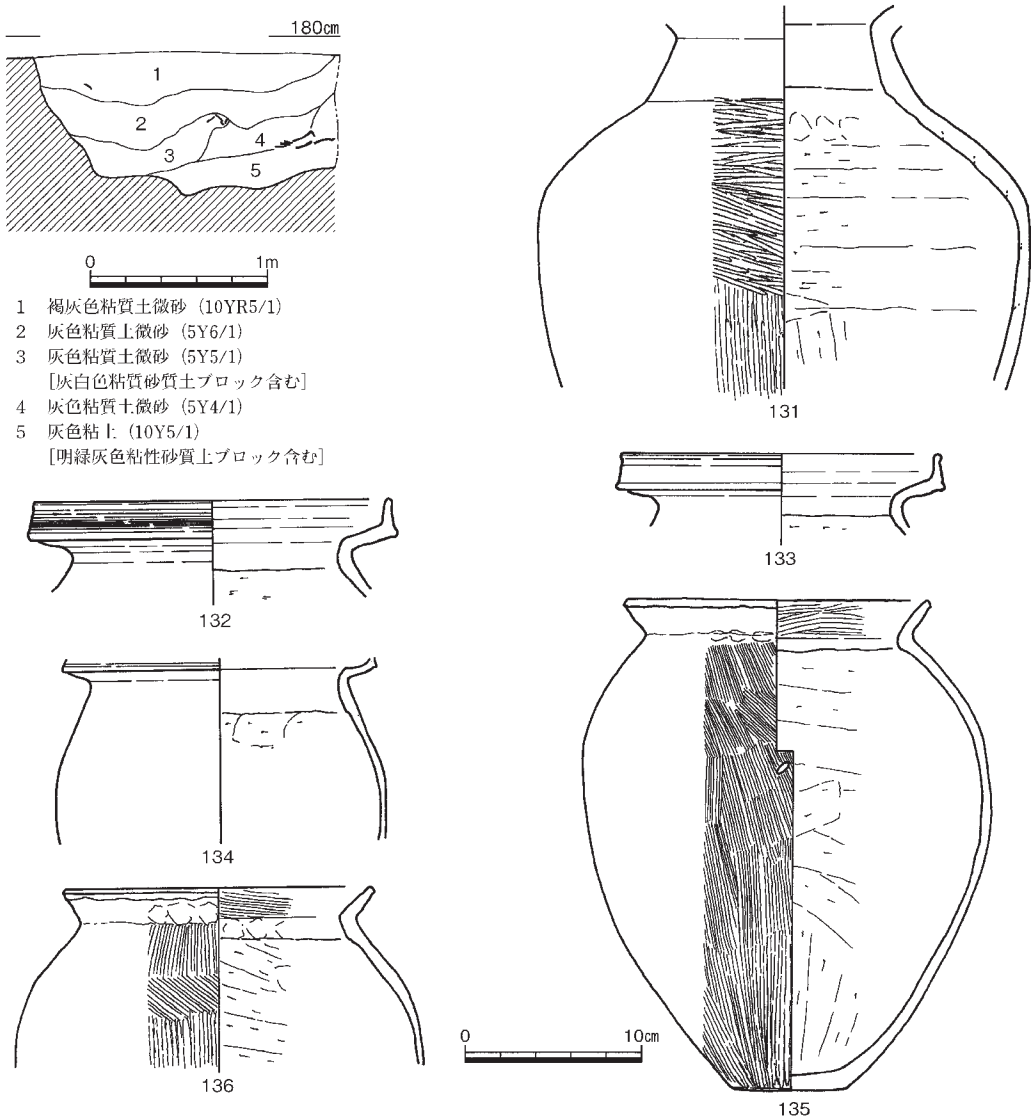


第 69 図　袋状土壙 60（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 61（第 70 図、図版 8-6）

袋状土壙 48 から 57 の連続して重複する袋状土壙の北東側に位置する。深さは、海抜 90㎝を測る。当該袋状土壙も連続するものに含まれる。断面図の南西側は、抉りの形状を示していない。北東側は、連続する土壙のため確認できていない。

出土遺物は、**134** が第３層、**131**・**132**・**135**・**136** が第５層上層から検出されている。**135** は、口径 16.9㎝、底径 3.8㎝、器高 27.5㎝を測る。口縁部は、押圧痕が認められる。胴部中程には、外からの打ち欠きが行われる。器面は、煤が付着する。（下澤）

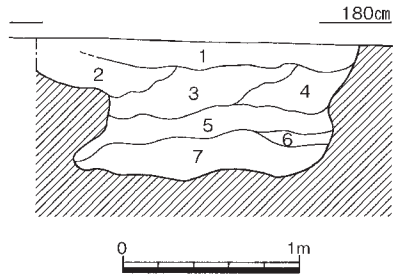


第 70 図　袋状土壙 61（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 62（第 71 図）

袋状土壙 55 の北東側に位置する。当該土壙は、連続する袋状土壙に含まれる。深さは、海抜 91㎝を測る。掘り方は、南東側が抉られるが、北西側は抉りの形状を示していない。南東側については、逆「コ」の字状の形状を呈すること、また、第２層の埋土の内容から浅い掘り込みの可能性が考えられる。

埋土は、第４と５層に黄色系、最下層の第７層は灰オリーブのブロックが含まれていることが認められている。（下澤）



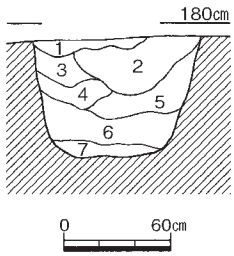
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
4　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）［にぶい黄色砂質土ブロック含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［暗灰黄色粘質土ブロック含む］
6　オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）
7　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］

第 71 図　袋状土壙 62（1/40）

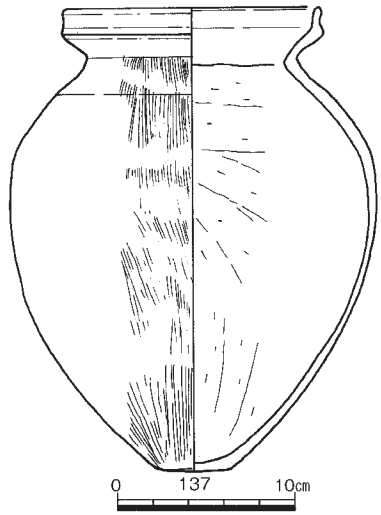
袋状土壙 63（第 72 図）

袋状土壙 54 の北東側に位置する。当該土壙は、連続する袋状土壙に含まれる。深さは、海抜 104 ㎝を測る。断面の作図の位置では、両側とも抉りを形成していない。第２層の堆積内容からは、重複する土壙の掘り込みが想定される。

出土遺物は、**137** の甕である。**137** は、口径 14.2㎝、底径４㎝、器高 25.9㎝を測る。器面調整は、ハケ後ヘラミガキを施す。器面には、煤が付着している。（下澤）



1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［にぶい黄橙色砂質土ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄橙色砂質土ブロック含む］
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土粒含む］
5　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
6　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
　［にぶい黄色粘質微砂粒含む］
7　オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3）

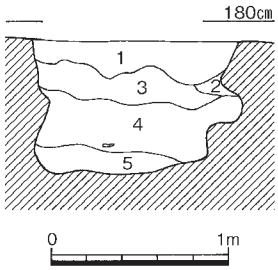


第 72 図　袋状土壙 63（1/40）・出土遺物（1/4）

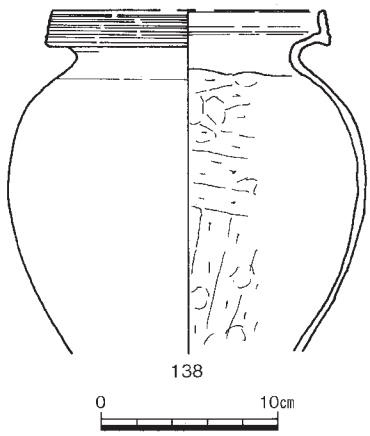
袋状土壙 64（第 73 図、図版 8-7・8）

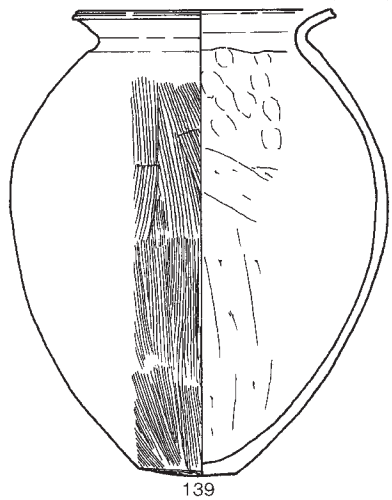
袋状土壙 54 の北東側に位置する。当該土壙は、連続する袋状土壙に含まれる。深さは、海抜 104 ㎝を測る。断面からは、顕著な抉りを形成しないが、西側の中央付近で大きく抉っている。

出土遺物は、上層から **138** と **139** の甕が検出する。**138** は、口径 15.2㎝を測り、口縁部に凹線文を施文する。**139** は、口径 14.2㎝、底径 5.6㎝、器高 26.1㎝を測る。口縁部は、凹線文一条施し、内面上半には、押圧痕を認める。器面には煤が付着している。（下澤）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［黄褐色砂質土ブロック含む］
5　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［青灰色粘性微砂ブロック含む］



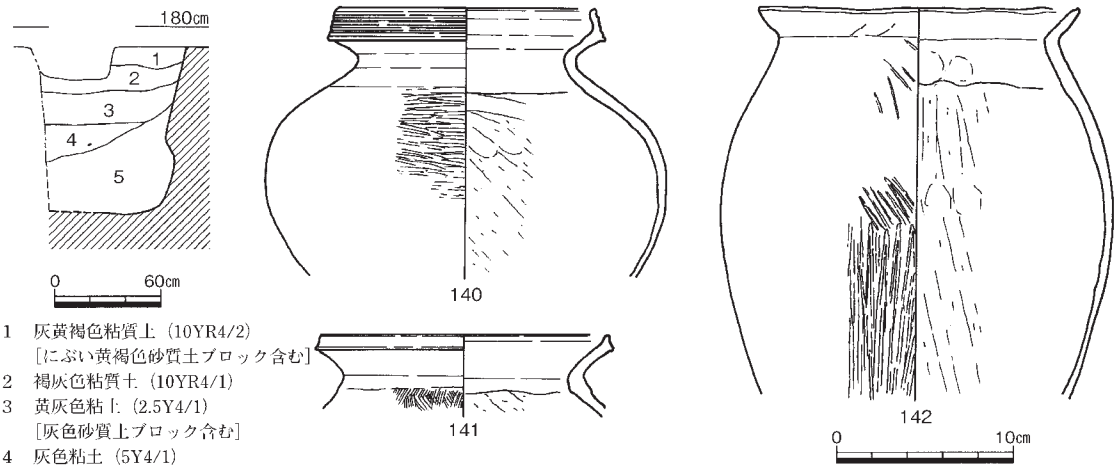


第 73 図　袋状土壙 64（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 65（第 74 図、図版 9-1）

袋状土壙 55 の北東側に位置する。当該土壙は、連続する袋状土壙に含まれる。深さは、海抜 74㎝を測る。断面は、東側部分を確認し、西側は重複の中で止まる。

出土遺物は、**140** と **142** が第５層から検出されている。**140** は、口径 14.3㎝を測る壺で、口縁部に凹線文を施す。器面には、煤が付着している。**142** は、口径 18㎝を測る甕である。口縁端部は、直線を形成しない。**141** は、口径 16.2㎝を測る甕で、器面に煤が付着する。（下澤）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］
4　灰色粘土（5Y4/1）
5　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］

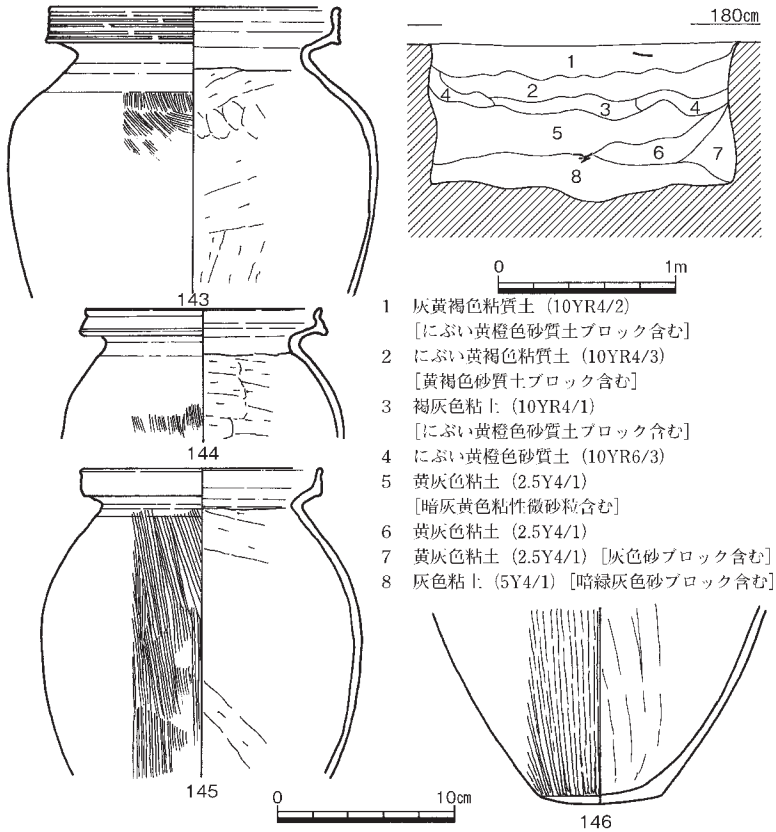
第 74 図　袋状土壙 65（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 66（第 75 図）

調査区の北部、袋状土壙 63 の西 1.5m に位置する。長径 200㎝、短径 125㎝、残存深さ 90㎝を測る。底面の海抜高は 80㎝である。平面形から見て２基以上の重複が想定できるが、土層断面の観察から切り合い関係はわからない。堆積土には基盤層の土がブロック状に入り込んでいる。

図示した遺物はいずれも甕である。**143** の口縁端部はほぼ垂直に立ち上がり、凹線が巡る。

遺物の特徴から見て、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。　（小松原）

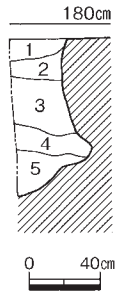


1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄橙色砂質土ブロック含む］
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［黄褐色砂質土ブロック含む］
3　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［にぶい黄橙色砂質土ブロック含む］
4　にぶい黄橙色砂質土（10YR6/3）
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［暗灰黄色粘性微砂粒含む］
6　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［灰色砂ブロック含む］
8　灰色粘土（5Y4/1）［暗緑灰色砂ブロック含む］

第 75 図　袋状土壙 66（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 67（第 76 図）

調査区の北部、袋状土壙 66 の西隣に位置する。残存する深さは 89㎝を測る。底面は不明だが、確認できた最深部の海抜高は 83㎝である。図示できる遺物はないが、周囲の状況から見て、この土壙の時期は周辺の土壙と大差ないと考えられる。　（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
　［黄灰色粘性微砂ブロック含む］
4　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［にぶい黄色粘性微砂ブロック含む］
5　黄灰色粘土（2.5GY4/1）
　［砂質土ブロック含む］

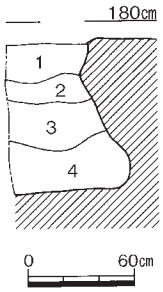
第 76 図　袋状土壙 67（1/40）

袋状土壙 68（第 77 図）

調査区の北部、袋状土壙 67 の西 2m に位置する。残存する深さは 87㎝、底面の海抜高は 83㎝。図示できる遺物はないが、この土壙の時期は周辺の土壙と大差ないと考えられる。（小松原）

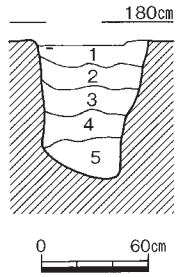
袋状土壙 69（第 78 図、図版 9-2）

調査区の北端、袋状土壙 68 の北 2m に位置する。残存する深さは 77㎝、底面の海抜高は 93㎝。図示できる遺物はないが、この土壙の時期は周辺の土壙と大差ないと考えられる。（小松原）



1　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
　［灰白色粘質土含む］
3　灰色粘質土微砂（7.5Y4/1）
　［明緑灰色砂質土ブロック含む］
4　灰色粘土（10Y4/1）

第 77 図　袋状土壙 68（1/40）



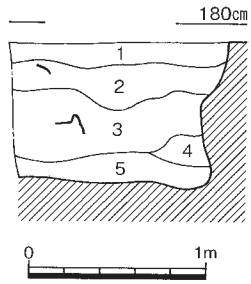
1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
2　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
4　灰色粘土（5Y4/1）
5　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［明緑灰色粘性砂質土ブロック含む］

第 78 図　袋状土壙 69（1/40）・出土遺物（1/4）

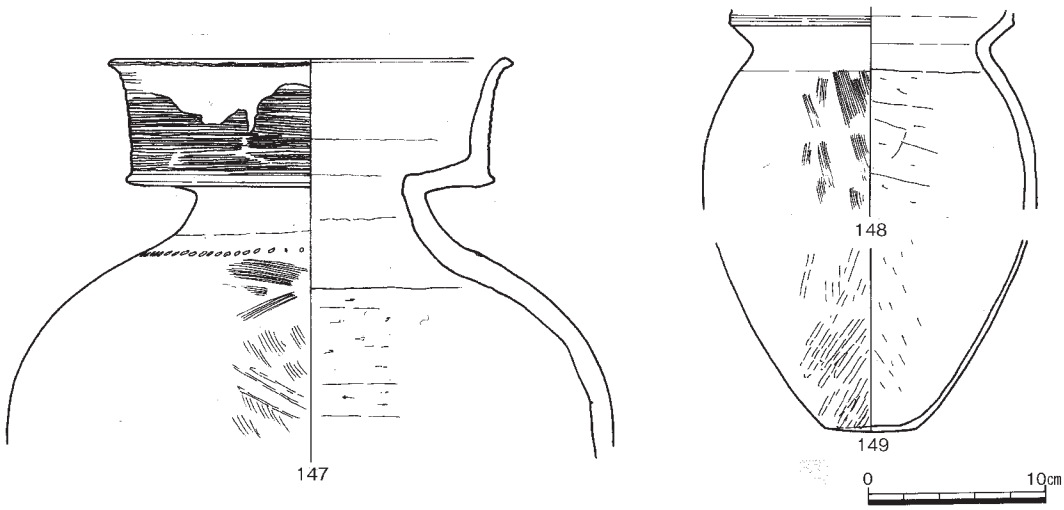
袋状土壙 70（第 79 図、図版 9-3）

調査区の北西端、袋状土壙 69 の北隣に位置する。平面の形状は楕円を呈すると思われるが、一部側溝に切られる。残存する深さは 83㎝を測り、底面の海抜高は 87㎝である。堆積層の下半は水平堆積で、基盤層の土がブロック状に入っており、人為的に短期間で埋め戻されたことを示す状況であった。

出土遺物のうち、**147** は複合口縁をもつ壺で、第 3 層からの出土である。肩部に刺突文が巡り、胴部外面には籠目痕が残る。遺物の観察から、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



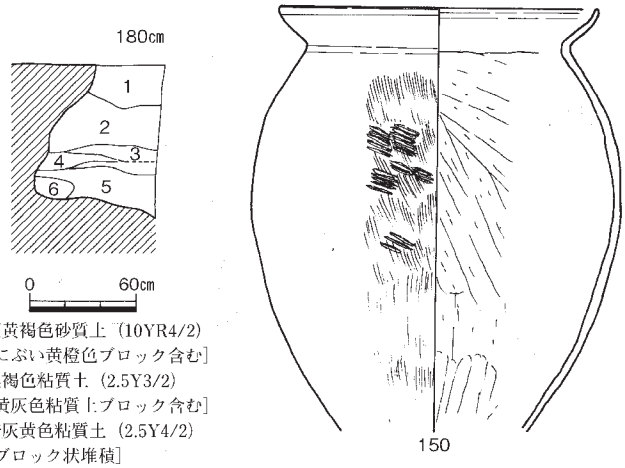
1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
　［明黄褐色砂質土ブロック含む］
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
3　灰色粘質土（5Y4/1）
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
5　灰色粘土（7.5Y4/1）



第 79 図　袋状土壙 70（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 71（第 80 図、図版 9-4）

調査区の北端、袋状土壙 69 の東隣に位置する。長径 150㎝、短径 120㎝、残存する深さは 85㎝を測る。土壙の東半分は、旧建築物の基礎杭が打ち込まれたままだったので、掘り下げ・実測が不可能であった。確認できる最深部の海抜高は 82㎝である。第３～６層は基盤層の土がブロック状に入り、水平に堆積している。人為的に短期間で埋め戻されたことを示す堆積状況であった。遺物は土壙の下半からの出土が多い。150 は甕で第３層からの出土である。遺物の観察からこの土壙は弥・後・Ⅳの時期と考えられる。（小松原）



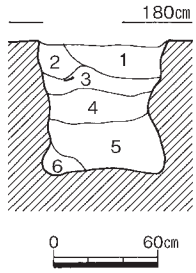
1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
［にぶい黄橙色ブロック含む］
2　黒褐色粘質土（2.5Y3/2）
［黄灰色粘質土ブロック含む］
3　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
［ブロック状堆積］
4　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
5　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
［灰色粘土ブロック含む］
6　暗オリーブ灰色砂質土（5GY4/1）
［地山ブロック状に堆積］

第 80 図　袋状土壙 71（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 72（第 81 図、図版 9-5）

袋状土壙 71 の北側に位置する。深さは、海抜 93㎝を測る。第Ⅴ調査区との取り合いの関係と側溝から北側について、追求出来ていない。プラン検出時は、浅い土壙と考えていたが、顕著ではないが袋状の形態をとる。

埋土は、最下層の第５層の堆積が厚く、第４層から下層には微砂ブロックを含む。　（下澤）

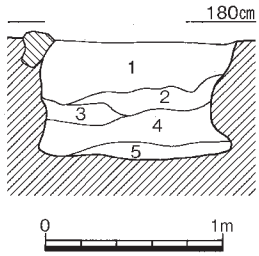


1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）
［灰白色砂質含む］
3　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
4　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
［灰白色粘性微砂含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
［灰白色粘性微砂ブロック含む］
6　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
［緑灰色粘性微砂ブロック含む］

第 81 図　袋状土壙 72（1/40）

袋状土壙 73（第 82 図、図版 9-6）

袋状土壙 66 の北に位置する。深さは、海抜 102㎝を測る。断面図南側の礫は、掘り込みが認められないことから、伴わないと判断している。埋土は、第１層が灰黄褐色のブロックを多く含まれる。　（下澤）



1　褐灰色粘質土（10YR5/1）
［灰黄色砂質土ブロック含む］
2　灰色粘質土（5Y4/1）
［灰白色砂ブロック含む］
3　灰色粘土（5Y4/1）
［浅黄色粘質粒含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
5　灰色粘土（7.5Y4/1）
［浅黄色粘質粒含む］

第 82 図　袋状土壙 73（1/40）

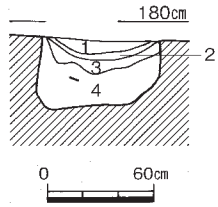
（２）土壙

土壙は、調査区南側と北側に２基検出されている。南側は、プラン検出時袋状土壙の形状を示す状態で確認されてきている。しかし、北側については、これまで記してきたように、袋状土壙が連続して重複している部分から北西方向の位置になる。この部分は、プランが重複する状況ではなく、単独の内容で認められている。このことから、袋状の形態をとらない土壙であることを思考した。結果、連続する重複が見られないが、１基を除き袋状土壙であった。　（下澤）

土壙３（第 83 図）

袋状土壙 30 と 32 の間に位置する。規模は、67 × 63㎝、深さは、海抜 130㎝を測る。底面断面形状は、皿形を呈する。

埋土は、プラン検出面時で内側に第１層による円形を呈する形状が認められている。この内容は、袋状土壙のプラン内側に認められるのと、全く同じ内容を示している。このことから、当該土壙は、袋状を呈さないことを除き、他の袋状土壙と近い内容を示している。第４層からの土器片からは、時期もこれらと前後すると考えられる。（下澤）



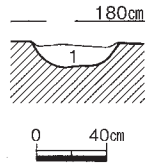
1　灰白色粘質土微砂（2.5Y7/1）
2　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
3　明黄褐色粘質土微砂（10YR6/6）
　［炭微量含む］
4　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）

第 83 図　土壙３（1/40）

土壙４（第 84 図）

袋状土壙 68 と 69 の間に位置する。規模は、45 × 40㎝、深さは、海抜 155㎝を測る。底部断面形状は、皿状を呈する。

埋土は、黄灰色粘質土の１層のみが認められている。当該土壙は、土壙３のような内容を示していない。（下澤）



1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）

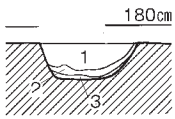
第 84 図　土壙４（1/40）

（３）溝

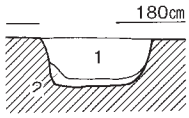
溝は、南東から北西方向の２条が検出している。溝１は、第Ⅳから第Ⅴ区にかけて確認されている。溝２は、溝１の東側に平行し、調査区南側と中程において途切れる状態で検出されている。袋状土壙との関係は、溝１が重複が前後、溝２では溝が切られる内容で重複することを確認した。（下澤）

溝１（第 85 図、図版 9-7・20-8）

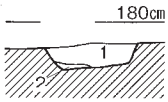
溝１は、幅 60㎝を測り、他の調査区に跨るが確認した長さ 48m で、南東から北西に延びる。深さは、北に行くほど浅くなり、南側が深くなる。その底面の海抜高は、第Ⅴ調査区北端で 164㎝、当該調査区南端では 146㎝を測る。このことは、第 85 図の上側の図が当該調査区、下の図が第Ⅴ調査区での作図であることからも示される。出土遺物は、151 の甕が第Ⅴ調査区側から検出されている。この他には、溝からの遺物は認められていない。（下澤）



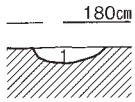
1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
　［褐灰色粘質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
3　黄褐色粘質土（2.5Y5/3）



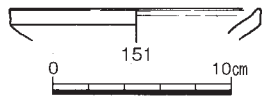
1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
　［褐灰色粘質土ブロック含む］
2　灰黄色粘性微砂（2.5Y6/2）



1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［黒褐色粘質土ブロック含む］
2　灰黄褐色粘性微砂（10YR4/2）



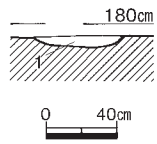
1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［黒褐色粘質土ブロック含む］



第 85 図　溝１（1/40）・出土遺物（1/4）

溝２（第 86 図、図版 9-8）

溝２は、幅 60㎝を測り、南東から北西に延びる。北側と南側及び途中で途切れている。深さは、第 86 図に見られるように浅く、確認された部分でほとんど変化を認めていない。袋状土壙との関係は、重複する袋状土壙 42 ～ 44 にいずれも、切られている。（下澤）

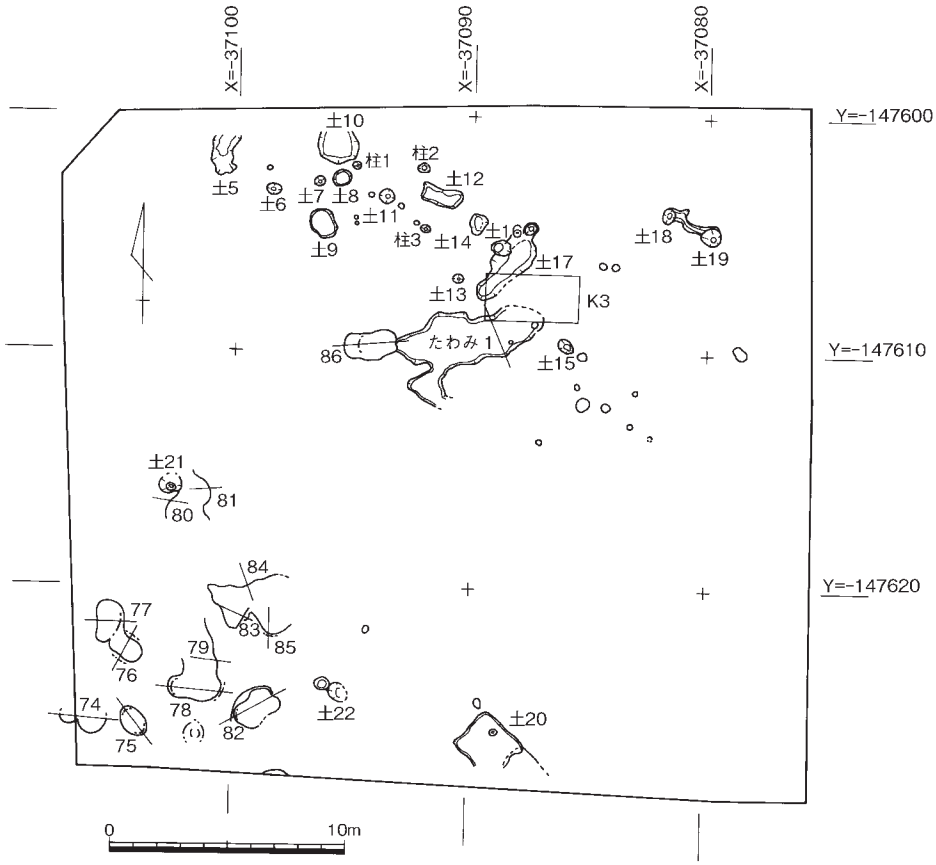


1　灰色粘質土微砂（5Y6/1）

第 86 図　溝２（1/40）

第２節　第Ⅱ調査区

第Ⅱ調査区は、南棟の基礎で南寄りで影響を受けているが、北側では見られていない。当該調査区は、第 87 図に方形の囲い部分確認調査において、遺構の存在が認められている地点である。基盤層は、黄褐色が北に行くに従い安定して認められる調査区である。北よりで検出している中期の遺構は、黒色土を埋土とするもので、遺構の遺存状態は良くなく、何れも削平を思わせる浅い内容である。袋状土壙は、南西側に検出されている。南東側では、遺構の密度が極めて低くなっているが、先に記した削平の影響が思考されるが、遺物がほとんど見られないことから判断し難い。　（下澤）



第 87 図　第Ⅱ調査区遺構配置図（1/300）

（1）袋状土壙

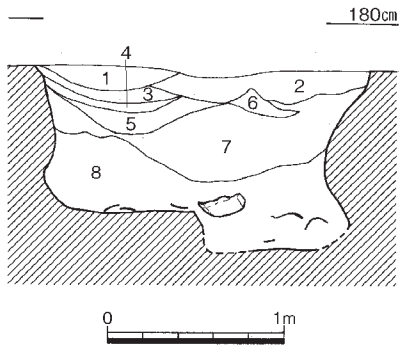
袋状土壙は、調査区南西隅よりに纏まって検出されている。これら纏まりから離れるように、１基が中央やや北に存在している。南西隅に検出されたのは、第ＩＢ調査区との関連で把握できるが、他は不詳である。しかし、この空白部分で分布の境界が想定される。　（下澤）

袋状土壙 74（第 88 図、図版 10-1・2）

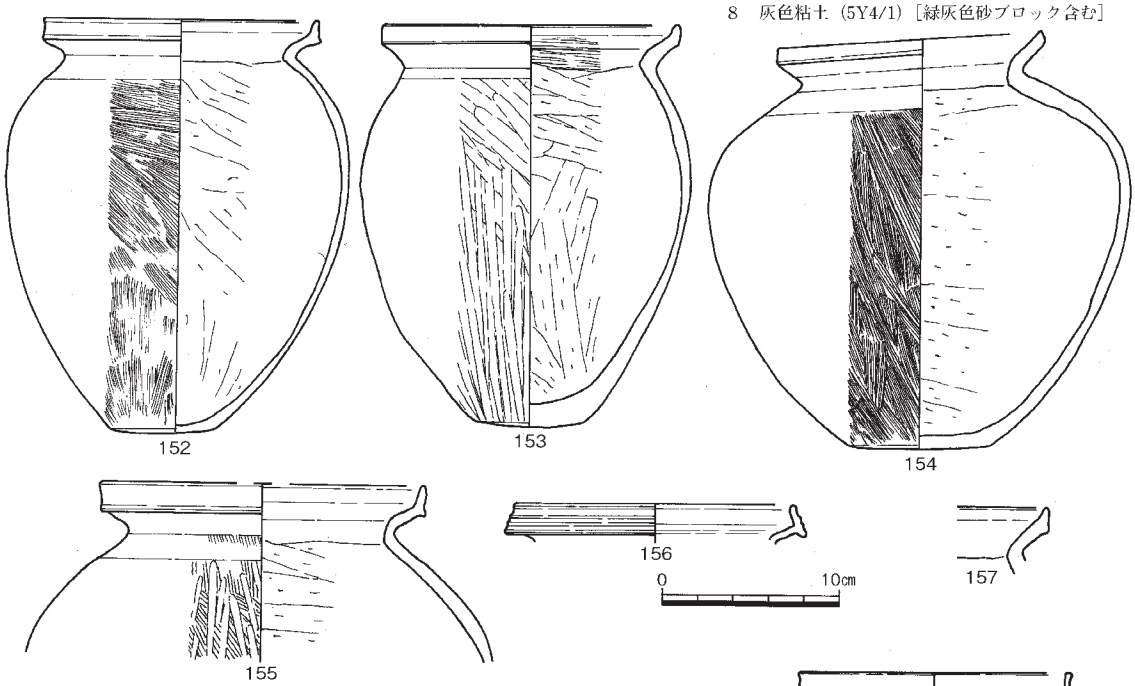
調査区の南西端に位置する。長径 190㎝、残存する深さは 103㎝を測る。検出時の平面形状から２基の土壙が重複していたと考えられる。底面も二段に分かれており、それぞれ海抜 71㎝と 52㎝を測る。しかし、土層断面の観察による切り合い関係は不明であった。第６～８層には基盤層の土がブ

ロック状に入り込んでおり、土壙の大半は短期間に人為的に埋め戻されたと思われる。掘り返しなど二次的な利用の痕跡は観察できず、第１～５層は埋め戻しの後土圧によりくぼんだ部分への自然堆積層と考えられるが複数回堆積と削平をくり返したようである。

遺物は主に第８層から出土しており、埋め戻しの際に廃棄されたものと思われる。図示した遺物は全て甕である。152～155は胴部内面の頸部まで丁寧なヘラケズリが施されている。152～154の底部はいずれも平底であるがシャープではない。これらの遺物の観察から、土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
3　褐灰色粘質土（10YR4./1）［炭、炭化物含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y5/1）
5　褐灰色粘土（10YR4/1）
6　褐灰色粘土（10YR4/1）
7　暗灰黄色粘性微砂（2.5Y5/2）
8　灰色粘土（5Y4/1）［緑灰色砂ブロック含む］

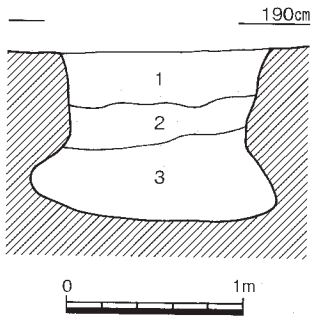


第88図　袋状土壙74（1/40）・出土遺物（1/4）

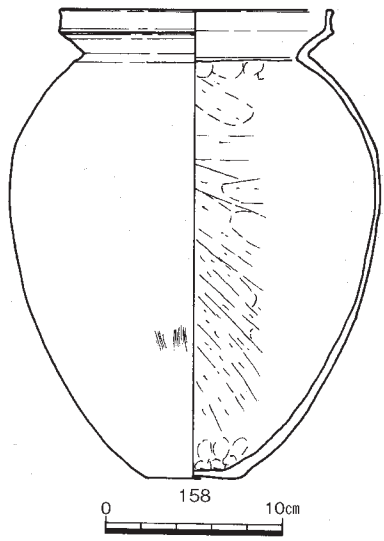
袋状土壙75

（第89図、図版10-3）

調査区の南西隅、袋状土壙74の東隣に位置する。長径125㎝、短径90㎝、残存する深さは98㎝を測る。底面の海抜高は78㎝である。埋土は水平堆積で基盤層の土がブロック状に入っており、短期間の埋め戻しが想定できる。出土遺物からこの土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



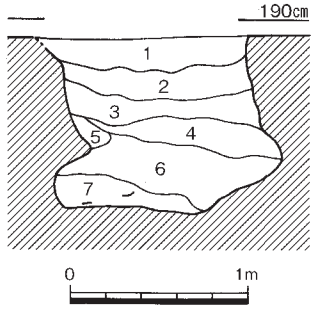
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
［灰色粘性微砂ブロック含む］



第89図　袋状土壙75（1/40）・出土遺物（1/4）

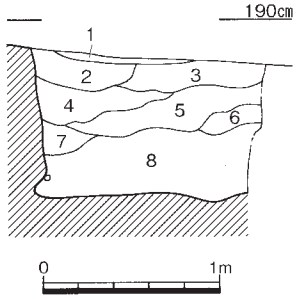
袋状土壙 76（第 90 図）

第Ⅱ区の袋状土壙 75 の 2m 北に位置し、隣接する袋状土壙 77 とは切り合う。平面形は 150 × 90㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 99㎝、平坦な底面は海抜高は 81㎝を測る。埋土は７層に区分でき、水平堆積の状況を示す。第６・７層は砂質土ブロックが含まれる埋土であることから人為的に埋め戻されたとみられる。出土遺物は、最下層で弥生土器が検出されているが図化にはいたっていない。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　黒褐色粘質土（10YR3/2）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
5　黒褐色粘質土（2.5Y3/2）
6　灰色粘土（5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
7　灰色粘土（10Y4/1）
　［灰色砂ブロック含む］

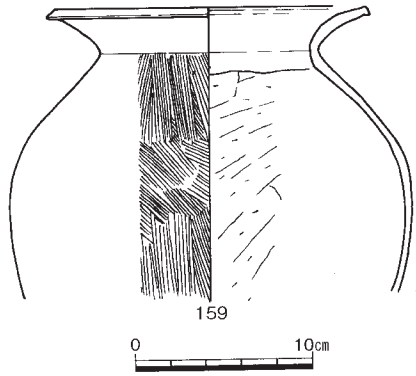
第 90 図　袋状土壙 76（1/40）



1　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
　［白っぽい砂含む］
2　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
3　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
4　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄橙色粘性微砂含む］
5　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
　［にぶい黄橙色粘性微砂粒含む］
6　灰黄色粘質土（2.5Y6/2］
7　褐灰色粘土（10YR4/1）
8　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［オリーブ灰色砂〈地山土〉ブロック含む］

袋状土壙 77（第 91 図、図版 10-4）

第Ⅱ区の袋状土壙 76 の北東に位置する。平面形は楕円形を呈している。検出面からの深さは 82㎝、平坦な底面の海抜高は 88㎝を測る。側壁は、東側の底がフラスコ状に抉れており、上方へは底面となす角度が鈍角になっていく。埋土は８層に区分できる。堆積状況は西側から東側に下降する様相を示す。第８層は、地山ブロック土を含む埋土が厚い水平堆積していることから、埋め戻されたと考えられる。出土遺物は、弥生土器の甕がある。**159** は口縁部を「く」の字状に外反する。外面はタテハケ、内面はヘラケズリを施す。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。　（水田）

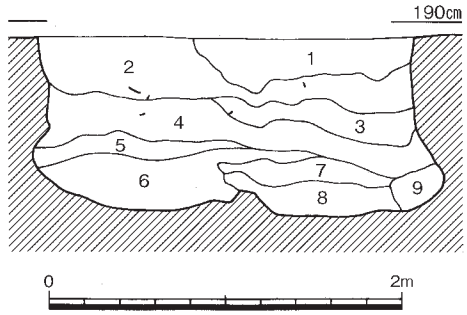


第 91 図　袋状土壙 77（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 78（第 92 図、図版 10-5）

調査区の南西部、袋状土壙 75 の北東 1.5m に位置する。長径 220㎝、残存する深さは 102㎝を測る。底面の海抜高は 80㎝である。後述の袋状土壙 79 を含めて少なくとも３基以上重複している。土層断面からは東西方向に２基切り合った状態が観察できる。第３～９層は基盤層の土がブロック状に入り込んでいる。短期間に人為的に埋め戻されたことを示す堆積状況であった。

図示できる遺物はないが、周辺の土壙の状況から見て、この土壙の時期は他の土壙と大差ないと考えられる。　（小松原）



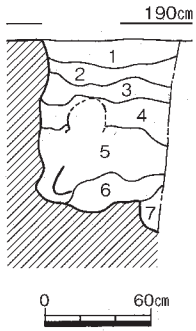
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　褐灰色粘土（10YR4/1）［黄灰色砂質土ブロック含む］
4　褐灰色粘土（10YR4/1）［黄灰色粘質土ブロック含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
6　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［灰色粘性微砂ブロック含む］
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　灰色粘土（5Y4/1）［緑灰色砂ブロック含む］
9　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［ブロック含む］

第 92 図　袋状土壙 78（1/40）

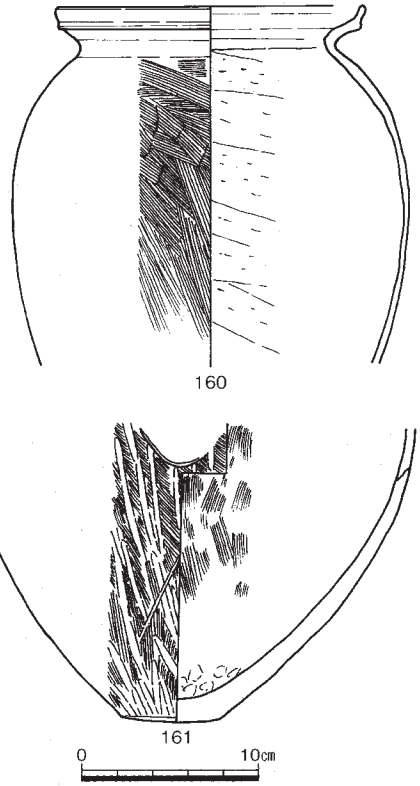
袋状土壙 79（第 93 図、図版 10-6）

調査区の南西部に位置し、南北方向に袋状土壙 78 と重複している。底面が二段確認できるので、東西方向にも２基以上の切り合いがあると考えられる。残存する深さは 97 ～ 108㎝、最深部の海抜高は 73㎝である。第３～５層にブロック状に入る基盤層の土が見られるため、人為的な短期間での埋め戻しが想定できる。

出土遺物のうち、**160** は第４層から、**161** は第５層から出土している。どちらも胴部外面によく煤が付着している。土壙の時期は、弥・後・Ⅳと考える。　（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
4　黄褐色砂質土（2.5Y5/3）［ブロック状に堆積］
5　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
　［にぶい黄色粘性微砂ブロック含む］
6　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）
7　灰色粘土（5Y4/1）



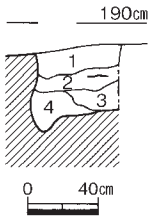
第 93 図　袋状土壙 79（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 80（第 94 図、図版 10-7）

調査区の中央西寄りに位置する。残存する深さは 49㎝、海抜高 129㎝を測る。後述の袋状土壙 81 と重複しており、図示できる遺物はないが周囲の状況から、この土壙の時期は他の土壙と大差ないと考えられる。　（小松原）

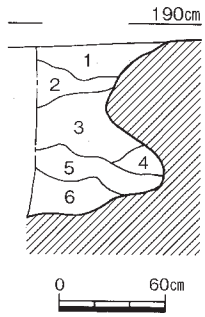
袋状土壙 81（第 95 図、図版 10-8）

調査区の中央西寄りに位置し、袋状土壙 80 と重複している。残存する深さは 99㎝、底面の海抜高 81㎝を測る。図示できる遺物はないが周囲の状況から、この土壙の時期は他の周辺の土壙と大差ないと考えられる。　（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2］
3　黒褐色粘質土（10YR3/2）
4　黒褐色粘土（10YR3/1）
　［にぶい黄褐色粘性微砂ブロック含む］

第 94 図　袋状土壙 80（1/40）

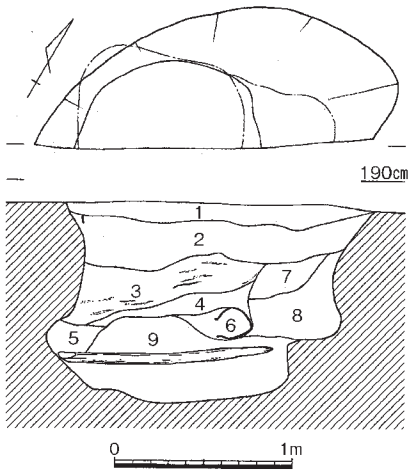


1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
　［淡黄色ブロック含む］
2　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
3　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
4　灰黄褐色粘質土微砂（10YR5/2）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
5　灰色粘質土（5Y5/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］
6　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［緑灰色粘性砂質土ブロック含む］

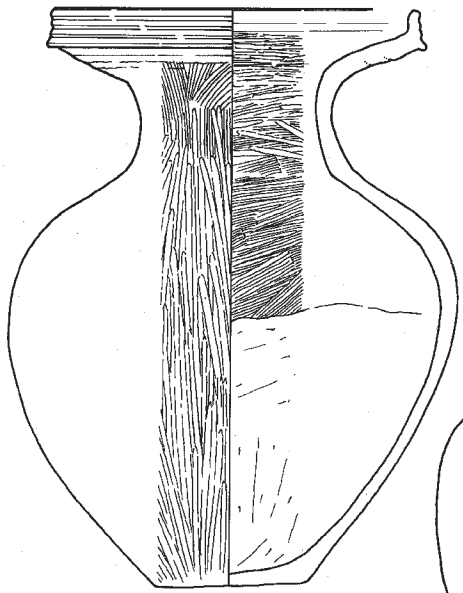
第 95 図　袋状土壙 81（1/40）

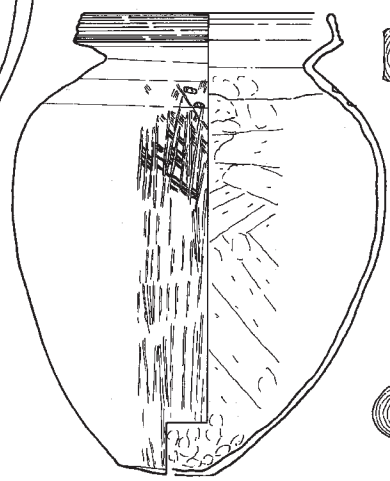
袋状土壙 82（第 96 図、図版 11-1 ～ 3）

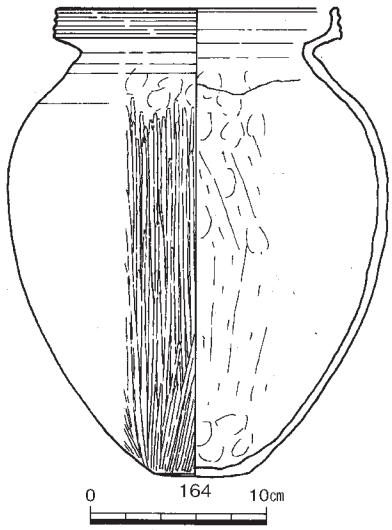
袋状土壙 78 の南東下近くに位置する。深さは、海抜 65㎝を測る。当該土壙は、断面の他に土器取り出しの際の掘り下げで、図版 11-2 で見られるような重複を平面でも確認できた。断面図からは、第３～６層が新たに掘られた袋状土壙埋土である。埋土の第３層中の筋状の線は、砂層である。

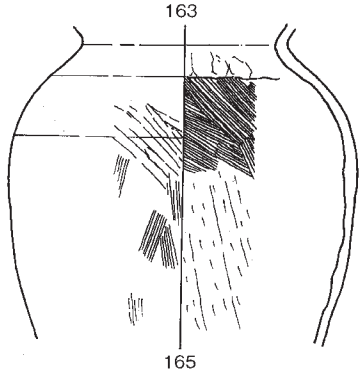


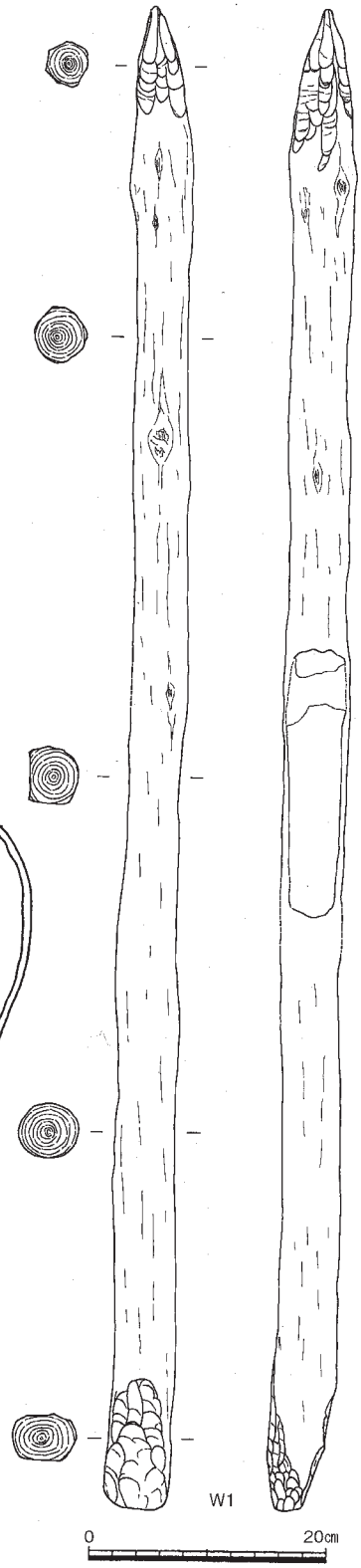
1　褐灰色粘質土（10YR5/1）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［薄い層灰黄色砂質土含む］
4　褐灰色粘土（10YR4/1）
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］
6　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］
7　褐灰色粘土（10YR4/1）
8　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］
9　灰色粘土（5Y4/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］











第 96 図　袋状土壙 82（1/40）・出土遺物（1/4・1/6）

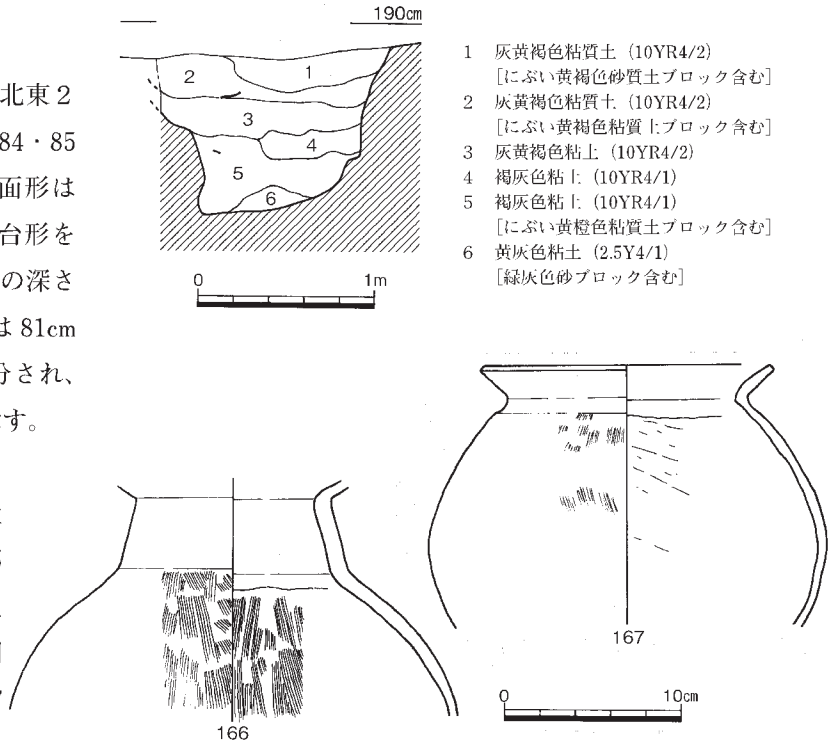
出土遺物は、第２層から **162**、第６層から **163** ～ **165**、木器の **W1** が第９層から検出されている。**162** は、口径 20.4㎝、底径 8.3㎝、器高 32.3㎝を測り、口縁部に凹線文を施文するがナデで消える部分がある。**163** は、口径 14㎝、底径 5.3㎝、器高 26㎝を測る甕である。口縁部は、凹線文を施し、肩部に刺突が認められる。外面調整は、胴部上半にタタキを施こす。**164** は、口径 15.5㎝、底径 5.3㎝、器高 26.3㎝を測る甕である。口縁部は、凹線文を施している。**165** は、甕の胴部片で、内面調整の胴部上半にハケを施している。３個の甕は、外面に煤が付着していた。**W1** は、長さ 127㎝、径 5.5㎝を測る。両端は、杭状と鑿状と異なる形状を示し、中程に平坦面を設けている。　（下澤）

袋状土壙 83

（第 97 図、図版 11-4）

第Ⅱ区の袋状土壙 78 の北東２ｍに位置する。袋状土壙 84・85 とは切り合いを示す。平面形は不整楕円形、断面形は逆台形を呈する。検出面から 89㎝の深さの床面は平坦で、海抜高は 81㎝を測る。埋土は６層に区分され、第１～５層は水平堆積を示す。

出土遺物は、第２層から **166**、第５層から **167** が検出された。壺 **166** は頸部が短く「ハ」の字状を呈する。内外面ともにハケ調整が施されている。甕 **167** は、口縁部が「く」の字に外反する。　（水田）

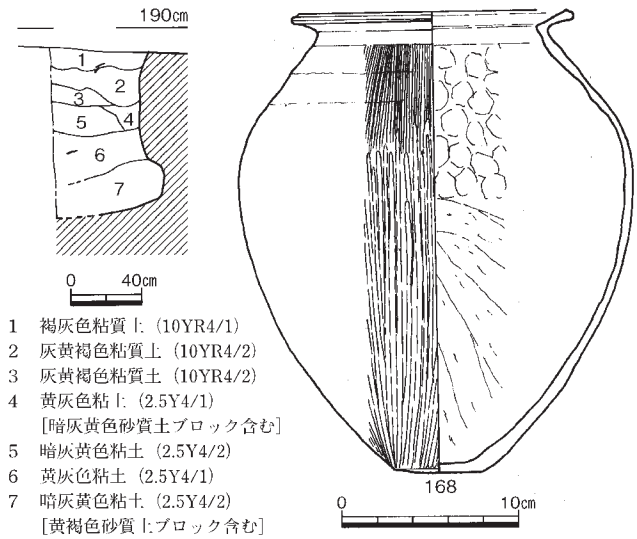


第 97 図　袋状土壙 83（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 84（第 98 図、図版 11-5）

第Ⅱ区の袋状土壙 83 の北に位置する。平面形は、不整楕円形を呈する。検出面からの深さは 93㎝、底面中央部が窪む。埋土は７層に区分できる。下層の第５～７層には、粘土が水平な堆積を示す。第４層は、壁面の崩落土とみられる。

遺物は、第６層からの甕が押し潰された状態で出土している。**168** は、胎土中に角閃石が多く含まれる。また、形態・調整の諸特徴から讃岐地域からの搬入品と考えられる。時期は弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）

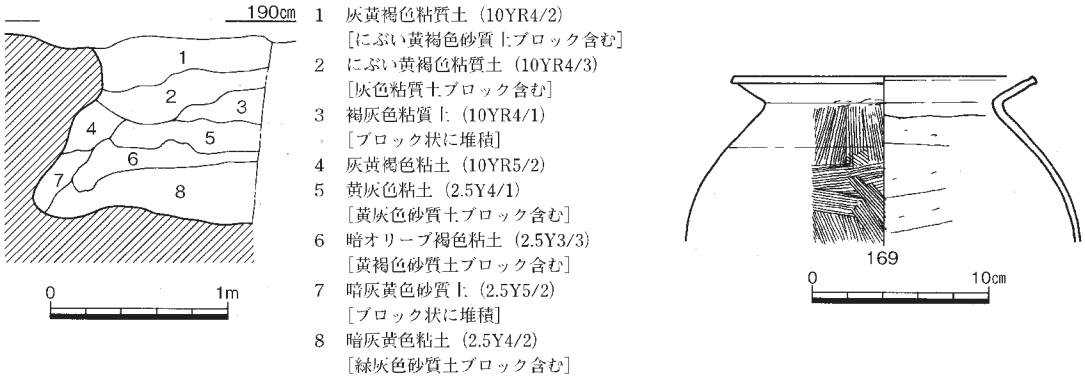


第 98 図　袋状土壙 84（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 85（第 99 図、図版 11-6）

第Ⅱ区の袋状土壙 83 の東に位置する。平面形は、不整楕円形を呈する。検出面からの深さは 104 ㎝を測る。断面形は、底面がフラスコ状に抉れており、中程から上方はわずかに逆「ハ」の字状に広がる様相を示す。底面はやや窪んでおり、海抜高は 76㎝を測る。埋土は８層に区分できる。

出土遺物は第２層から弥生土器が検出された。甕 **169** は「く」の字に口縁部が外反する。外面はハケ調整、内面はヘラケズリを施している。時期は弥・後・Ⅳに位置づけられる。　（水田）

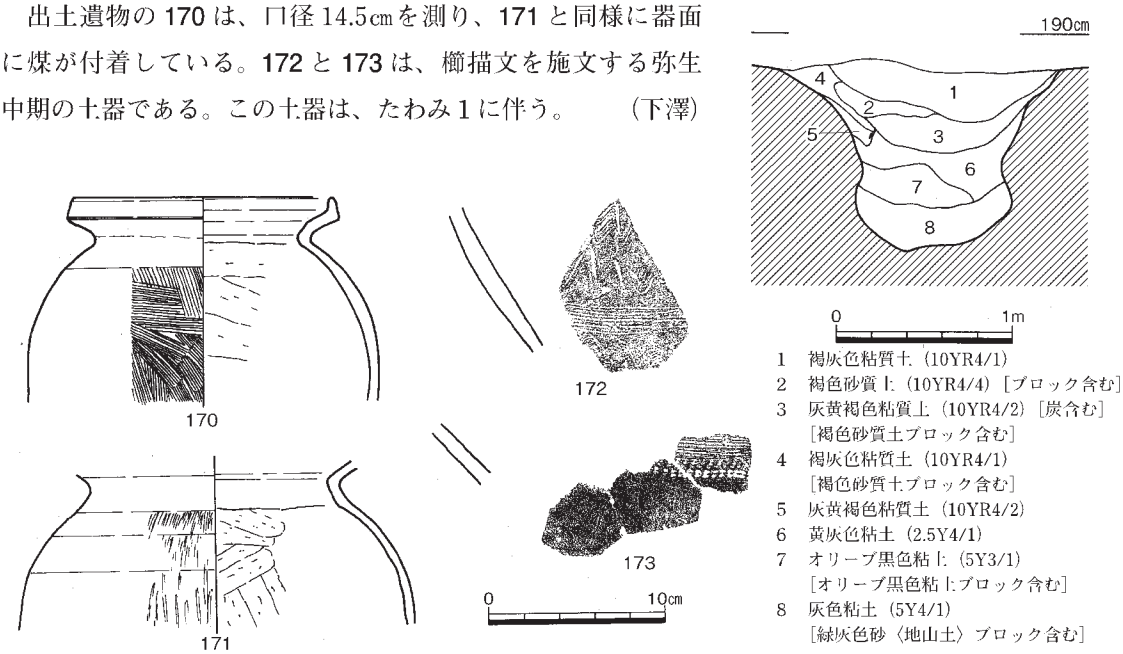


第 99 図　袋状土壙 85（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 86（第 100 図、図版 11-7）

袋状土壙 81 の北上方に位置し、たわみ１と重複している。深さは、海抜 68㎝を測る。平面プラン検出時は、210 × 110㎝であるが、断面で確認できた東西の長さは 158㎝となった。第 87 図で示したプランよりも実際は、東側に小さくなっていることが理解される。当該袋状土壙は、同遺構が密に分布する域よりも、離れた位置に単独で認められている。このことで、他のと相違する内容を示していない。しかしながら、遺存の影響と推測されるが、断面図に見られる袋状から立ち上がる形状は同じであるが、そこから更に、逆「ハ」の字状の広がりが示される。

出土遺物の **170** は、口径 14.5㎝を測り、**171** と同様に器面に煤が付着している。**172** と **173** は、櫛描文を施文する弥生中期の土器である。この土器は、たわみ１に伴う。　（下澤）



第 100 図　袋状土壙 86（1/40）・出土遺物（1/4）

（２）土壙

調査区北寄りに多く検出されている。他の調査区に比較して、基盤が安定し最も高い付近となる。埋土は、黒褐色土を基本とし、その遺存状態からは削平された可能性が思考される。　（下澤）

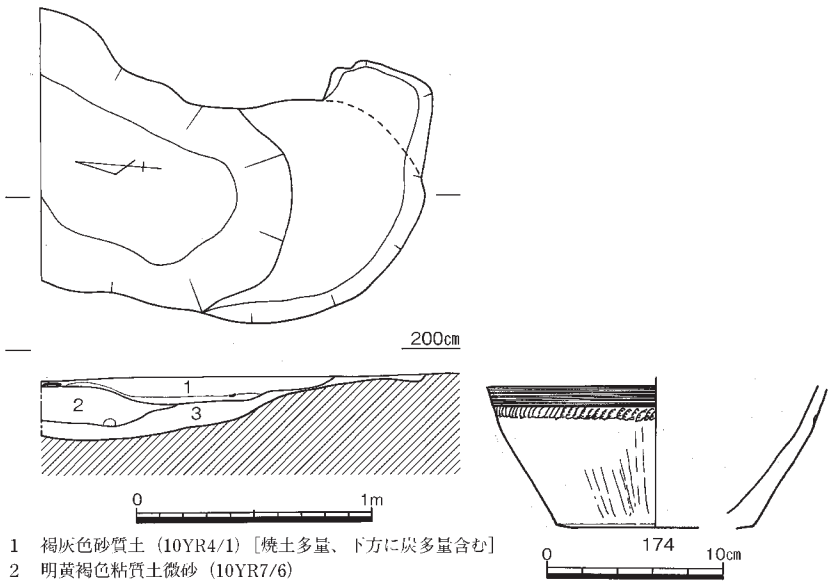
土壙５（第 101 図）

第Ⅱ区の北西に位置する。遺構の半分は調査区外に続く。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 163 ㎝、短軸は 87㎝、検出面からの深さは 26㎝を測る。遺物は鉢 **174** が出土している。　（水田）

土壙６（第 102 図）

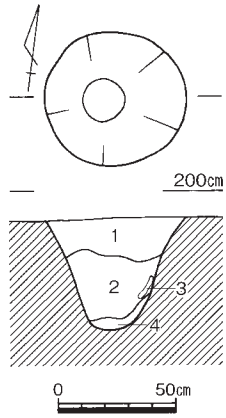
土壙５の東近くに位置する。規模は 60 × 58㎝、深さは、海抜 140㎝を測る。当初は、柱穴と考えていたが、柱痕およびそれを想定させる埋土の状況を、断面図に示すように呈していなかった。

埋土からは、炭が認められたが、時期を判断する遺物は検出できていない。　（下澤）



1　褐灰色砂質土（10YR4/1）［焼土多量、下方に炭多量含む］
2　明黄褐色粘質土微砂（10YR7/6）
　［黒褐色粘土ブロック、明黄褐色焼土多量含む］
3　明黄褐色粘質土微砂（2.5Y6/6）［黄灰色粘土ブロック含む］

第 101 図　土壙５（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色弱粘性砂質土（10YR4/1）
　［明黄褐色砂質土多く含む］
2　黒褐色粘質土多砂（10YR3/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］
3　黒［炭］
4　灰色粘土（7.5Y4/1）

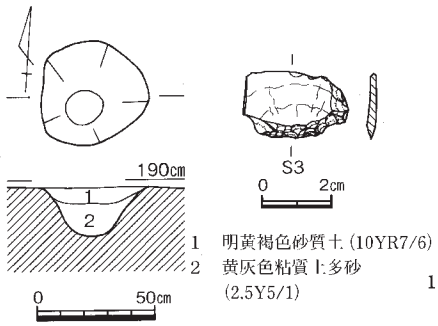
第 102 図　土壙６（1/30）

土壙７（第 103 図）

調査区の北西寄り、土壙６の東約２m に位置する。径 45㎝、残存する深さは 21㎝の浅い土壙である。**S3** の石材はサヌカイトである。埋土が弥生時代中期の遺構と共通であることから、同じ時期のものと考えられる。　（小松原）

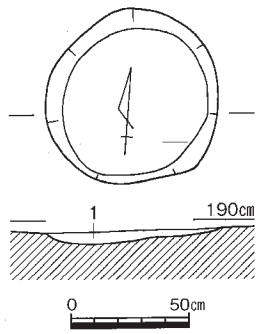
土壙８（第 104 図）

第Ⅱ区の土壙７の１m 東に位置する。平面形は 74 × 72㎝の円形を呈する。検出面からの深さは５㎝を測る。　（水田）



1　明黄褐色砂質土（10YR7/6）
2　黄灰色粘質土多砂（2.5Y5/1）

第103図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/2）



1　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y6/2）
　［明黄褐色砂質土多く含む］

第 104 図　土壙８（1/30）

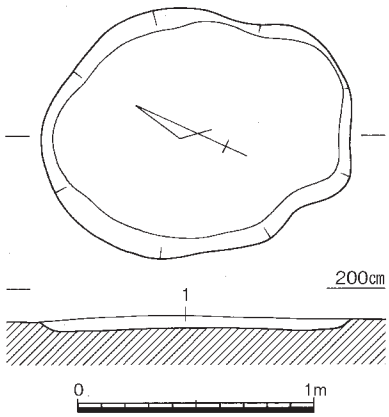
土壙９（第 105 図）

土壙７の下方近くに位置する。規模は 132 × 105㎝、深さは、海抜 182㎝を測る。平面形態は、北側が円形、南側が方形状を呈する。

埋土は、１層のみ認められ、時期を判断する遺物は検出されなかった。（下澤）

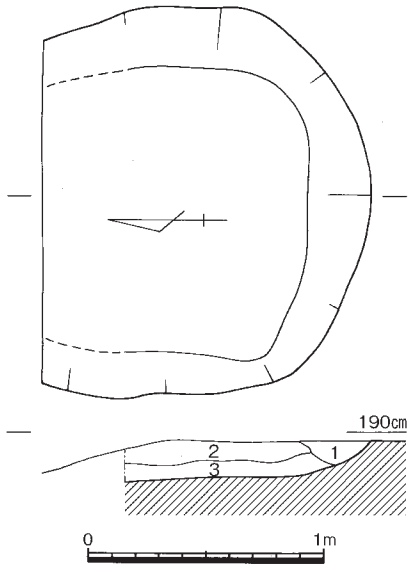
土壙 10（第 106 図）

調査区中央寄り北端に位置し、土壙７・８の北に隣接する。東西径 165㎝、残存する深さは 15㎝、浅いたわみ状の土壙である。図示できる遺物はないが、埋土が弥生時代中期の遺構と共通であることから、同じ時期のものと考えられる。（小松原）



1　黄灰色弱粘性砂質土（2.5Y6/1）［明黄褐色多く含む］

第 105 図　土壙９（1/30）



1　灰黄色粘質土微砂（2.5Y6/2）［粘質土多く含む］
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）［明黄褐色粘質土多く含む］
3　黄灰色弱粘性砂質土（2.5Y5/1）

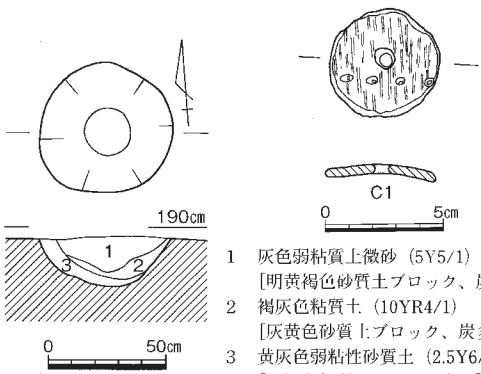
第 106 図　土壙 10（1/30）

土壙 11（第 107 図）

第Ⅱ区の北側中央に位置する。平面形は 74 × 72㎝の円形を呈し、検出面からの深さが 22㎝を測る。埋土は３層に区分でき、第２層には炭を多く含む。出土遺物は、紡錘車 C1 が検出された。（水田）

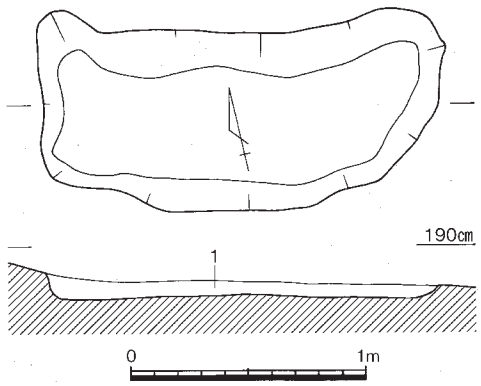
土壙 12（第 108 図）

土壙 11 の東側に位置する。規模は 166 × 75㎝、深さは、海抜 170㎝を測る。平面形態は、不整の長方形を呈する。埋土は、１層認められるが、時期を判断する遺物は検出されなかった。（下澤）



1　灰色弱粘質上微砂（5Y5/1）
［明黄褐色砂質土ブロック、炭少量含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
［灰黄色砂質土ブロック、炭多量含む］
3　黄灰色弱粘性砂質土（2.5Y6/1）
［黒褐色粘質土ブロック含む］

第 107 図　土壙 11（1/30）・出土遺物（1/3）



1　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）［やや粘性帯びる］

第 108 図　土壙 12（1/30）

土壙 13（第 109 図）

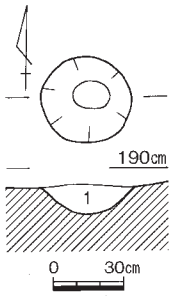
調査区北寄り、土壙 12 の南約３m に位置する。径 39㎝、残存する深さは 12㎝の浅い土壙である。図示できる遺物はないが、埋土が弥生時代中期の遺構と共通であることから、同じ時期のものと考えられる。（小松原）

土壙 14（第 110 図）

第Ⅱ区の土壙 12 の南東２m に位置している。平面形は 86 × 66㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは６㎝を測る。広く平坦な底面をもち、土壙の断面形は浅い皿状を呈している。埋土は、灰黄褐色砂質土の１層のみである。遺物は出土していない。（水田）

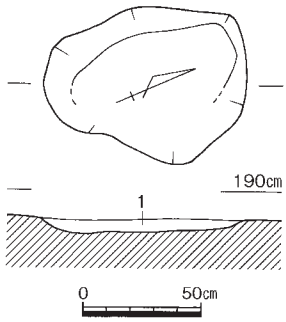
土壙 15（第 111 図）

たわみの東側近くに位置する。規模は 70 × 50㎝、深さは、海抜 164㎝を測る。平面形は隅丸方形を呈する。（下澤）



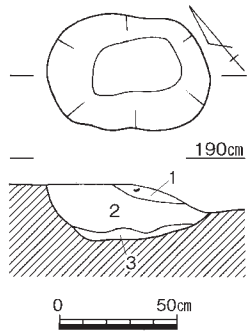
1　黒褐色粘質土（10YR3/2）
［褐色粘質土ブロック含む］

第 109 図　土壙 13（1/30）



1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
［やや粘性帯びる］

第 110 図　土壙 14（1/30）



1　黒褐色弱粘性砂質土（10YR3/1）
［炭少量含む］
2　浅黄色弱粘性砂質土（2.5Y7/4）
3　暗灰黄色粘質土微砂（2.5Y5/2）

第 111 図　土壙 15（1/30）

土壙 16（第 112 図）

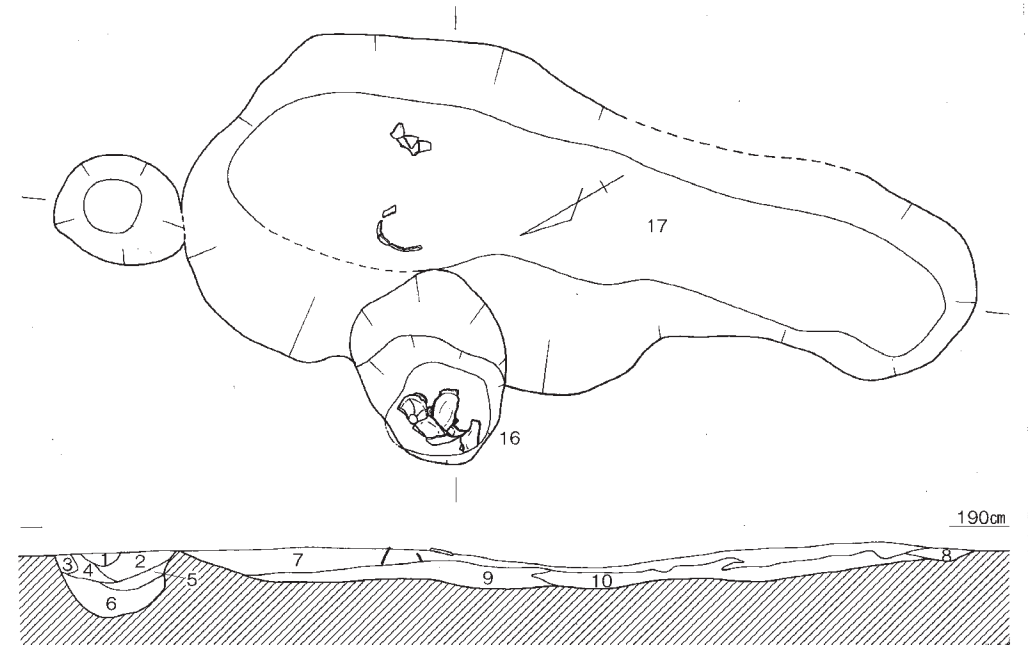
調査区の北半やや東寄り、土壙 13・14 の東隣に位置する。平面の形状は長径 84㎝、短径 65㎝のややいびつな円形を呈する。残存する深さは 50㎝を測り、平坦な底面をもつ。後述の土壙 17 と重複し、同土壙を切っている。埋土は周囲の土壙と同様の黒っぽい粘質土を基調とした土である。

175・176・180 などがこの土壙出土の土器である。主に第２・３層から出土している。**175** は甕で、胴部内外面ともヘラミガキが施されている。**176** はジョッキ形土器で、内外面ともヘラミガキが施され、外面には刺突文２段の上にヘラ描き沈線文２条が観察できる。**180** は蓋と考えられる土器である。**S4** は太形蛤歯石斧の刃部破片で幅は約６㎝である。**S5・6** は石鏃である。出土遺物の特徴から、この土壙の時期は弥・中・Ⅱと考えられる。（小松原）

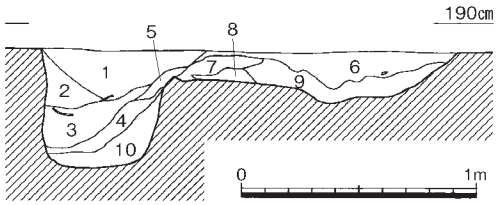
土壙 17（第 112 図）

土壙 16 と重複し、同土壙に切られている。長さ 340㎝、最大幅 140㎝、残存する深さは 16㎝でいびつな形を呈する浅いたわみ状の土壙である。北端に柱穴状の小土壙が付随する。埋土は土壙 16 や周囲の土壙と同様の黒っぽい粘質土を基調とした土である。

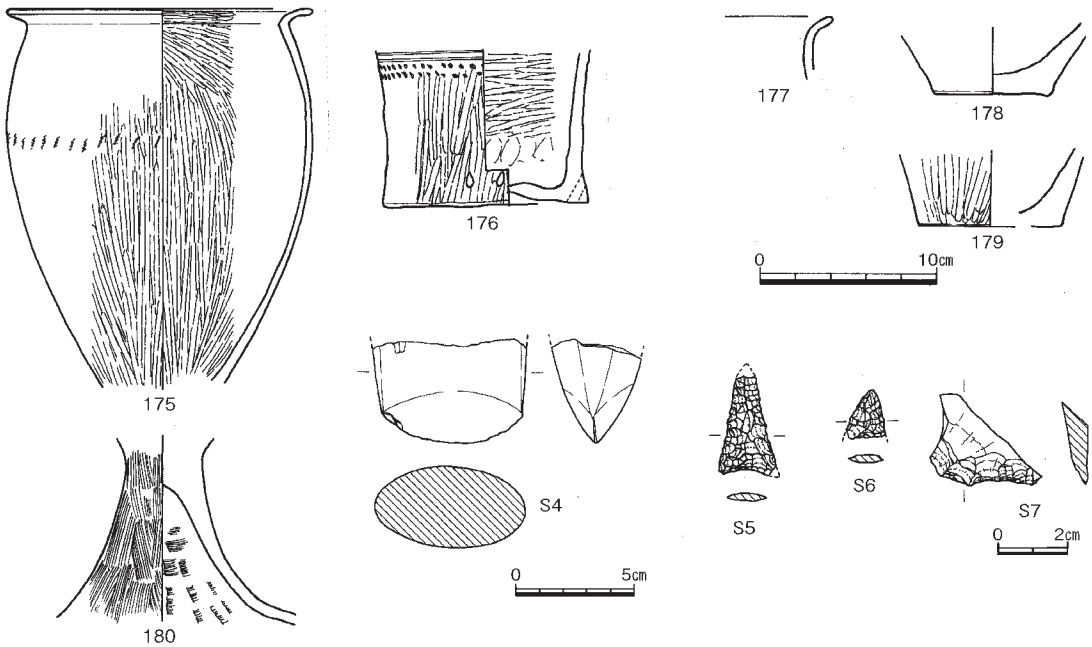
177 は小土壙、**178・179** がこの土壙出土の土器である。**177** はやや古相を示すようだが、埋土の状況などから、この土壙の時期は土壙 16 とほぼ同じと考えられる。（小松原）



1　にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）［ブロック含む］
2　黒褐色粘質土（10YR3/2）
3　のぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）［ブロック含む］
4　褐灰色粘質土（10YR4/1）
5　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）［ブロック、薄い炭層含む］
6　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
7　黒褐色粘質土（10YR3/2）［炭含む］
8　褐色粘質土（10YR4/4）
9　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
10　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）



1　褐灰色砂質土（10YR4/1）
2　黒褐色弱粘性砂質土（10YR3/1）［炭少量含む］
3　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）［炭多量含む］
4　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
5　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
6　黄灰色砂質土（2.5Y5/1）［炭少量含む］
7　灰色弱粘性砂質土（5Y5/1）
8　黒褐色粘質土（10YR3/1）
9　にぶい黄弱粘質土微砂（2.5Y6/4）
10　灰色粘質土（5Y4/1）［黒褐色粘質土ブロック含む］



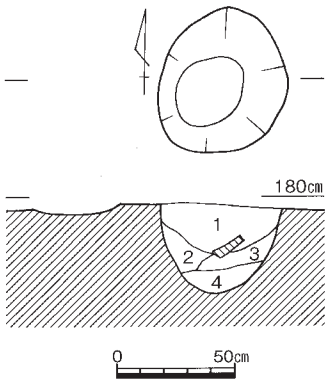
第 112 図　土壙 16・17（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）

土壙 18（第 113 図）

第Ⅱ区の土壙 19 の 2m 北西に位置する。平面形は 62 × 53㎝の円形を呈する。検出面からの深さは 38㎝を測る。埋土は、４層に区分できる。第１層の下方中央で板石があったが、使用痕跡はみられなかった。土器等の遺物は出土しておらず、時期については不明である。（水田）

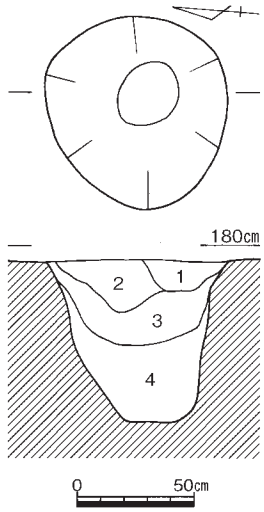
土壙 19（第 114 図）

土壙 18 の東側近くに位置する。規模は 82 × 76㎝、深さは、海抜 106㎝を測る。当初は、土壙 18 と一体の溝として検出していた。結果、両端が深くなり土壙となった。平面形態は、円形を呈する。埋土は、４層の堆積が認められ、時期を判断する遺物は、検出されなかった。（下澤）



1　黒色粘質土（10YR2/1）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）

第 113 図　土壙 18（1/30）



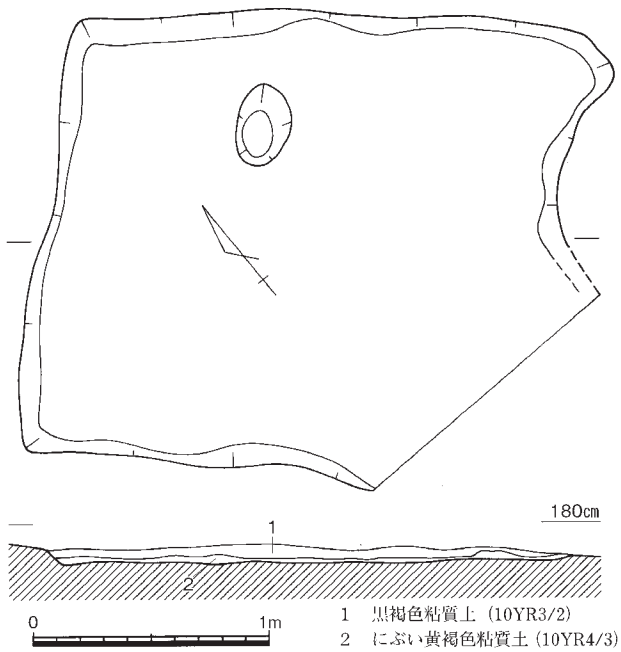
1　褐灰色粘土（10YR4/1）［炭含む］
2　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
3　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［黒褐色粘土ブロック含む］
4　黒褐色粘土（2.5Y3/2）

第 114 図　土壙 19（1/30）

土壙 20（第 115 図）

袋状土壙 82 の東側に位置する。規模は 212 × 192㎝、深さは、海抜 162㎝を測る。平面形態は、方形を呈しているが、南隅部分は表土除去の影響で不詳である。プラン検出時は、この平面形態から竪穴住居の可能性を想定した。しかし、第Ⅲ調査区の溝４との関係で同一の遺構と認識した。さらに、両調査境に残された土手のセクションを検討した結果、当該遺構の壁が立ち上がるのを確認したのである。このことから、単独の遺構として認識したのである。

埋土は、水平堆積の２層が認められる。時期を判断する遺物は、検出されなかった。（下澤）

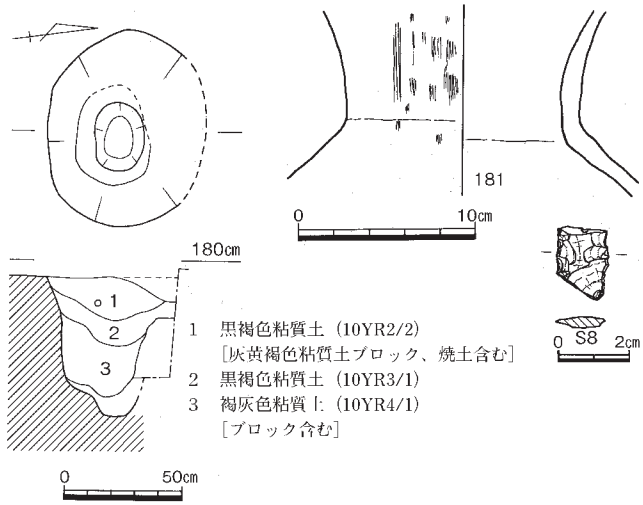


1　黒褐色粘質土（10YR3/2）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）

第 115 図　土壙 20（1/30）

土壙 21（第 116 図）

調査区の中央西端に位置する。袋状土壙 80・81 の西隣である。長径は東西で 84㎝だが、北にコンクリートの基礎杭が打ち込まれているため、南北径は不明である。残存する深さは 60㎝を測る。土壙の時期は不明であるが、同じ調査区の他の土壙と同じく黒褐色を基調とした粘質土が堆積している。　（小松原）

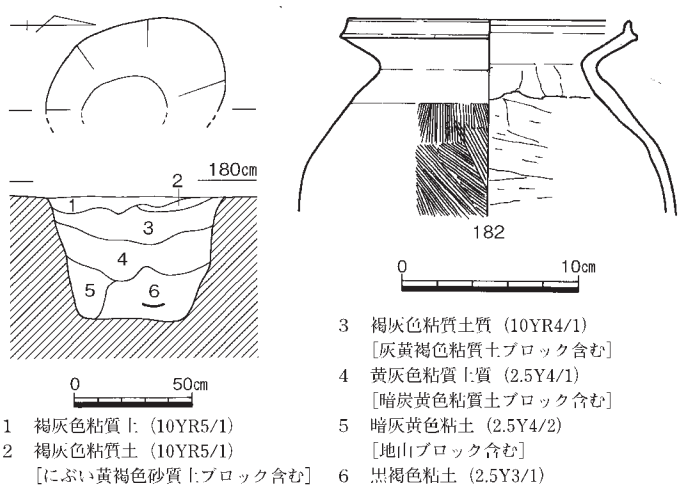


第 116 図　土壙 21（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙 22（第 117 図）

袋状土壙 82 の 3ｍ東に位置する。土壙の規模は 90 × 70㎝を測る。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは 53㎝、平坦な底面の海抜高は 119㎝を測る。埋土は、６層に区分できる。

遺物は、第６層から甕 **182** が出土している。口縁端部は強いヨコナデにより凹線状に窪む。外面はハケメ、内面はヘラケズリ、頸部にはナデを施す。口径は 15.8㎝を測る。　（水田）



第 117 図　土壙 22（1/30）・出土遺物（1/4）

（３）柱穴

調査区北よりに多く認められている。他の調査区に比較して、基盤が安定し最も高い付近となる。柱穴と認識できたのは、３個である。この他に、第 87 図に示されるようにピットが認められているが、柱穴として把握できなかった。　（下澤）

柱穴１（第 118 図）

土壙 10 の南東近くに位置する。規模は径 30㎝、深さは海抜 140㎝を測る。柱痕は、断面図に示すように、明確に確認された。時期を判断する遺物は、検出されなかった。　（下澤）

柱穴２（第 119 図）

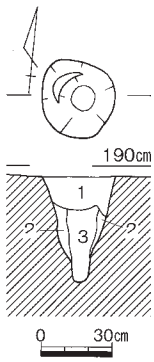
土壙 12 の北西側近くに位置する。規模は 44 × 37㎝、深さは海抜 138㎝を測る。当初の断面では、両側に認められる黄灰色砂質土の存在から柱痕を想定し、一部に礫が引っかかっていた。このようなことから、再度、セクションの位置を北に換えたことにより、礎石と樹皮を確認することができた。この北側の図が、第 119 図の右である。底に認められる礫は、底に据えられ、その面に接して断面に示した黒色の線が斜めに認められる。この部分が柱の樹皮部分でり、この内容から柱が東寄りに傾いていたことが想定される。

出土遺物は、**S9** で長さ 25.5㎜、幅 21.5㎜、厚さ 4㎜、重さ 2.54g のサヌカイト製楔である。（下澤）

柱穴３（第 120 図）

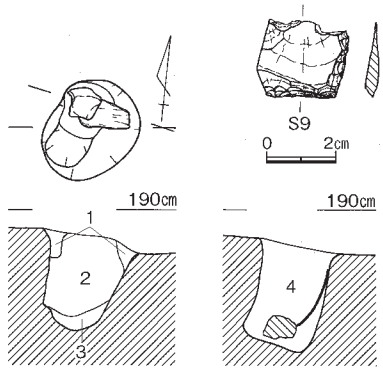
土壙 14 の西側に位置する。規模は 34 × 33㎝、深さは海抜 147㎝を測る。

出土遺物は、石鏃２点が検出されている。**S10** は、長さ 32㎜、幅 16㎜、厚さ 4.4㎜、重さ 1.81g、**S11** は長さ 15.8㎜、幅 15㎜、厚さ 3.8㎜、重さ 0.60g を測るサヌカイト製の石鏃である。　（下澤）



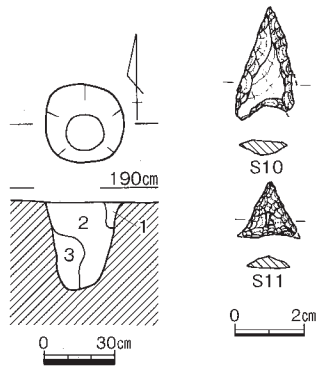
1　黄灰色弱粘性砂質土（2.5Y5/1）
　［明黄褐色多く含む］
2　灰色粘質土（7.5Y6/1）
3　黄灰色粘質土多砂（2.5Y4/1）
　［浅黄色細粒砂質土含む］

第 118 図　柱穴１（1/30）



1　黄灰色弱粘性砂質土（2.5Y6/1）
2　〈上〉褐灰色弱粘性砂質土（10YR4/1）
　［明黄褐色砂質土ブロック、炭微量含む］
　〈下〉灰色粘質土微砂（5Y4/1）［炭微量含む］
3　灰色粘質土（7.5Y5/1）
4　柱痕跡

第 119 図　柱穴２（1/30）・出土遺物（1/2）



1　灰色弱粘性砂質土（5Y6/1）
2　黄灰色粘性砂質土（2.5Y4/1）［炭少量含む］
3　黄灰色粘性砂質土（2.5Y5/1）

第 120 図　柱穴３（1/30）・出土遺物（1/2）

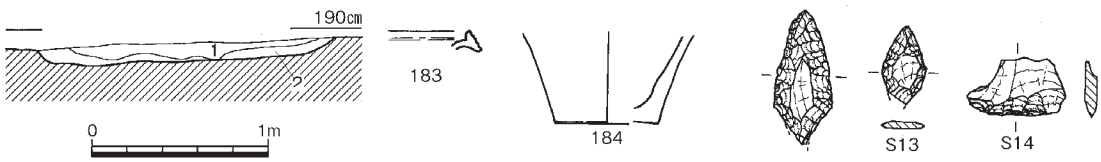
（４）たわみ

たわみは、第５図で示すように県が実施した確認調査のトレンチ K3 で確認されていた遺構である。この他には、この種の遺構は確認されていない。　（下澤）

たわみ（第 87・121 図）

土壙 17 の南下に位置する。西端は袋状土壙 86 と重複し、東部分は K3 の影響を受けている。規模は約 600 × 220㎝、深さは、海抜 170㎝を測る。平面形態は、不整の楕円状を呈し、西よりの南辺より下方に延びていく部分を認めるが、立ち上がってしまう。

出土遺物は、土器と石器が検出されている。**183** は、甕の小片である。口縁端部には、４条の凹線文を施文する。**184** は底部片で、外面にヘラミガキ、内面には押圧が認められる。**S12** は、長さ 38㎜、幅 16㎜、厚さ 4.4㎜、重さ 2.63g、**S13** は長さ（22）㎜、幅 12㎜、厚さ 2.3㎜、重さ 0.64g、**S14** 長さ 28㎜、幅 16.5㎜、厚さ 3.5㎜、重さ 1.83g を測るサヌカイト製の石鏃と R.F である。　（下澤）



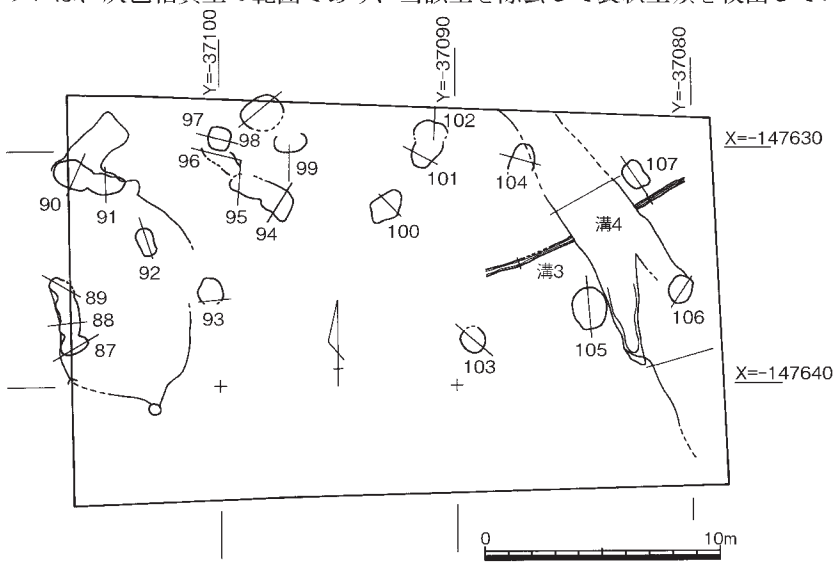
1　黒褐色粘質土（10YR3/2）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）

第 121 図　たわみ（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

第３節　第Ⅲ調査区

第Ⅱ調査区と同じように、明確な基盤層を認めている。第４図の土器は、図版 25-４に示すようにこの調査区の南端よりの黄褐色基盤層下に堆積の認められる黒褐色土中からの検出である。この土器を含む層は、東に行くに従い厚くなる。具体的には、溝４から東側である。

袋状土壙を主体とする分布は、調査区東西の中程から北にかけて認められる。第 122 図の西端の破線を含んだプランは、灰色粘質土の範囲であり、当該土を除去して袋状土壙を検出している。(下澤)



第 122 図　第Ⅲ調査区遺構配置図（1/300）

（1）袋状土壙

分布は、調査区東西方向の中央から北側に確認されている。先の調査区で見られたように、連続した状態で袋状土壙が続くことはないようである。しかし、複数が重複した状態では、西寄りで認められている。単独となるものは、東側での分布の内容を示している。　(下澤)

袋状土壙 87（第 123 図、図版 11-8）

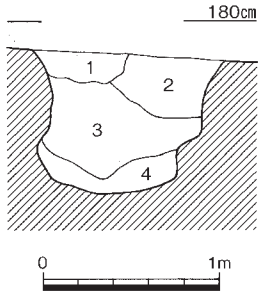
調査区の西端に位置し、袋状土壙 88・89 と重複しているが、切り合い関係は不明。残存する深さは 81㎝、底面の海抜高は 83㎝。基盤層の土がブロック状に入っており、この土壙が短期間に埋め戻された状況を示す。図示できる遺物はないが、時期は他の土壙と大差ないと考えられる。　(小松原)

袋状土壙 88（第 124 図、図版 12-1）

調査区の西端に位置し、袋状土壙 87・89 と重複しているが、切り合い関係は不明。残存する深さは 80㎝、底面の海抜高は 82㎝である。基盤層の土がブロック状に入っており、短期間に埋め戻された状況を示している。図示できる遺物はないが、時期は他の土壙と大差ないと考えられる。(小松原)

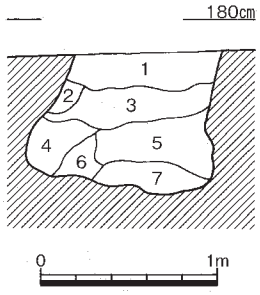
袋状土壙 89（第 125 図、図版 12-2）

調査区の西端に位置し、袋状土壙 87・88 と重複しているが、切り合い関係は不明。残存する深さは 71㎝、底面の海抜高は 92㎝。基盤層の土がブロック状に入る水平堆積が観察でき、短期間に埋め戻された状況を示す。図示できる遺物はないが、時期は他の土壙と大差ないと考えられる。(小松原)



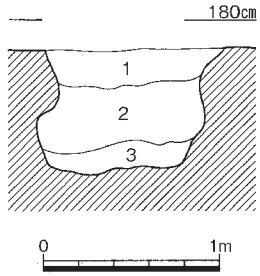
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［暗灰黄色粘土ブロック、炭含む］
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［灰色粘土ブロック含む］

第 123 図　袋状土壙 87（1/40）



1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）［ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［ブロック含む］
3　褐灰色粘土（10YR4/1）［黄灰色粘土ブロック含む］
4　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［暗オリーブ褐色粘質土ブロック含む］
5　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［暗オリーブ褐色粘質土ブロック含む］
6　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［灰色砂ブロック含む］
7　灰色粘土（5Y4/1）

第 124 図　袋状土壙 88（1/40）



1　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
　［黄褐色粘質土微砂ブロック含む］
2　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［にぶい黄色粘質粒
　灰白色粘質土微砂ブロック含む］
3　灰色粘質土（7.5Y5/1）
　［明緑灰色砂質土ブロック含む］

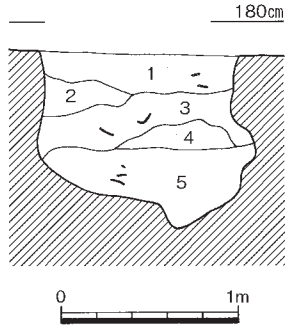
第 125 図　袋状土壙 89（1/40）

袋状土壙 90（第 126 図、図版 12-3）

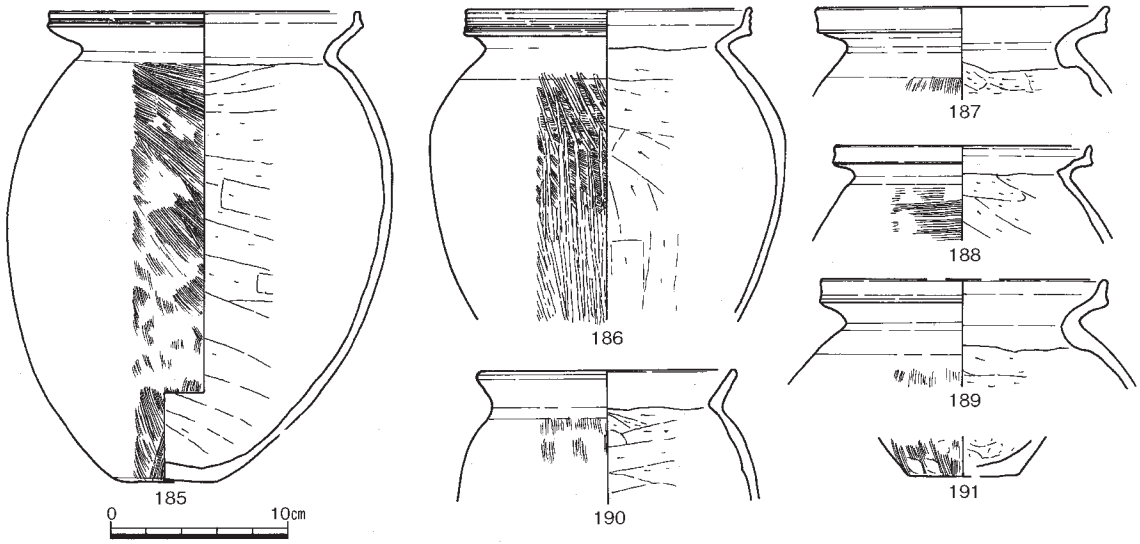
袋状土壙 89 の北側に位置し、袋状土壙 91 と重複している。深さは、海抜 64㎝を測る。袋状土壙は、短軸方向の断面である可能性もあるが、抉りは顕著な内容を示していない。

埋土は、最下層の第５層の堆積が厚く、水平の状態を示している。

出土遺物は、第１層から **185**、第３層から **186** と **187**、第５層から **189** が検出されている。**185** は、口径 17.3㎝、底径 6.8㎝、器高 26.4㎝を測る甕である。外面調整はハケが施され、口縁部にヘラガキ沈線文が認められる。**186** は、口径 16㎝を測る甕である。**190** は、頸部が「く」の字状に屈曲する甕である。**187** ～ **189** は、甕で口縁部が立ち上がるが文様を施さない。甕の器面には、煤の付着が認められる。　（下澤）



1　明黄褐色粘質土微砂（10YR6/6）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［浅黄色粘質土粒含む］
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
4　黄灰色粘質土（2.4Y4/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
5　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］



第 126 図　袋状土壙 90（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 91（第 127 図、図版 12-4）

袋状土壙 89 の北側に位置し、袋状土壙 90 と東側で重複している。深さは、海抜 88㎝を測る。断面の形状は、底部分で抉る様相を示し、その中ほどにおいてもやや抉り状態が認められる。

埋土は、最下層の第３層中には、図版 12-４に見られるように砂質土のブロックを含む。　（下澤）

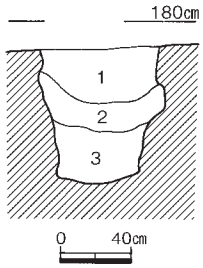
袋状土壙 92（第 128 図、図版 12-5）

第Ⅲ区の袋状土壙 91 の南東３m に位置する。平面形は 120 × 70㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さ 70㎝の底面は、周縁よりも中央が高くなっており、最深部の海抜高は 87㎝を測る。壁面は、底部から一旦膨らんだ後、内傾して上部へと立ち上がる様相を示す。埋土は５層に区分できる。

出土遺物はなく、時期は周囲の袋状土壙から弥生後期末の範疇と考えている。　（水田）

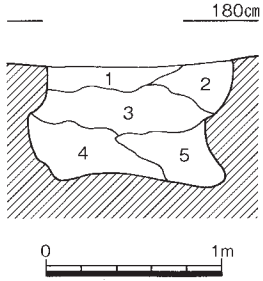
袋状土壙 93（第 129 図、図版 12-6）

第Ⅲ区の袋状土壙 92 の南東３m に位置する。近世の土壙により半分が削平を受けている。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 90㎝、底面の海抜高は 80㎝を測る。埋土は３層に区分でき、第１～３層は水平な堆積状況を示す。遺物は出土していない。　（水田）



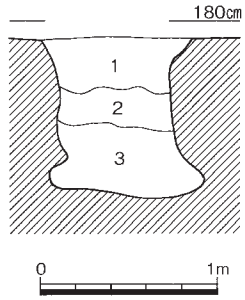
1　黄褐色粘質土微砂（10YR5/6）
　[灰白色弱粘性砂質 I:ブロック含む]
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　[灰白色弱粘性砂質土ブロック含む
3　灰色粘質 I:（5Y4/1）

第 127 図　袋状土壙 91（1/40）



1　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）
　[ブロック含む]
2　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
3　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　[灰色粘 I:ブロック含む]
4　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）
　[灰色粘土ブロック含む]
5　灰色粘土(5Y4/1)[灰色粘土ブロック含む]

第 128 図　袋状土壙 92（1/40）



1　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
　[灰白色粘質土微砂ブロック少量含む]
2　黄灰色粘質 I:（2.5Y4/1）
　[明緑灰色粘質土ブロック 浅黄色粘質土多く含む]
3　灰色粘質土（5Y4/1）
　[下層に明緑灰色粘質土ブロック 浅黄色粘質土含む]

第 129 図　袋状土壙 93（1/40）

袋状土壙 94（第 130 図、図版 12-7）

袋状土壙 93 の北上方に位置し、袋状土壙 95 と重複している。深さは、海抜 133㎝と 89㎝の底が認められる。断面形状は、南側辺が浅く、抉りを認めない。北側は、明瞭な抉りを示し、それに対応する抉りも形成される。このことから、複数の重複と思考されるが、埋土の関係から判断できない。

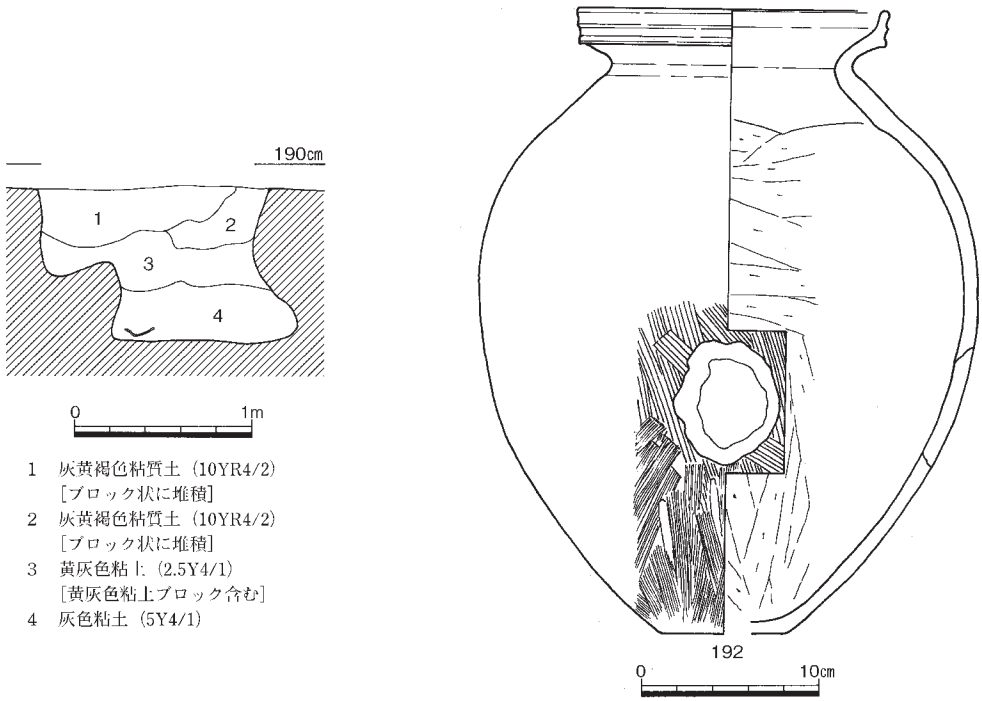
出土遺物は、**192** が第４層から検出している。この甕は、口径 17.3㎝、底径 7㎝、器高 35㎝を測る。口縁部は、強いナデによる凹部を形成し、胴部下半に穿孔が認められる。　（下澤）

袋状土壙 95（第 131 図）

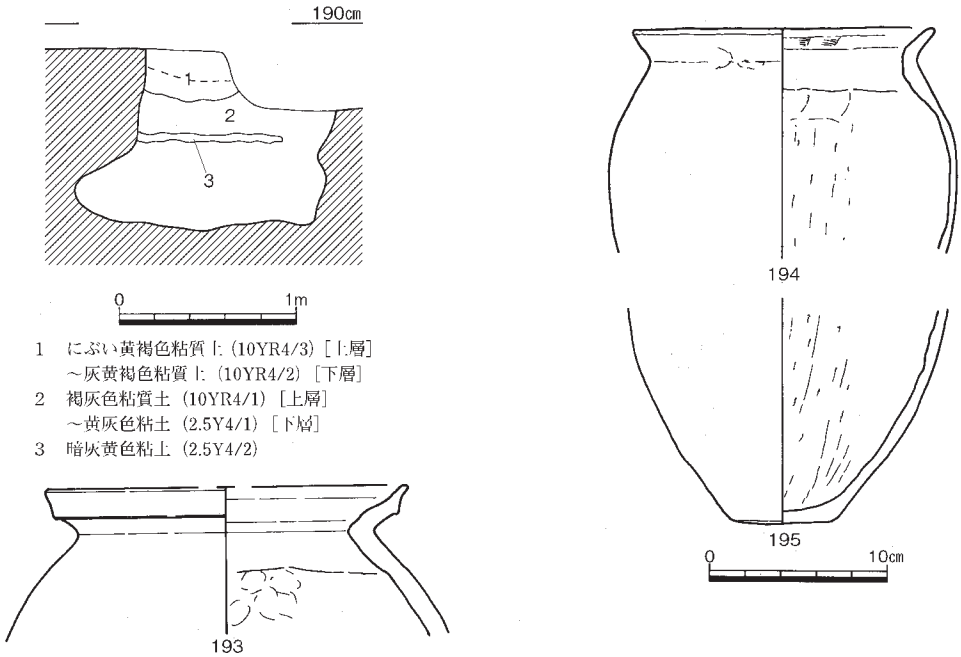
袋状土壙 93 の北上方に位置し、袋状土壙 94 と重複している。深さは、海抜 73㎝を測る。断面図表面北側のくぼみは、第５図に示している近世の溝の影響を受けている。断面形状は、南側が抉る様相はなく、北側で明瞭な抉りを形成させている。

埋土は、第３層が帯状に認められる。基本的には、第２層の暗灰黄色土で占められている。

出土遺物は、**193** ～ **195** の甕である。**193** は、第２層の上方で検出している。内面には、押圧痕を認める。**194** は、口径 16.7㎝を測り、頸部に押圧痕を認める。**195** は、底径 5.6㎝を測り、外面調整にハケが認められる。これらの土器には、煤が付着している。　（下澤）



第 130 図　袋状土壙 94（1/40）・出土遺物（1/4）



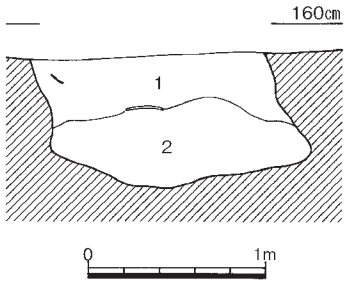
第 131 図　袋状土壙 95（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 96（第 132 図、図版 12-8・13-1）

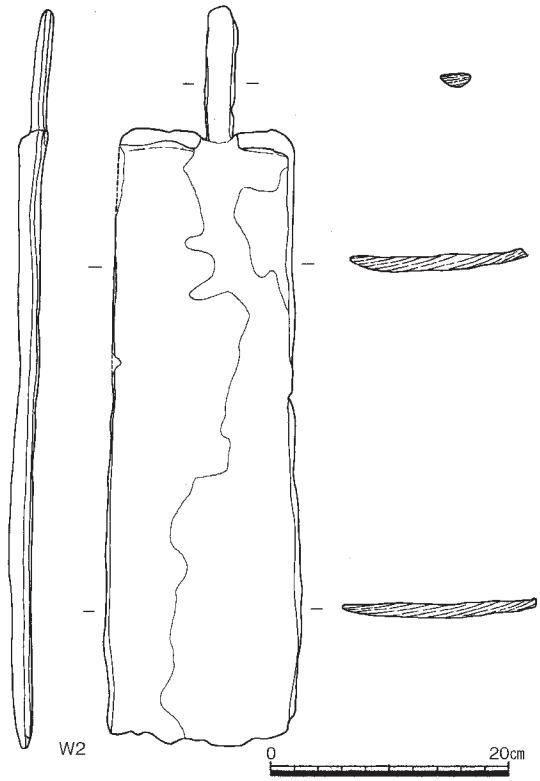
袋状土壙 95 の北西側に位置し、南東側で袋状土壙 95、北西側では袋状土壙 97 と重複している。当該袋状土壙が検出された部分は、第５図に一点破線で示した近世の掘り込みのうちで、東西方向に溝状に認められるものの西端よりである。この影響により、明確なプランを検出できていないことから、断面の位置が適切に設定できていない。結果的には、先の図で判断できるようにプラン対し、斜めの位置で設定したのである。深さは、海抜 67㎝を測る。断面の形状は、作図の位置が不適切であ

るが両側とも抉りの状態を呈する。埋土は、２層が認められているが、それより上層については、近世溝の影響による。

出土遺物は、**W2** の木器で、長さ 62.5㎝、柄の長さ 1.2㎝、幅 16.8㎝、厚さ 1.3㎝を測る。柄は、この状態で先端を丸く収め、平たい部分のそれは、傷んではいるが裏面から弧状に終わる。図の細線部分は火を受け、出土状態から、第２層上に置かれたと判断する。　（下澤）



1　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
2　灰色粘土（10Y4/1）［緑灰色粘土ブロック含む］

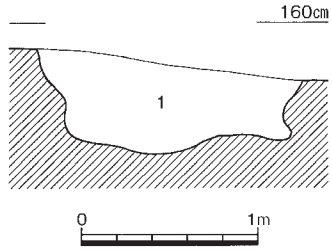


第 132 図　袋状土壙 96（1/40）・出土遺物（1/6）

袋状土壙 97（第 133 図、図版 13-2）

袋状土壙 96 の北に接して位置する。その位置関係から、重複していることが判断される。しかし、近世溝の影響により、把握していない。深さは、海抜 86㎝を測る。

埋土は、１層のみ確認されている。断面形態は、東側で抉りの状態を示している。　（下澤）



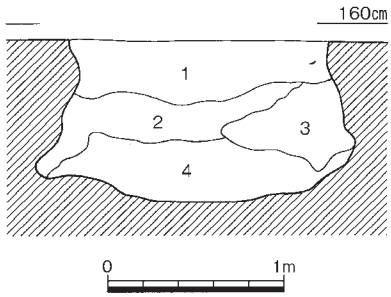
1　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
［灰色粘土ブロック含む］

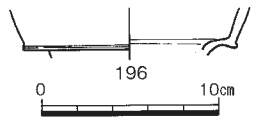
第 133 図　袋状土壙 97（1/40）

袋状土壙 98（第 134 図、図版 13-3）

第Ⅲ区の袋状土壙 97 の北東１m に位置する。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 92㎝、床面は中央が窪んでおり、最深部の海抜高は 78㎝を測る。壁面は一旦内傾し、中程で径 140㎝を測ったのちに外傾する。埋土は４層に区分できる。第２～４層には粘土が堆積しており、南側からの流入が想定される。

遺物は第１層から弥生土器の甕 **196** が出土している。口縁端部は欠損しているが、二重口縁を呈する。調整は磨滅により不明確である。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。　（水田）





1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
［褐灰色粘質土ブロック含む］
2　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
3　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
4　灰色粘土（7.5Y4/1）
［緑灰色粘性微砂ブロック含む］

第 134 図　袋状土壙 98（1/40）・出土遺物（1/4）

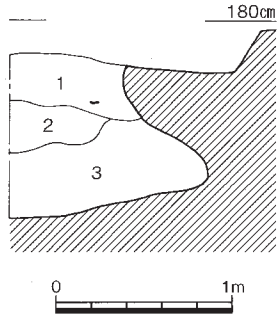
袋状土壙 99（第 135 図、図版 13-4）

第Ⅲ区の袋状土壙 98 の南東 1.5m に位置する。半分は現代の建物の基礎よって削平されていた。平面形は楕円形、断面形は袋状を呈する。深さは 92㎝、底面の海抜高は 78㎝を測る。（水田）

袋状土壙 100（第 136 図、図版 13-5）

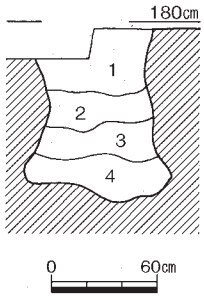
第Ⅲ区の袋状土壙 101 の南西 2m に位置する。平面形は 160 × 100㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは 98㎝、床面の海抜高は 78㎝を測る。埋土は４層に区分できる。第１～４層は埋土中にブロックが含まれており、水平な堆積状況が認められる。

出土遺物は第３・４層から甕 **197・198** が検出された。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。（水田）

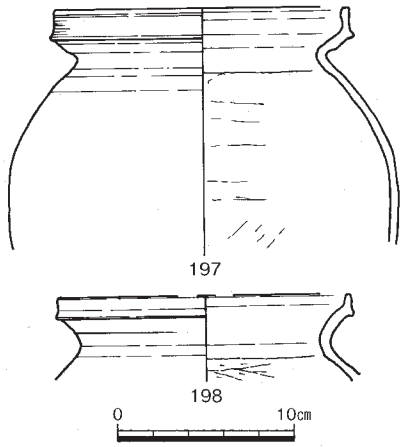


1　灰色粘土（5Y4/1）
2　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
3　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
［緑灰色粘土ブロック含む］

第 135 図　袋状土壙 99（1/40）



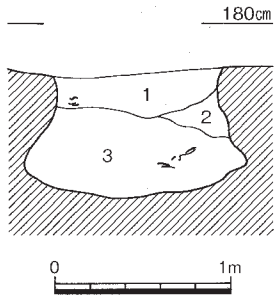
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
［にぶい黄褐色粘質土ブロック状に堆積］
2　黄灰色粘土（2.5Y5/1）
［黄灰色粘土ブロック状に堆積］
3　暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）
4　灰色粘土（5Y4/1）
［暗青灰色粘土ブロック含む］



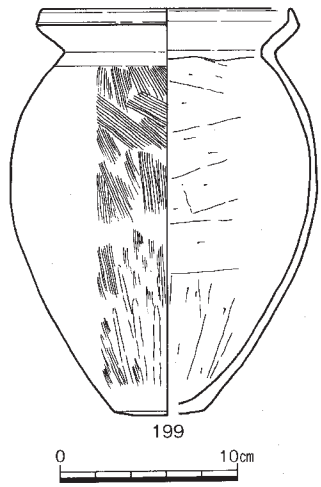
第 136 図　袋状土壙 100（1/40）・出土遺物（1/4）

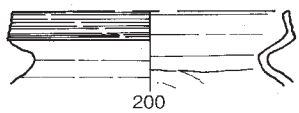
袋状土壙 101（第 137 図、図版 13-6）

調査区の中央北端に位置し、土壙 100 の北東約 2m にあたる。袋状土壙 102 と重複しているが、切り合い関係は不明である。残存する深さは 74㎝、底面の海抜高は 81㎝である。基盤層の土がブロック状に入っているので、短期間での埋め戻しが想定できる。**200** は第３層から出土した。この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　灰色粘土（5Y4/1）
［灰色粘質土ブロック含む］
2　灰色粘土（5Y4/1）
3　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
［暗緑灰色砂質土ブロック含む］





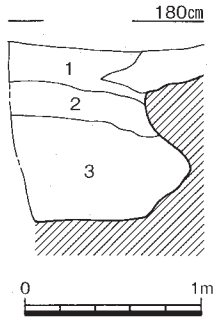
第 137 図　袋状土壙 101（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 102（第 138 図、図版 13-7）

調査区の中央北端に位置し、袋状土壙 101 と重複しているが、切り合い関係は不明である。残存する深さは 102㎝、底面の海抜高は 67㎝である。基盤層の土がブロック状に入る水平堆積で、人為的な短期間での埋め戻しが想定できる。図示できる遺物はないが周辺の状況から、この土壙の時期は他の土壙と大差ないと考えられる。（小松原）

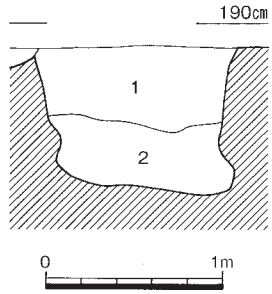
袋状土壙 103（第 139 図、図版 13-8）

袋状土壙 100 の南東下方に位置する。規模は 110 × 100㎝、深さは、海抜 94 ㎝を測る。断面形態は、顕著ではないが、抉りの状態を示している。埋土は２層認められ、レンズ堆積の内容を示していない。（下澤）



1　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
　［暗灰黄色粘質土ブロック状に堆積］
2　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［灰色粘土ブロック含む］
3　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）

第 138 図　袋状土壙 102（1/40）



1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［褐灰色粘質土ブロック状に堆積］
2　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　暗灰黄色粘質土［ブロック状に堆積］

第 139 図　袋状土壙 103（1/40）

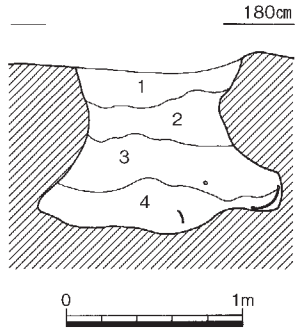
袋状土壙 104

（第 140・141 図、図版 14-1・2）

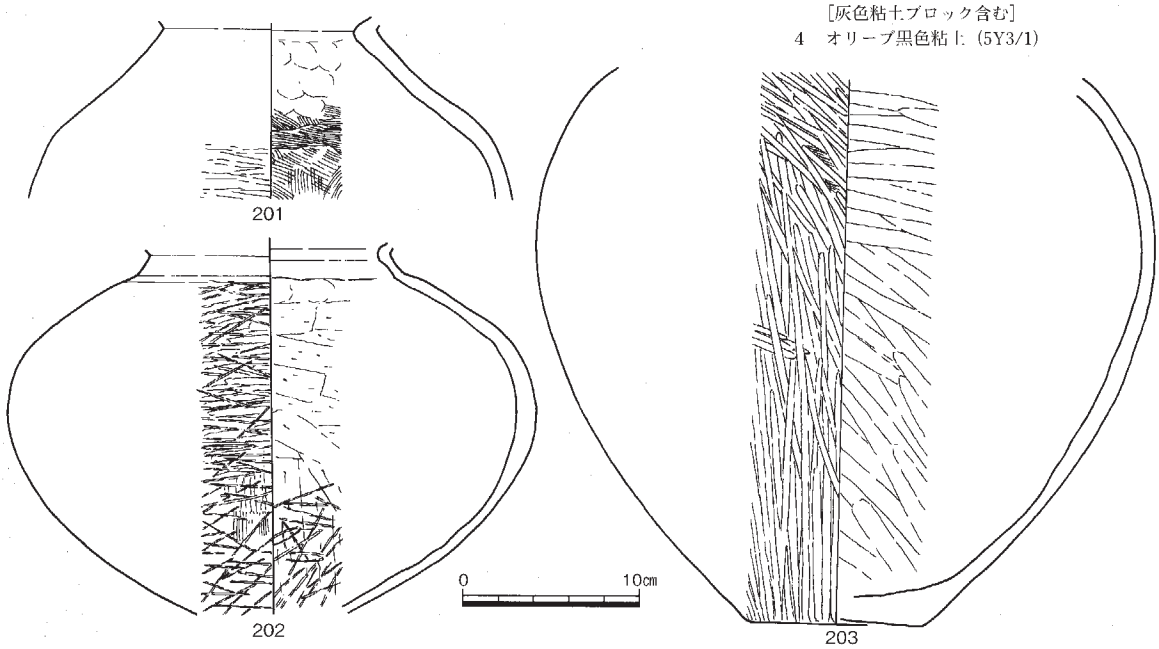
調査区の北東部に位置し、袋状土壙 101・102 の東３m にあたる。南半分が削平を受けており、規模・重複関係は不明。残存する深さは 99㎝を測る。断面形は底部付近で抉られており、袋状を呈する。底面には凹凸がある。底面の海抜高は 62㎝である。第１～３層には基盤層の土がブロック状に入り、水平に堆積している。短い間に人為的に埋め戻されたと考えられる。

遺物の多くは第３・４層からの出土である。**201** ～ **203** は壺である。外面はヘラミガキ調整が観察できる。**202**・**203** は内面にヘラケズリが認められる。**204** ～ **207** は甕で、**204** ～ **206** は内面頸部までヘラケズリが施されている。

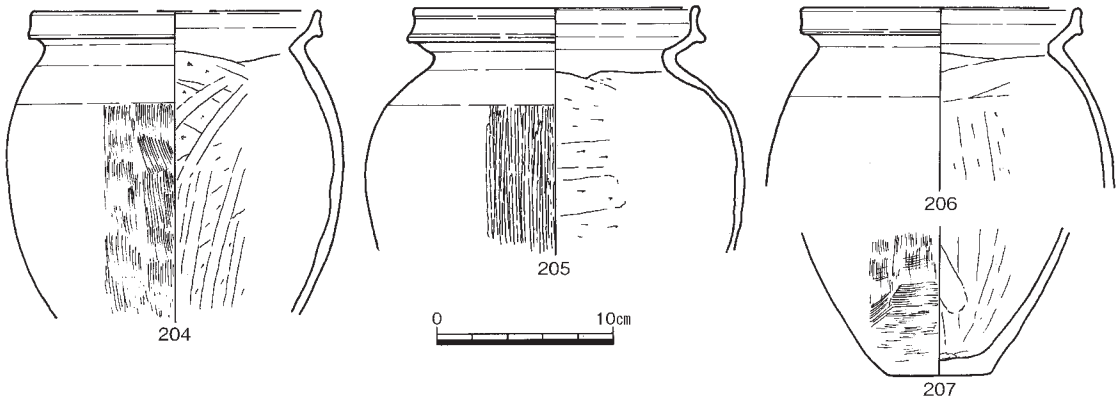
遺物の状況からこの土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［黄灰色粘質土ブロック含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色粘土ブロック含む］
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）



第 140 図　袋状土壙 104（1/40）・出土遺物１（1/4）

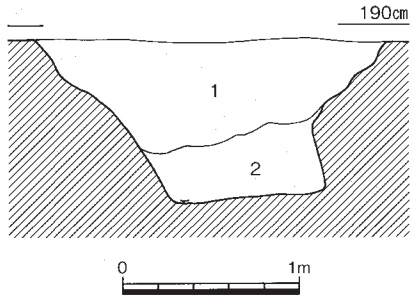


第 141 図　袋状土壙 104 出土遺物２（1/4）

袋状土壙 105（第 142 図）

第Ⅲ区の袋状土壙 103 の５m 東に位置する。平面形は 180 × 150㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 92㎝、平坦な床面は海抜高 89㎝を測る。断面形は上部が逆「ハ」の字状に開く逆台形を呈する。埋土は２層に区分でき、短期間に埋め戻されたとみられる。

遺物は、弥生土器の小破片が出土している。　（水田）

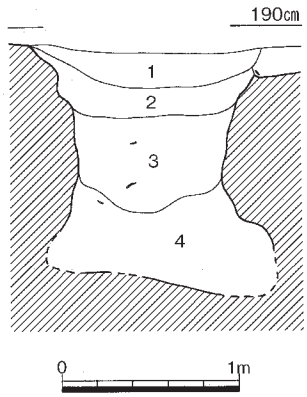


1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　　［褐灰色粘質土ブロック状に堆積］
2　灰色粘土（5Y4/1）
　　［オリーブ黒色粘土ブロック状に堆積］

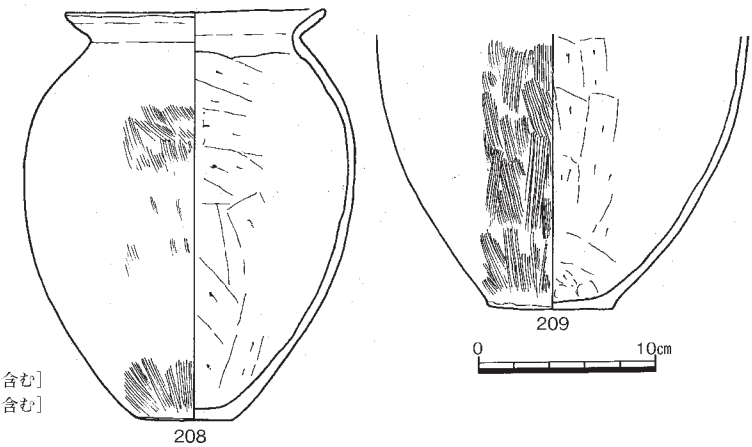
第 142 図　袋状土壙 105（1/40）

袋状土壙 106（第 143 図、図版 14-3）

調査区の東端に位置する。長径約 120㎝、短径約 100㎝、残存する深さは推定で 140㎝である。底面は南西に傾斜している。底面の海抜高はおよそ 40㎝である。断面形は、底部付近が大きく抉れており、袋状を呈している。第１層はレンズ状の自然堆積と考えられる。第２～４層には基盤層の土がブロック状に入っており、短期間に埋め戻されたことが窺える。遺物は主に第３・４層から出土した。**208・209** は甕である。**208** の内面は頸部まで丁寧なヘラケズリが施されている。遺物の観察から、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考える。　（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［灰色粘土ブロック含む］
4　黄灰色粘土（2.5Y5/1）［灰色微砂ブロック含む］

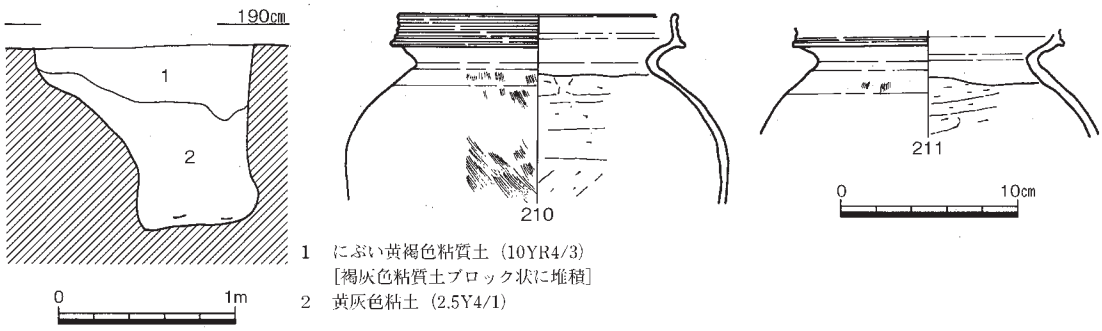


第 143 図　袋状土壙 106（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 107（第 144 図、図版 14-4・5）

第Ⅲ区の北東部に位置する。平面形は 110 × 80㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 104㎝、平坦な床面は海抜高 72㎝を測る。埋土は２層に区分できる。

出土遺物は、第２層から甕 **210**・**211** が検出された。**210**・**211** は、口縁端部に擬凹線文を施す。外面はハケ、内面はヘラケズリによって調整されている。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。（水出）



第 144 図　袋状土壙 107（1/40）・出土遺物（1/4）

（２）溝

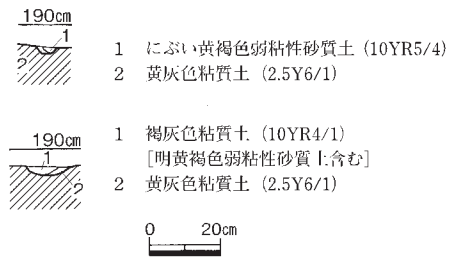
溝は、調査区東端よりに２条検出された。調査区を北西から南東に斜めに横切る幅広のものと、北東から南西に斜めに交差する幅の狭いものとが認められている。（下澤）

溝３（第 122・145 図）

調査区の北東側に、北東から南西方向に検出されている。溝の幅は 12㎝前後、深さは東側で海抜 173㎝、西側で 176㎝、当該溝は、溝４と重複している。（下澤）

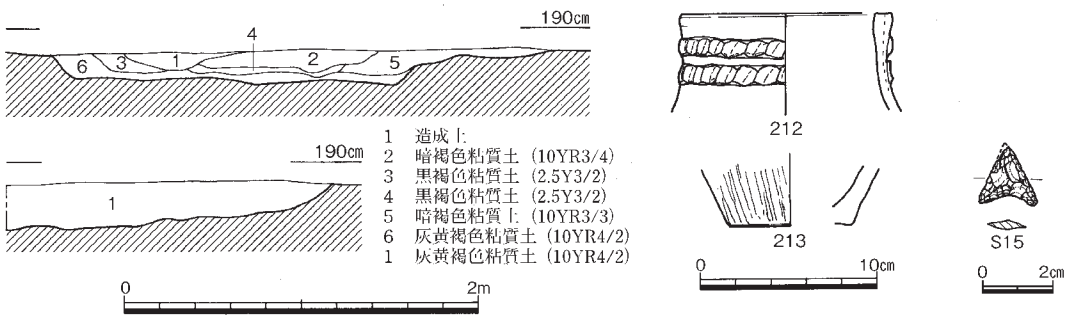
溝４（第 122・146 図）

調査区の北東側に、北西から南東方向に検出している。溝の幅は 200 ～ 310㎝、深さは、海抜 158㎝、確認された面からの深さは 18㎝前後である。第Ⅱ調査区の土壙 22 に切られ、溝３を切り、南東側では２条となる。この部分での溝埋土が異なることが土層断面から認められているが、平面的には確認できなかった。



第 145 図　溝３（1/20）

出土遺物は、**212** の口縁部に押圧を施す突帯を付す壺と **213** の底部である。石器は、**S15** で長さ 16.5㎜、幅 16.5㎜、厚さ 2.8㎜、重さ 0.45g を測るサヌカイト製の石鏃である。（下澤）

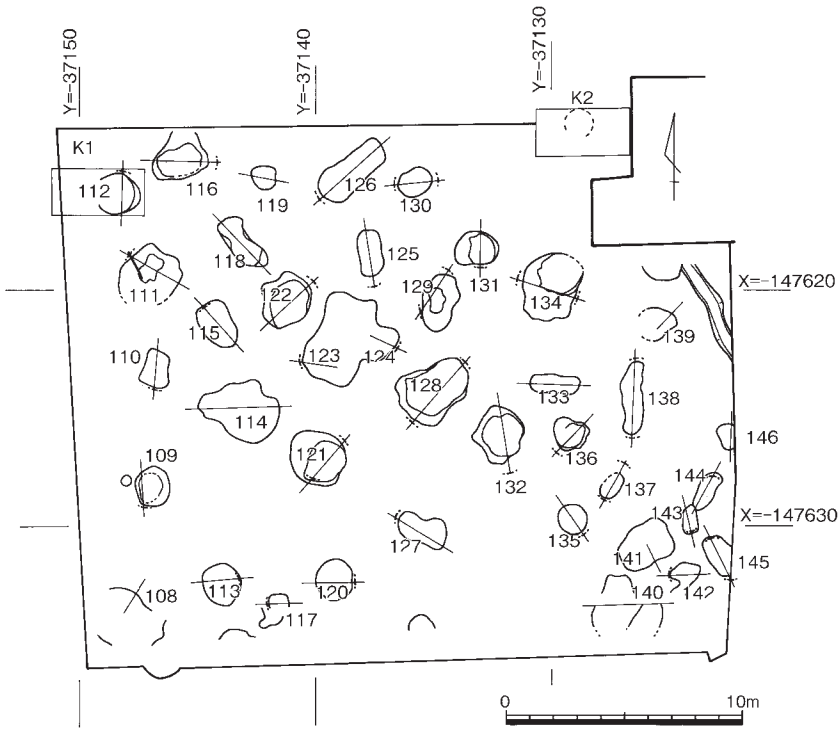


第 146 図　溝４（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

第４節　第Ⅳ調査区

当該調査区は、４月調査開始前での協議で調査対象外としていたが、第Ⅰ調査区における遺構の状況により調査が可能であるとのことであった。したがって、第Ⅰ調査区の調査内容を受け実施した。調査区内には、既存建物であった南棟のコンクリートパイルが基礎と用いられているが、先の調査区と同様に比較的影響は少なかった。

検出された遺構は、袋状土壙がほとんどを占めているが、重複する袋状土壙の様相は、複数であり、連続してのそれは認められない。第ⅠＢ調査区から続く溝１が北東端で認められる。　（下澤）



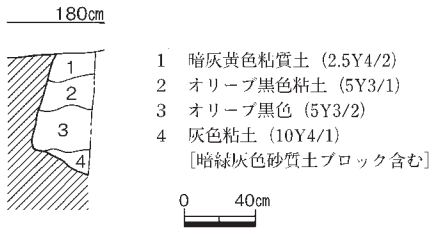
第 147 図　第Ⅳ調査区遺構配置図（1/300）

（１）袋状土壙

第ⅠＡ・Ｂ調査区と同様に、密な分布が認められている。先に記したように、県が実施した確認調査時のトレンチ位置が、K1 と K2 である。袋状土壙は、連続して重複の内容を呈していないが、広がらない状況で比較的多くの袋状土壙の重複が認められる。　（下澤）

袋状土壙 108（第 148 図、図版 14-6）

第Ⅳ区の南西部に位置する。遺構の南側半分は調査区外へ続く。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは 70㎝、底部は中央が一段窪んでおり、最深部の海抜高は 94㎝を測る。埋土は４層に区分でき、水平に堆積している。



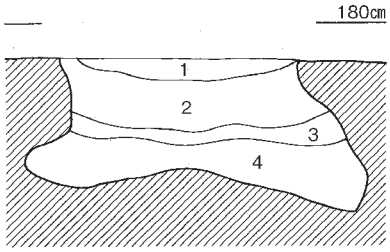
第 148 図　袋状土壙 108（1/40）

出土遺物はないが、時期については他の袋状土壙の状況から弥生後期末の範疇と考えている。（水田）

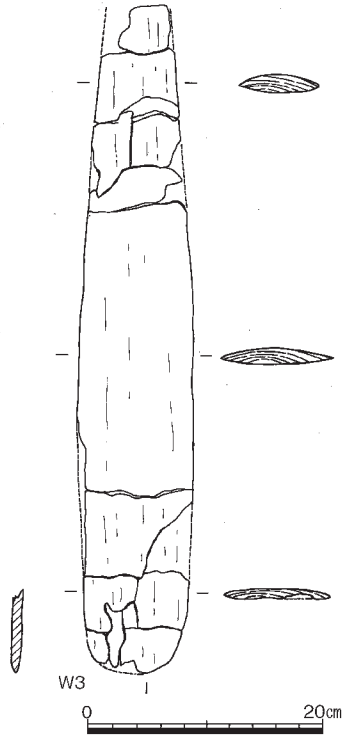
袋状土壙 109（第 149 図、図版 14-7・8）

この土壙は、調査区の南西部に位置し、袋状土壙 114 の南西約 4ｍに検出された。規模は、約 170 × 140㎝で、平面はほぼ円形を呈する。残存する深さは 87㎝を測る。底面は、中央部がやや盛り上がっており、海抜高は 73㎝である。断面形は、底部付近が大きく抉れており、袋状を呈している。土壙内は、第１～４層が堆積しており、第２～４層には基盤層の土がブロック状に入り、土層は水平に堆積している。

鋤の先と考えられる木製品 **W3** が底面直上から出土している。**W3** は幅約 9.9㎝で、長さは約 54.5㎝残存しており、上部で折れている。図示できる土器は出土していないが、時期は周囲の袋状土壙と大差ないと考えられる。（小松原）



1　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　[炭少量含む]
2　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　[全体に灰色粘性微砂含む]
3　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）
　[全体に灰白色粘性微砂含む]
4　灰色粘土（7.5Y4/1）
　[砂質土ブロック含む]

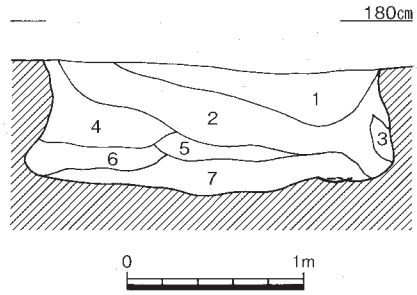


第 149 図　袋状土壙 109（1/40）・出土遺物（1/6）

袋状土壙 110（第 150・151 図、図版 15-1）

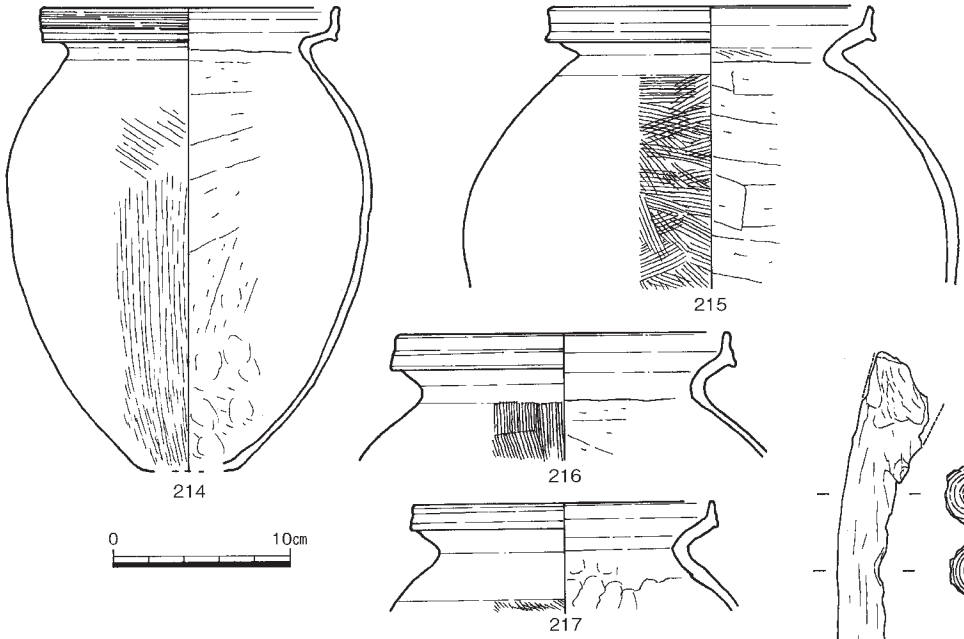
第Ⅳ区の袋状土壙 109 の 4ｍ北に位置する。平面形は 160 × 100㎝の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは 75㎝、底面は中央部がやや窪んでおり、最深部の海抜高は 80㎝を測る。埋土は７層に区分できる。土壙内は、下層の第５～７層は水平堆積を示し、上層の第１～４層はレンズ状に堆積する。第３層は壁面の崩落土とみられる。

出土遺物は、最下層の下方に集中していた。遺物には、弥生土器の甕 **214** ～ **217** がある。いずれも口縁部を上方に拡張するタイプのものである。**214** は口径 16.4㎝、器高 26㎝を測る。胴部最大径が器高の中心よりも上方に位置し、倒卵形を呈するが、底部は明瞭に平底を残す。外面はハケ及びヘラミガキ、内面は下半にユビオサエ、上半にヘラケズリがみられる。**215** は外面に粗いハケメが施されている。**216** は第２層から出土している。（水田）



1　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
2　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）
　[暗灰黄色粘土ブロック、炭含む]
3　オリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3）
　[地山ブロック含む]
4　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
5　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
6　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
7　灰色粘土（7.5Y4/1）
　[緑灰色砂質土ブロック含む]

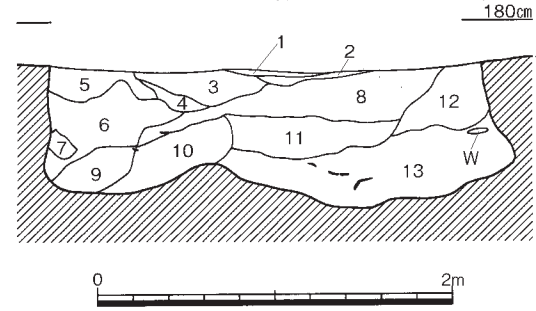
第 150 図　袋状土壙 110（1/40）



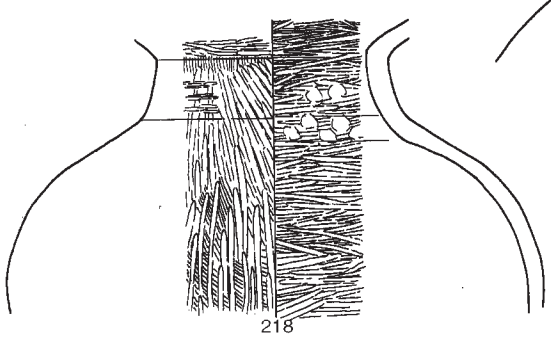
第 151 図　袋状土壙 110 出土遺物（1/4）

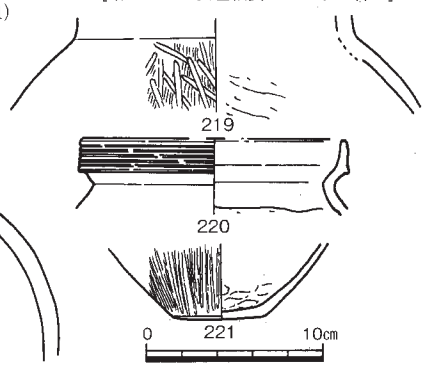
袋状土壙 111（第 152 図、図版 15-2 ～ 4）

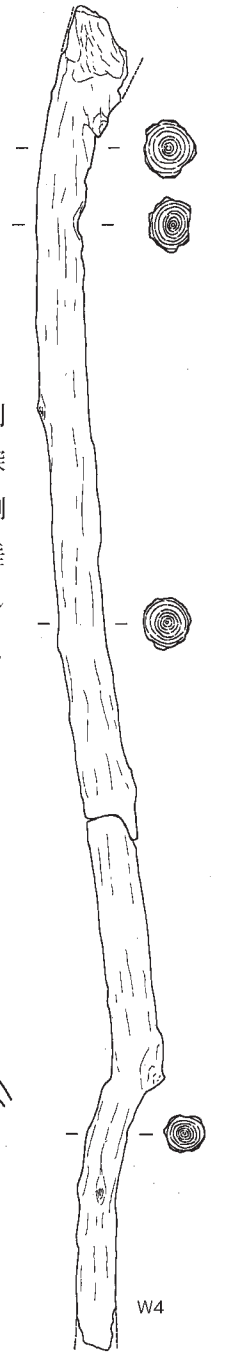
第Ⅳ区の袋状土壙 110 の 4 m 北に位置する。土壙の大半は近世の土壙により削平を受けていた。平面形は、140 × 120㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは、底面が平坦面を見せないことで一定ではないが、南東側で 68㎝、北西側で 78㎝、底面の海抜高は最深部で 74㎝を測る。壁面は、南東側では底面から垂直に立ち上がり、北西側では底面がフラスコ状に抉れており、中程から内傾し立ち上がる。埋土は 13 層に区分できる。第 13 層は、厚い堆積状況をしており、



1　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
4　黒褐色粘土（10YR3/1）
5　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
6　灰色粘質土（5Y4/1）
7　黄褐色砂質土（2.5Y5/3）
　［地山ブロック含む］
8　灰色粘質土（5Y4/1）
　［黄褐色粘質土ブロック含む］
9　灰色粘質土（7.5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
10　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）
11　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）
　［灰色粘質土ブロック含む］
12　灰色粘質土（5Y4/1）
　［黄褐色粘質土ブロック含む］
13　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［暗オリーブ灰色粘質土ブロック含む］







第 152 図　袋状土壙 111（1/40）・出土遺物（1/4・1/6）

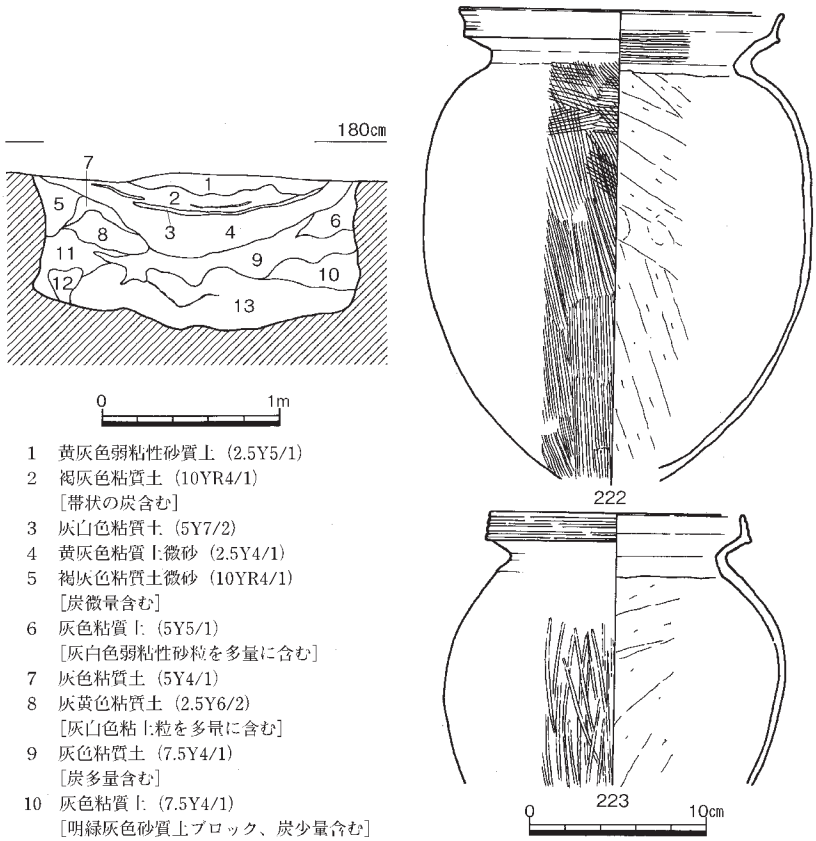
埋め戻されたとみられる。遺物は、弥生土器の壺 **218**・**219**、甕 **220**・**221** の他に木製品が出土した。甕 **220** は口縁部端部には擬凹線文を施す。甕 **221** は内面には炭化物が付着していた。**W1** は用途不明木器である。第 13 層埋積後に意図的に置かれたとみられる状態で出土した。残存長 114.5㎝、最大幅 5.7㎝、厚さ４㎝を測る。部材は根元の最大幅部分で炭化をしている。樫を使用しており、全面に樹皮を残す。時期は弥・後・Ⅳに比定できる。　（水出）

袋状土壙 112（第 153 図、図版 15-5）

袋状土壙 111 の北西上に位置し、先に記した県の確認調査時トレンチ K1 中に検出した。規模は、南北が 170㎝、深さは、海抜 75㎝を測る。断面形状は、顕著な抉りを示していない。

埋土は、第４層までがレンズ状堆積を示すが、以下は状況が異なる。断面北側はの第５・７・８・11・12 層と南側の埋土と様相が相違し、底の海抜高も北が 85㎝と高くなり、さらに、最下層の内容からも重複が推測される。

出土遺物は、**222** と **223** の甕が検出している。**222** は、口径 18.1 ㎝を測り、口縁部に櫛描沈線を施文する。**223** は、口径 14.3㎝を測り、口縁部に凹線３条を施文する。　（下澤）

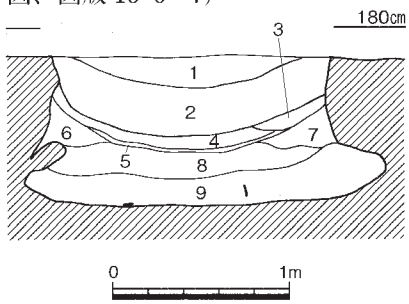


1　黄灰色弱粘性砂質土（2.5Y5/1）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［帯状の炭含む］
3　灰白色粘質土（5Y7/2）
4　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
5　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
　［炭微量含む］
6　灰色粘質土（5Y5/1）
　［灰白色弱粘性砂粒を多量に含む］
7　灰色粘質土（5Y4/1）
8　灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
　［灰白色粘土粒を多量に含む］
9　灰色粘質土（7.5Y4/1）
　［炭多量含む］
10　灰色粘質土（7.5Y4/1）
　［明緑灰色砂質土ブロック、炭少量含む］
11　灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
12　灰白色粘性砂質土（7.5Y7/2）
13　灰色粘土（10Y4/1）
　［明オリーブ灰色粘性砂質土ブロック含む］

第 153 図　袋状土壙 112（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 113（第 154・155 図、図版 15-6・7）

この土壙は、調査区の南西隅に位置し、袋状土壙 108 の東約４m に検出された。規模は直径約 170㎝を測り、平面はほぼ円形を呈する。残存する深さは約 83㎝を測る。断面形は、底部付近が大きく

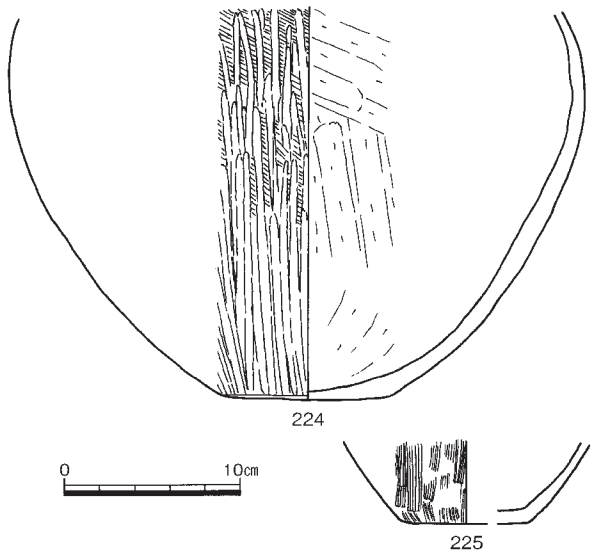


1　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄橙色砂質土ブロックと炭含む］
2　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）
3　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［炭含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
6　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
7　暗オリーブ褐色粘土（2.5Y3/3）
8　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）［炭含む］
9　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［暗オリーブ灰色砂質土ブロック含む］

第 154 図　袋状土壙 113（1/40）

抉り込まれて袋状を呈している。底面はほぼ水平で、海抜高は80㎝である。土壙内は、第１～９層の堆積が認められ、上層の第１～５層はレンズ状に堆積していた。

224は壺で、外面をハケメののちヘラミガキを施す。内面は、ヘラケズリが認められる。**225**は甕の底部である。これらの土器の時期は、弥・後・Ⅳと見て差し支えない。　（小松原）



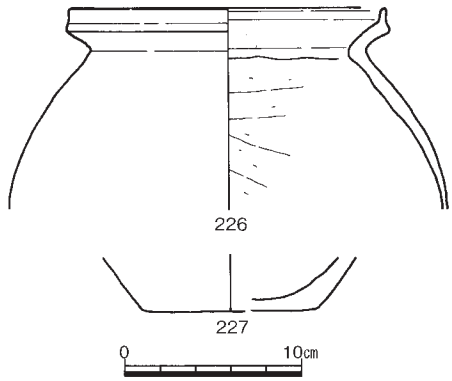
第155図　袋状土壙113出土遺物（1/4）

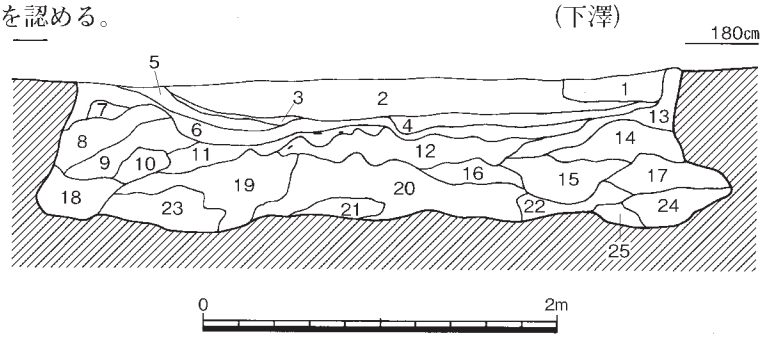
袋状土壙114（第156図、図版15-8）

袋状土壙110の南東下方に位置する。規模は340×250㎝、深さは、重複が考えられることから、計測可能な底面は79・74・80・89・77㎝をそれぞれ測る。平面形態は凹凸のある不整楕円状を呈している。上層断面の位置は、長軸方向で作図し、これにより複数の袋状土壙の重複が把握された。

断面図から袋状土壙の埋土は、①が第８～10・18層、②が第11・19・23層、③が第12・16・20・21層、④が第13～15層、⑤が第17・22・24・25層で、①～⑤の５基が重複していたことが思考される。袋状土壙の前後関係は、③と⑤が埋没後に④が掘削、③が埋没後に①と②が掘削されている。最終的に、これらの５基の袋状土壙は第６層から上の層において埋没している。この第６層の段階では、これらの袋状土壙は、浅い椀状の状態で埋没していたことが理解される。

出土遺物は、**226**を④の第15層、**227**が第11層から検出されている。**226**は、口径17.5㎝を測る甕であり、内外面とも剥離が著しい。**227**は、底径9.8㎝を測り、平底となり、外面は煤が付着し、内面には炭化物の付着を認める。　（下澤）





1　造成土
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）
3　灰黄褐色微砂（10YR5/2）
4　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
5　褐灰色粘性微砂（10YR5/1）
6　灰黄褐色粘性微砂（10YR4/2）
7　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）［ブロック状に堆積］
8　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
9　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
10　灰黄褐色粘性微砂（10YR4/2）
11　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
12　灰黄褐色粘土（10YR4/2）［灰オリーブ色砂質土ブロック含む］
13　褐灰色粘土（10YR4/1）
14　灰黄褐色粘土（10YR4/2）［灰オリーブ色砂質土ブロック含む］
15　緑灰色粘質土（10GY5/1）［ブロック状に堆積］
16　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
17　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［有機物・植物遺体含む］
18　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
19　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
20　緑灰色粘質土（10GY5/1）［ブロック状に堆積］
21　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
22　16層に同じ
23　15層に同じ
24　15層に同じ
25　21層に同じ

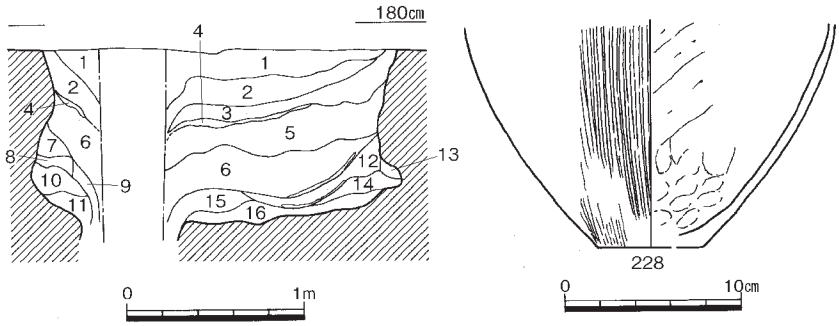
第156図　袋状土壙114（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 115（第 157 図、図版 16-1）

第Ⅳ区の袋状土壙 114 の 2m 北に位置する。大半は現代建物の基礎により削平を受けている。平面形は、200 × 120㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 100㎝、平坦な床面をもち、海抜高は 66㎝を測る。堆積状況は、建物の基礎の影響を受けているために明確ではない。埋土は 16 層に区分できる。第３層は炭を多く含み、第６層の下位・第 12 層の上層では一見植物の葉を敷いた様相が認められる。

遺物は、弥生土器の甕の底部 **228** が最下層から出土した。外面はヘラミガキ、内面はオサエ、ヘラケズリを施す。時期は弥・後・Ⅳに比定できる。

（水田）



1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）［炭多量含む］
4　灰白色粘性砂質土（5Y7/1）
5　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
　［灰白色弱粘性砂質土ブロック含む］
6　灰色粘質土微砂（5Y4/1）［葉の層含む］
7　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［灰色粘質土ブロック、炭少量含む］
8　灰色粘質土（5Y4/1）［炭微量含む］
9　灰色粘質土（7.5Y4/1）
10　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）
　［オリーブ灰色粘質土ブロック含む］
11　灰色粘質土（10Y5/1）
　［オリーブ灰色弱粘性砂質土ブロック含む］
12　灰色粘質土（10Y4/1）［葉の層含む］
13　灰オリーブ色弱粘性砂質土（7.5Y6/2）
　［ブロック状に堆積］
14　灰色粘質土（7.5Y4/1）
15　灰色粘土（10Y5/1）［炭微量含む］
16　灰色粘土（10Y5/1）

第 157 図　袋状土壙 115（1/40）・出土遺物（1/4）

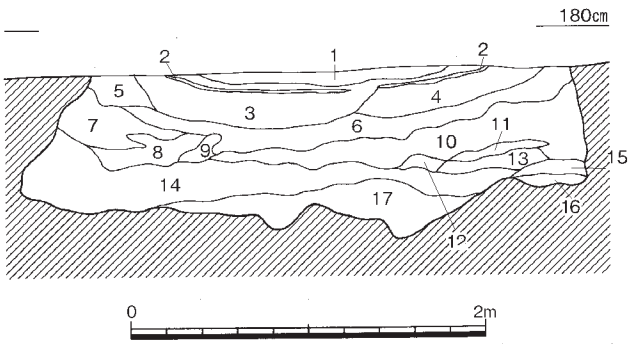
袋状土壙 116

（第 158 図、図版 16-2）

調査区の北西隅に位置し、袋状土壙 112 の北東に隣接して検出された。土壙の規模は、長径約 240㎝を測り、平面は長楕円形を呈している。残存する深さは最深部で 97㎝を測るが、底部は凹凸が認められる。底面の海抜高は 61㎝である。土壙は２基以上重複している可能性が考えられるが、断面の観察から切り合い関係は不明である。土壙内は第１～ 17 層が堆積する。埋土の下半には基盤層の土がブロック状に堆積しており、短期間での埋め戻しが窺われる。

229 は甕の底部で、底部には焼成後の穿孔が認められる。外面はハケメののちヘラミガキを施している。内面はヘラケズリ。土壙の時期は弥・後・Ⅳとみて差し支えない。

（小松原）



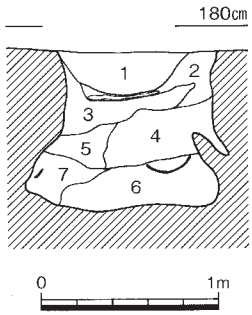
1　灰黄色粘質土微砂（2.5Y6/2）
2　灰白色粘質土（5Y7/2）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
4　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
5　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
6　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［炭多量含む］
7　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
8　灰色粘土（5Y4/1）
　［灰色粘質粒を多量含む］
9　灰色粘土（7.5Y4/1）
10　灰色粘土（7.5Y5/1）
　［灰色粘質粒を多量含む］
11　灰色粘土（7.5Y4/1）［砂質土ブロック含む］
12　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
13　灰色粘土（10Y4/1）［粘性砂質土ブロック含む］
14　緑灰色粘土（7.5GY5/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
15　灰色粘土（7.5Y5/1）
16　灰色粘土（10Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
17　灰色粘土（7.5Y6/1）
　［緑灰色粘性砂質土ブロック含む］

第 158 図　袋状土壙 116（1/40）・出土遺物（1/4）

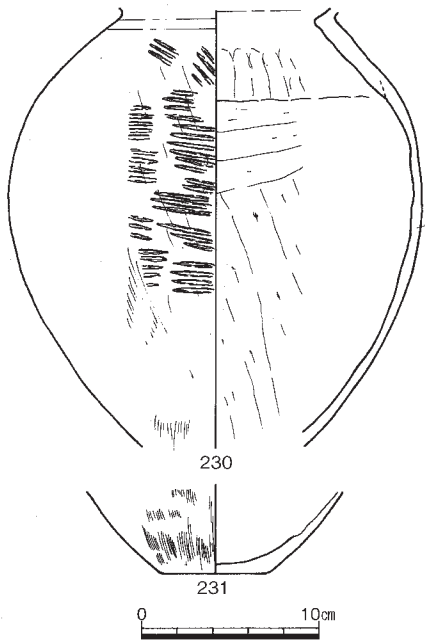
袋状土壙 117（第 159 図、図版 16-3）

袋状土壙 113 と 120 の間の南下に位置する。平面形態は、第ⅠA調査区との排土関係から整合していない。深さは、75㎝を測り、断面形状は袋状を呈する。断面西側に見られる二段状の掘り込みと見られるのは、基盤層が内側に落ち込んだものである。

出土遺物は、**230** が第６層から検出している。**230** は、外面調整にタタキを施し、内面肩部には押圧が認められ、外面に煤の付着が認められる。**231** は、底部破片で、外面に煤の付着を認める。（下澤）



1　灰黄色粘質土微砂（2.5Y6/2）
2　黄灰色粘質微砂（2.5Y5/1）［炭含む］
3　灰色粘質土（5Y5/1）
4　灰色粘質土微砂（5Y4/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
5　灰色粘質土（5Y4/1）
6　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［明緑灰色粘性微砂含む］
7　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［明緑灰色砂質土ブロック多く含む］

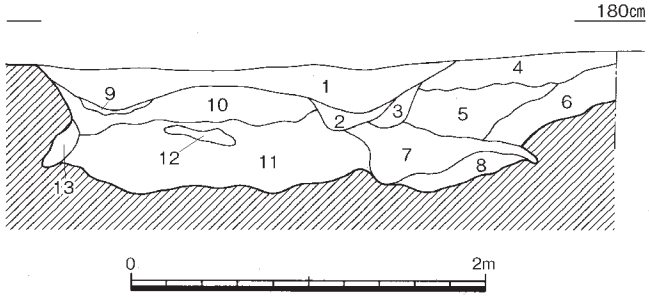


第 159 図　袋状土壙 117（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 118（第 160・161 図、図版 16-4 ～ 6）

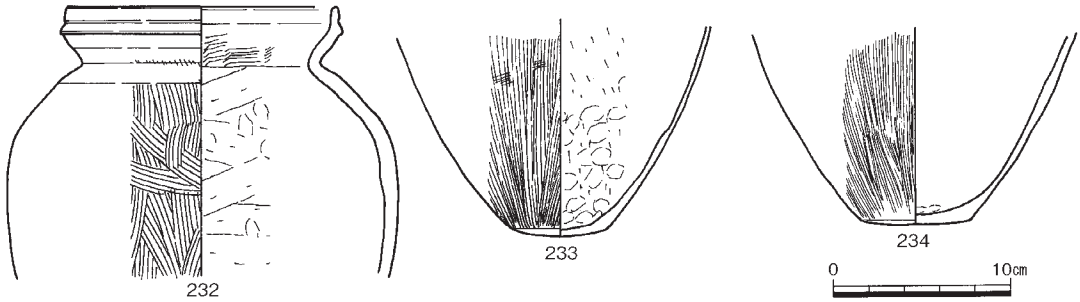
袋状土壙 111 の北東側に位置する。規模は、260 × 90㎝を測り、平面形態の長軸が長いことから、重複を想定できた。深さは、103㎝と 105㎝の底が認められた。前者に伴う土層は、第１～３・９～11 層であり、後者は、第６～８・12・13 層である。これら以外に、第５と６層が先の袋状土壙の埋没後に掘り込まれている。

出土遺物は、**232** ～ **234** で第 11 層から検出している。**232** は、口径 15㎝を測る甕である。外面調整はハケ、肩部に連続した凹みがあることからタタキを施している。**233** は、底部の過度の使用により磨滅が顕著である。また、いずれの土器の外面には、煤が付着している。（下澤）



1　灰色粘質土微砂（5Y6/1）
2　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
3　灰色粘質土（5Y4/1）
4　褐灰色弱粘性砂質土（10YR5/1）
5　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
6　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）［微量炭含む］
7　灰色粘土（10Y4/1）
8　灰色粘土（10Y4/1）［緑灰色粘性微砂ブロック含む］
9　灰色粘質土（10Y4/1）［炭含む］
10　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
11　灰色粘質土微砂（7.5Y5/1）
　［明緑灰色砂質土ブロック含む］
12　灰色粘土（7.5Y5/1）
　［明緑灰色粘性微砂ブロック含む］
13　灰色粘土（10Y4/1）［緑灰色粘性微砂ブロック含む］

第 160 図　袋状土壙 118（1/40）

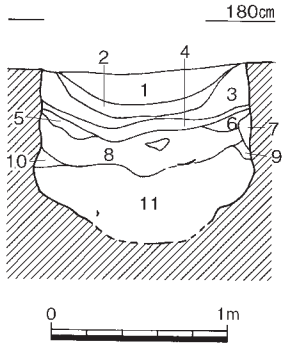


第 161 図　袋状土壙 118 出土遺物（1/4）

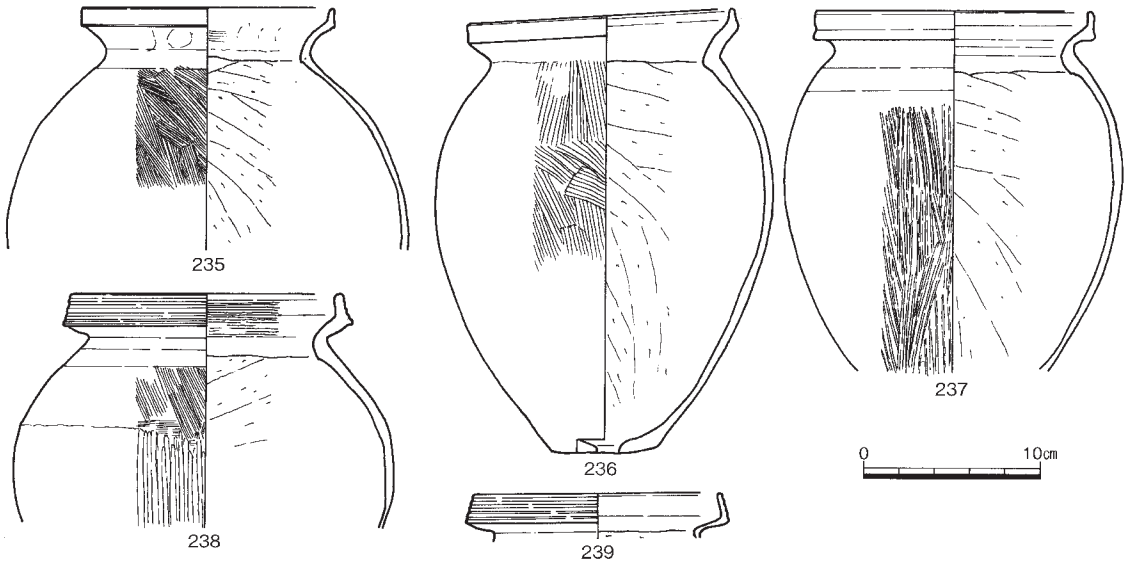
袋状土壙 119（第 162 図、図版 16-7）

第Ⅳ区の袋状土壙 118 の 3m 北に位置する。平面形は、120 × 100cmの不整円形を呈する。検出面からの深さは 98cm、最深部の海抜高 53cmを測る。底面付近は湧水のため不明瞭ではあるが、中央で一段深くなる状況を呈していた。壁面は、底部から一旦膨らんだ後、内傾して上部へと立ち上がる様相を示す。埋土は 11 層に区分できる。第 11 層は、地山ブロックを含む埋土が厚い水平堆積をしており、人為的に埋め戻された可能性がある。第１～ 10 層には、当年性と考えられる枝が多量に含まれており、袋状土壙の開口時の流れ込みの様相を示している。第７層は壁面の崩落土である。

遺物は、第２層から **235**、第 11 層から **236** ～ **239** が出土し、いずれも甕である。甕は、口縁部を上方につまみ上げるタイプ **235**・**236**、口縁部を上方に拡張するタイプ **237** ～ **239** がみられる。**236** は底部に貫通孔がみられる。**238** は外面をハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。**239** は口縁部に擬凹線文を施す。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）



1　暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）
2　黄灰色粘性微砂（2.5Y5/1）
　［薄い炭層含む］
3　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）
4　灰色粘性微砂（5Y5/1）
　［砂質土ブロック含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
6　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
7　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
　［地山ブロック崩落土］
8　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［有機物・炭化物多量に含む］
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［有機物・炭化物多量に含む］
10　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［有機物・炭化物多量に含む］
11　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
　［砂質土ブロック含む］

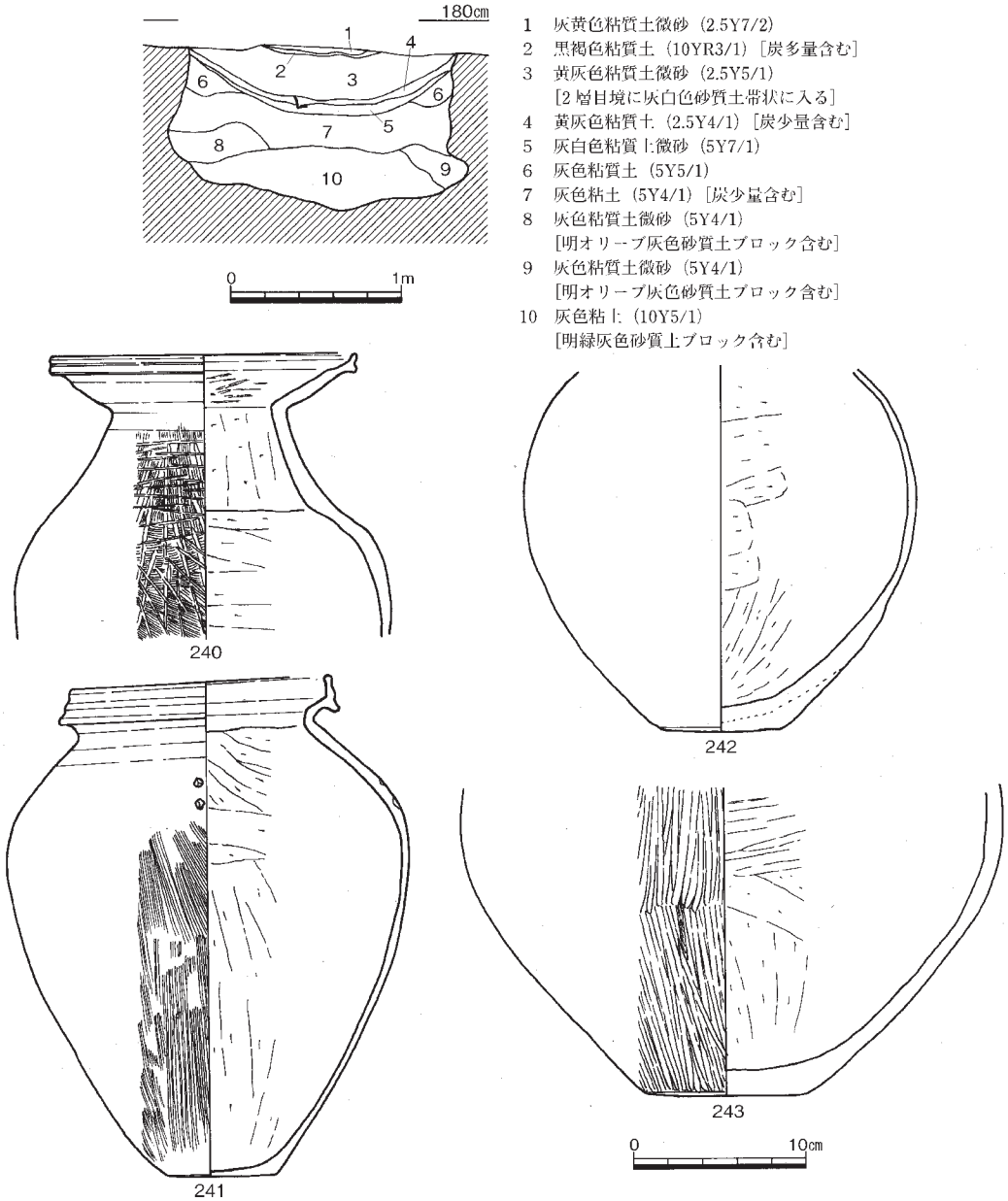


第 162 図　袋状土壙 119（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 120（第 163 図、図版 16-8）

この土壙は、調査区の中央南に位置し、袋状土壙 113 の東約４m に検出された。規模は長径約 180 ㎝、短径約 150㎝で、平面はほぼ円形を呈している。深さは 96㎝を測る。底部は、中央部がやや窪んでおり、底面の海抜高は 70㎝であった。断面は、底部が抉れており、袋状を呈している。土壙内は、第１～10 層が堆積しており、第８～10 層では基盤層の土がブロック状に認められた。このような状況から、短期間で埋め戻されたと考えられる。また、上層の第１～５層はレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

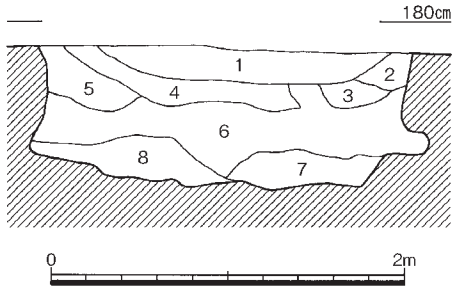
出土遺物は、図示した土器などが検出された。**240**･**243** は壺で、**240** は「ハ」の字に開く頸部から「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は上下に肥厚させている。**241** は、頸部から外反し、さらに上方に延びる口縁部をもつ。時期は弥・後・Ⅳと考える。（小松原）



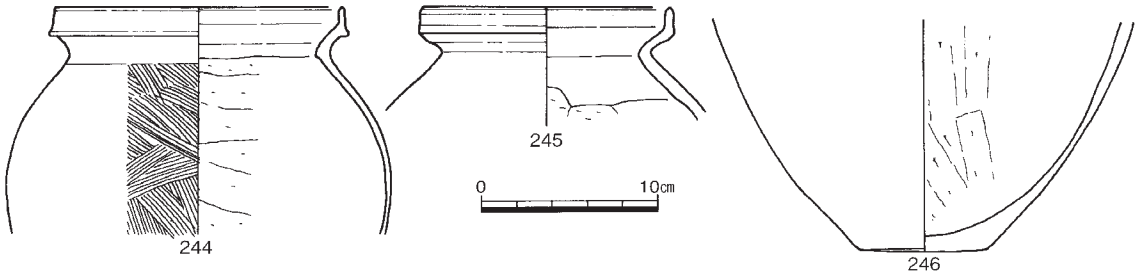
第 163 図　袋状土壙 120（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 121（第 164 図、図版 17-1）

第Ⅳ区の袋状土壙 120 の5m 北に位置する。平面形は、260 × 220㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは 78㎝、底面海抜高は 84㎝を測る。埋土は８層に区分できる。第７・８層は、地山ブロックを含む埋土が水平堆積をしており、人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は、第６層から甕が検出された。**244** は、強いヨコナデにより口縁端部が凹状に窪む。外面はハケメを施す。**245** は口径 14.0㎝を測る。**246** は底部である。時期は弥・後・Ⅳに位置づけられる。　（水田）



1　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
5　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
6　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
7　緑灰色粘質土（10GY5/1）
　［ブロック状に堆積］
8　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［ブロック状に堆積］



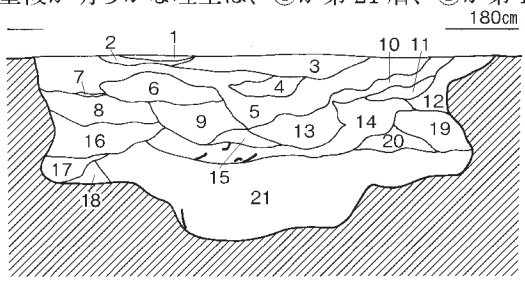
第 164 図　袋状土壙 121（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 122（第 165・166 図、図版 17-2・3）

袋状土壙 115 の東側に位置する。規模は、230 × 220㎝を測り、平面形態は、凹凸のある円形を呈する。検出段階では、単独の袋状土壙と判断していたが、断面に示すように複数の重複であった。深さは、底面とする部分で 93、62、93㎝を測る。重複が明らかな埋土は、①が第 21 層、②が第 14 層、③が第８・16・17 層、④が第９・13・15 層である。

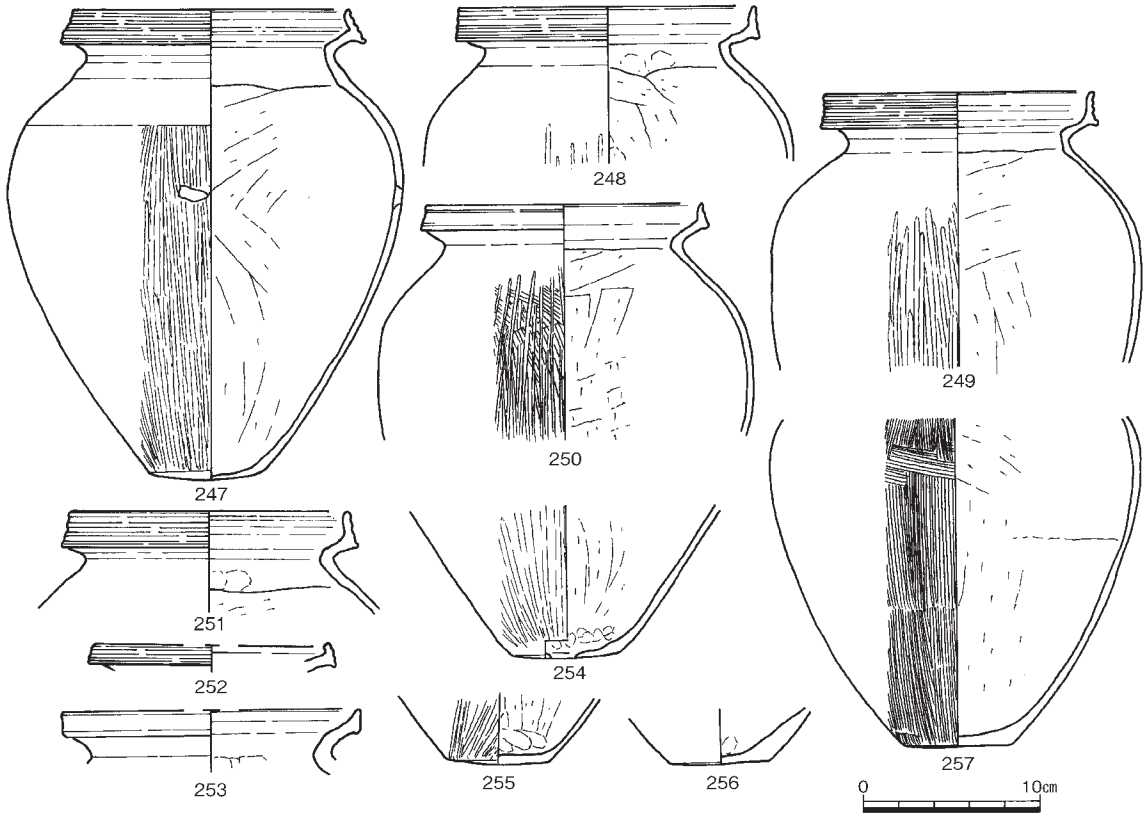
土壙の関係は、①が埋められた後に②が掘り込まれ、①と同様に単一層で埋め戻されている。この後、③と④が掘り込まれる。

出土遺物は、第 14 層から **247・248・250・254**、第 21 層からも **250** が検出し、何れも甕である。また、**253** は第１層からの出土である。**247** は、口径 15.6㎝、底径 6.6㎝、器高 26.3㎝を測る。口縁部は、凹線文が４条施し、胴部上半には穿孔が認められる。**248・249・251・252** は口縁部に２～４条の凹線文を施している。**250** は、ヨコナデによるもので、両端が深くなりその間が浅くなる。**254** は、底部が穿孔する。これらの土器は、器面に煤が付着する。　（下澤）



1　灰黄色粘質土微砂（2.5Y7/2）
2　オリーブ灰色粘質土（10Y5/2）
　［炭少量含む］
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
4　灰色粘質土微砂（10Y5/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
5　黄褐色粘質土微砂（2.5Y5/3）
6　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
　［灰白色弱粘性砂質土ブロック含む］
7　灰白色砂質土（5Y7/1）
8　にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）
　［明黄褐色粘性粒含む］
9　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
　［浅黄色粘性粒含む］
10　黄灰色粘質土（2.5Y6/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
11　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
12　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
13　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［灰白色砂質土ブロック多く含む］
14　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［明黄褐色粘性粒含む］
15　にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）
16　灰色粘質土（5Y6/1）
17　灰色粘質土（5Y5/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
18　灰色粘土（10Y5/1）
　［粘性砂質土ブロック含む］
19　灰色粘質土（5Y6/1）
20　灰色粘土（10Y4/1）
　［灰白色粘性粒含む］
21　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［明緑灰色粘性砂質土ブロック含む］

第 165 図　袋状土壙 122（1/40）

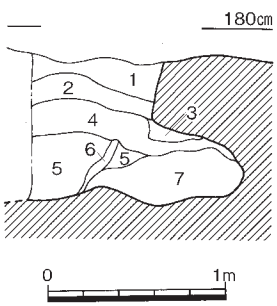


第 166 図　袋状土壙 122 出土遺物（1/4）

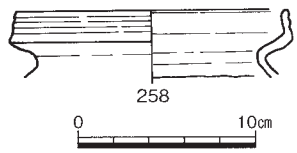
袋状土壙 123（第 167 図、図版 17-4）

調査区中央部北寄りに位置する。平面の形状から袋状土壙 124 も含めて５・６基以上重複しているように思われるが、新旧関係は全くわからない。残存する深さは 85㎝、底面の海抜高は 80㎝である。第２層以下の土層には基盤層の土がブロック状に堆積しており、短期間に埋め戻された状況を示している。

258 は甕で、口縁端面に退化凹線を施している。出土遺物からこの土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



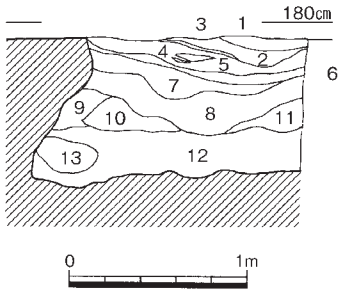
1　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄褐色微砂土粒・炭含む］
2　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［黄灰色粘質土ブロック含む］
3　黄灰色粘土（2.5Y5/1）
4　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）
　［黄褐色粘質土砂まじりブロック含む］
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［黄灰色粘質微砂ブロック含む。灰白色土粒点在］
6　灰色粘質土（n5/）［砂含む］
7　暗緑灰色粘土（7.5GY4/1）［少量砂含む］



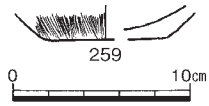
第 167 図　袋状土壙 123（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 124（第 168 図、図版 17-5）

調査区の中央北寄り、袋状土壙 123 と重複する複数基の袋状土壙の一つである。規模･平面形等は、明確でない。残存する深さは 84㎝、底面の海抜高は 87㎝である。底部は大きく抉られている。第７層以下の土層には基盤層の土がブロック状に入る。時期は袋状土壙 123 に相前後する弥・後・Ⅳの範囲に入ると考えられる。（小松原）



1　褐灰色砂質土（10YR5/1）
　［灰黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色砂質土（10YR5/1）
3　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
4　褐灰色粘質土（10YR4/1）
5　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
6　褐灰色粘質土（10YR5/1）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
8　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
9　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
10　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
11　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色粘質土ブロック含む］
12　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
13　暗緑灰色粘質土（10GY4/1）
　［ブロック状に堆積］

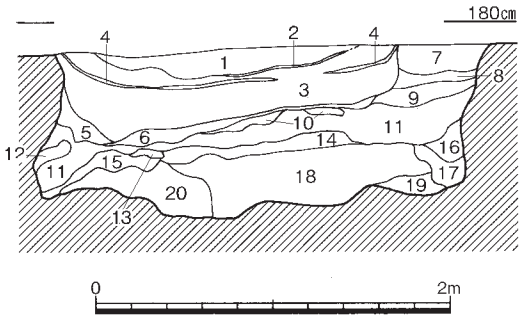


第 168 図　袋状土壙 124（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 125（第 169 図、図版 17-6）

第Ⅳ区の袋状土壙 124 の 2m 北に位置する。平面形は、190 × 100cmの細長い楕円形を呈する。検出面からの深さは 97cm、凹凸を呈する床面の海抜高は 67cmを測る。壁面下部は、大きく抉りをみせる。埋土は 20 層に区分できる。土壙内の状況は、最下層にて地山ブロックを含む埋土が、厚く堆積していることから人為的に埋め戻されている可能性がある。また、第１～４層は第７層までに埋積した後に、別の土壙として掘り直されているとみられる。第２層は薄い炭の層である。

出土遺物は、弥生土器の甕が最下層から検出されているが、小片のため図化にはいたっていない。時期は、周囲の袋状土壙と同じ埋土であることから、弥生後期後半に比定できる。　（水田）



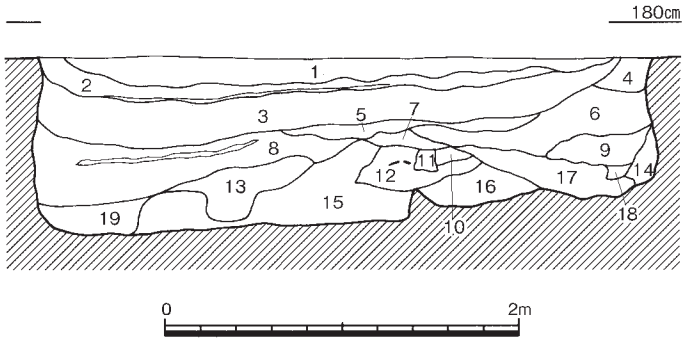
1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　薄い炭層
3　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
4　灰黄色粘土薄い灰層（2.5Y6/2）
5　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
　［炭含む］
6　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
7　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
8　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
9　褐灰色粘土（10YR4/1）
10　灰色粘性微砂（5Y5/1）
　［ブロック含む］
11　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰黄色粘土粒含む］
12　灰色粘性微砂（5Y5/1）
　［ブロック含む］
13　灰色粘土（5Y4/1）
14　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色粘性微砂ブロック含む］
15　灰色粘性細砂（10Y5/1）
　［ブロック含む］
16　暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）
　［ブロック含む］
17　灰色粘質土（10Y5/1）
　［ブロック含む］
18　灰色粘土（5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
19　緑灰色砂質土（10GY5/1）
　［ブロック含む］
20　緑灰色砂質土（10GY5/1）
　［19 層より多くブロック含む］

第 169 図　袋状土壙 125（1/40）

袋状土壙 126（第 170 図、図版 17-7）

袋状土壙 124 の北上方に位置する。規模は、195 × 100cmを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。断面の内容からは、袋状の形状を把握でき、複数の袋状土壙が重複していることも確認された。深さは、底面とする部分が土壙関係において識別が明確に把握できていないが 87・70・76・83cmをそれぞれ測る。

重複関係は、最初に掘られたのが第 18 層を埋土とするものであり、第 11 層から上層は新たな土壙の掘り込みと判断される。第 11 ～ 13・15・20 層の埋土は、第 18 層の土壙の後から掘り込まれた土壙である。このことから、第１～４層が最終に掘り込まれた土壙であるが、第７～ 11 層については、断面南側の第 11 層の下層部分の形状から判断して、第１～４層を埋土とする土壙よりも先に設けられていた土壙であったと思考される。　（下澤）



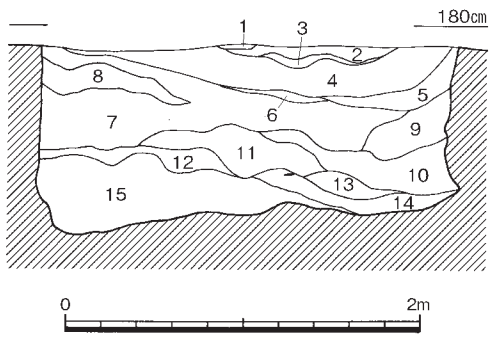
1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）
3　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
4　灰白色粘質土微砂（2.5Y7/1）
5　灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
　［炭少量含む］
6　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
7　灰黄色粘質土（2.5Y6/2）
8　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
　［細かい砂］
9　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
10　灰色粘質土（10Y5/1）
11　明緑灰色弱粘性砂質土（5G7/1）
　［ブロック含む］
12　灰色粘土（10Y4/1）
13　オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）
14　灰色粘質土（5Y5/1）
　［灰白色弱粘性砂質土ブロック含む］
15　灰色粘土（7.5Y5/1）
　［明緑灰色弱粘性砂質土ブロック含む］
16　灰色粘土（10Y4/1）
　［明緑灰色弱粘性砂質土ブロック含む］
17　灰色粘土（10Y4/1）
18　弱粘性砂質土　［ブロック含む］
19　オリーブ灰色粘土（5GY5/1）
　［明緑灰色弱粘性砂質土ブロック含む］

第 170 図　袋状土壙 126（1/40）

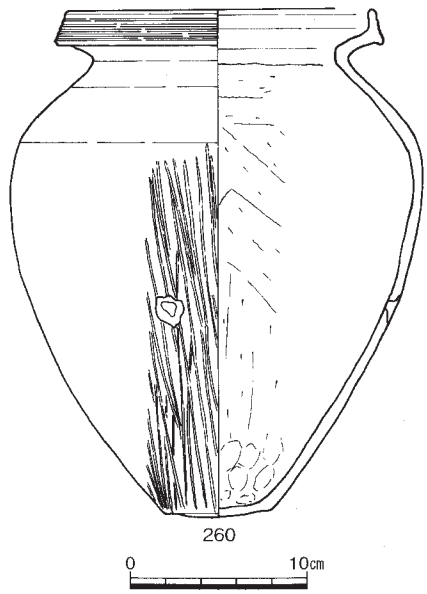
袋状土壙 127（第 171 図、図版 17-8・18-1）

調査区中央南寄りに位置し、袋状土壙 120 の北東３m に検出された。長さ 210cmを測るが、平面形はヒョウタン状を呈しており、袋状土壙が２基重複したものと考えられる。断面観察によっても切り合い関係は明確にできなかった。深さは 107cm、底面の海抜高は 62cmである。断面形は、ほぼ箱形を呈している。土壙内は、第１～15 層が堆積していた。埋土は、基盤層の土がブロック状に入る層と黒褐色の粘土層が交互に見られることから、ある程度埋め戻した後に土壙を再利用したと思われる。

260 の甕は、頸部から大きく外反し、さらに上方にやや内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁部端面には、５条の退化凹線を廻らしている。胴部中央やや下には、焼成後の穿孔が１か所存在する。底部は、丸味をもつ平底を残している。これらの土器は、他の土壙と同様に弥・後・Ⅳの特徴を示している。（小松原）



1　黒褐色粘質土（10YR3/1）
　［炭含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　黒褐色粘質土（10YR3/1）
　［炭含む］
4　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
5　褐色灰色粘土（10YR4/1）
6　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［薄い炭層含む］
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）
　［ブロック含む］
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［7 層より暗色］
10　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［粘質土ブロック含む］
11　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［粘質土ブロック含む］
12　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
13　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
14　灰色粘土（5Y4/1）
15　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［オリーブ灰色粘質土ブロック含む］



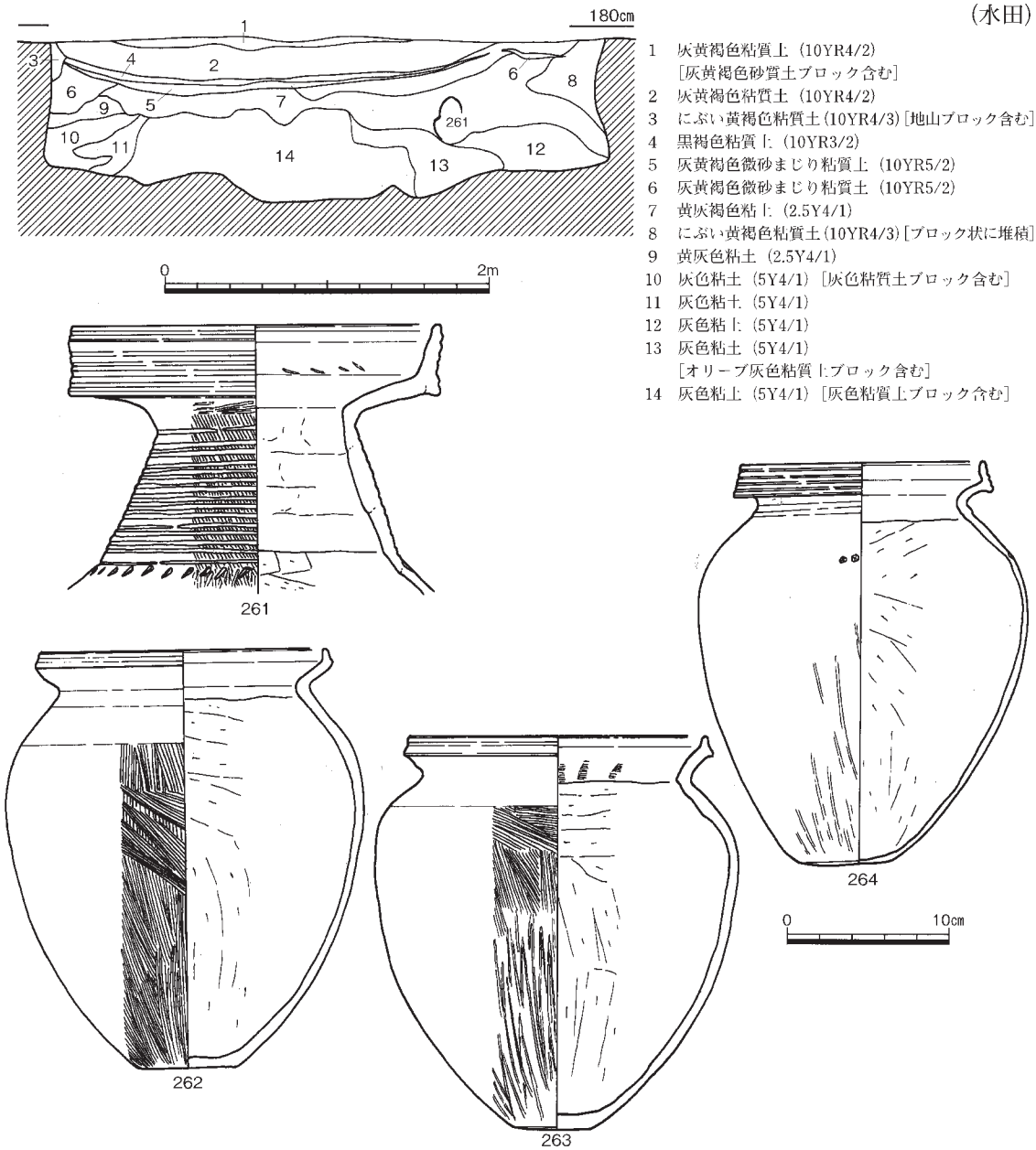
第 171 図　袋状土壙 127（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 128（第 172・173 図、図版 18-2）

第Ⅳ区の袋状土壙 127 の 5m 北に位置する。平面形は、310 × 180㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは 100㎝、底部は凹凸な面をしており、最深部の海抜高は 70㎝を測る。埋土は 14 層に区分できる。下層の第９～ 14 層は、比較的厚い粘土の堆積が認められる。中層の第７層は、灰黄褐色粘質土からなり、土器片を含む。北・南壁上位は、壁面の崩落土とみられる。

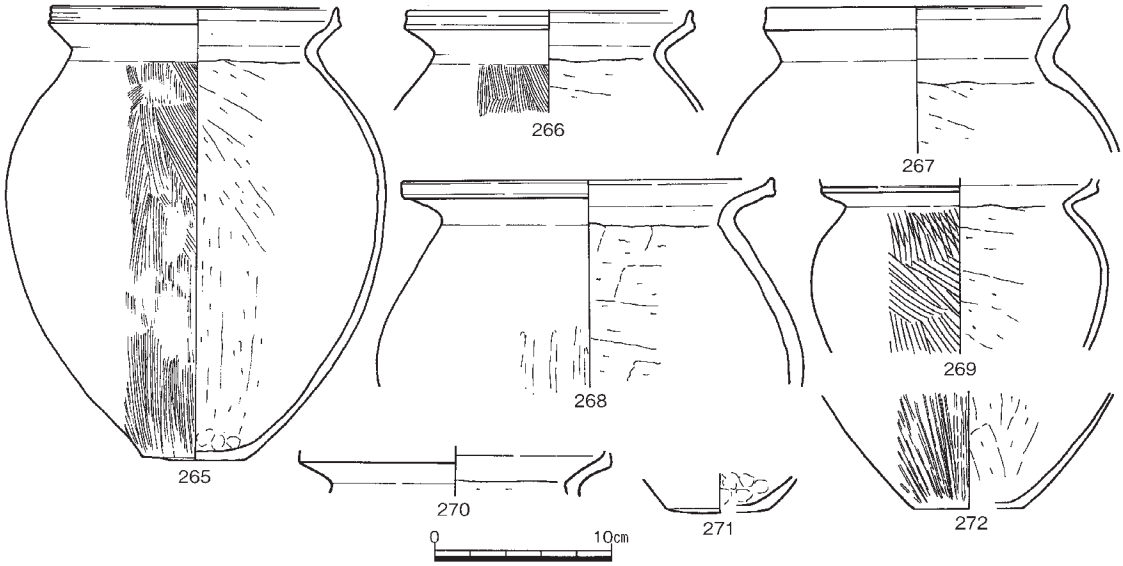
遺物は、弥生土器・ウリ類の種子が出土している。壺 **261** は、口縁部内面に工具の当り痕跡がみられる。甕は口縁端部をつまみ上げるもの **262**・**263**・**265** ～ **268**・**270**、口縁部を上方に拡張するもの **264**・**269** とに大きく分けられる。**264** は、肩部に米粒状の列点文が施されている。**265** は、外面はハケ調整、内面は底部にナデ・ヘラケズリを施す。外面には、煤の付着がみられる。**270** は口径 17.2㎝を測る。**271**・**272** は甕の底部である。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。

（水田）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［灰黄褐色砂質土ブロック含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)［地山ブロック含む］
4　黒褐色粘質土（10YR3/2）
5　灰黄褐色微砂まじり粘質土（10YR5/2）
6　灰黄褐色微砂まじり粘質土（10YR5/2）
7　黄灰褐色粘土（2.5Y4/1）
8　にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)［ブロック状に堆積］
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
10　灰色粘土（5Y4/1）［灰色粘質土ブロック含む］
11　灰色粘土（5Y4/1）
12　灰色粘土（5Y4/1）
13　灰色粘土（5Y4/1）
　［オリーブ灰色粘質土ブロック含む］
14　灰色粘土（5Y4/1）［灰色粘質土ブロック含む］

第 172 図　袋状土壙 128（1/40）・出土遺物１（1/4）

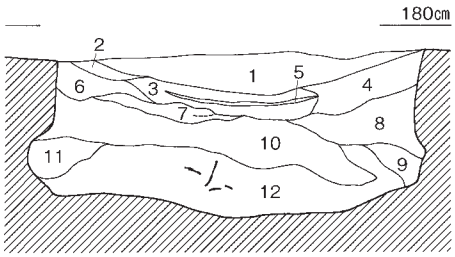


第 173 図　袋状土壙 128 出土遺物２（1/4）

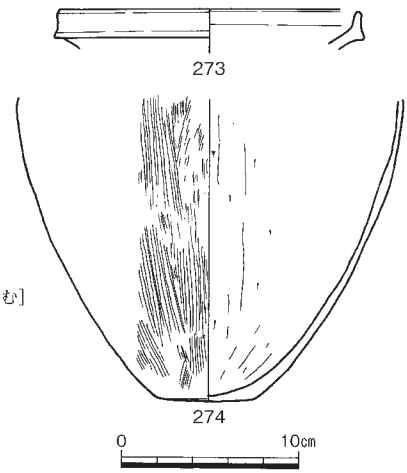
袋状土壙 129（第 174 図）

袋状土壙 125 の南東下方に位置する。規模は、195 × 150㎝を測り、平面形態は、楕円を呈する。当該袋状土壙は、第 147 図に見られる断面作図の位置が確認プランよりも北西側に偏っているが、断面図の内容から一応単独の袋状土壙と判断したが、平面形態と土層断面図南側の堆積から重複の可能性も思考される。これは、最初に掘り込まれたのが第４・８・９・12 層を埋土とした土壙であり、後から第２・３・５～７・10 層を埋土とする土壙が掘り込まれていると思考されるのである。このことは、第 10 層が第 12 層と同様に人為的に埋め戻されたように単一の土層が厚く認められることからも推測される。

出土遺物は、**273** と **274** が第 12 層から検出している。**273** は、口径 17㎝を測る甕の口縁部破片である。口縁部には、ヨコナデが施されている。**274** は、底径 5.6㎝を測る胴部から底部にかけての甕の破片である。外面調整は細かいハケ、内面は丁寧なタテヘラケズリが認められる。器面には、煤が付着し、被熱によるはつれが認められる。これらの遺物は、接合点が無いが胎土及び色調から同一個体と判断される。（下澤）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　褐灰色粘土（10YR4/1）
4　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
5　黒褐色粘土（10YR3/2）
6　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］
8　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］
9　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
　［緑灰色粘質土ブロック含む］
10　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
11　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
　［緑灰色粘質土ブロック含む］
12　緑灰色粘質土（10GR5/1）
　［ブロック状に堆積］

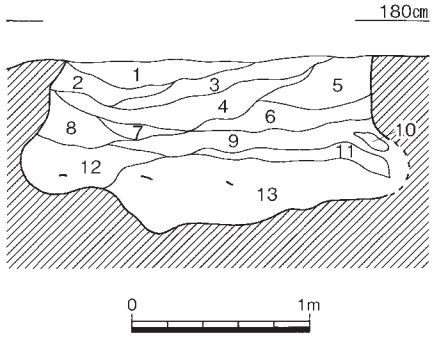


第 174 図　袋状土壙 129（1/40）・出土遺物（1/4）

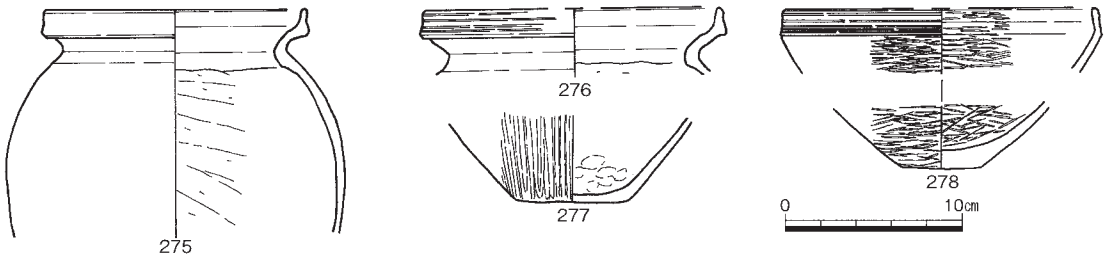
袋状土壙 130（第 175 図、図版 18-3）

この土壙は、調査区中央北端、袋状土壙 126 の東隣に位置する。長径 150㎝、短径 110㎝、残存する深さは 80 ～ 100㎝を測る。底面の海抜高は 60 ～ 85㎝である。平面形と土層断面での底面形状から２基以上の重複が考えられる。土層断面の観察から、まず西側に掘られた土壙が使用された後第 13 層の土で埋め戻され、新たに東側に土壙が掘られ使用されたと思われる。その後東側の土壙も第 12 層で埋め戻され、廃棄されたと考えられる。出土遺物からこの土壙の時期は、弥・後・Ⅳと考えられる。

（小松原）



1　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
2　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）［炭少量含む］
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
［浅黄色弱粘性砂質土ブロック含む］
4　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）［灰白色砂質土ブロック含む］
5　灰黄色粘質土微砂（2.5Y6/2）
6　褐灰色粘質土（10YR4/1）
7　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［明黄褐色粘質粒多く含む］
8　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
9　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
［明黄褐色粘質粒多く、炭を微量含む］
10　灰白色粘性砂質土（10Y7/1）［ブロック含む］
11　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）［砂質土ブロック、炭微量含む］
12　灰色粘土（5Y4/1）
［明青灰色砂質土ブロック多く含む］
13　緑灰色粘性砂質土（7.5GY6/1）



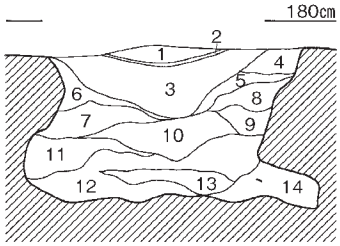
第 175 図　袋状土壙 130（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 131（第 176 図、図版 18-4）

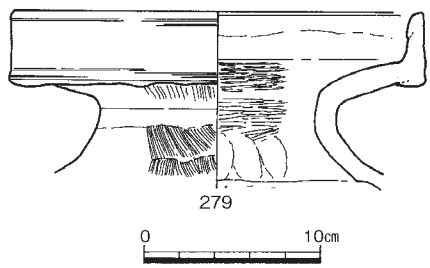
この土壙は、調査区の北東部、袋状土壙 129 の北東隣に位置する。土壙の規模は、長径約 140㎝、短径約 130㎝で、平面はほぼ円形を呈している。残存する深さは 91㎝を測る。底面の海抜高は 75㎝である。土壙の底部は、大きく外側に抉られている。土壙の下半は基盤層の土がブロック状に堆積しており、短期間での埋め戻しが想定できる。

279 は壺の口縁部で、端部は垂直に立ち上がる。この土壙の時期は、出土した **279** から弥・後・Ⅳと考えられる。

（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
［薄い炭層含む］
2　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
3　灰黄褐色粘性微砂（10YR4/2）
4　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
5　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
6　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
7　暗灰黄色粘性微砂（2.5Y4/2）
8　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
9　暗灰黄色粘性微砂（2.5Y4/2）
10　黄灰色粘土（2.4Y4/1）
11　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
［緑灰色砂質土ブロック含む］
12　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
13　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
［緑灰色砂質土ブロック含む］
14　緑灰色砂質土（7.5GY5/1）
［ブロック状に堆積］

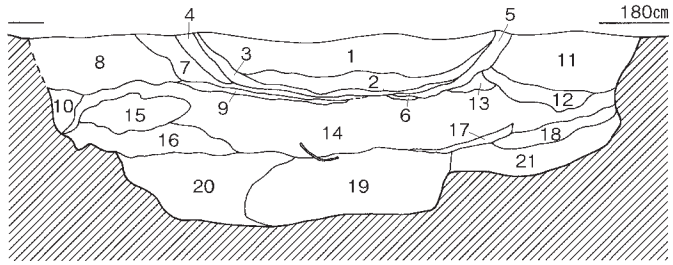


第 176 図　袋状土壙 131（1/40）・出土遺物（1/4）

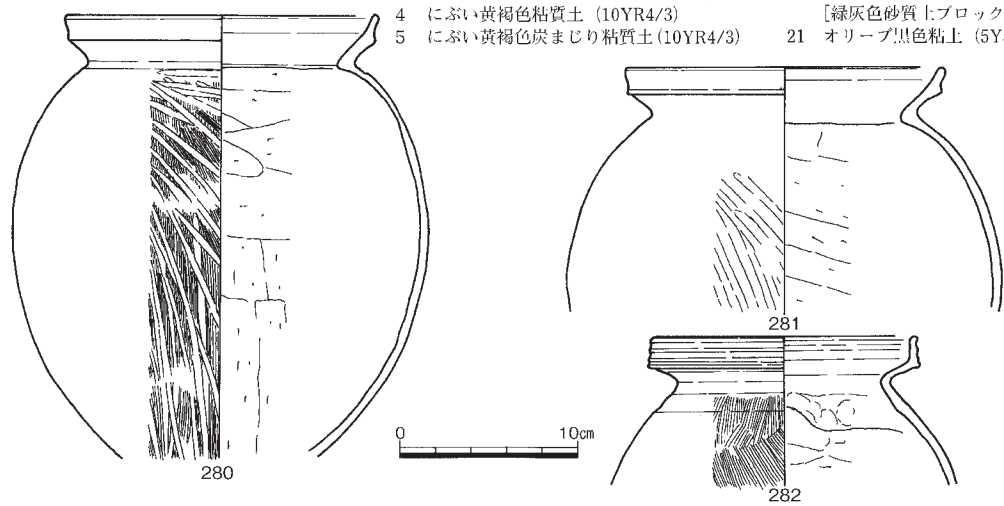
袋状土壙 132（第 177 図、図版 18-5）

第Ⅳ区の袋状土壙 128 の南東３m に位置する。平面形は、250 × 200㎝の凹凸状をなす不整円形を呈する。検出面からの深さは 104㎝、底面は中央部で一段窪む形状をしており、海抜高は 65㎝を測る。壁面は、海抜高 110㎝にて抉り込み、緩やかに内傾し立ち上がる。埋土は 21 層に区分できる。抉り部以下では、砂質土ブロックを含む粘土の厚い水平堆積が認められる。本層は、上方の第８・11 層まで比較的水平な堆積をした後に、第１～７層が、別の土壙として再び掘り返されているとみられるが、目的は不明である。

遺物は、甕が第 14 層から出土している。**280** は、外面はタテハケ後やや左斜方向のヘラミガキを施している。**281** は外面に煤の付着がみられる。**282** は、口縁部に擬凹線文を施す。　（水田）



1　にぶい黄褐色砂質土（10YR43）
　[にぶい黄褐色砂質土ブロック含む]
2　灰黄褐色粘性微砂（10YR5/2）
3　灰黄褐色炭まじり粘質土（10YR4/2）
4　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
5　にぶい黄褐色炭まじり粘質土(10YR4/3)
6　灰黄褐色粘性微砂（10YR5/2）
7　褐灰色粘質土（10YR4/1）
8　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
9　褐灰色粘土（10YR5/1）
10　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
11　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
12　灰黄褐色粘性微砂（10YR5/2）
13　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
14　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）
15　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
16　灰色粘土（5Y4/1）
17　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
18　灰色粘土（5Y4/1）
19　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　[緑灰色砂質土ブロック含む]
20　灰色粘土（10Y4/1）
　[緑灰色砂質土ブロック含む]
21　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）

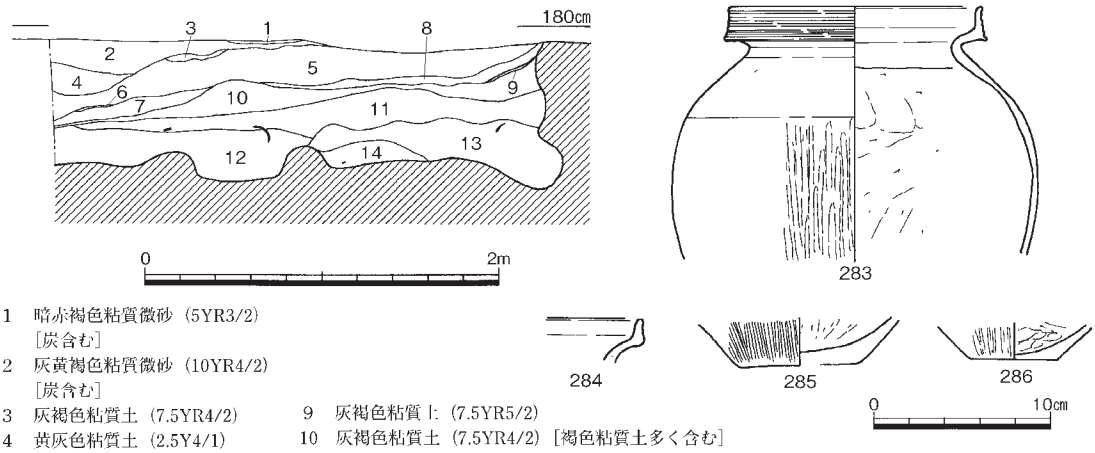


第 177 図　袋状土壙 132（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 133（第 178 図、図版 18-6）

袋状土壙 128 の東側に位置する。規模は 210 × 70㎝、深さは底面とされる部分が 103、93、104㎝を測る。当該土壙は、検出時に第 147 図で示すように平面形態が明確に確認ができていたが、これより西側部分は袋状土壙 132 のトレンチが崩落したことにより、把握できなかった。最下層の埋土の状態からは、複数の袋状土壙の重複の可能性が考えられる。

出土遺物は、第 11 層下層と第 11 ～ 12 層にかけて **283** と **285**、第 13 層からは **286** が検出されている。**283** は、口径 14.1㎝を測る甕である。口縁部外面には、５条の凹線文を施している。器面外面は、肩部下半までヘラミガキ、内面にはナデとヘラケズリを行っている。また、煤が付着している。**285** と **286** は、底部破片で、前者の内面には炭化物が付着していた。　（下澤）



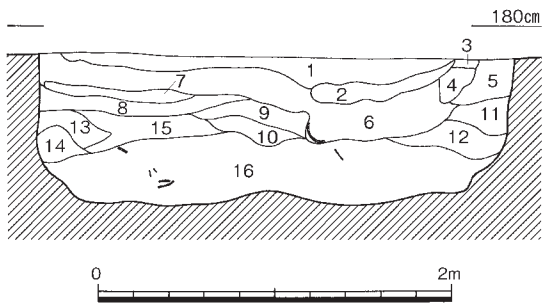
1　暗赤褐色粘質微砂（5YR3/2）
　［炭含む］
2　灰黄褐色粘質微砂（10YR4/2）
　［炭含む］
3　灰褐色粘質土（7.5YR4/2）
4　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［黄褐色粘質土ブロック多く含む］
5　灰色粘質土（5Y4/1）
6　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
7　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
8　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）
　［暗褐色粘質土ブロック多く含む］
9　灰褐色粘質土（7.5YR5/2）
10　灰褐色粘質土（7.5YR4/2）［褐色粘質土多く含む］
11　灰色粘土（5Y5/1）
　［暗オリーブ褐色粘質土、暗灰黄色粘質土ブロック含む］
12　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
13　灰色粘土（10Y4/1）
14　暗オリーブ灰色粘土（2.5GY4/1）［砂含む］

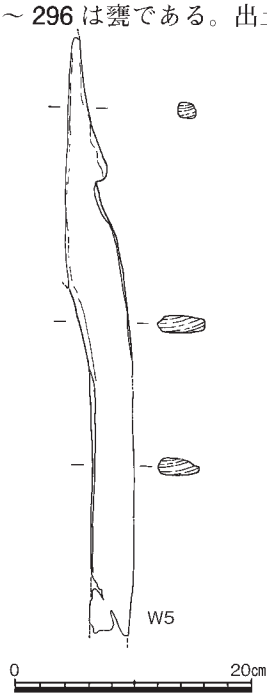
第 178 図　袋状土壙 133（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 134（第 179・180 図、図版 18-7・8）

第Ⅳ区の袋状土壙 131 の南東 2m に位置する。平面形は、300 × 220㎝の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは 84㎝、底面は、中央部がやや凸状となり、海抜高は 79㎝を測る。壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は 16 層に区分できる。最下層は砂質土ブロックを含む粘土が厚く堆積をしており、多くの土器片を含む。東壁の第 13・14 層、西壁の第 5・11 層は、崩落土とみられる。中層から上層にかけては、粘質土と粘質土微砂が相互に堆積する。

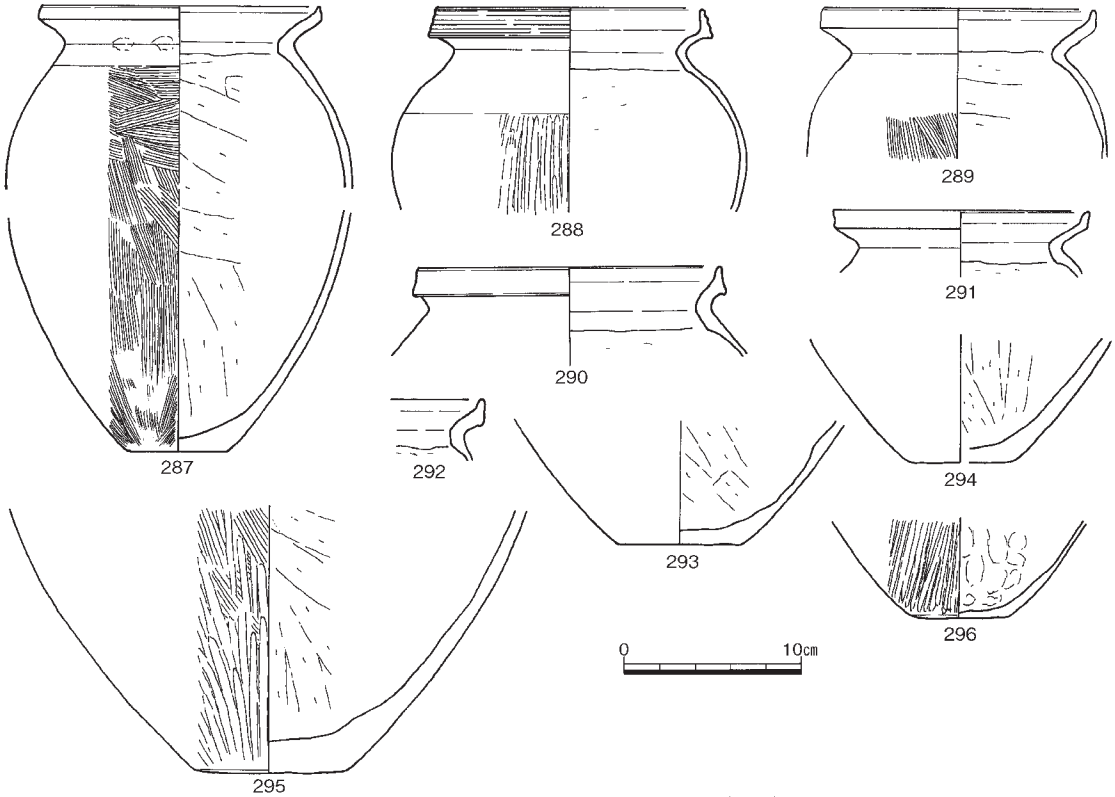
W5 はナスビ状又鍬である。出土状況は、最下層埋積後に水平な状態で出土していることから、意図的な廃棄ともみられる。樹種はアカガシ類を使用している。**287** ～ **296** は甕である。出土遺物から時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。　（水田）





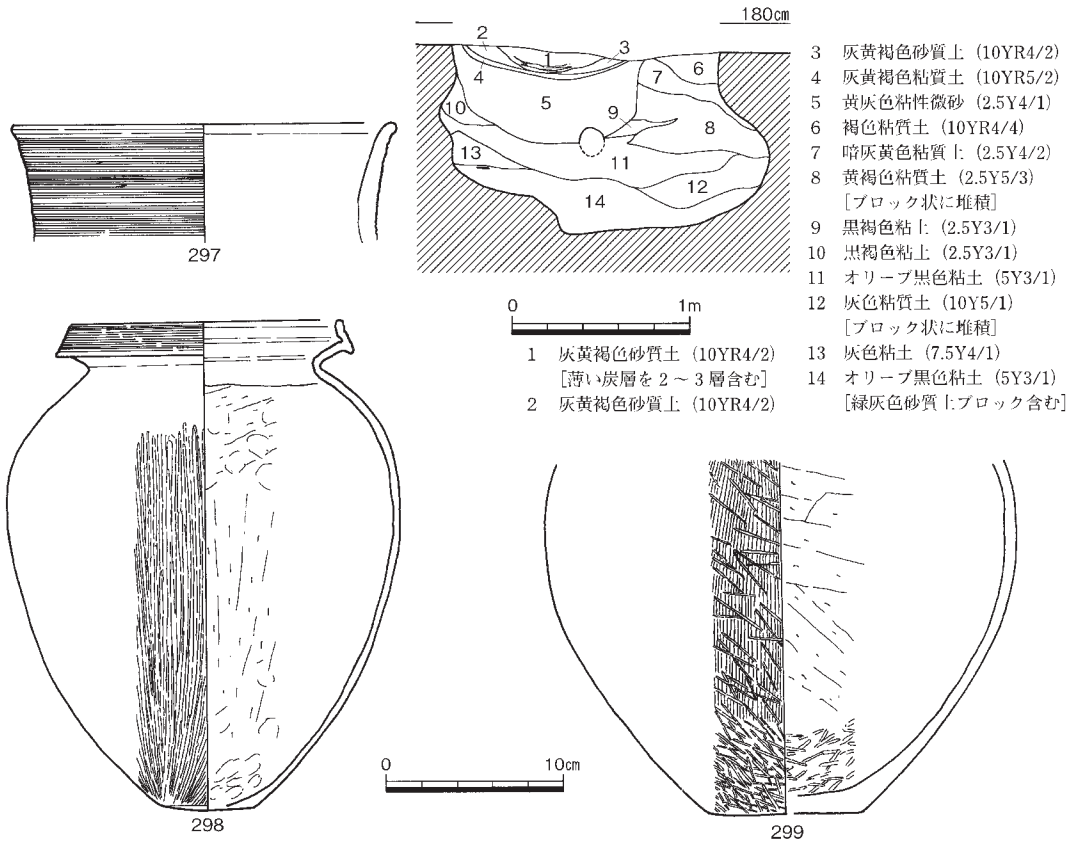
1　にぶい黄色粘質土微砂（2.5Y6/3）
2　褐灰色粘質土微砂（10YR4/1）
　［明黄褐色粘性砂粒含む］
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
4　黄灰色粘質土（2.5Y4.1）
5　黄灰色粘質土微砂（2.5Y6/1）
　［明黄褐色砂質度ブロック含む］
6　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
　［灰白色弱粘性砂質土ブロック含む］
7　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
　［灰白色砂質土ブロック少量含む］
8　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y5/2）
　［浅黄色粘性粒含む］
9　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
10　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［にぶい黄色弱粘性砂質土ブロック含む］
11　灰オリーブ色粘質土微砂（5Y5/2）
12　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［炭微量含む］
13　灰色粘質土微砂（5Y5/1）
14　にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
15　黄灰色粘土（2.5Y5/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
16　灰色粘土（10Y4/1）
　［明緑灰色粘性砂質土ブロック含む］

第 179 図　袋状土壙 134（1/40）・出土遺物（1/6）



第 180 図　袋状土壙 134 出土遺物（1/4）

袋状土壙 135（第 181 図、図版 19-1・2）



第 181 図　袋状土壙 135（1/40）・出土遺物（1/4）

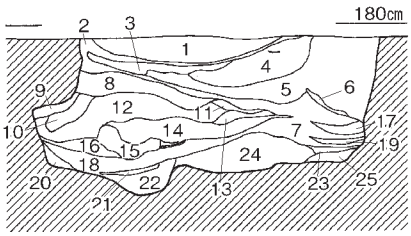
袋状土壙 127 の東側に位置する。規模は、125 × 120㎝を測り、平面形態は円形を呈する。検出時は、単独の袋状土壙として掘り下げた。しかしながら、断面において重複していることが認められた。最初に掘り込まれたのは、６～14 層を埋土とする深さは 63㎝のものである。この断面形状は、北西側が凹凸のある抉りで、南東側は弧を描くように形の整った抉りの内容を示す。当該土壙が埋まった後に、第１～５層を埋土とする深さ 113㎝の土壙が掘り込まれている。この土壙は、袋状の形状を示していない。埋土は、人為的に埋め戻されたと思考される第５層が厚く認められる。

出土遺物は、断面図に示したように第５と 11 層の間に **298** と **299**、第 14 層からは **297** を検出する。**297** は、口径 21.7㎝を測る壺で、口縁部外面にヘラ描沈線を施している。**298** は、口径 15㎝、器高 27.4㎝、底径 5.3㎝を測る。口縁部外面には、６条の凹線文を施す。（下澤）

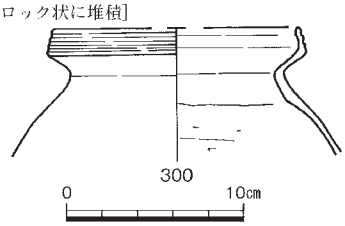
袋状土壙 136（第 182 図、図版 19-3）

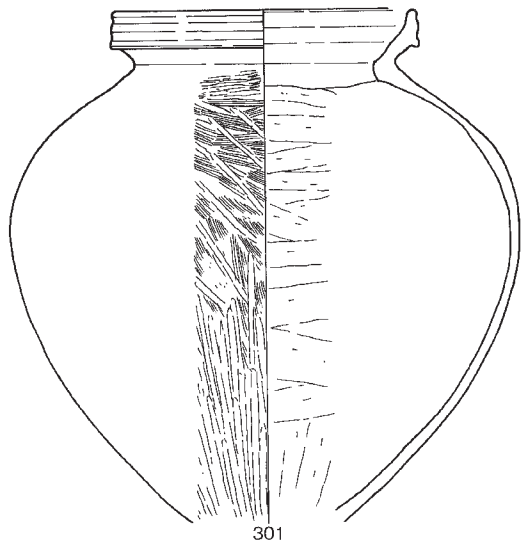
この土壙は、調査区東部に位置し、袋状土壙 133 の南約１ｍに検出された。規模は径約 140㎝で、平面は楕円形を呈している。残存する深さは 89㎝、底面の海抜高は 84㎝である。土層は均質な粘土層と基盤層の土がブロック状に入る層が互層となっており、数次にわたり掘削と埋め戻しを繰り返したとみて取れる堆積状況であった。

300・301 は甕である。**301** は、頸部から「く」の字に屈曲し、さらに上方に延びる口縁部をもつ。外面はハケメのちヘラミガキを施している。内面は、いずれも頸部まで丁寧なヘラケズリが施されている。出土遺物からこの土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　褐灰色粘質土（10YR4/1）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　褐灰色粘質土（10YR5/1）
　［薄い灰白色微砂層含む］
4　にぶい黄褐色粘質土細砂（10YR4/3）
　［ブロック状に堆積］
5　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［ブロック状に堆積］
6　黄灰色粘土（2.5Y5/1）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［ブロック状に堆積］
9　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［ブロック状に堆積］
10　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［ブロック状に堆積］
11　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［ブロック状に堆積］
12　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
13　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［薄い灰白色微砂層含む］
14　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
15　砂質土［ブロック状に堆積］
16　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
17　灰色粘土（7.5Y4/1）
18　灰色粘土（5Y4/1）
19　灰色粘土（7.5Y4/1）
20　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
21 オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
22　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
23　灰色粘土（7.5Y4/1）
24　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
25　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］

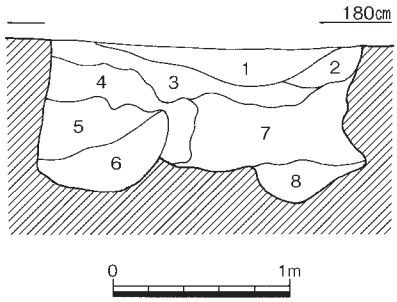




第 182 図　袋状土壙 136（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 137（第 183 図、図版 19-4）

第Ⅳ区の袋状土壙 136 の南東２m に位置する。平面形は、120 × 70㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは北東側 98㎝、南西側で 102㎝を測る。底面は中央部が平坦なのに対して、両端が大きく窪み、海抜高は北東側で 82㎝、南東側で 78㎝を測る。壁面は、北東側では垂直に立ち上がる。南西側では、海抜高 100㎝のところで抉り込み、緩やかに内傾して立ち上がる。埋土は８層に区分できる。下層の第４～８層には、粘土にブロックが含まれることから人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物はなく、時期については他の袋状土壙の状況から弥生後期末の範疇とみられる。（水田）



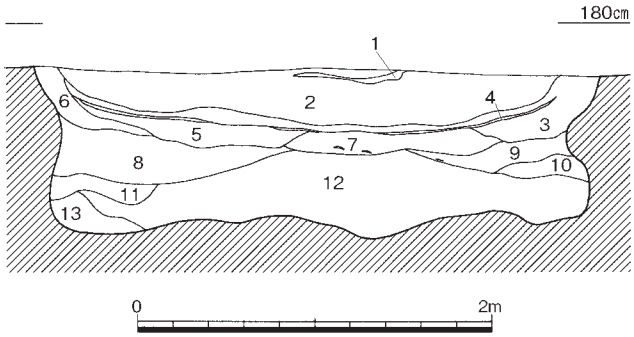
1　灰黄褐色粘質土微砂（10YR4/2）
2　暗褐色粘質土（10YR3/4）
　［灰色土・黄褐色土粒ブロック含む］
3　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
4　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［暗灰黄色・オリーブ褐色粘土ブロック含む］
5　灰色粘土（5Y4/1）
　［灰オリーブ色粘土ブロック含む］
6　灰色粘土（10Y4/1）
　［灰色粘土ブロック含む］
7　灰色粘土（10Y4/1）
　［灰色粘土ブロック含む］
8　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
　［粘質微砂ブロック含む］

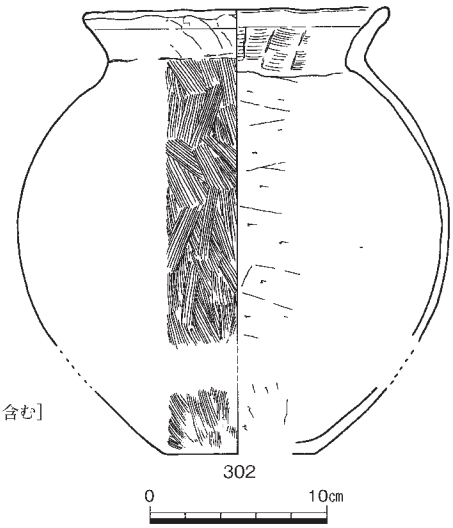
第 183 図　袋状土壙 137（1/40）

袋状土壙 138（第 184 図、図版 19-5）

この土壙は、調査区東部に位置し、袋状土壙 137 の北２m に検出された。土壙の規模は、長さ 310㎝、幅 80㎝で、平面は不整な長楕円形を呈する。残存する深さは 97㎝を測る。底面は凹凸があり、海抜高は 59㎝である。土壙はその形態から５～６基以上の重複も考えられるが明確ではない。土壙内は、第１～ 13 層が堆積している。下半には、基盤層の土がブロック状に入る層の堆積が見られるが、断面観察しても切り合い関係を見つけることはできない。

出土遺物としては **302** の甕がある。「く」の字の口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。口縁部内面にもハケメ。土器は弥・後・Ⅳである。（小松原）





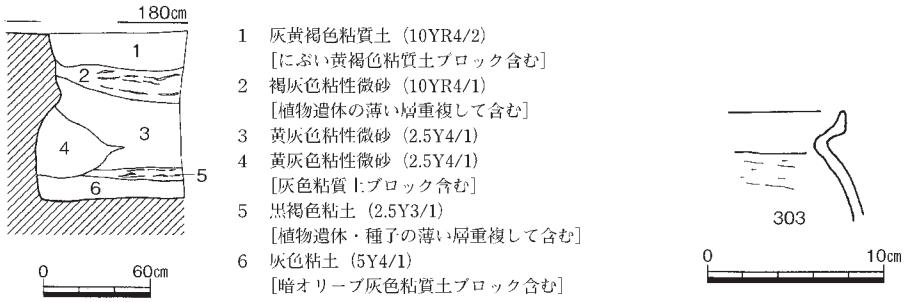
1　灰黄褐色粘質微砂（10YR4/2）
2　黒褐色粘質土（10YR3/2）
3　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［オリーブ褐色粘質土ブロック含む］
4　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）
5　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［暗オリーブ色粘土ブロック含む］
6　灰オリーブ色粘土（7.5Y4/2）
　［暗オリーブ色粘土ブロック多量含む］
7　オリーブ黒色粘土（10Y3/2）
8　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/2）
　［灰色粘質微砂ブロック含む］
9　灰色粘土（10Y4/1）
　［灰オリーブ色・黒色粘土ブロック含む］
10　灰色粘質土（n4/）
　［わずかに砂含む］
11　灰色粘土（10Y4/1）
12　暗オリーブ灰色粘土（2.5GY4/1）
13　暗オリーブ灰色粘土（2.5GY4/1）
　［砂まじり］

第 184 図　袋状土壙 138（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 139（第 185 図、図版 19-6）

袋状土壙 138 の北上に位置する。規模は、130 × 100（＋α）cmを測るが、西側は建物基礎のコンクリートパイルにより不詳である。深さは、82cmを測る。埋土の第２と５層中には、小枝の植物遺体が筋状に幾層も認められた。

出土遺物は、内面にヘラケズリを施す **303** の甕が検出されている。（下澤）

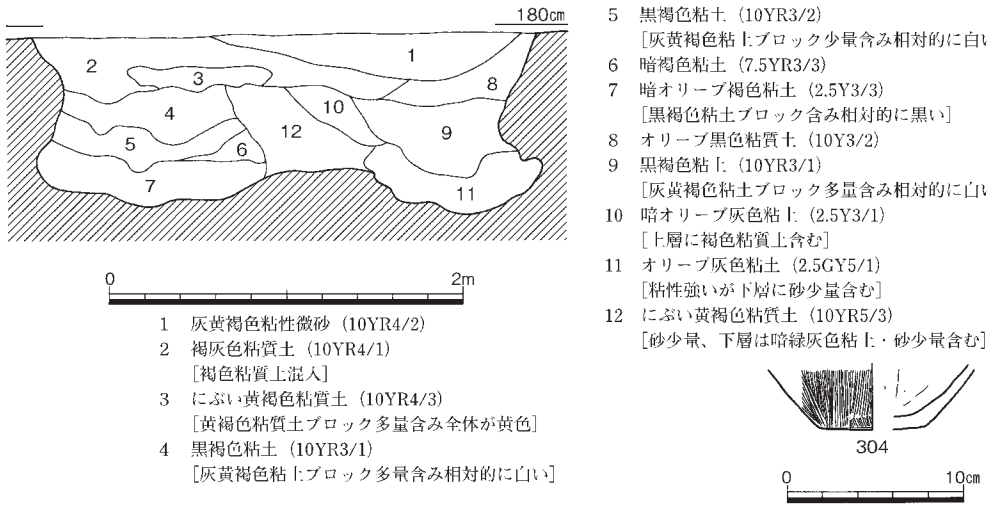


第 185 図　袋状土壙 139（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 140（第 186 図、図版 19-7・8）

袋状土壙 135 の南東下に位置する。規模は、290 × 220（＋α）cmを測るが、南側は第ＩＡ調査区境の関係で不詳である。平面形態は、南側が円形を描く様であり、北側は張り出す形状を呈している。このことから、袋状土壙の重複を思考し、断面により確認した。深さは、底面とされる部分が 77、98、74cmを測る。最初に掘り込まれた袋状土壙は、第 12 層を埋土とするもので、次に前後関係は不詳であるが第４～７層と第８～ 11 層を埋土とした３基が重複している。この重複は、プラン確認の高さではなく、最終埋土である第１～３と第８層の堆積前の段階での掘り込みである。このことから、確認面から約 30cmの凹んだ状態での掘り込みであったことが推測される。したがって、先に記した前後関係が不詳な掘り込みは、第１層の堆積内容から判断すれば第８～ 11 層を埋土とするものが最も新しくなると思考されるのである。

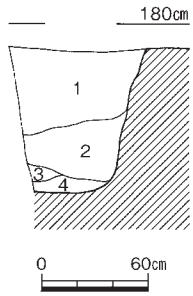
出土遺物は、**304** の甕の底部破片で、底径６cm測る。器面外面調整は、細かいハケ、内面にはヘラケズリが施される。器面には、煤の付着が認められる。（下澤）



第 186 図　袋状土壙 140（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 141（第 187 図、図版 20-1）

第Ⅳ区の袋状土壙 140 の 1ｍ北に位置する。遺構は建物の基礎の影響を受けている。平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは 80㎝、底面海抜高は 94㎝を測る。埋土は 4 層に区分できる。時期は弥生後期末の範疇である。　（水田）

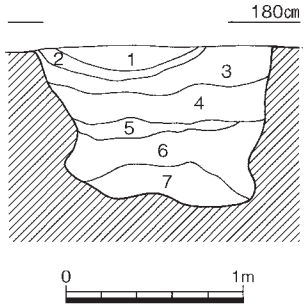


1　にぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）
　［ブロック状に堆積］
2　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
　［灰オリーブ色粘質土ブロック含む］
3　灰オリーブ色粘質土（5Y4/2）
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）

第 187 図　袋状土壙 141（1/40）

袋状土壙 142（第 188 図、図版 20-2）

第Ⅳ区の袋状土壙 141 の南東 1ｍに位置する。平面形は、不整円形を呈する。検出面からの深さは 90㎝、底面海抜高は 86㎝を測る。時期は、弥生後期末の範疇とみられる。　（水田）

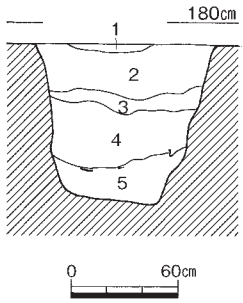


1　褐灰色粘質土微砂（10YR5/1）
　［灰白色砂質土ブロック含む］
2　黄灰色粘質土微砂（2.5Y5/1）
3　黄灰色粘質土微砂（2.5Y4/1）
4　灰色粘質土（5Y4/1）
　［灰白色粘質砂質土ブロック含む］
5　灰色粘質土微砂（7.5Y5/1）
6　灰色粘質土（7.5Y4/1）
　［明緑灰色弱粘性砂質土ブロック含む］
7　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［緑灰色粘質土ブロック含む］

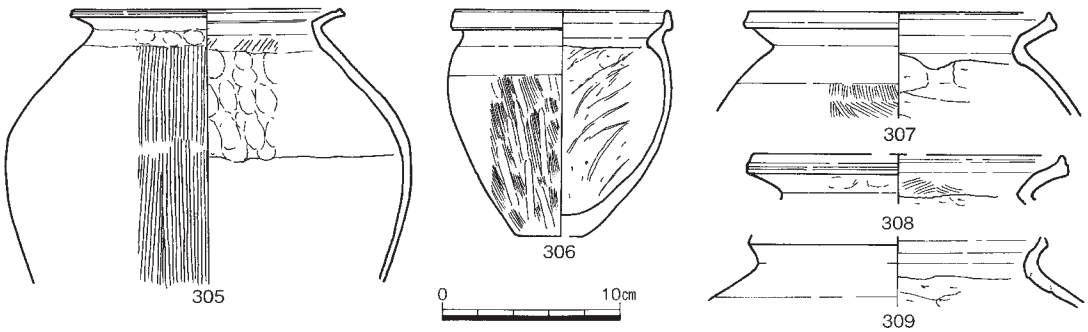
第 188 図　袋状土壙 142（1/40）

袋状土壙 143（第 189 図、図版 20-3）

調査区東端南寄りに位置し、長径 120㎝、短径 65㎝、残存する深さは 91㎝を測る。底面の海抜高は 78㎝である。基盤層の土がブロック状に入る層が水平に堆積しており、人為的な埋め戻しが考えられる。甕 **305** は、讃岐からの搬入品土器、**307** ～ **309** の甕は口縁端部を上方にわずかに立ち上がらせている。出土遺物の特徴から土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。　（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色粘質土ブロック含む］
3　灰黄褐色粘土（10YR4/2）
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
5　灰色粘土（7.5Y4/1）
　［灰色粘土ブロック含む］



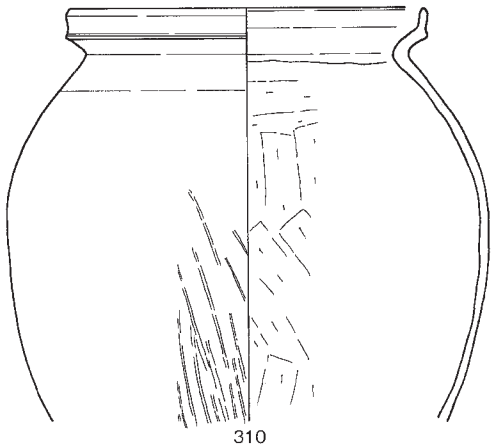
第 189 図　袋状土壙 143（1/40）・出土遺物（1/4）

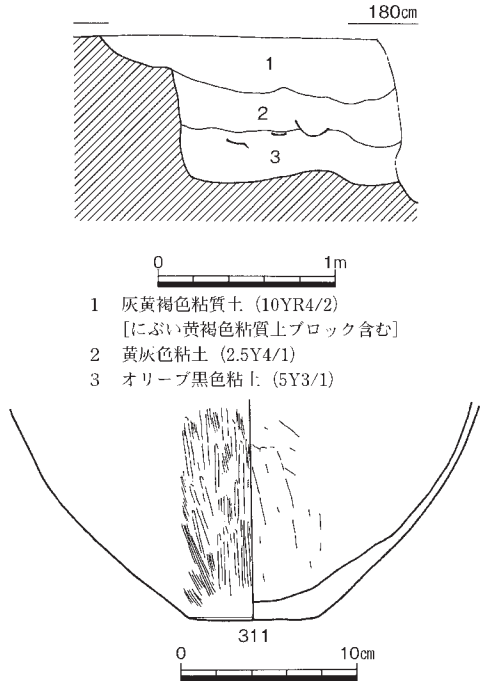
袋状土壙 144（第 190 図、図版 20-4）

この土壙は、調査区の東端に位置し、袋状土壙 143 の北隣に検出された。土壙の規模は、長径 190㎝、短径 80㎝で、平面はやや不整な長楕円形を呈している。残存する深さは 83㎝を測り、底面の海抜高は 90㎝である。断面形は、底部が外側に大きく抉るように掘られている。土壙内は、第１～３層が堆積している。他の土壙と同様に基盤層の土がブロック状に入る層が水平に堆積しており、人為

的な埋め戻しが短期間で行われたと考えられる。

出土遺物としては図示した310・311などが確認された。これらの土器から土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



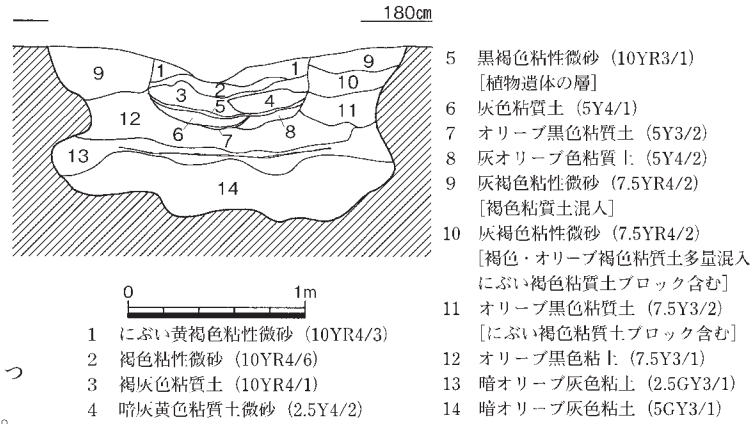


第190図　袋状土壙144（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙145（第191図）

袋状土壙142の北東側に接して位置する。規模は、180×110cmを測り、平面形態は、楕円形を呈する。重複は、平面形態の関係から外角側でなく、既設の袋状土壙のはぼ中央に掘り込まれているのである。したがって、深さは、70cmと118cmを測る。

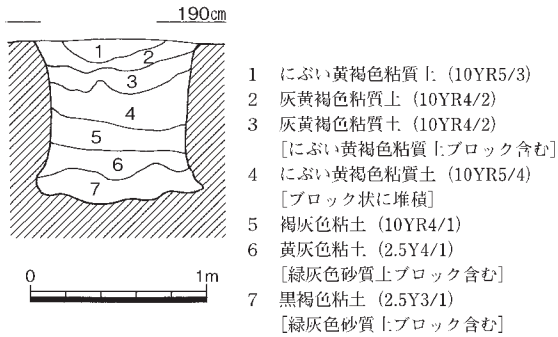
最初の袋状土壙は、第９～14層を埋土とし、第14層は人為的な厚い堆積がみられる。第13層中には、第191図で示しているが、被うように炭層が認められ、これが埋没した後に、第１～８層の土壙が掘り込まれる。（下澤）



第191図　袋状土壙145（1/40）

袋状土壙146（第192図）

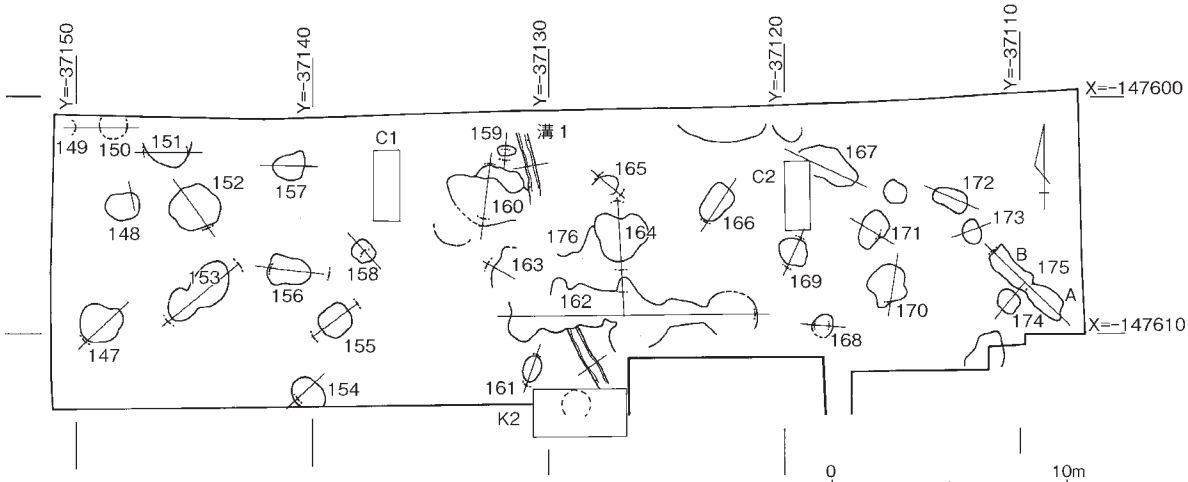
第Ⅳ区の袋状土壙144の北東１mに位置する。平面形は円形を呈する。検出面からの深さは93cm、底面海抜高は88cmを測る。埋土は７層に区分できる。時期は弥･後･Ⅳに比定できる。（水田）



第192図　袋状土壙146（1/40）

第５節　第Ⅴ調査区

当該調査区は、第１章で記したように岡山市の確認調査で埋蔵文化財包蔵地でないとの判断が示されている地区である。しかし、第Ⅳ調査区の内容から遺構が北に広がり、調査の必要が生じたのである。岡山市の調査位置は、第５図のC1とC2であり、後者で袋状土壙167が掘り込まれていた。また、岡山県が行った確認調査のK2の地点では、袋状土壙の掘り込みを確認している。このように、袋状土壙は、南から途切れることなく北に分布域を広げている。　（下澤）



第193図　第Ⅴ調査区遺構配置図（1/300）

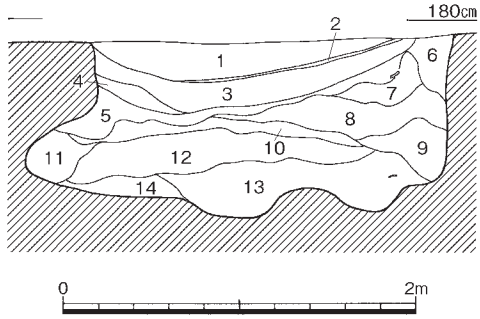
（1）袋状土壙

第Ⅳ調査区からは、途切れることなく確認され調査区外の北にも広がる様相を示している。検出した袋状土壙は、重複が多い、番号を付していない袋状土壙は、プランのみの検出である。　（下澤）

袋状土壙147（第194・195図、図版20-5～7）

第Ⅴ区の袋状土壙153の2m西に位置する。平面形は、190×170㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは98㎝、凹凸状を呈する底面の海抜高は68㎝を測る。壁面は、北東側では海抜高130㎝で大きく抉り込む。南西側では、底面から垂直に立ち上がる。埋土は14層に区分できる。下層の第10層～14層は、地山ブロックを含む埋土であり、上層の第2・3層では、砂質土の堆積が確認された。第6・9層は、崩落土である。

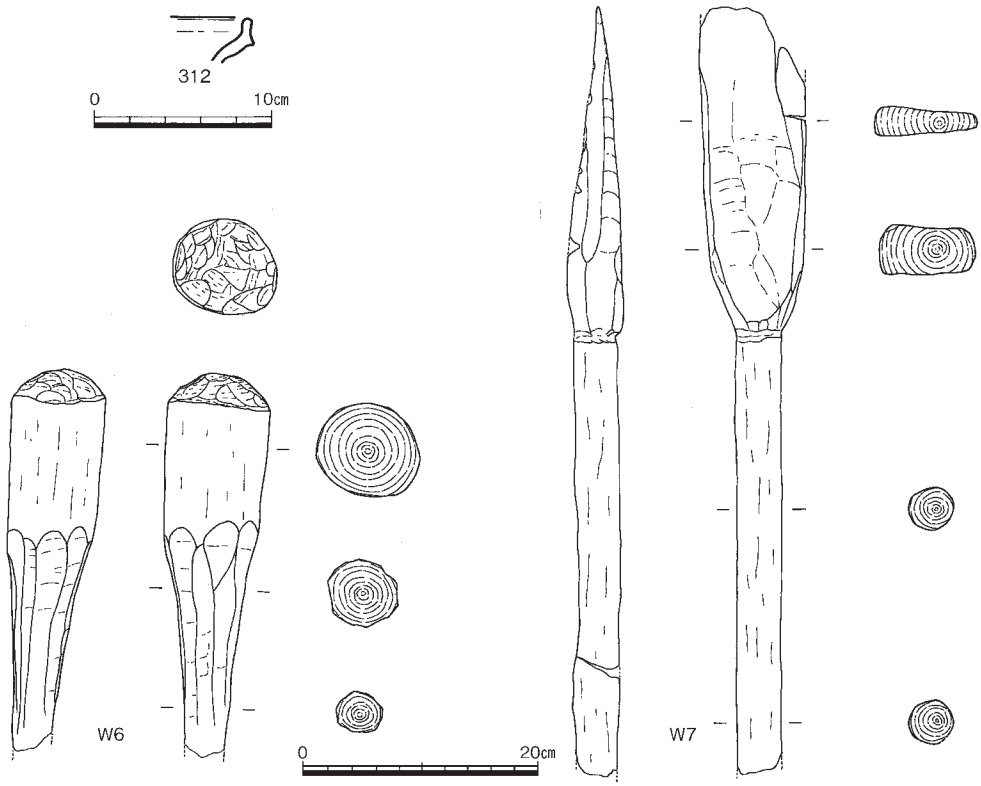
出土遺物は、弥生土器と木器が検出された。312は甕の口縁部である。W6は、砧（横槌）とみられる。残存長32.5㎝を測る。敲打部では、使用痕跡がみられた。W7は



1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）［ブロック状に堆積］
2　灰黄褐色微砂（10YR6/2）
3　褐灰色粘性微砂（10YR5/1）
4　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
5　褐灰色粘土（10YR4/1）
6　褐色粘質土（10YR4/4）
7　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［ブロック状に堆積］
8　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）［ブロック状に堆積］
9　暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）［ブロック状に堆積］
10　暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）［ブロック状に堆積］
11　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
12　黒褐色粘土（2.5Y3/1）［オリーブ灰色砂質土ブロック含む］
13　灰色細砂まじり粘土（7.5Y4/1）［ブロック状に堆積］
14　緑灰色砂質土（10GY5/1）［ブロック状に堆積］

第194図　袋状土壙147（1/40）

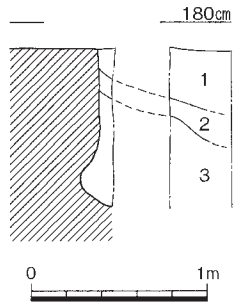
用途不明木器である。身の平面形は扁平状に近く、最大幅は９㎝を測る。柄の一部が欠損している。２点の木器は、最下層から水平な状態で出土しており、流れ込みとは考えにくく、人為的に置かれた可能性が考えられる。樹種は、アカガシ類を使用し、芯持材を加工して製作されている。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。（水田）



第 195 図　袋状土壙 147 出土遺物（1/4・1/6）

袋状土壙 148（第 196 図、図版 21-1）

第Ⅴ区の袋状土壙 147 の５m 北に位置する。遺構は建物の基礎により大きく影響を受けている。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 90㎝、底面の海抜高は 74㎝を測る。埋土は３層に区分できるが、基礎の影響により不明確である。（水田）



1　黄灰色粘質微砂（2.5Y4/1）
2　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
3　灰色粘土（5Y4/1）
［緑灰色砂質土ブロック含む］

第 196 図　袋状土壙 148（1/40）

袋状土壙 149（第 197 図、図版 21-2）

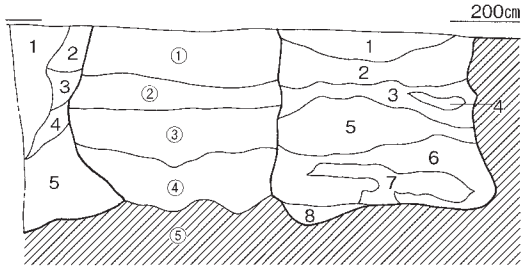
袋状土壙 148 の北西上で、調査区境の隅に位置する。深さは、81㎝を測る。規模は、検出位置が調査区域外に接し、調査区北端の側溝部分の断面に認められていることから不詳である。断面形状は、内湾しながら下方部分で抉る内容を示す。最下層の第５層は他の袋状土壙の最下層のそれと同様の堆積内容を示す。なお、第１層は、近世の井戸の掘り方である。（下澤）

袋状土壙 150（第 197 図、図版 21-3）

袋状土壙 149 の東側近くに位置する。深さは、85㎝を測る。規模は、先の袋状土壙 149 と同様に検出位置が調査区域外に接することから、調査区北端の側溝部分の断面に認められていることから不

詳である。

第197図の袋状土壙149との間の①～⑤土層は、自然堆積層であり、袋状土壙の掘り込みが砂層に達していたことが判断できる。断面形状は、西側が明確な抉りを持たないが、東側については、抉りを示す。埋土は、第１～８層の堆積が認められ、最上層の第１層がレンズ状堆積を呈しているが、他の埋土は、水平堆積となり、基盤層がブロック状に含まれる。　（下澤）



1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
2　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）
4　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
5　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
［ブロック状に堆積］
6　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
［黄褐色粘質土ブロック含む］
7　黄褐色粘土（2.5Y5/3）
8　オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）
［緑灰色砂質土ブロック含む］

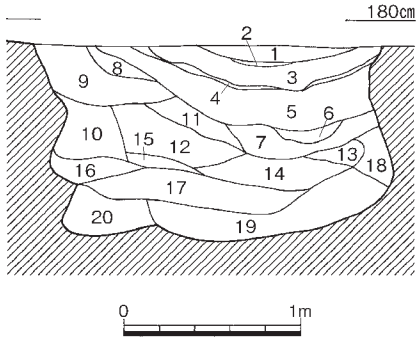
1　オリーブ黒色細砂（7.5Y3/1）
［近世井戸掘り方］
2　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）
3　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
4　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）
［ブロック状に堆積］
5　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
［青灰色砂質土ブロック含む］

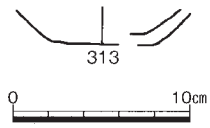
①　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
②　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
③　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
④　黄褐色粘質土（2.5Y5/4）
⑤　緑灰色細砂（10GY5/1）

第197図　袋状土壙149・150（1/40）

袋状土壙151（第198図、図版21-4）

この土壙は、調査区の北西隅に位置し、袋状土壙148の北東約２mに検出された。規模は直径約200cmで平面はほぼ円形と考えられる。残存する深さは110cmを測る。底面の海抜高は56cmである。土壙の堆積状況から数回の掘削と埋め戻しが繰り返されたと考えられる。すなわち、第20層で１回、第18・19層で１回、第10～17層で１～３回、第８・９層で１回、第１～７層で１～２回の使用が認められる。時期を特定できる遺物はないが周囲の状況から、この土壙の時期は他の土壙と大差ないと考えられる。　（小松原）





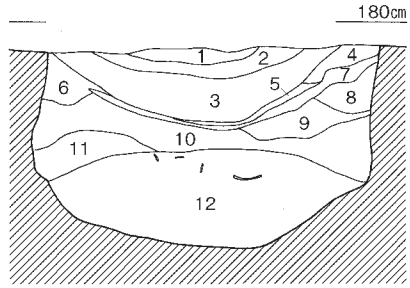
1　灰白色砂質土（7.5Y7/1）
［砂粒有］
2　炭
3　灰色土（7.5Y6/1）［炭・植物含む］
4　灰白色土（7.5Y7/1）
［砂多く含む］
5　灰色土（n6/）
6　灰色土（n5/）［炭層］
7　灰オリーブ色土（7.5Y6/2）
8　浅黄色土（2.5Y7/3）
9　明黄褐色土（2.5Y6/6）
10　黄灰色土（2.5Y6/1）
11　灰色土（n5/）［炭含む］
12　灰オリーブ色土（5Y5/2）
13　黄灰色土（2.5Y6/1）
14　灰色土（7.5Y4/1）
15　灰オリーブ色土（5Y5/2）
［淡黄色土ブロック含む］
16　オリーブ灰色土（2.5GY5/1）
17　緑灰色土（7.5GY6/1）
18　黄灰色土（2.5Y6/1）
［淡黄色土ブロック多く含む］
19　灰色土（n4/）
［明オリーブ灰色砂質土多く、植物遺体含む］
20　緑灰色土（10GY6/1）
［砂塊多く含む］

第198図　袋状土壙151（1/40）・出土遺物（1/4）

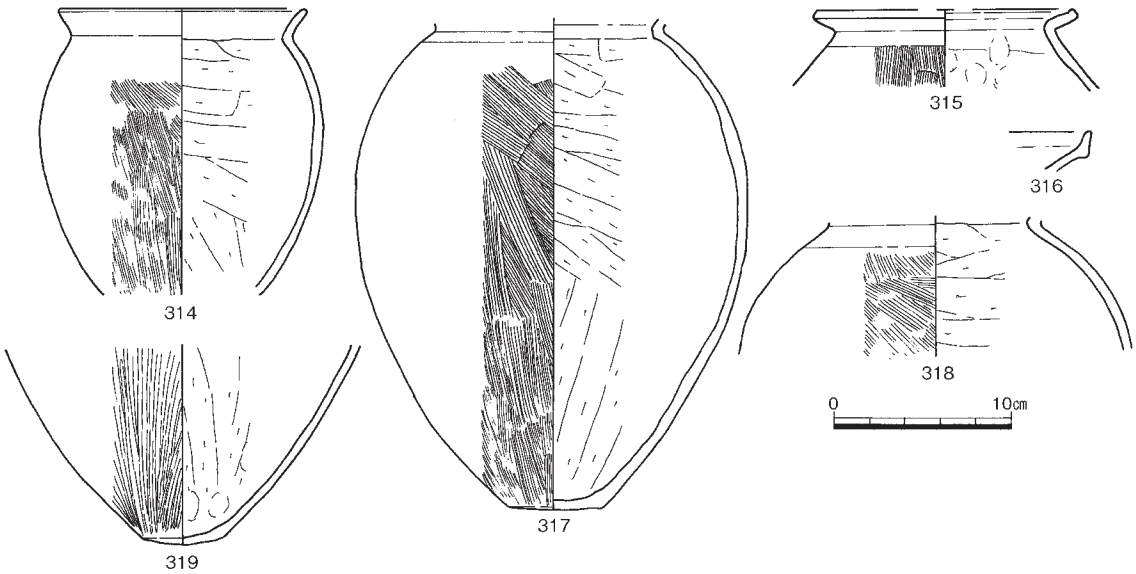
袋状土壙 152（第 199 図、図版 21-5）

第Ⅴ区の袋状土壙 151 の南東１m に位置する。平面形は、220 × 180㎝の円形を呈する。検出面からの深さは 112㎝、底面の海抜高は 54㎝を測る。埋土は 12 層に区分できる。抉り部以下の最下層は、粘質土ブロックを含む粘土が厚い堆積をしており、上位に多くの土器片を含む。埋土の状況からは、第４・６層堆積後に第１～３層まで掘り直されたともみられる。

遺物は、最下層から弥生土器の甕が出土した。**314** は、口縁部を「く」の字状に外反する。**315** は讃岐地域からの搬入品である。**317** は外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）



1　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
2　褐灰色粘質土（10YR5/1）
3　灰黄褐色粘土（10YR5/2）
4　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［ブロック状に堆積］
5　褐灰色粘土（10YR4/1）
6　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）［ブロック状に堆積］
7　黒褐色粘土（10YR3/1）
8　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
9　黒褐色粘土（10YR3/1）［灰黄褐色粘土ブロック含む］
10　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）［ブロック状に堆積］
11　暗灰黄色細砂まじり粘土（2.5Y5/2）［ブロック状に堆積］
12　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［灰色粘質土ブロック含む］

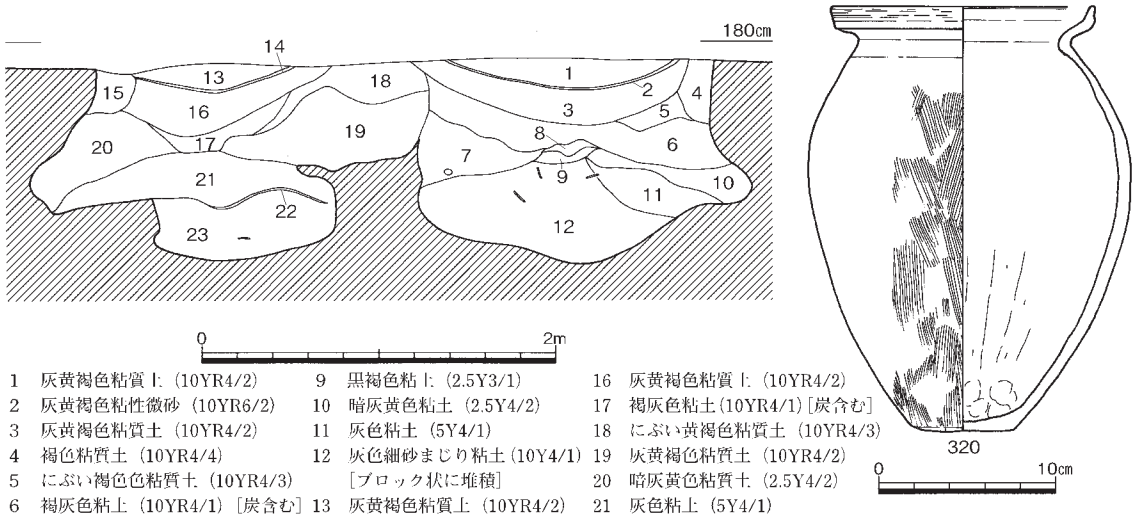


第 199 図　袋状土壙 152（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 153（第 200 図、図版 21-6 ～ 8・22-1）

この土壙は、調査区西部に位置し、袋状土壙 152 の南２m に検出された。土壙の規模は、長さ約 320㎝、幅約 130 ～ 150㎝を測り、平面はヒョウタン形を呈している。残存している深さは 111 ～ 115㎝を測るが、底面の凹凸が著しい。底面の海抜高は 55 ～ 57㎝である。土壙内の堆積は、大きく第１～ 12 層、第 13 ～ 23 層に分かれ、２基の土壙の存在が指摘できる。特に第 13 ～ 23 層の土壙は複雑な断面形を呈している。平面形から見て、さらに２・３基の土壙が重複していると考えられる。土層断面の観察から、複数回掘削と埋め戻しが行われていたと考えられる。

出土遺物としては、**320** の甕が検出された。**320** は頸部から大きく外反し、さらに上方に延びる口縁部をもつ。口縁端面には一条の退化凹線文が施される。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整している。この土器の時期はその特徴から弥・後・Ⅳと考えられる。　（小松原）

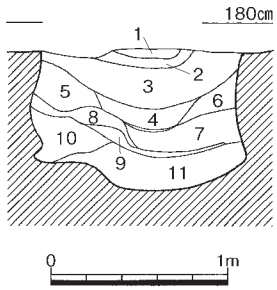


1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　灰黄褐色粘性微砂（10YR6/2）
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　褐色粘質土（10YR4/4）
5　にぶい褐色色粘質土（10YR4/3）
6　褐灰色粘土（10YR4/1）［炭含む］
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　黒褐色細砂まじり粘土（2.5Y3/2）［ブロック状に堆積］
9　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
10　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
11　灰色粘土（5Y4/1）
12　灰色細砂まじり粘土（10Y4/1）［ブロック状に堆積］
13　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
14　灰黄褐色粘性微砂（10YR6/2）
15　褐色粘質土（10YR4/4）
16　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
17　褐灰色粘土（10YR4/1）［炭含む］
18　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
19　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
20　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
21　灰色粘土（5Y4/1）
22　灰色細砂（7.5Y5/1）
23　灰色細砂まじり粘土（10Y4/1）［ブロック状に堆積］

第 200 図　袋状土壙 153（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 154（第 201 図、図版 22-2）

調査区西半南端に位置し、袋状土壙 155 の南約 2m に検出された。規模は長径 155cm、短径 110cmで、平面は楕円形を呈する。残存する深さは 80cmを測る。底面の海抜高は 85cmである。第７～10 層では基盤層の土がブロック状に入る。第１～３層は自然堆積。図示できる遺物はないが周囲の状況から、土壙の時期は他の土壙と大差ないと考えられる。　（小松原）

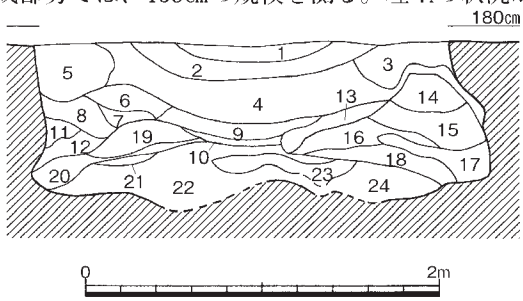


1　灰白色土（10YR7/1）
2　灰白色土（2.5Y7/1）［下層に砂小塊含む］
3　褐灰色土（10YR6/1）
4　黄灰色土（2.5Y5/1）
5　明褐灰色土（7.5YR7/2）
6　明褐灰色土（7.5YR7/2）
7　黄灰色土（2.5Y5/1）［淡黄色土斑点・炭含む］
8　褐灰色土（10YR6/1）
9　灰白色土（7.5Y7/1）
10　褐灰色土（7.5YR5/1）
11　灰白土（7.5Y5/1）［植物遺体含む］

第 201 図　袋状土壙 154（1/40）

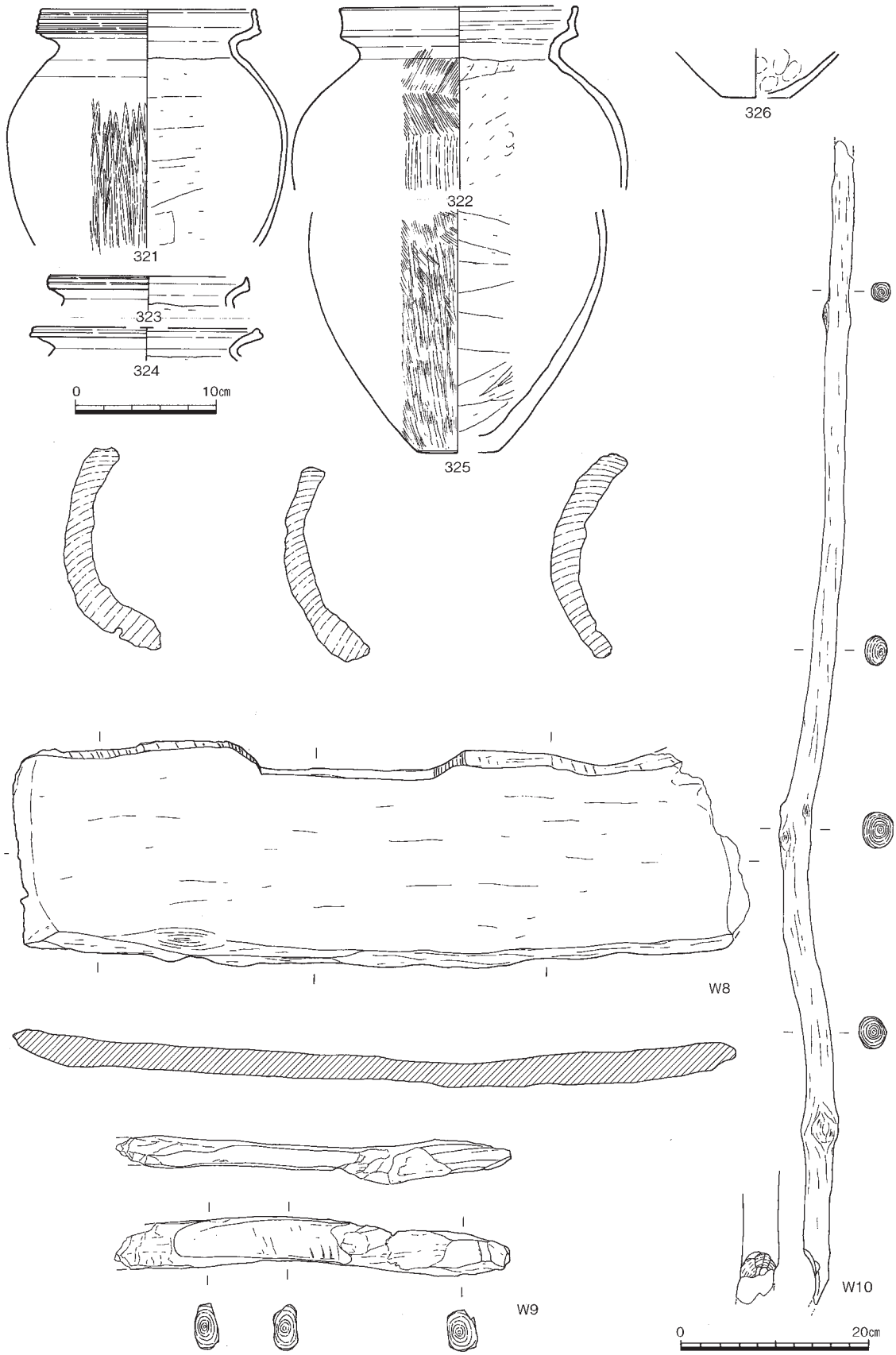
袋状土壙 155（第 202 図、図版 22-3・4）

袋状土壙 154 の北上に位置する。規模は、75 × 65cmで、深さ 77cmを測る。平面形態は円形を呈する。しかし、断面図作成部分では、465cmの規模を測る。埋土の状況からは、重複が推定されるが、



1　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
2　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
3　褐色砂質土（10YR4/4）
4　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
5　褐色砂質土（10YR4/4）
6　褐色粘質土（10YR4/4）
7　灰黄褐色粘性微砂（10YR4/2）
8　褐灰色粘性微砂（10YR4/1）
9　黄灰色粘性微砂（2.5Y4/1）［植物質のものを含む］
10　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
11　にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）
12　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
13　灰黄褐色粘性微砂（10YR4/2）
14　褐色粘質土（10YR4/4）
15　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
16　褐灰色粘土（10YR4/1）
17　黄褐色砂まじり粘質土（2.5Y5/3）［ブロック状に堆積］
18　暗灰黄色砂まじり粘土（2.5Y5/2）［ブロック状に堆積］
19　褐灰色粘土（10YR4/1）
20　暗灰黄色砂まじり粘土（2.5Y5/2）［ブロック状に堆積］
21　灰色粘土（5Y4/1）
22　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［オリーブ灰色砂質土ブロック含む］
23　灰色粘土（5Y4/1）
24　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［オリーブ灰色砂質土ブロック含む］

第 202 図　袋状土壙 155（1/40）



第 203 図　袋状土壙 155 出土遺物（1/4・1/6）

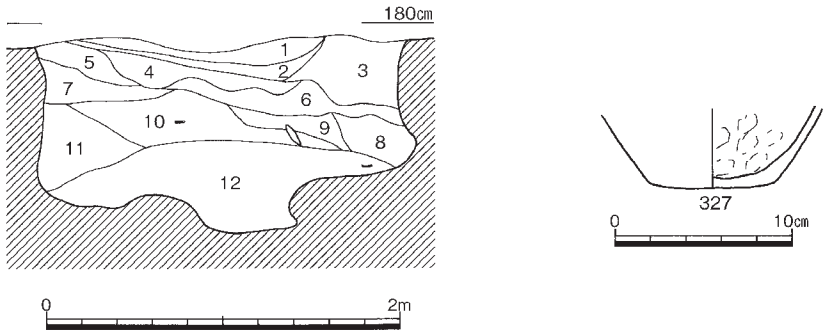
具体的に把握できていない。

出土遺物は、土器と木製品である。**321** は、口径 15㎝を測る甕である。口縁部外面には、４条の凹線文を施すが、ナデで消える部分が認められる。器面は煤付着し、内面には炭化物の付着を認める。**322** は、口径 16.6㎝を測る甕で、器面には煤が付着する。**323** と **324** は、口縁部に凹線文をもつ甕である。**325** と **326** は、底部片である。**W8** は、残存長さ 78㎝、幅 23.2㎝、厚さ 3.5㎝を測る槽である。長辺側には、抉りが認められる。材質は、コナラ属アカガシ亜属である。**W9** は、残存長さ 41.8㎝、幅５㎝、厚さ 3.2㎝を測る不明木器である。材質は、シブラジイである。**W10** は、残存長さ 123.4㎝、径４㎝を測る不明木器である。先部分が、加工されている。**321** と **325** および木製品は、トレンチに掛かったため南東側の袋状部分を拡張して、その底面から検出された。（下澤）

袋状土壙 156（第 204 図）

第Ⅴ区の袋状土壙 155 の北西２m に位置する。平面形は、170 × 110㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは 106㎝を測る。床面は凹凸を呈しており、中央にて一段掘り込まれた海抜高は 54㎝を測る。埋土は 12 層に区分できる。堆積状況は、下層の第 10 ～ 12 層が地山ブロックを含む埋土が認められることから、人為的な埋め戻しとみられる。第８層は、上部壁の崩落土と考えられる。

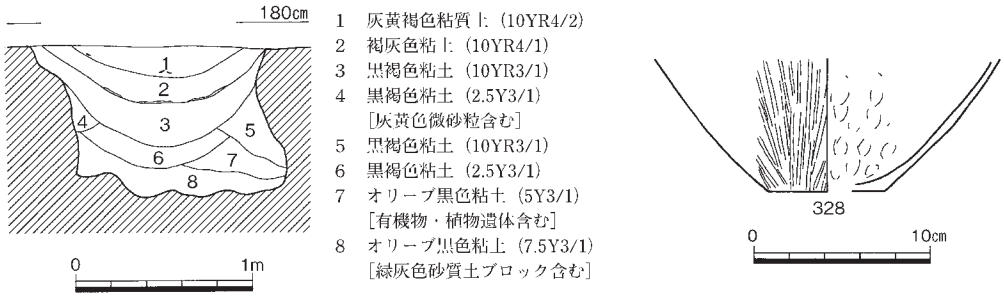
出土遺物は、第 12 層から弥生土器が検出された。**327** は甕の底部である。外面は煤の付着、内面には炭化物がみられる。検出中に桃の種が出土している。時期は、弥・後・Ⅳに比定される。（水田）



1　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
4　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）
5　灰黄褐色細砂まじり粘質土（10YR5/2）
　［ブロック状に堆積］
6　褐灰色粘土（10YR5/1）
7　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
　［ブロック状に堆積］
8　黄灰色粘性微砂（2.5Y5/1）
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
10　暗灰黄色粘質土（2.5Y5/2）
　［ブロック状に堆積］
11　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［黄灰色砂質土ブロック含む］
12　灰色粘土（5Y4/1）
　［オリーブ灰色粘質土ブロック含む］

第 204 図　袋状土壙 156（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 157（第 205 図、図版 22-5）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
2　褐灰色粘土（10YR4/1）
3　黒褐色粘土（10YR3/1）
4　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
　［灰黄色微砂粒含む］
5　黒褐色粘土（10YR3/1）
6　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
7　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［有機物・植物遺体含む］
8　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］

第 205 図　袋状土壙 157（1/40）・出土遺物（1/4）

第Ⅴ区の袋状土壙156の３m北に位置する。平面形は、140×110㎝の不整円形を呈する。検出面からの深さは85㎝、底面海抜高は80㎝を測る。壁面は、東側の中位部で大きく抉れているが、西側はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は８層に区分できる。埋土の状況から第４・５層の堆積後に、第１～３層が掘り直されているとみられる。第７層には、当年性と考えられる小枝が含まれる。

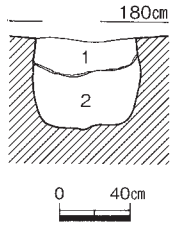
遺物は、甕の底部**328**が第１層から出土した。時期は、弥・後・Ⅳに位置づけられる。　（水田）

袋状土壙158（第206図、図版22-6）

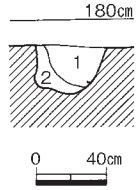
袋状土壙156の北東上に位置する。規模は、100×80㎝、深さ119㎝を測る。埋土中には、他の袋状土壙に存在する灰白色砂の層を認める。　（下澤）

袋状土壙159（第207図、図版22-7）

袋状土壙157の東側に位置する。規模は、70×40㎝、深さ139㎝を測る。その内容から土壙と理解したい。　（下澤）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［灰白色砂質土の薄い層含む］
2　黄灰色粘土（2.5Y4/1）



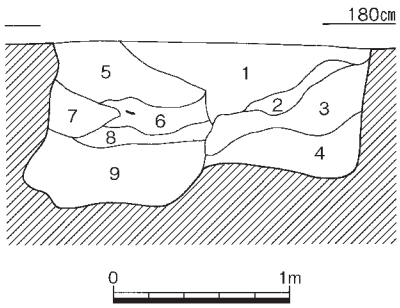
1　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
2　灰黄褐色粘土（10YR4/2）

第206図　袋状土壙158（1/40）　第207図　袋状土壙159（1/40）

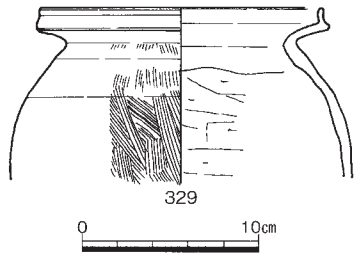
袋状土壙160（第208図、図版22-8）

この土壙は、調査区中央やや北寄りに位置し、袋状土壙159の南隣に検出された。土壙の規模は、約360×250㎝で、平面は不整形である。平面形状からみて土壙が２基以上重複していると思われる。残存する深さは75～94㎝を測る。底部の海抜高は77～90㎝を測る。土壙の堆積土は、大きく第１～４層、第５～９層に分かれる。埋土のほとんどにブロック状に入る基盤層の土が確認できるので、短い間での埋め戻しが想定できる。しかし、その短期間でも土層の切り合いから複数回の使用の可能性を考えることができる。

出土遺物としては**329**の甕が確認されている。土器の特徴からこの土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。　（小松原）



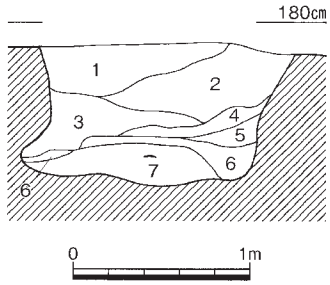
1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［褐灰色粘質土ブロック状に堆積］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　黄褐色砂質土（2.5Y5/4）
　［黄灰色粘質土ブロック状に堆積］
4　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［暗灰黄色砂質土ブロック含む］
5　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［ブロック状に堆積］
6　黒褐色粘土細砂（2.5Y3/1）
7　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
8　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
9　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］



第208図　袋状土壙160（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙161（第209図、図版23-1）

第Ⅴ区の中央南側、袋状土壙162の１m南に位置する。平面形は、170×110㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは85㎝、底面海抜高は88㎝を測る。第５層には、炭粒が認られる。最下層から甕**330**が出土している。時期は、弥・後・Ⅳに比定できる。　（水田）

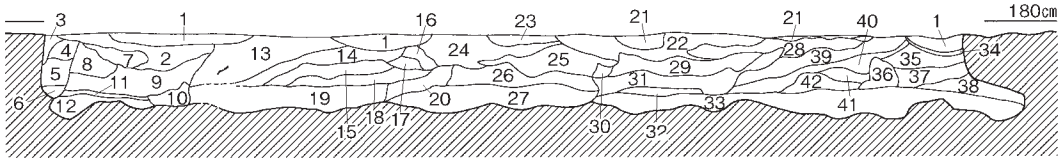


1　灰褐色土（7.5YR6/2）
2　褐灰色土（10YR5/1）
　［灰白色粘土塊含む］
3　褐灰色土（10YR5/1）
4　褐灰色土（10YR5/1）
　［にぶい黄橙色粘土塊含む］
5　褐灰色土（10YR5/1）
　［炭、にぶい黄橙色粘土塊含む］
6　褐灰色土（7.5YR5/1）
　［灰色粘土含む］
7　オリーブ灰色土（2.5GY6/1）
　［灰色土含む］

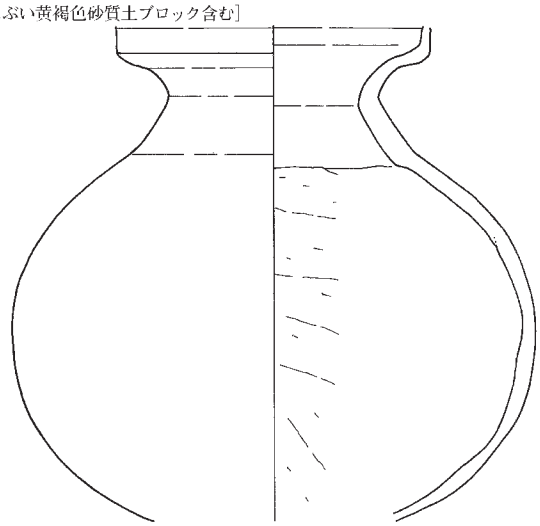
第209図　袋状土壙161（1/40）・出土遺物（1/4）

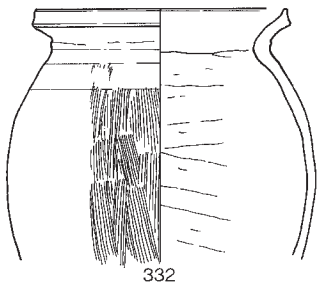
袋状土壙 162（第 210 図、図版 23-2 ～ 7）

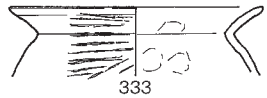
袋状土壙 155 の東側に位置する。規模は、東西の長さ 10.5m を測るが、幅となる南北側は凹凸が顕著であり、単独の遺構として計測できない。プラン検出時において、その内容から重複が想定されたが、明確な数および前後関係は把握できなかった。断面観察時においては、袋状土壙の最終堆積土

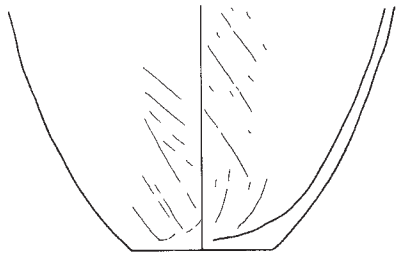


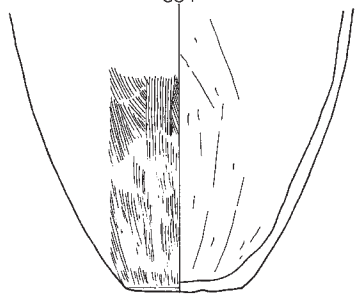
1　褐色砂質土（10YR4/4）
　［ブロック状に堆積］
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
3　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［ブロック状に堆積］
4　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
5　褐灰色粘質土（10YR4/1）
6　灰オリーブ色砂質土（5Y4/2）
7　褐灰色粘土（10YR4/1）
8　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
9　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
10　暗オリーブ灰色砂質土（5GY4/1）
　［ブロック状に堆積］
11　暗オリーブ灰色砂質土（5GY4/1）
　［ブロック状に堆積］
12　灰色粘土（5Y4/1）
13　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）
　［ブロック状に堆積］
14　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）
15　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
16　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）
　［ブロック状に堆積］
17　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
18　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
19　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］
20　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
21　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
22　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
23　褐色砂質土（10YR4/4）
　［ブロック状に堆積］
24　黄褐色砂質土（10YR4/3）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
25　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）
　［ブロック状に堆積］
26　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
　［黄褐色粘質土ブロック含む］
27　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
　［灰色砂質土ブロック含む］
28　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）
　［ブロック状に堆積。下層黄褐色砂質土含む］
29　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
30　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
31　黄褐色砂質土（2.5Y5/3）
　［ブロック状に堆積。上層にぶい黄褐色土含む］
32　暗灰黄色砂まじり粘土（2.5Y4/2）
33　黄灰色粘土（2.5Y4/1）［灰色砂質土ブロック含む］
34　褐灰色粘質土（10YR4/1）
35　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
36　黒褐色粘質土（2.5Y3/2）
37　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
38　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
39　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
40　黄褐色砂質土（2.5Y5/3）［ブロック状に堆積］
41　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
42　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）











第 210 図　袋状土壙 162（1/80）・出土遺物（1/4）

の形状を示す土層が５か所認められている。しかし、土層断面から７個の袋状土壙の重複と判断した。

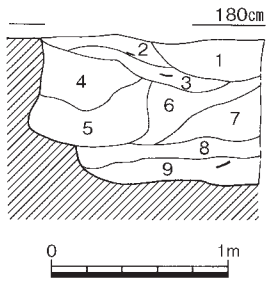
その７個の土層関係は、①が第３～６、②が第２・７～12、③が第１・13～19、④が第23～27・30、⑤が第21・22・29・31・32、⑥が第39～42、⑦が第１・34～38であるが、先に記した最終堆積層とした土層は、②と③の間の第１層、③と④の間の第１層、④の第23層、⑤の第21層、⑦の第１層が相当する。そして、その前後関係は、その土層関係から西から東に重複しているようであるが、⑥と⑦は、第１と34層の内容から⑥が⑦よりも先に設けられていた。

底面の深さは、69～95㎝を測る。最下層の堆積層は、先に示した重複した袋状土壙に伴う内容を示すが、⑤～⑦のそれは第33層で共通している。これより上層では、重複関係を示す堆積状態が認められるが、この層にまでは達していない。

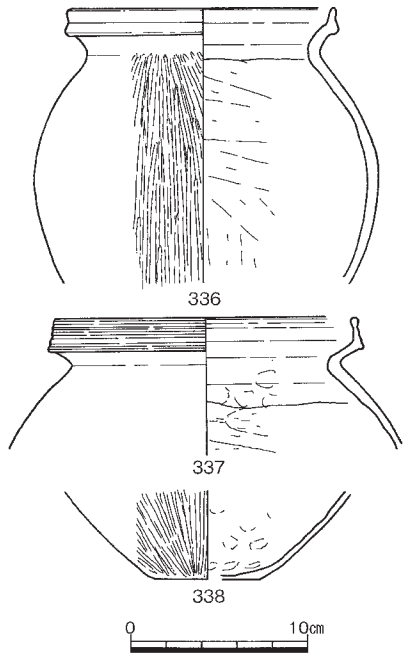
出土遺物は、**331**～**335**の壺と甕である。**331**は、口径17.4㎝で内外面とも剝離が著しい。**332**は、口径14㎝で外面にハケを施し、煤が付着する。**333**は、口径14.1㎝で器面にタタキを施し、煤が付着する。**334**と**335**は、底部片で煤が付着する。出土位置は、**332**と**334**が③の第13層である。**331**は、第212図上層断面図の南側であり、④の第24層からの検出である。（下澤）

袋状土壙163（第211図）

第Ⅴ区の袋状土壙160の１m南に位置する。遺構は建物の基礎による影響を受けており、平面形は不明確である。深さは、海抜高は90㎝を測る。堆積状況からこの袋状土壙は２回の掘り直しがみられる。第６層の堆積後に第４・５層の袋状土壙を再掘削している。第４層の堆積後に第２・３層の土壙が掘削される。遺物は弥生土器の甕**336**～**338**が出土している。（水田）



1　造成土
2　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
5　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
6　にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）
　［ブロック状に堆積］
7　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
8　灰オリーブ色粘土（5Y4/2）
9　灰色粘土（5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］

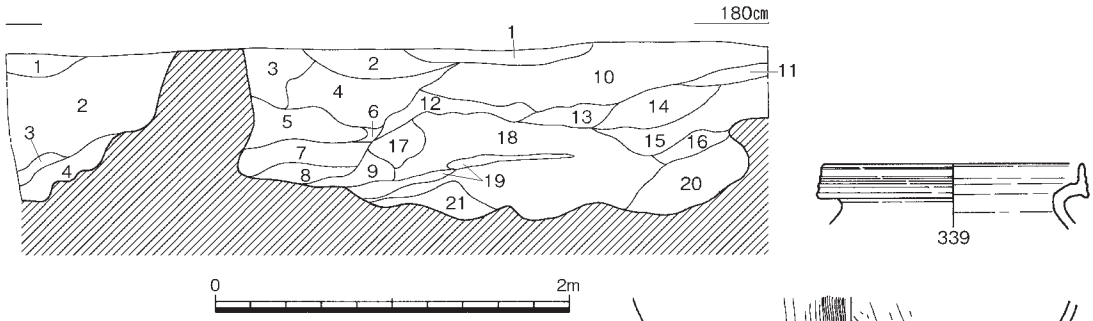


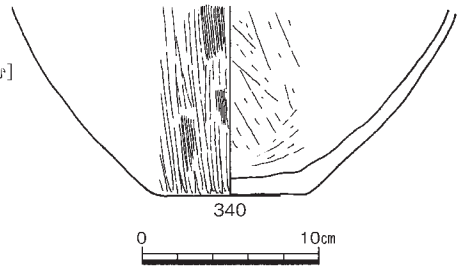
第211図　袋状土壙163（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙164（第212図、図版23-6・7）

この土壙は、調査区のほぼ中央に位置し、袋状土壙163の東約４mに存在する。土壙の規模は、約230×約200㎝を測る。平面は不整形で、円形・楕円形の土壙が数基重複している状況を示している。図示した断面図の中で南端の土壙は袋状土壙162の一部である。残存している深さは100㎝を測り、底面は凹凸があり海抜高は69㎝である。土壙内の堆積は、第１～21層が認められるが、大きく第２～９層、第10～21層に大別できる。堆積土には、おおむね基盤層の土がブロック状に入る状況が観察できる。

339は袋状土壙162からの出土、**340**は袋状土壙164からの出土である。土壙の時期は、土器の特徴から弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）





1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
2　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）
　［ブロック状に堆積］
3　緑灰色砂質土（7.5GY6/1）
　［ブロック含む］
4　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［ブロック含む］

1　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）
2　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
3　褐色砂質土（10YR4/4）
4　褐灰色粘質土（10YR4/1）
5　オリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3）
6　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）
　［ブロック状に堆積］
9　黒褐色粘土（2.5Y3/1）
10　褐灰色粘質土（10YR4/1）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
11　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
12　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
13　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［黄褐色砂質土ブロック含む］
14　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
15　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）
　［黄褐色砂質土ブロック含む］
16　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
17　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
18　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［オリーブ灰色砂質土ブロック含む］
19　オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）
　［ブロック状に堆積］
20　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［オリーブ灰色砂質土ブロック含む］
21　オリーブ灰色砂質土（5GY5/1）
　［ブロック状に堆積］

第 212 図　袋状土壙 164（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 165（第 213 図、図版 23-8）

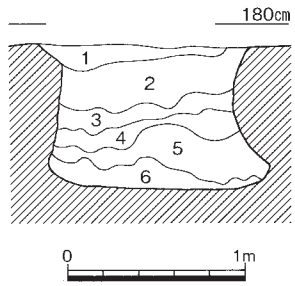
調査区のほぼ中央やや北寄りに位置し、袋状土壙 164 の北隣である。径約 80㎝、残存する深さは 84㎝、底面の海抜高は 87㎝である。土層は均質な粘土層と基盤層の土がブロック状に入る層が互層となっており、数次にわたり掘削と埋め戻しを繰り返したとみて取れる堆積状況であった。図示できる遺物はないが周囲の状況から、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）

袋状土壙 166

（第 214 図、図版 24-1）

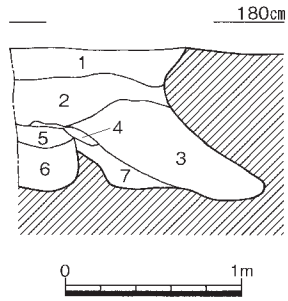
この土壙は、調査区の東半やや中央寄りにあり、袋状土壙 165 の東約 4 m に位置する。規模は、長径 170㎝、短径 105㎝で、平面は長楕円形を呈している。残存している深さは 85㎝を測る。底面はほぼ水平で、海抜高は 80㎝である。断面形は、底部が外側に抉られている。土壙内の堆積土は、第１～６層が認められる。

図示できる遺物はないが周囲の状況から、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



1　灰オリーブ色粘質土（5Y4/2）
2　オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）
　［灰オリーブ色砂質土ブロック含む］
3　オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）
4　灰オリーブ色粘質土（5Y4/2）
　［暗オリーブ色粘質土ブロック含む］
5　灰色粘土（5Y4/1）
6　灰色粘土（5Y4/1）
　［オリーブ灰色砂質土ブロック含む］

第 213 図　袋状土壙 165（1/40）



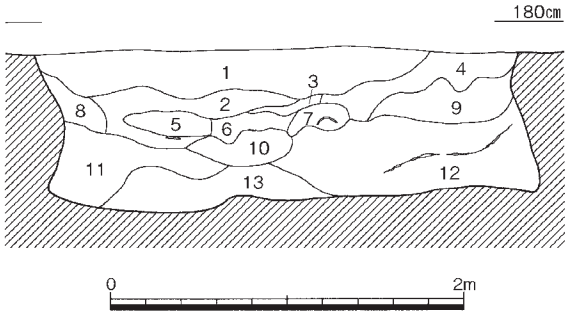
1　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）
2　オリーブ黒色粘土（5Y3/2）
　［暗オリーブ色砂質土ブロック含む］
3　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
4　オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）
　［ブロック状に堆積］
5　灰色粘土（5Y4/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
6　灰色粘土（7.5Y4/1）
7　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］

第 214 図　袋状土壙 166（1/40）

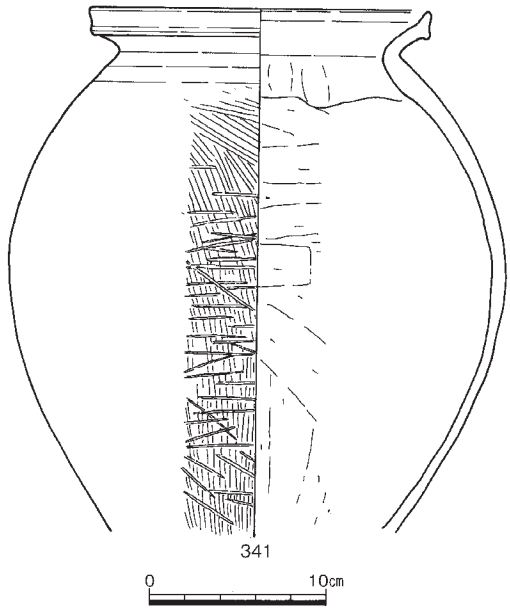
袋状土壙 167（第 215 図）

袋状土壙 166 の北東上に位置し、先に記したように岡山市のトレンチ C1 の北東部分にかかる。規模は、270 × 130㎝を測り、平面形態は楕円を呈する。深さは、72 と 83㎝の２か所の面が認められ、土層堆積内容から重複の可能性があるが、具体的に把握できなかった。土層第 12 層中の植物は、木片状のもので、面的な広がりの可能性がある。

出土遺物は、**341** で第 12 層から検出している。**341** は、口径 19㎝を測る甕である。外面調整は、粗いタテハケ後細かいヘラミガキ、内面はヘラケズリを施している。（下澤）



1　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　褐灰色粘質土（10YR4/1）［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
4　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）［ブロック状に堆積］
5　にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）［ブロック状に堆積］
6　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
7　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
8　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）
9　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
10　黒色粘土（2.5Y2/1）
11　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）［灰色砂質土ブロック含む］
12　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
［灰色砂質土ブロック、炭化した植物遺体の薄い層含む］
13　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）

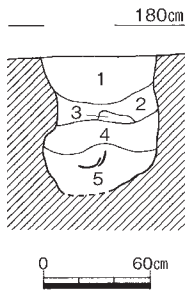


第 215 図　袋状土壙 167（1/40）・出土遺物（1/4）

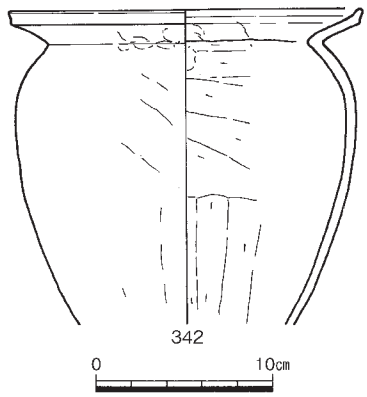
袋状土壙 168（第 216 図、図版 24-2）

第Ⅴ区の袋状土壙 169 の２m 南に位置する。平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは 80㎝、底面の海抜高は 85㎝を測る。埋土は５層に区分できる。第１～５層までは、粘質土が水平な堆積をしている。第１と５層には地山ブロックが含まれており、人為的な埋め戻しとみられる。

遺物は、最下層から弥生土器の甕が出土した。**342** は、口縁部を「く」の字状に外反し、端部をわずかに上方へ摘み上げる。肩部に最大径が認められる。時期は弥・後・Ⅳに位置づけられる。（水田）



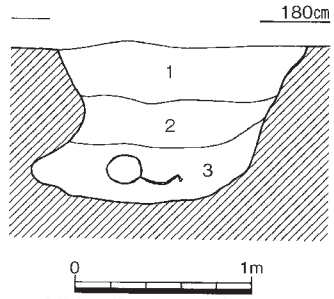
1　褐灰色粘質土（5YR5/1）
［ブロック含む］
2　褐灰色粘質土（5YR4/1）
3　黒褐色粘質土（10YR3/1）
［細砂含む］
4　黒褐色粘質土（7.5YR3/1）
5　暗赤灰色粘質土（7.5R3/1）
［ブロック含む］



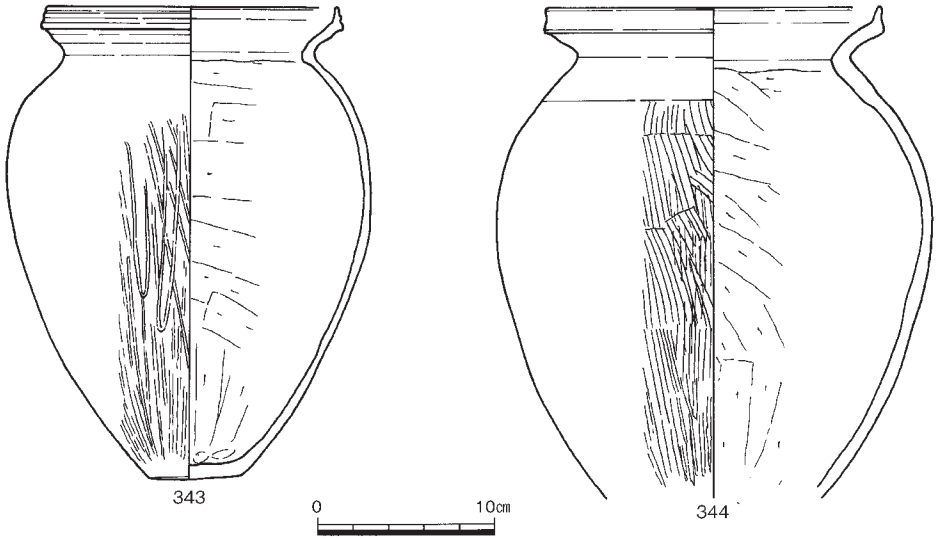
第 216 図　袋状土壙 168（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 169（第 217 図、図版 24-3）

この土壙は、調査区の東半に位置し、袋状土壙 167 と 168 の間に検出された。土壙の規模は約 140 × 110㎝で、平面は不整円形を呈している。残存する深さは 91㎝を測る。底面の海抜高は 76㎝である。土層は水平に堆積し、基盤層の土がブロック状に入っているので、短期間に人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物には、**343・344** の甕がある。**343** は、口縁端面に退化凹線が巡る。ともに内面は頸部まで丁寧なヘラミガキが施されている。これらの遺物の特徴から、土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えられる。（小松原）



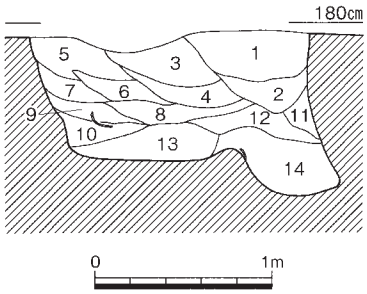
1　浅黄色粘質土（2.5Y7/3）
　［白黄色土ブロック含む］
2　黄灰色粘質土（2.5Y5/1）
　［白黄色土ブロック含む。下層グライ化］
3　黄灰色砂質土（2.5Y5/1）



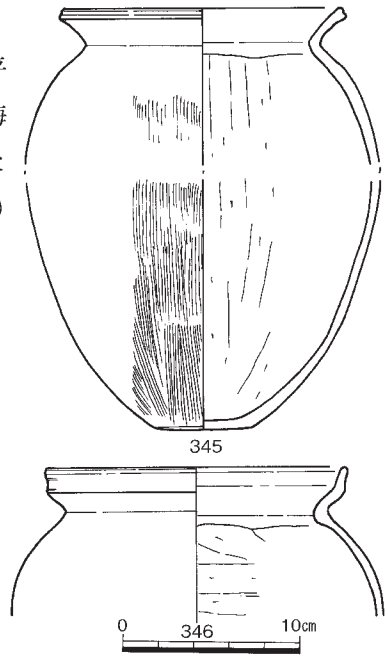
第 217 図　袋状土壙 169（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 170（第 218 図、図版 24-4）

調査区の東半やや南寄りに位置する。規模は直径約 160㎝で、平面は不整円形を呈する。残存する深さは最深部で 91㎝、底面の海抜高は最深部で 84㎝を測る。土層の堆積状況から、数度の掘削と埋め戻しが確認できる。時期は弥・後・Ⅳである。（小松原）



1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
2　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［黄灰色砂質土ブロック含む］
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　褐灰色粘土（10YR4/1）
　［黄灰色砂質土ブロック含む］
5　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
　［にぶい黄褐色砂質土ブロック含む］
6　褐灰色粘土（10YR4/1）
7　灰黄褐色粘土（10YR4/2）
8　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
9　暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）
10　黒褐色粘土（2.5Y3/2）
11　褐灰色粘土（10YR4/1）
12　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
13　オリーブ黒色粘土（5Y3/1）
　［緑灰色砂質土ブロック含む］
14　オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）

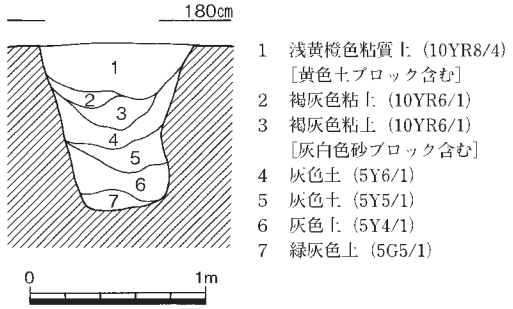


第 218 図　袋状土壙 170（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 171（第 219 図、図版 24-5）

袋状土壙 169 の北東側に位置する。規模は 160 × 110㎝、深さ 73㎝を測り、平面形態は楕円状を呈する。断面形状は、西側が斜めに掘り下げられるが、東側は「く」の字状を呈している。また、作図の位置が短軸方向のため重複の有無については不詳である

埋土は、７層認められ第３と５層に微砂のブロック、第１層中に黄色ブロックを含む。（下澤）



第 219 図　袋状土壙 171（1/40）

袋状土壙 172（第 220 図、図版 24-6）

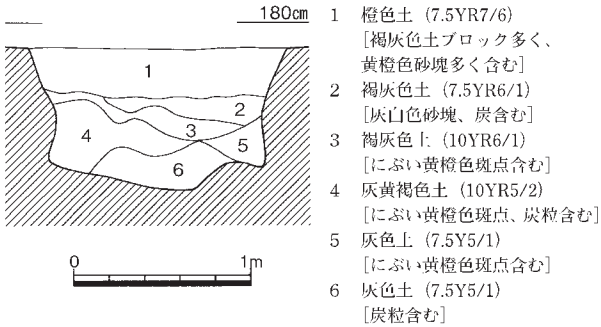
袋状土壙 170 の北上方に位置する。規模は 150 × 80㎝、深さ 86㎝を測る。平面形態は、楕円状を呈する。断面形状は、両断面とも抉りを形成しているが、西壁は段状となる。平面および底面の形状から重複を思考したが、埋土の内容から単独であると判断した。

埋土は、最上層の第１層がレンズ状堆積ではなく、水平の厚い単一層で形成されている。　（下澤）

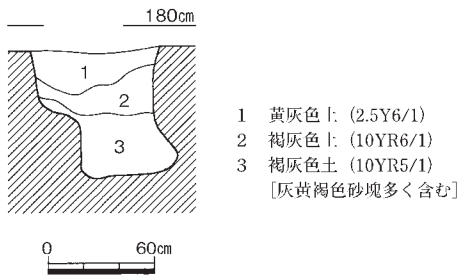
袋状土壙 173（第 221 図、図版 24-7）

袋状土壙 171 の東側に位置する。規模は 100 × 70㎝、深さ 93㎝を測る。平面形態は、円形に近い形状を呈する。断面形状は、西側が段状を呈し、東側は緩やかな抉りを示す。

埋土の堆積は、３層認められる。最下層は、厚さ 35㎝の水平堆積となる。レンズ状堆積を示すのは、最上層であり、明瞭に凹んだ状態が観察される。　（下澤）



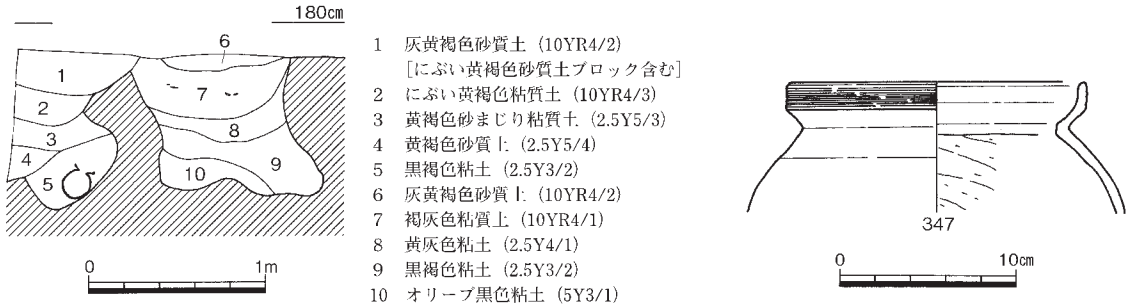
第 220 図　袋状土壙 172（1/40）



第 221 図　袋状土壙 173（1/40）

袋状土壙 174（第 222 図、図版 24-8）

この土壙は、調査区の南東隅に位置し、袋状土壙 173 の南約３m に検出された。土壙の規模は、直径約 100㎝で、平面形はほぼ円形を呈している。残存していた深さは 79㎝を測る。底面は凹凸があり、海抜高は 83㎝である。断面形は、上部はやや斜めに張られ、底部は外側に大きく抉られるように掘られている。第 222 図の断面図のうち左側は袋状土壙 175 である。土壙内には、第６～10 層が堆積している。出土遺物としては、７層から **347** の甕などが検出されている。遺物の観察から土壙の時期は古・前・Ⅰと考えられる。　（小松原）

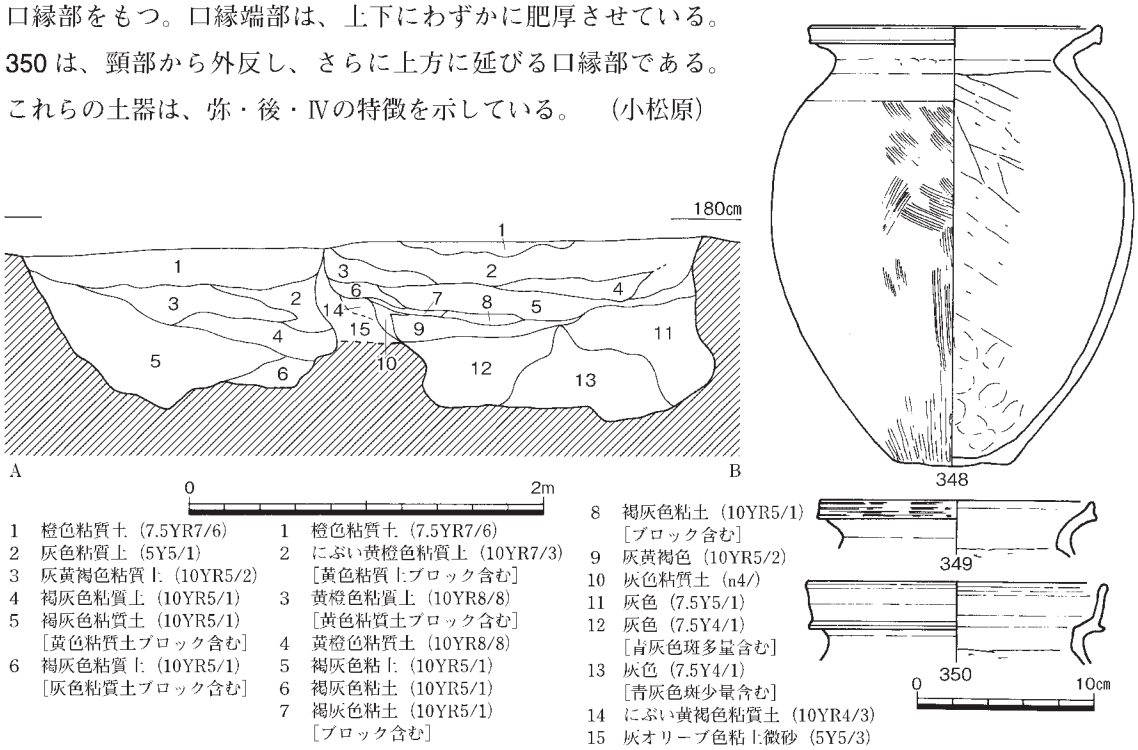


第 222 図　袋状土壙 174（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 175（第 223 図、図版 24-8・25-1・2）

この土壙は、調査区の南東隅に位置し、袋状土壙 174 の北東側に隣接して検出された。土壙は、大きく２基の 175 Ａと 175 Ｂの土壙が連なっている状況を示しているが、さらに土壙が重複している可能性もある。土壙 175 Ａと 175 Ｂの切り合い関係も明確ではない。南側 175 Ａ第１～６層は、長さ約 210㎝、幅約 90㎝、深さ 90㎝を測り、北側 175 Ｂの７～ 13 層は長さ約 190㎝、幅約 90㎝、深さ 104㎝である。双方とも平面は長楕円形を呈している。土壙の主軸は、北西から南東方向にとる。断面は、いずれも不定形で、底部は凹凸があり安定していない。土壙内の堆積層には、基盤層である黄褐色土のブロックを含むものが多く確認でき、掘削の後すみやかに埋め戻しされた状況が看取される。

出土遺物としては、**348** ～ **350** の甕が検出されている。**349**・**350** は、頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は、上下にわずかに肥厚させている。**350** は、頸部から外反し、さらに上方に延びる口縁部である。これらの土器は、弥・後・Ⅳの特徴を示している。　（小松原）



第 223 図　袋状土壙 175（1/40）・出土遺物（1/4）

袋状土壙 176（図版 25-3）

袋状土壙 164 の西に接して位置する。建物基礎のコンクリートパイルのため図版に示すように、抉り部分の一部を確認できたのに止まった。　（下澤）

第４章　結　語

第１節　袋状土壙について

今回の調査で検出された遺構は、袋状土壙が主要なものである。報告した遺構数は、176 基である。しかしながら、単体で検出された割合は少なく、重複した状態のものが多く認められ、断面図等から判断すると、その遺構数は 233 基と判断される。報告した袋状土壙は、一般的に認識されている性格の貯蔵穴を意味するものではなく、形態が巾着袋状となることから呼称したのである。このことから、改めて南方遺跡で検出された袋状土壙について、その性格を明らかにする。

形態　平面形態は、遺構検出面が第１章に記したように、検出を容易にするため検出面を下げたため、より高い面における掘り込みの検出を行っていない。さらに、重複するものが多く、単体での検出割合が少ないことから、当初の姿では把握されていない可能性が思考される。このようなことを前提として見ていくと、不整円形と楕円状が多い傾向が認められる。

断面形態は、検出された遺構全てが袋状を呈することはない。以下、特徴を示す例を記す。

・袋状土壙 21 は、壁面が弓状に外反し、底面下端が平面掘り方よりも外側で、底面は平坦となる。
・袋状土壙 23 は、壁面が緩やかに内径し、底面下端がやや抉り気味となる。袋状土壙 36 は、壁面の外反が弱く、底面下端にたる部分は深く抉られる。
・袋状土壙 66 は、壁面の外反と底面下端には顕著な抉りがない。袋状土壙 105 は、逆「ハ」の字状に広がり、抉りを持たない。
・袋状土壙 107 は、上方に受け口状となり、他方は垂直に掘り込み、底面下端は抉られている。
・袋状土壙 143 は、一般的な土壙の形状を示し、抉りを形成しない。

等が認められる。なお、底部の形状では、平坦となるのが多く認められるが、袋状土壙 152 のように椀を伏せたような内容を示すものも確認されている。

深さ　袋状土壙のプラン確認レベルは、第１章第２節で記したように工事関係の条件整備の段階に置いて、すでに海抜 190㎝の高さに整地されていた。このことから、その影響を受けていない高さである 170㎝を検出面とした。このことから、報告されている遺構のレベルは、この高さに均されている。しかしながら、これよりも高い位置で掘り込みが確認されたのが存在する。それが、袋状土壙 149 と 150 である。これらは、平面プランで検出されずに調査区境の土層断面中に確認された。このうち袋状土壙 149 は、近世の井戸と重複しわずかに残された掘り込み面が 197㎝であることを確認できた。このことから、可能性として調査時検出面よりも高い位置で掘り込まれたことが推測される。第 197 図は、この 197㎝からの深さを示している。このことから、底面は海抜 50 ～ 90㎝の間に集中している。このようなことから、袋状土壙の深さは、さらに深くなり、それは 110 ～ 140㎝の間に多く位置している。この他に、最も深いのは袋状土壙 106 の 161㎝、浅いものは袋状土壙 159 の 58㎝である。

袋状土壙底面の土層　調査の半ば過ぎまで砂層は、袋状土壙の性格と関わるとの思考が欠落してい

た。しかしながら、調査が進むにつれその認識を少しずつ変えていったが、すでに、調査がかなり進んだ段階であったことから記録は十分に残せていない。砂層は、調査区全面に認められる。そのレベルは、第Ⅴ区からⅡ区の北東にかけて、海抜120㎝前後で粘質土に砂が混じり、直ぐに砂となり一部で湧水層となっている。明確にこのように砂層が把握したのは、この部分であり、この他の調査区北西側においては砂層まで達しない。また、調査区南寄りでは厚い粘土と砂の混在した層となっている。

重複　報告した袋状土壙数は176であるが、その内の40％を越えて重複している。最も多くの重複が認められたのは、袋状土壙162である。この土壙は、東に向かって掘られていることが、土層断面図から読み取れる。また、底面もほぼ一定となっている。重複する内容として特徴的なのは、袋状土壙掘り方のプラン内に収まるものである。この種の内容を有するのは、袋状土壙135や145が顕著な例であり、袋状土壙151も同様である。

埋土　埋没の最終段階近くと底面に認められる最初の埋土において、特徴的な様相を有している。前者については、図版16-4に見られる袋状土壙118の平面プラン検出時のものが、その内容を良く示している。図版で認められる白色の不整形のプランは、微砂によるものである。この内容は、第160図に明確にされていないが、第１層の線上に薄く認められている。この層は、第51図第２層の灰白色砂質土、第10図第２層の灰黄褐色粘質土微砂も同様である。さらに、袋状土壙１や５などは複数認められている。この砂層は、非常にきれいな層で水により運ばれ堆積されたものと判断している。

後者の底面に認められる埋土は、レンズ状堆積ではなく水平堆積となり、さらにその層中にブロックが含まれている。この底面の埋土の厚さは、最も厚いもので袋状土壙95の70㎝を測る。埋土が２層あるいは１層のみのが認められ、上部の削平が考えられるが、レンズ状堆積を示していない。さらに、袋状土壙152においては、椀を伏せたような盛り上がった形状を呈していた。このブロックが含まれる土層は、鑑定によれば『人為的擾乱の影響下で形成された堆積物であることが窺える』との見解が示され、調査時の認識と一致する。このようなことから、袋状土壙底面の埋土は、周辺土流入の埋積土ではなく、人為的に埋め戻されたことを示すものとして理解することが許されるであろう。

植物遺体　袋状土壙146第５層は、安定した状態で検出されている。この層は、袋状土壙157第７層の土層表記の中で有機物・植物遺体を含むとしたものと同じである。この層は、袋状土壙の土層表記に記していないことが多い。このことは、調査が断面観察が主となることから面的な追求をほとんどしていない。また、袋状土壙139の様に植物遺体層が重複しているのも認められる。その層の内容は、繊維状の条線が長軸方向にあって、横方向のものが認められない。その条線は、２～３㎜の間隔での単位、そして節などは認められなかった。このことから分析結果が出るまでは、葦類のものと考えていた。その結果は、『小枝などの木材遺体』であった。この原因は、『水による影響』によりもたらされたとされ、先の埋土の人為的な由来と異なることにより堆積されていたことが想定される。

遺物の出土状態　土器は、ほとんどが完形に復元できるのは検出されていない。ほぼ完全品なのは、306であるが、底部外面が剥落している状態である。その出土状態は、底面に置かれたことが示唆されるのが袋状土壙82である。後から掘り込まれた袋状土壙の底面端に沿うように検出されているが、先に記したように完形品ではない。袋状土壙10・35・101・117・169は、人為的に埋め戻

された土層中に、その上面にも認められるのが袋状土壙 26・31・132 などである。また、袋状土壙 15・53 のように検出面近くからの出土が認められている。

このような出土をみる土器の器種は、壺・甕・杯・直口壺の４種類であり、この内甕がそれらの 88％以上を占め、杯と直口壺は１点のみである。この甕は、外面に煤が付着している物が多く認められ、さらに底部内面には炭化粒の痕跡が残されているのも確認できている。

木製品は、興味深い出土内容を示している。**W4** は、長さが 123㎝、**W2** は幅 16.8㎝で長さもある物が、流入したことを想起させる斜めの状態ではなく、水平の状態で検出されていることが図版 12-8、同 13-1 および図版 15-3・4 で示されている。他の木器も同様な内容を呈しているが、この詳細については第３節に譲る。

時期　個々の土器による検討は第２節に記すが、ここでは大まかな時期を示しておく。出土している土器は、弥・後・Ⅳ期のものが大半を占めている。この時期よりも遡るのは、**43・65・101・330** である。また、古墳時代に入ると思われる **318・347** の土器も検出されている。このことから、袋状土壙が掘削されたのは、弥・後・Ⅲから古・前・Ⅰの間であり中心となるのは弥・後・Ⅳの段階である。

性格　このことについては、最初に記したように貯蔵穴と考えていない。これに近い内容は、倉敷市矢部奥田遺跡 (1) と総社市服部遺跡 (2) で粘土採掘（壙）坑として調査されている。掘り方の内容は、前者において『垂直もしくは袋状を呈す土壙を一回の単位とし、これらの土壙が接しもしくは重複するように連続して掘削された』とされ、このことは後者の『重複、連続しながら掘削されているため、検出時にはアメーバ状の不定形な遺構』と、ほぼ同様であることが思考される。埋土については、服部遺跡で『埋め戻し等がさされることなくそのまま放置され、主に自然堆積によって埋没』としている。このアメーバ状の不定形の掘り方は、袋状土壙 162 および第ＩＢ区の一部にそれに近い内容が認められる。アメーバ状の掘り方は、報告書の図を見る限り南方遺跡よりもかなり明確さに欠ける。さらに、大きく相違するのが、人為的に埋め戻しされた同じ袋状土壙内の中で重複が認められることである。

これらよりもさらに近い内容を示すのが、徳島県石井城ノ内遺跡 (3) である。この袋状土壙は、掘り方と人為的埋め戻しおよび時期においてもほぼ同じ内容を示している。その性格については、粘土採掘土壙としている。

南方遺跡の袋状土壙は、類例が粘土採掘坑との見解がみられるが、袋状土壙が時間の経過を経ずに埋め戻しが行われたこと、木器が埋め戻された面で置かれた内容での出土、さらには、同一土壙内における浅い位置での重複等を検討するにつけ、粘土採掘坑にするには無理があると判断するのである。当該袋状土壙の性格を窺い知ることができるのは、木器の出土状態である。このことから、現状では、木製品に関わる何らかの遺構と推測されるが更なる検討が必要であろう。　（下澤）

註

（1）「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 82』岡山県教育委員会 1986 年３月
（2）「服部遺跡」『岡山県文化財発掘調査報告 162』岡山県教育委員会 2002 年２月
（3）岡山真知子「石井城ノ内遺跡」『石井曽我団地地区県営住宅（石井曽我団地）建設工事関連発掘調査埋蔵文化財発掘調査報告』徳島県教育委員会 2004 年３月

第２節　讃岐系土器について

はじめに

今回の調査で、南方遺跡から出土した遺物の多くは弥生時代後期末を中心とする土器である。その中には岡山県南部の土器とは異なり、他地域から搬入された可能性があるものが含まれている。器種は甕が６点（110・121・139・168・305・315）あり、讃岐系と呼称されている中でも形態・調整技法・胎土において「香東川下流域産土器」(1) の諸特徴を示している。本稿では讃岐地域からの搬入土器について検討し、南方遺跡の位置づけを行う。

1. 香東川下流域産土器について

「香東川下流域産土器」は、弥生時代後期の讃岐地域、特に高松平野の香東川下流域で製作されたと考えられる土器群である。従来、播磨灘沿岸地域を中心に出土例が多く、「播磨系土器」・「雲母土器」と認識されていた土器の一群である (2)。香川県内の発掘調査事例の増加に伴い、この土器群が高松平野で比較的高い比率で出土した。また、丸亀平野の下川津遺跡で「下川津Ｂ類土器」(3) とされるものもこの土器群に含まれる。製作地は、高松平野中央部の香東川下流域の一角の半径５～６㎞の範囲であり、素地粘土採取地が石清尾山西南麓に推定されている (4)。特徴は、比較的精選された胎土中に微細な角閃石を多量に含み、色調は灰褐色～暗橙色を呈するとされている。

2. 出土土器の概要

袋状土壙から出土している讃岐系土器は６点確認できる。諸特徴を示すと、口縁部は強く折り返し、やや水平気味にのびる。端部は肥厚し、やや上方へ摘み上げられる。端面にはナデ調整により擬凹線文（110・168・305）と無文のものがみられる。頸部は内外面ともにヨコナデを施す。胴部外面は全体をタテハケ調整後に、底部から下半部にかけて縦方向のヘラミガキを加えている。また、外面調整で110は断続的なタテハケであり、305と同様に縦方向のヘラミガキが省略されているものもみられる。内面は底部から胴部最大径付近までヘラケズリを行い、上半部は指頭圧痕が残る。完形に復元できる110・168では肩が張り、胴部下半が膨らみ、球形化している。底部はわずかながら平底を止め、連続して立ち上がる。胎土の色調は、灰黄褐色から茶褐色をなしており、おおむね茶系統を呈している。胎土中には微細な角閃石を多量に少量ながら金雲母も含有している。しかし、139は形態・調整では共通しているが、胎土の色調は細粒を含む橙色をしており、他の５点とは異なる様相を示している。徳島県矢野遺跡 (5) の出土資料に類似している。以上の諸特徴から５点の土器は「香東川下流域産土器」であり、うち110・168・315は下川津Ｂ類土器である (6)。

時期については、110・121が袋状土壙から出土している在地産の二重口縁甕と共伴しており、後・Ⅳ（才ノ町Ⅰ～Ⅱ式併行）である。讃岐地方の下川津Ⅳ式に併行するものと考えられる (7)。

3. 旭川流域の讃岐系土器

岡山県内における香東川下流域産土器の出土遺跡は南部地域を中心に分布を示している。高松平野の推定製作地から半径50㎞圏内に県南部の拠点集落が含まれている。搬入状況は管見の範囲によると22遺跡140点に及び、時期は後・Ⅲ～古・Ⅰにみられる。ここでは、南方遺跡が位置する旭川流域の香東川下流域産土器の出土事例について述べる。旭川流域では、当該資料の遺跡数は10遺跡59

点と岡山県内では最も多く認められる地域[8]であり、東岸域と西岸域に区分できる。

東岸域は、６遺跡38点の出土事例がある。雄町遺跡では後・Ⅳの広口壺が１点出土している。百間川遺跡群では37点と流域全体の64％を占める。原尾島遺跡では後･Ⅳで甕10点･細頸壺１点、古･Ⅰで甕１点が出土している。沢田遺跡では甕４点がみられる。兼基遺跡では後・Ⅲ～Ⅳと甕２点、今谷遺跡では包含層から広口壺１点・甕６点が出土している。米田遺跡では後・Ⅲ～Ⅳにかけて広口壺４点・甕６点が出土している。古・Ⅰに井戸から大型の片口鉢があり県内では１例のみである。

西岸域は、４遺跡21点の出土事例がある。津島遺跡では後・Ⅲ～Ⅳにかけて広口壺１点、甕７点が出土している。伊福定国前遺跡では後・Ⅳで広口壺１点、甕１点がある。鹿田遺跡では後・Ⅳで甕６点がみられ、古・Ⅰには播磨系土器が顕著になることが指摘されている[9]。

出土する器種は甕が最も多く、広口壺・細頸壺・大型の片口鉢が認められるが、高杯・複合口縁壺・小形丸底壺、台付小形丸底壺、鉢の搬入は現段階では認められない。搬入時期は後・Ⅲから受容がみられ、継続的に後・Ⅳで最盛期を迎え、古・Ⅰで甕３点と減少傾向を示す。

４．模倣品の搬入（第224図）

旭川流域の出土している搬入土器の中には、調整技法・胎土においてやや異なるものが、２遺跡７点で認められる。

先述したが、南方遺跡出土の甕16・17は胎土に角閃石を多く含有するが、調整技法に下川津Ｂ類土器の外面調整はタテハケのち下半の縦方向のヘラミガキであるのに対して、胴部下半のはヘラミガキを省略している。

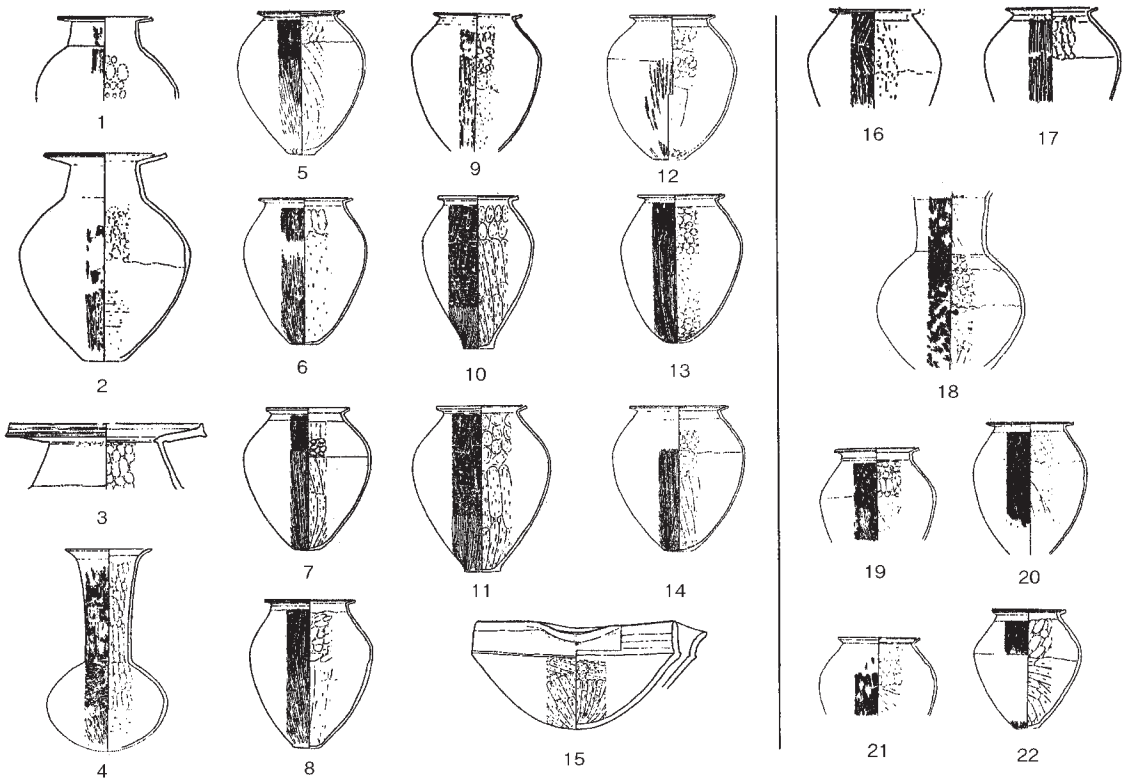
津島遺跡[10]の河道１出土資料がある。広口壺18は形態・調整技法は香東川下流域土器であるが、胎土には雲母を含む。甕19は外面調整にヘラミガキを省略している。甕20・21は外面調整にヘラミガキを省略し、胎土には雲母を含む。甕22は器壁がやや厚く、胎土に雲母を含む。

以上、讃岐系土器として搬入されている中にも数点ではあるが香東川下流域産土器を模倣した個体も含まれている。高松平野中央部の製作圏外に模倣品を製作する集落の存在が指摘されており[11]、複数の製作地からの搬入の可能性があると考えられる。

おわりに

本稿では、南方遺跡出土の土器を通して、讃岐系土器の搬入状況について考えてみた。従来、旭川流域出土の讃岐系土器とされていたもの多くは高松平野の香東川下流域産土器であり、南方遺跡・津島遺跡での模倣形態の土器も少量ながら搬入されていることが判明した。南方遺跡では讃岐系土器の他に阿波地域からの搬入品と考えられる土器の存在している。また、県南部地域では、古・Ⅰ（下田所式）に香東川下流域産土器の受容量が低下するが、逆にこの時期以降から高松平野も含めた讃岐地域全体への吉備系土器の出土が数量的に増加する傾向[12]にあることは注目される。今後、他地域を含めた上で、比較検討していかなければならないであろう。（水田）

この節を成すにあたり、高松市教育委員会の大嶋和則、山元敏裕の各氏から多くの教示をいただきました。また、高畑知功・渡邉恵理子・米田克彦・河合忍・石田爲成の各氏をはじめとする岡山県古代吉備文化財センター職員の諸氏には様々な機会において有益な助言を頂きました。末筆ながら感謝の意を表します。



雄町遺跡（1）　百間川今谷遺跡（2・9）　伊福定国前遺跡（3）　百間川原尾島遺跡（4～6）　百間川沢田遺跡（7）　百間川兼基遺跡（8）　百間川米田（当麻）遺跡（10・11・15）　鹿田遺跡（13・14）　南方遺跡（16・17）　津島遺跡（12・18～22）

第 224 図　搬入土器の諸形態（1/12）

註

（1）大久保徹也「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社　2003
（2）石野博信「川島遺跡 20 溝の土器について」『川島・立岡』太子町教育委員会　1971
今里幾次「播磨の雲母土器」『考古学研究』第 23 巻第 4 号　1977
（3）大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』香川県教育委員会　1990
（4）森下友子「胎土 1 類土器について」『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会　1994
（5）近藤玲『矢野遺跡（Ⅰ）』（財）徳島県埋蔵文化財センター　2002
（6）大嶋和則氏の御教示による。
（7）前掲註（3）
（8）草原孝典「吉備における庄内併行の土器」『庄内式土器研究』Ⅸ　庄内式土器研究会　1995
（9）山本悦世「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の土器」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 3 冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988
（10）島崎東ほか「津島遺跡 4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』173　岡山県教育委員会　2003
（11）大嶋和則「高松平野の集落間における庄内併行期の土器様相」『續文化財學論集』文化財学論集刊行会　2003
（12）信里芳紀「四国地域における吉備系土器の分布」『庄内式土器研究』XXV　庄内式土器研究会　2001

第３節　袋状土壙出土の木器について

南方遺跡では袋状土壙[1]から木製品が20点近く出土している。そのうち明らかに加工が施されたもの10点について第３章で報告している。管見の限り、岡山県内では貯蔵穴として報告されている袋状土壙や方形土壙からは木製品の出土はない[2]。今までにない出土例であるため、ここでそのまとめを行う。

木製品が出土した袋状土壙は７基である。その分布については恣意的なものは窺えない。全調査区の袋状土壙176基に対し４％という割合での出土は一般的な遺物とも言い難い[3]。材の樹種は農耕具に適したアカガシ類が主である。時期は伴出した土器などから弥生時代後期末に位置づけられる。以下、それぞれの木製品について概要を述べる。

W1は全長127㎝の棒状木製品で、丸太材を使用している。一方の端を蛤刃石斧の刃部のような形状に削り出し、もう一方の端を円錐形に尖らせている。両端ともに挫滅したような使用痕が認められる。擦痕は観察できない。出土当初から用途不明の木製品として扱っていたが、他府県に類例を求めたところ、形状の似たものが散見することが判明した。

縄文時代中期の掘り棒として報告されている富山県桜町遺跡の出土例では、掘削に使用したと思われる端部が片刃でヘラ状をなす[4]。大阪府鬼虎川遺跡の出土例は弥生時代中期の掘り棒と報告されている。一方の端部がやや幅広なので、鋤の範疇に入るかも知れない。もう一方の端部は先を尖らせている[5]。徳島県石井城ノ内遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての粘土採掘坑と考えられる土壙群から、棒状の木製品が複数出土しており、土掘り具であると報告されている[6]。鳥取県福岡遺跡の出土例は全長178㎝の棒状木製品で、先端部分を両側から削って薄く仕上げている。また、中央部の一部にも加工痕が観察できる。弥生時代の粘土採掘坑とみられる不定形の土壙の底面から20㎝程上層で水平に置かれた状態で検出されている[7]。富山県小杉流通業務団地内No21遺跡では粘土採掘坑から鋤とともに掘り棒が出土している。先端を削ってヘラ状に仕上げており、弥生時代後期の土器を伴っている[8]。福岡県湯納（ゆのう）遺跡からは全長75㎝ほどの棒状木製品が出土している。古墳時代のもので、種まきの際の掘り棒と報告されている[9]。

以上の類例から推測するに、W1は鋤に準ずる掘削具としてのいわゆる「掘り棒」と考えて差し支えないだろう。

W2は組合せ鋤である。刃部は朽ちて欠けており、使用痕については不明である。角張った肩は踏み込むために分厚く残してある。表面に炭化している部分が観察できる。火を受けた痕かも知れない。

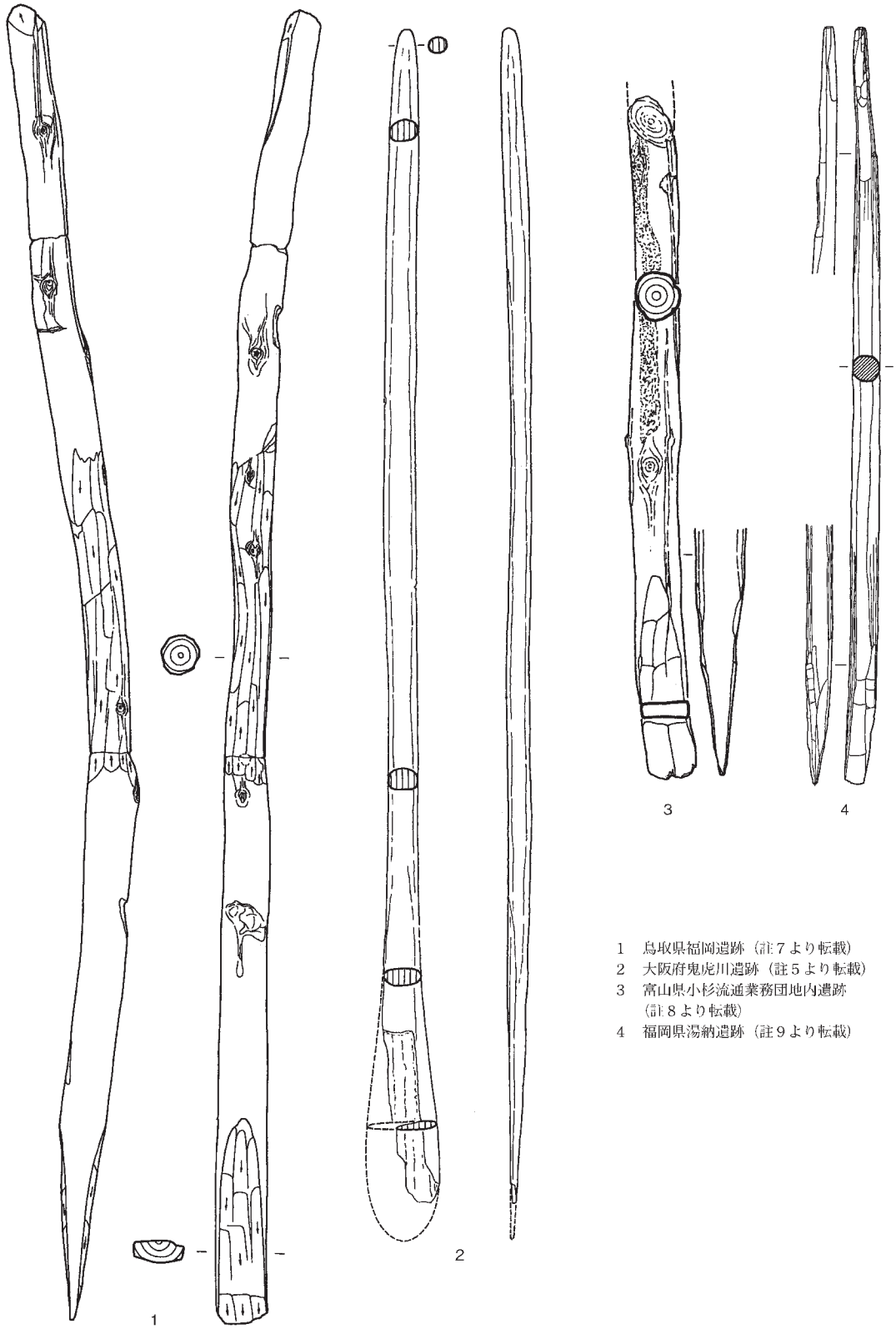
W3は曲柄平鍬か櫂と思われる木製品である。非常に薄く削り出している。先端部は磨滅している。

W4・10は枝状のものであるが、加工痕も観察できる。W1に比べ掘り具として使用するには細い。杖の類であろうか。大阪府巨摩廃寺遺跡では弥生時代後期の沼状遺構から南方遺跡の例とよく似た小枝・小幹が出土しており、製品製作のための準備材として報告されている[10]。

W5はナスビ形の又鍬の破片である。笠の下のくびれは外彎し、刃の部分から屈曲する。

W6は砧（横槌）である。側面に挫滅したような使用痕が認められる。前出の鳥取県福岡遺跡では似た形状の木製品がやはり不定形の土壙から出土している。同報告書では「杵」と報告している[11]。

W7は一木鋤とも櫂ともとれる形状をなす。鋤としては踏み込むための肩が明瞭ではなく、櫂にし



1　鳥取県福岡遺跡（註７より転載）
2　大阪府鬼虎川遺跡（註５より転載）
3　富山県小杉流通業務団地内遺跡（註８より転載）
4　福岡県湯納遺跡（註９より転載）

第 225 図　掘り棒の類例（1 は 1/8、他は 1/6）

掲載番号	出土地区	遺構	底面海抜高（cm）	出土層	出土レベル（cm）	底面からの比高（cm）	器種	計測値（mm）			樹種	木取り
								最大長	最大幅	最大厚		
W１	第Ⅱ調査区	袋状土壙 82	64	最下層上面	96	32	掘り棒	1270	55	48	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出
W２	第Ⅲ調査区	袋状土壙 96	67	最下層上面	114	47	鋤	625	168	13	コナラ属アカガシ亜属	板目材
W３	第Ⅳ調査区	袋状土壙 109	73	底面	83	10	鍬？櫂？	545	99	16.8	シイ属	板目材
W４	第Ⅳ調査区	袋状土壙 111	75	最下層上面	119	44	杖？	1132	60	48	樹皮	丸太材
W５	第Ⅳ調査区	袋状土壙 134	79	最下層上面	112	33	鍬	514	47	15	コナラ属アカガシ亜属	板目材
W６	第Ⅴ調査区	袋状土壙 147	58	最下層	90	32	砧（横槌）	323.5	87.5	80	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出
W７	第Ⅴ調査区	袋状土壙 147	58	最下層	66	8	鋤？櫂？	631	90	47.5	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出
W８	第Ⅴ調査区	袋状土壙 155	70	底面	92	22	槽	780	232	35	コナラ属アカガシ亜属	割材削出
W９	第Ⅴ調査区	袋状土壙 155	70	底面	87	17	？	418	50	32	ツブラジイ	芯持削出
W 10	第Ⅴ調査区	袋状土壙 155	70	底面	77	7	杖？	1234	40	40	広葉樹	丸太材

第２表　木製品一覧表

てはやや分厚い作りのように思われる。扁平に削りだした先端部は磨滅している。

W8 は槽と考えられる。厚みは 3.5㎝で、長辺側面の一部が刳ってある。土壙を掘削、あるいは使用する際に足場板として転用されたものであろうか。

W9 は用途不明の木製品であるが、何かの道具の一部と思われる。

木製品は、土壙の底面か最下層中、あるいは最下層の上面から出土している。出土レベルは土壙底面から上層 50㎝以内である。最下層は、基盤層の上がブロック状に堆積するか、ブロック状の上を含んでおり、短期間の人為的な埋め戻しが窺える土層である。よって木製品は、埋め戻し前か埋め戻し途中に廃棄もしくは何かの意図を持って置かれたと考えられる。第１節にあるとおり、流入したことは考え難い。そして、出土木製品のうち、可能性も含めて半数が農具の類、特に耕起具であることは、土壙の性格を考える上で示唆的である。（小松原）

註

（１）第４章第１節にあるように本報告書では土壙の形状から「袋状土壙」とよび、その用途については不明とする。

（２）木製品の遺存状況については、平地の湿潤な粘土層では残りやすく、丘陵上の遺跡では残存しにくいということも考慮に入れなければならない。

（３）第１章第２節のとおり、今回の調査ではその手法から土壙出土の遺物全てを確認したわけではない。従ってこの数値はあくまで参考値である。

（４）山本直人『縄文時代の植物採集活動－野生根茎類食料化の民俗考古学的研究－』渓水社　2002

（５）『鬼虎川の木質遺物―第７次発掘調査報告書第４冊―』財団法人東大阪市文化財協会　1987

（６）「石井城ノ内遺跡　石井曽我団地地区」『県営住宅（石井曽我団地）建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告　徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 46 集』　徳島県教育委員会　2003

（７）『一般国道９号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　鳥取県西伯郡淀江町福岡遺跡』
鳥取県教育文化財団調査報告 27』　㈶鳥取県教育文化財団　1992

（８）『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第７次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会　1985

（９）『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査第４集』
福岡県教育委員会　1976
『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　福岡市西区糸島郡前原町所在遺跡の調査第５集』
福岡県教育委員会　1977

(10)「巨摩・瓜生堂」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会　1981

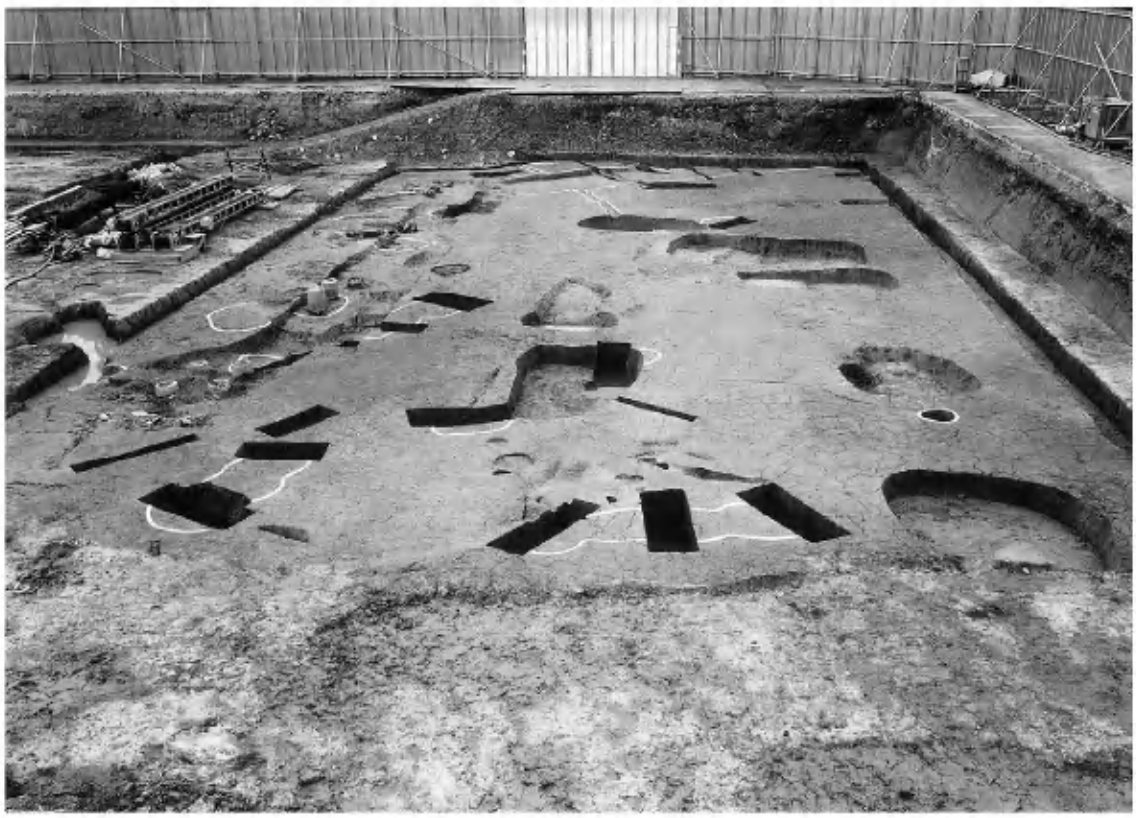
(11) 註（７）に同じ

1　第Ⅰ A 調査区南壁土層断面（北から）

2　第Ⅰ B 調査区全景（北西から）

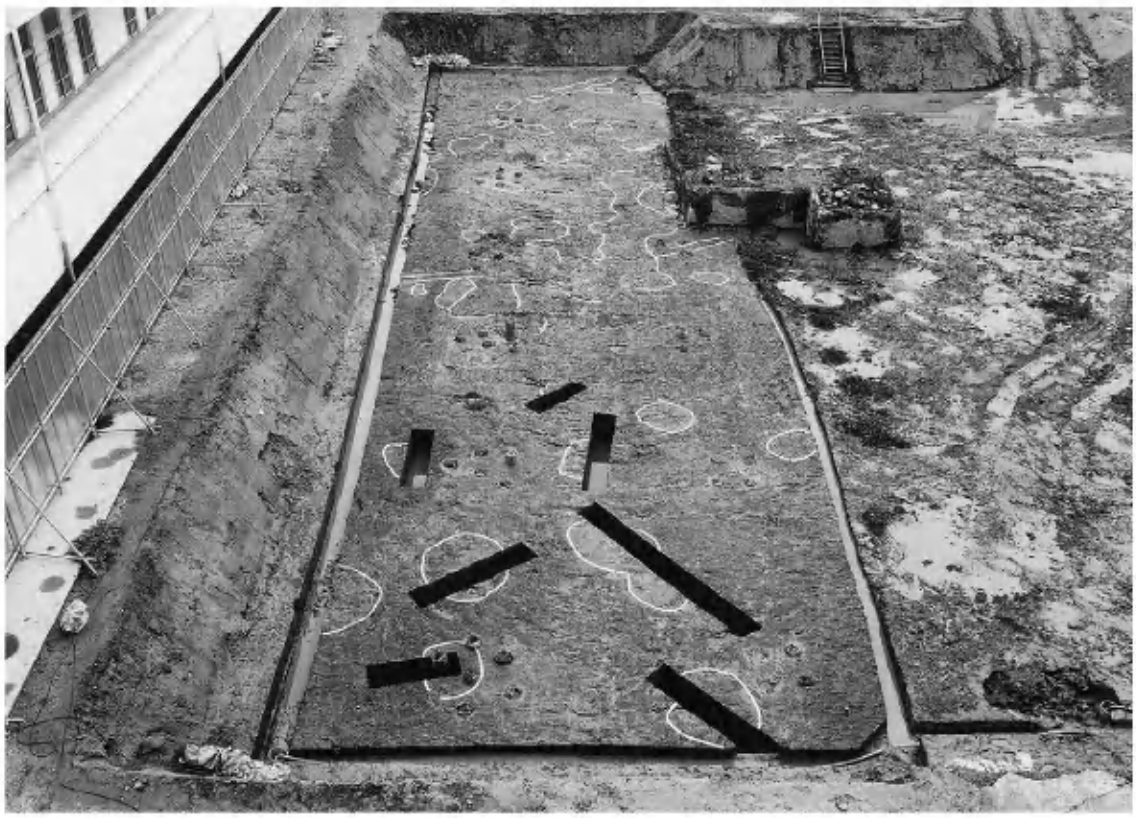
図版２

１　第Ⅱ調査区全景（北から）



２　第Ⅲ調査区全景（西から）

１　第Ⅳ調査区全景（西から）

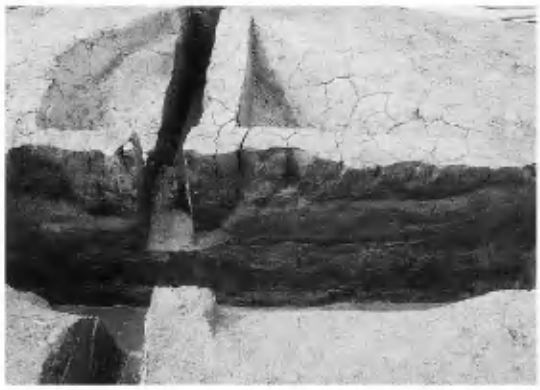


２　第Ⅴ調査区全景（西から）

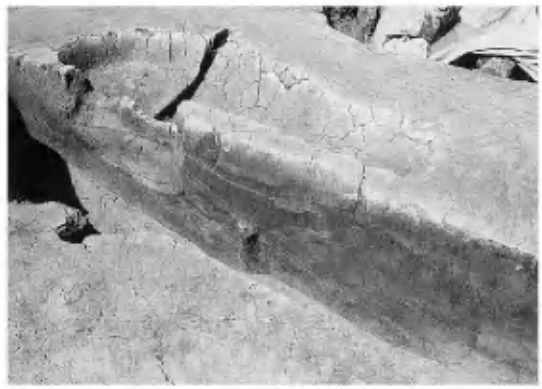
図版４

１　袋状土壙１（北東から）

２　袋状土壙２（南から）



３　袋状土壙４（南から）



４　袋状土壙５（北東から）

５　袋状土壙９（西から）

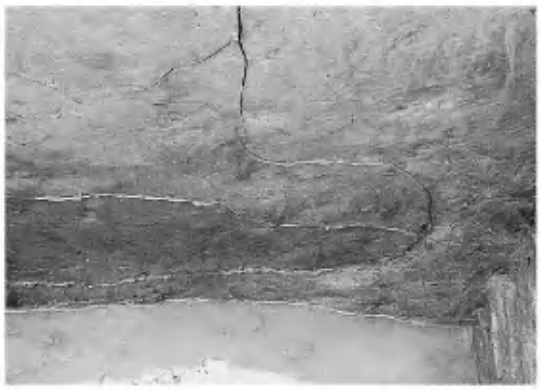
６　袋状土壙 10（南から）

７　袋状土壙 11（北西から）

８　袋状土壙 13（南西から）

1　袋状土壙 14（西から）

2　袋状土壙 15（南西から）



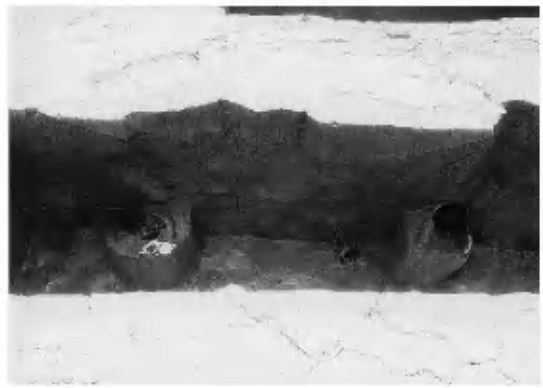
3　袋状土壙 16（東から）

4　袋状土壙 17（北から）

5　袋状土壙 22（東から）

6　土壙 1（東から）

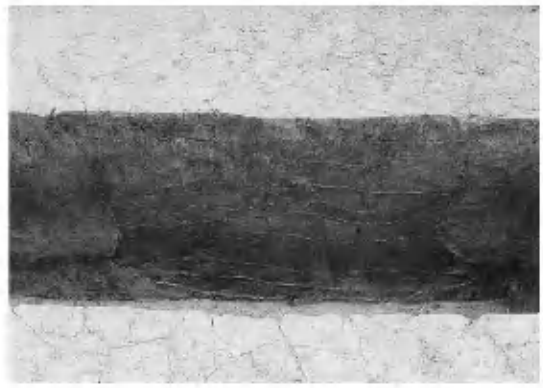
7　土壙 2（南から）



8　袋状土壙 25（東から）

図版 6

1　袋状土壙 26（北から）

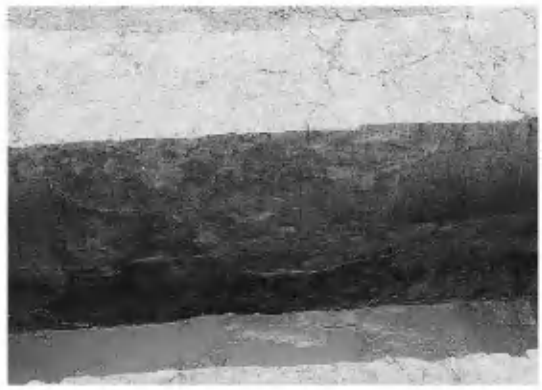


2　袋状土壙 29（南から）

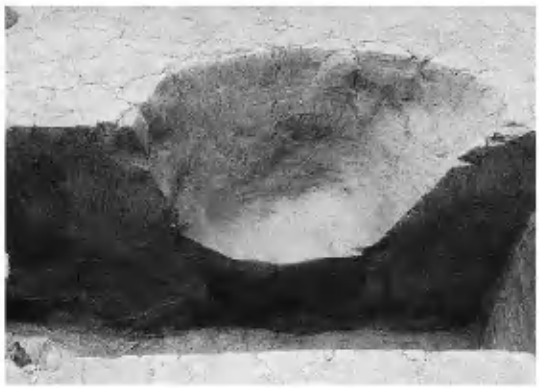
3　袋状土壙 31（南から）

4　袋状土壙 32（南西から）

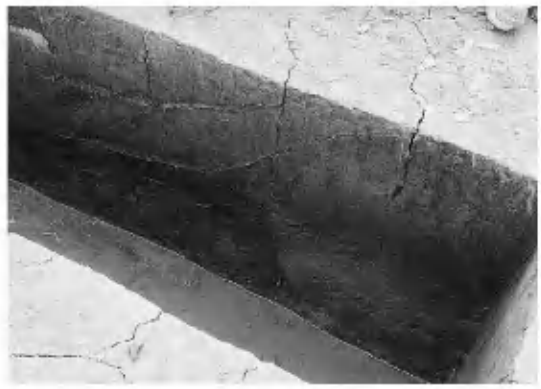
5　袋状土壙 37（南から）



6　袋状土壙 38（東から）



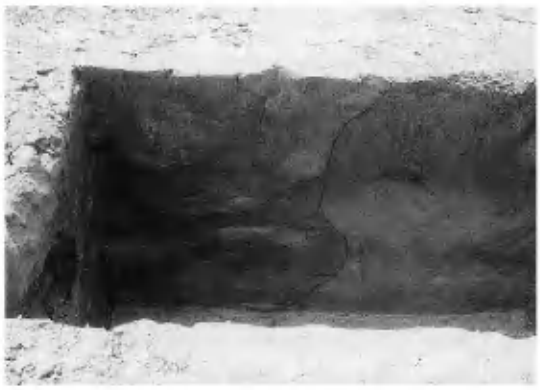
7　袋状土壙 41（東から）



8　袋状土壙 42（東から）

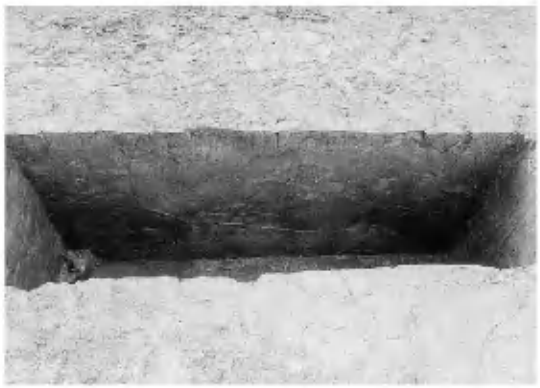
1　袋状土壙 42（北東から）

2　袋状土壙 42（北から）

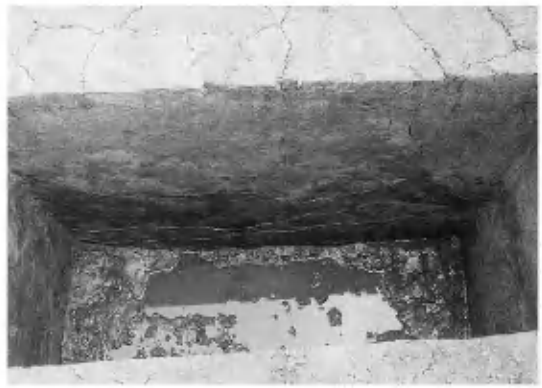


3　袋状土壙 45（東から）

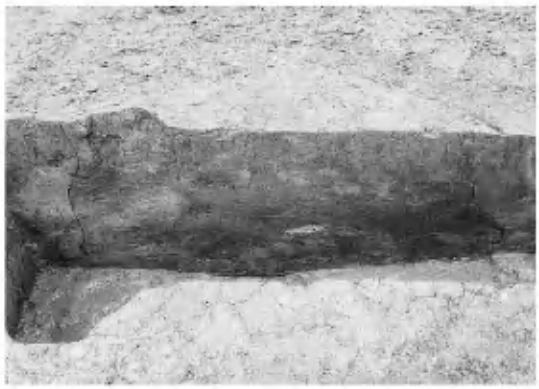
4　袋状土壙 46（西から）



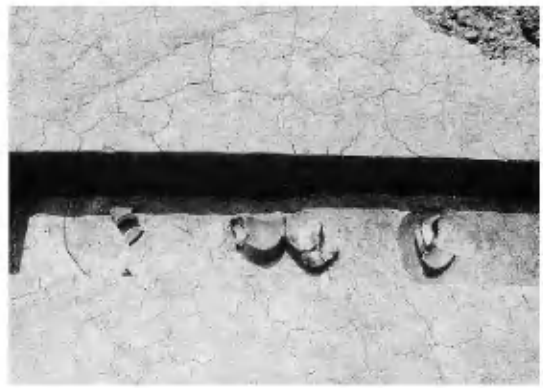
5　袋状土壙 47（南から）



6　袋状土壙 49（北から）



7　袋状土壙 52（西から）



8　袋状土壙 53（北から）

図版 8

1　袋状土壙 54（東から）

2　袋状土壙 55（北から）

3　袋状土壙 56（東から）

4　袋状土壙 59（南から）

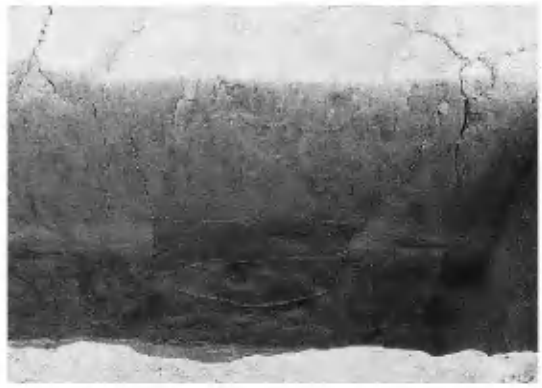
5　袋状土壙 60（東から）

6　袋状土壙 61（南東から）

7　袋状土壙 64（北から）

8　袋状土壙 64（北から）

1　袋状土壙 65（北から）

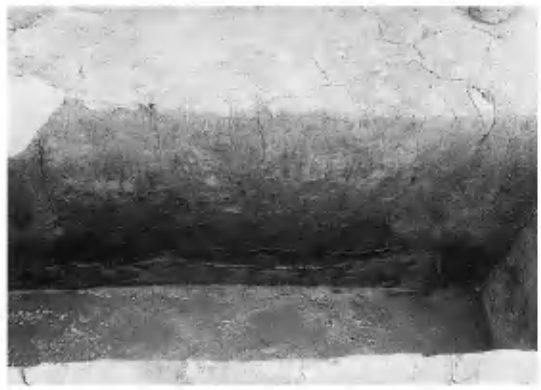


2　袋状土壙 69（西から）

3　袋状土壙 70（西から）

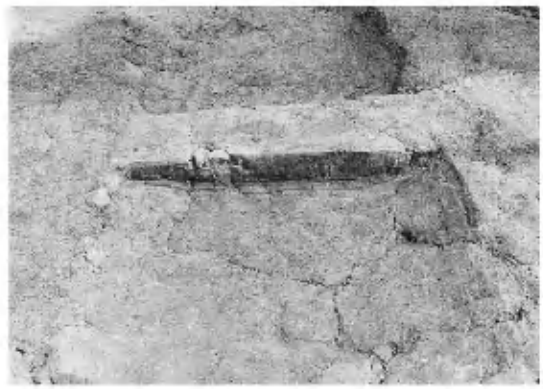
4　袋状土壙 71（南から）

5　袋状土壙 72（南から）



6　袋状土壙 73（東から）

7　溝 1（南から）

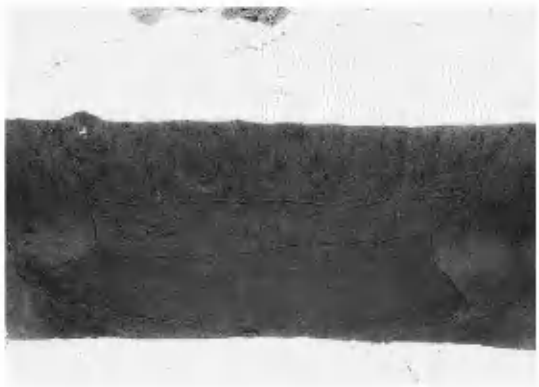


8　溝 2（南から）

図版 10

1　袋状土壙 74（北から）

2　袋状土壙 74（北から）

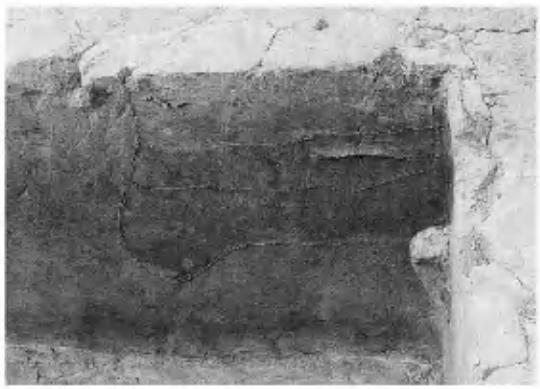


3　袋状土壙 75（東から）

4　袋状土壙 77（北から）

5　袋状土壙 78（南から）

6　袋状土壙 79（北から）



7　袋状土壙 80（南から）

8　袋状土壙 81（南から）

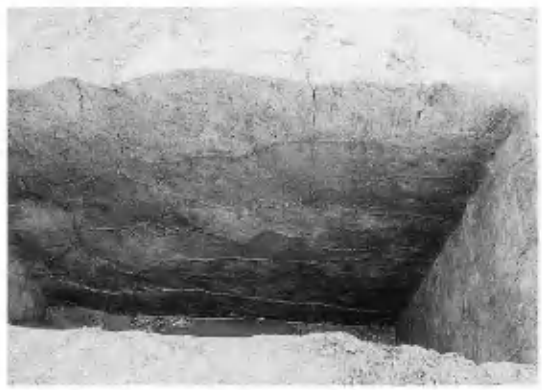
1　袋状土壙 82（南から）

2　袋状土壙 82（南から）

3　袋状土壙 82（南から）

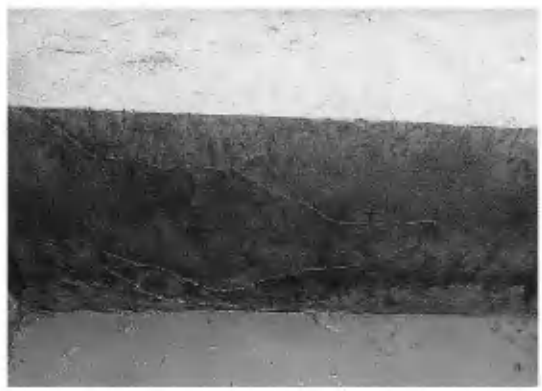
4　袋状土壙 83（南から）

5　袋状土壙 84（東から）



6　袋状土壙 85（南から）

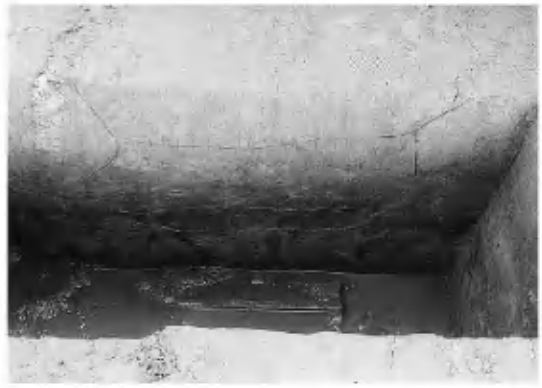
7　袋状土壙 86（南から）



8　袋状土壙 87（南から）

図版 12

1　袋状土壙 88（北から）



2　袋状土壙 89（北東から）

3　袋状土壙 90（北西から）

4　袋状土壙 91（東から）

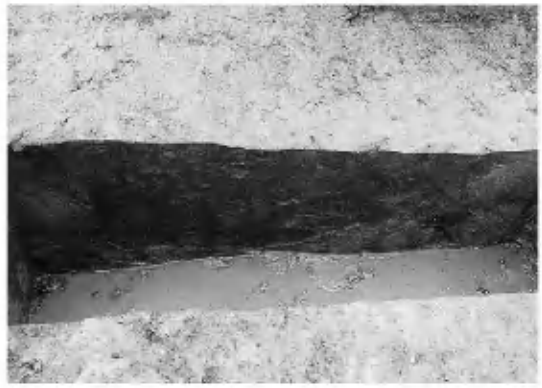
5　袋状土壙 92（北東から）

6　袋状土壙 93（北から）

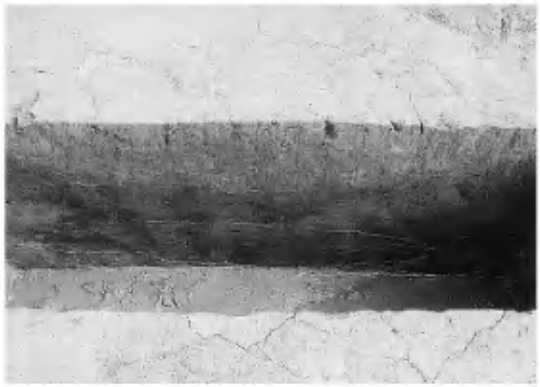
7　袋状土壙 94（南東から）

8　袋状土壙 96（北から）

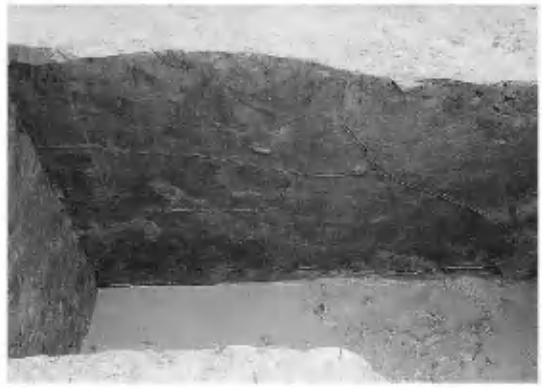
1　袋状土壙 96（東から）



2　袋状土壙 97（北から）



3　袋状土壙 98（北西から）

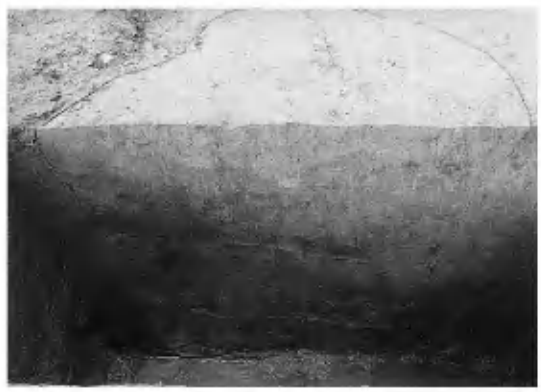


4　袋状土壙 99（西から）

5　袋状土壙 100（南西から）

6　袋状土壙 101（南から）

7　袋状土壙 102（東から）

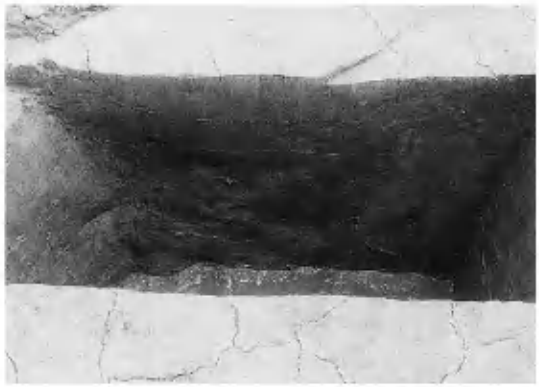


8　袋状土壙 103（南西から）

図版 14

1　袋状土壙 104（南から）

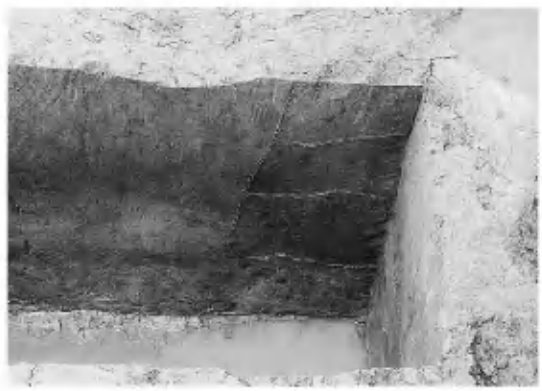
2　袋状土壙 104（南から）



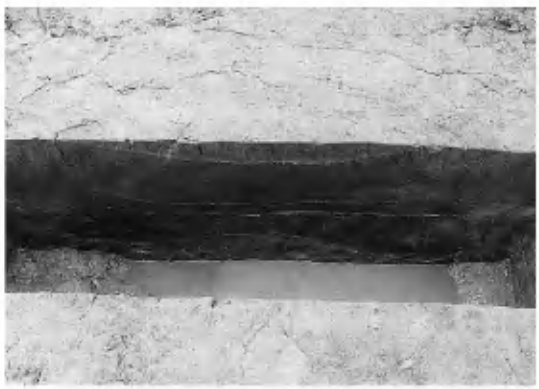
3　袋状土壙 106（北西から）

4　袋状土壙 107（東から）

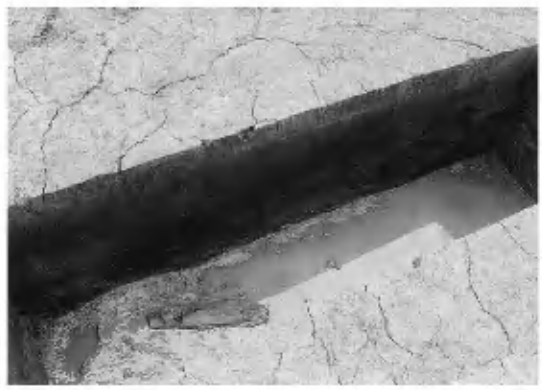
5　袋状土壙 107（東から）



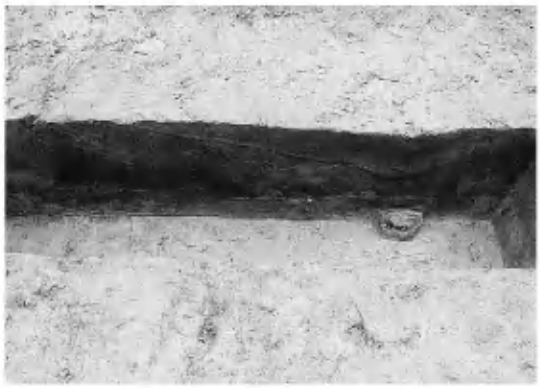
6　袋状土壙 108（北西から）



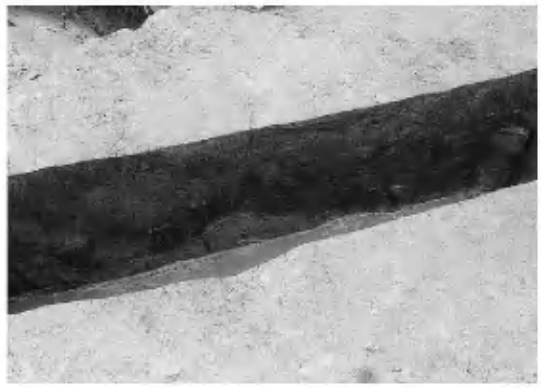
7　袋状土壙 109（東から）



8　袋状土壙 109（東から）



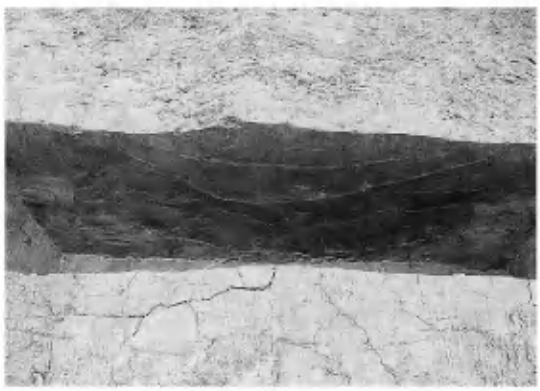
1　袋状土壙 110（西から）



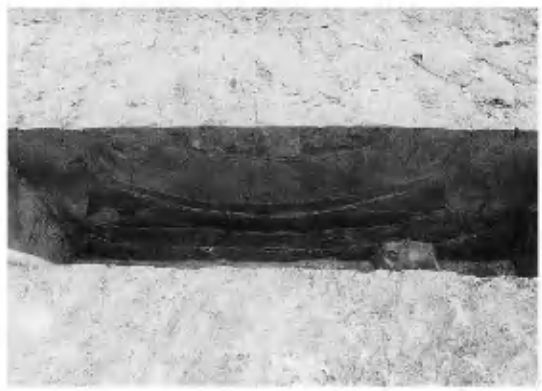
2　袋状土壙 111（北から）

3　袋状土壙 111（北から）

4　袋状土壙 111（北から）



5　袋状土壙 112（西から）



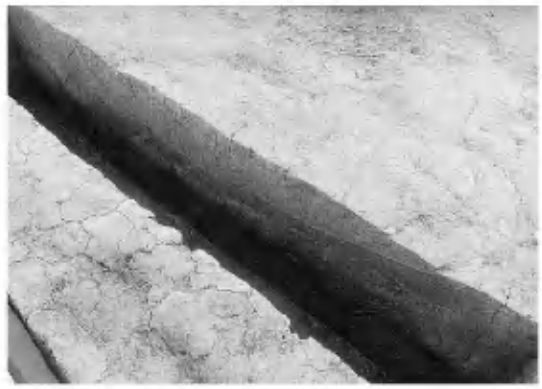
6　袋状土壙 113（南から）

7　袋状土壙 113（南から）

8　袋状土壙 114（南から）

図版 16

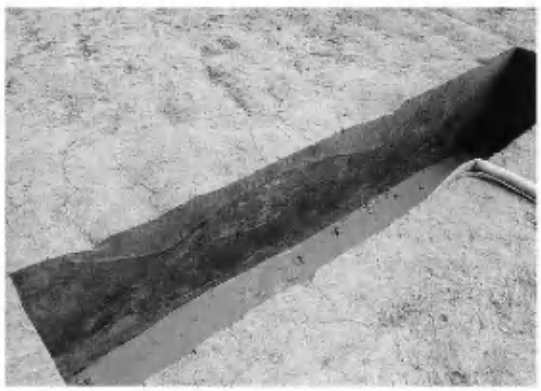
1　袋状土壙 115（北東から）



2　袋状土壙 116（北から）

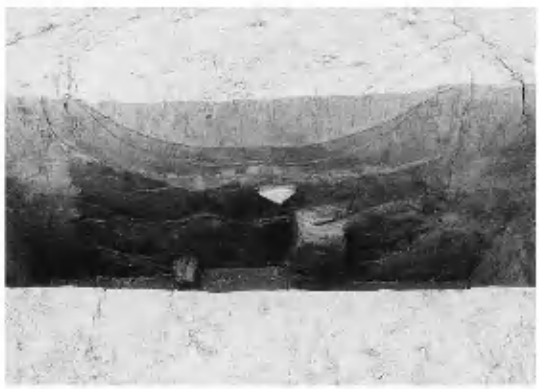
3　袋状土壙 117（北から）

4　袋状土壙 118（北東から）

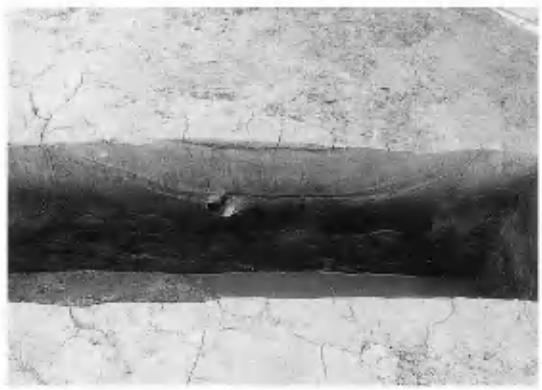


5　袋状土壙 118（北西から）

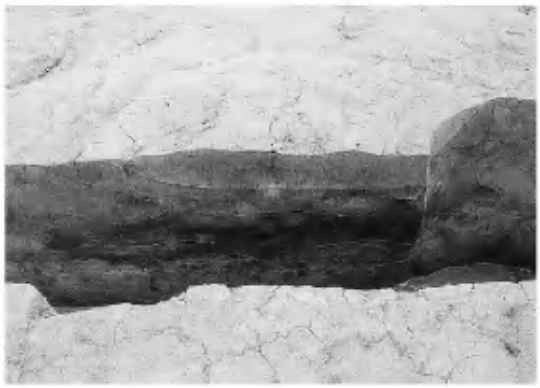
6　袋状土壙 118（南西から）



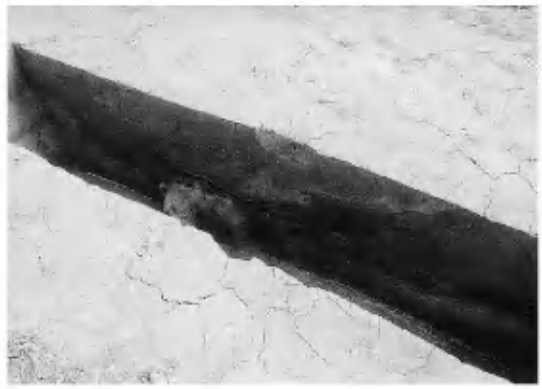
7　袋状土壙 119（南から）



8　袋状土壙 120（北から）



1　袋状土壙 121（北から）



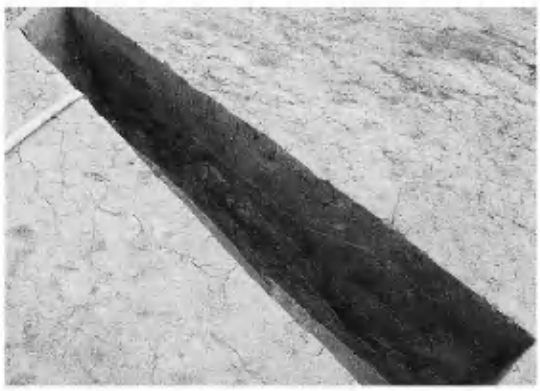
2　袋状土壙 122（北西から）

3　袋状土壙 122（西から）

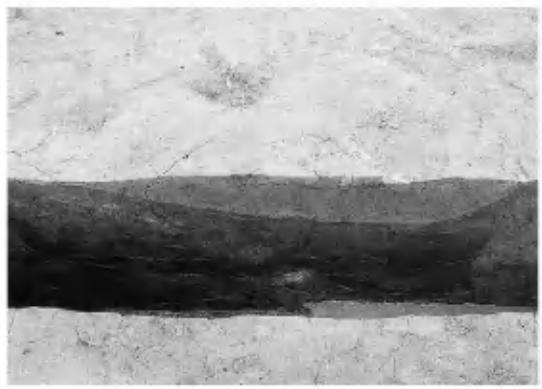
4　袋状土壙 123（北から）

5　袋状土壙 124（北から）

6　袋状土壙 125（西から）



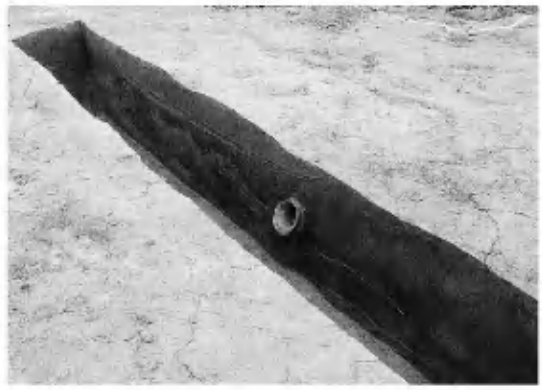
7　袋状土壙 126（北西から）



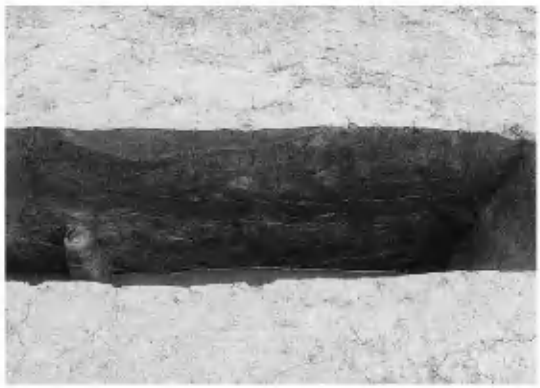
8　袋状土壙 127（南西から）

図版 18

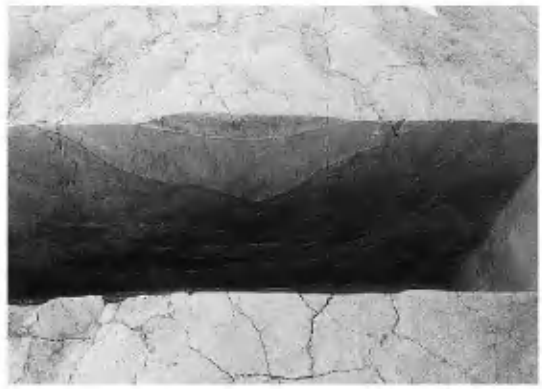
1　袋状土壙 127（南から）



2　袋状土壙 128（西から）



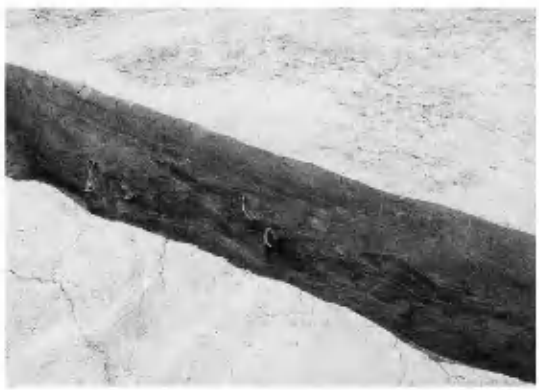
3　袋状土壙 130（北から）



4　袋状土壙 131（西から）

5　袋状土壙 132（東から）

6　袋状土壙 133（南から）

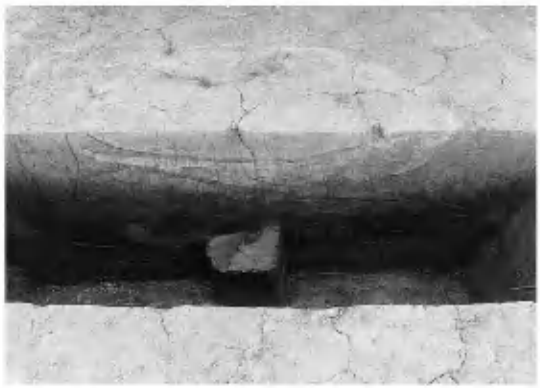


7　袋状土壙 134（北から）

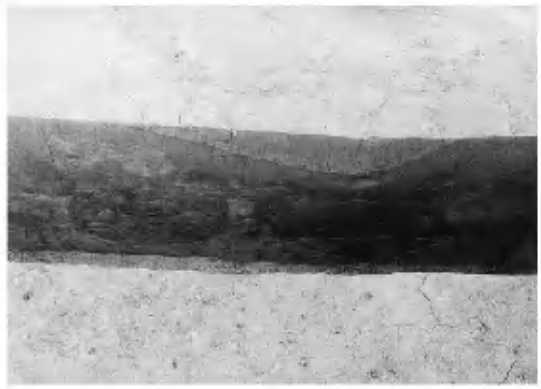
8　袋状土壙 134（北西から）

1　袋状土壙 135（西から）

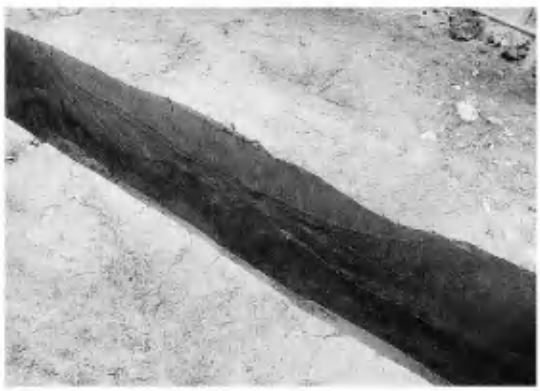
2　袋状土壙 135（西から）



3　袋状土壙 136（北西から）

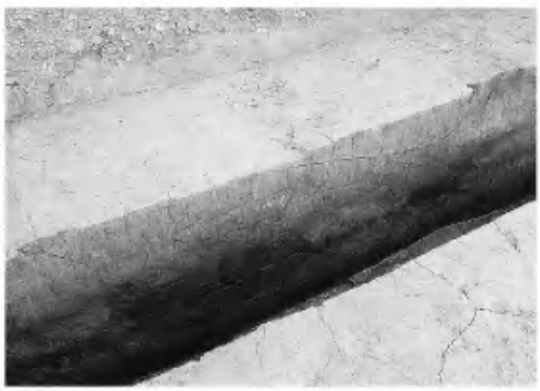


4　袋状土壙 137（北西から）



5　袋状土壙 138（西から）

6　袋状土壙 139（西から）

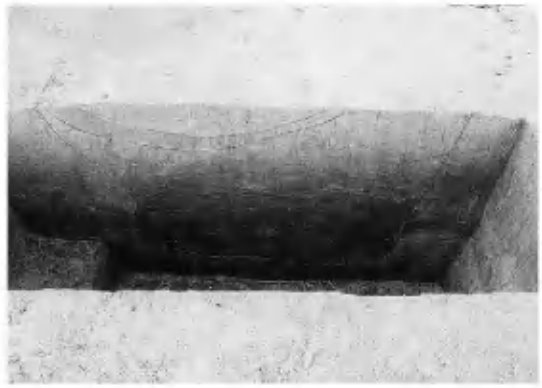


7　袋状土壙 140（東から）

8　袋状土壙 140（西から）

図版 20

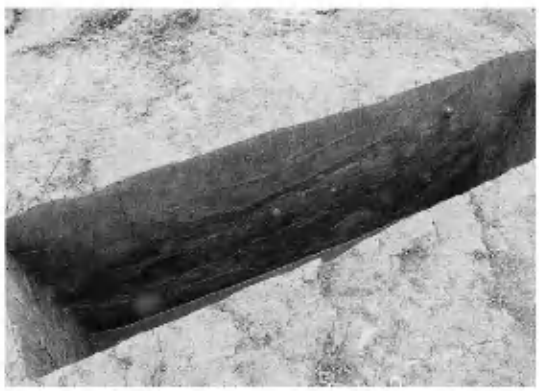
1　袋状土壙 141（西から）



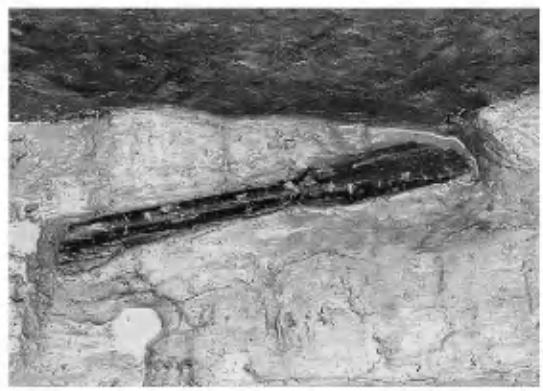
2　袋状土壙 142（北から）

3　袋状土壙 143（西から）

4　袋状土壙 144（西から）



5　袋状土壙 147（北西から）



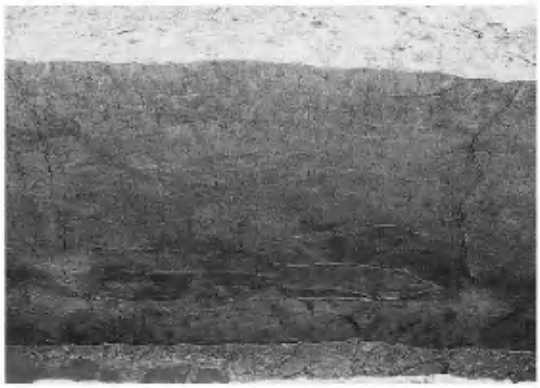
6　袋状土壙 147（南から）

7　袋状土壙 147（南から）

8　溝 1（南から）

1　袋状土壙 148（西から）

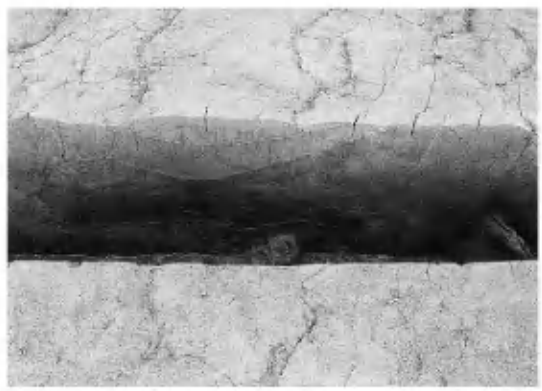
2　袋状土壙 149（南から）



3　袋状土壙 150（南から）

4　袋状土壙 151（南から）

5　袋状土壙 152（西から）

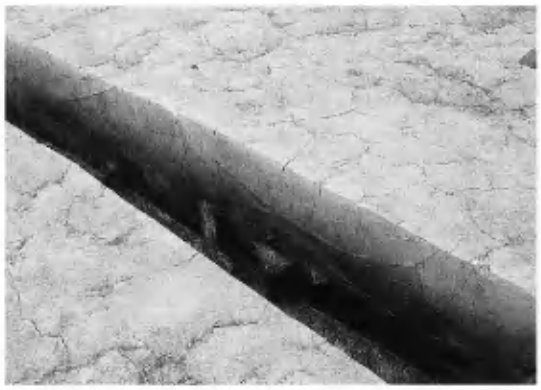


6　袋状土壙 153（南から）

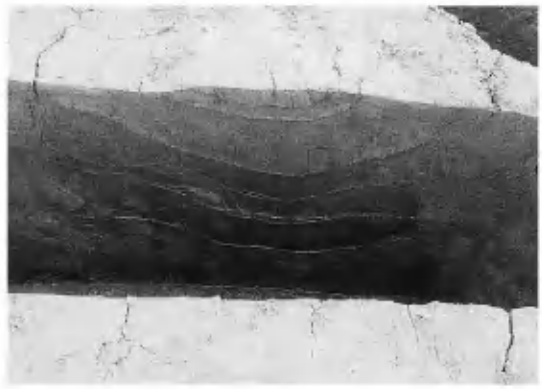
7　袋状土壙 153（南から）

8　袋状土壙 153（南西から）

図版 22



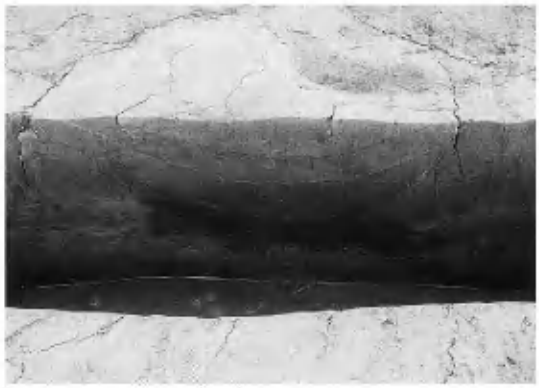
1　袋状土壙 153（南東から）



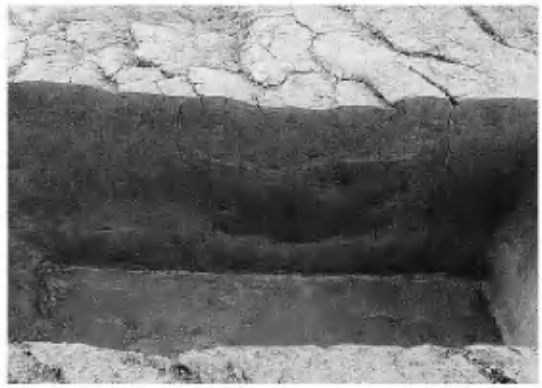
2　袋状土壙 154（北西から）

3　袋状土壙 155（南東から）

4　袋状土壙 155（南東から）

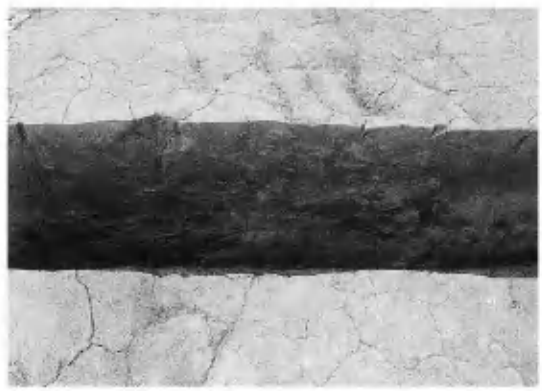


5　袋状土壙 157（南から）

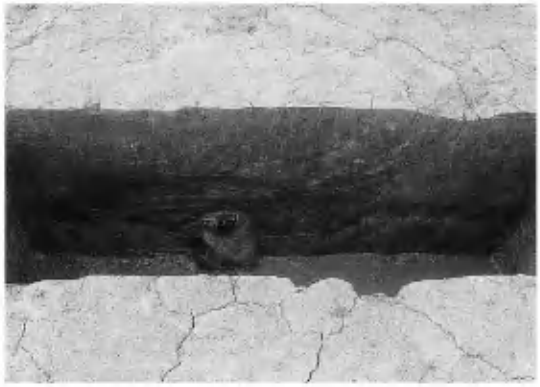


6　袋状土壙 158（南東から）

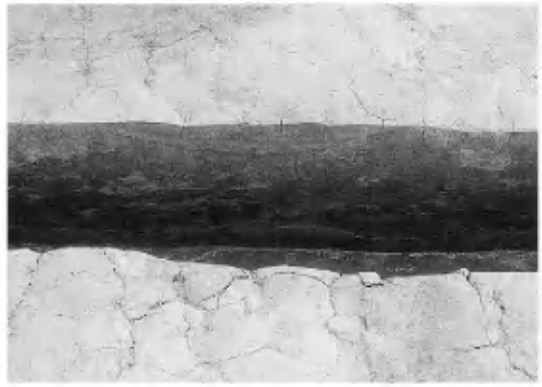
7　袋状土壙 159（西から）



8　袋状土壙 160（東から）

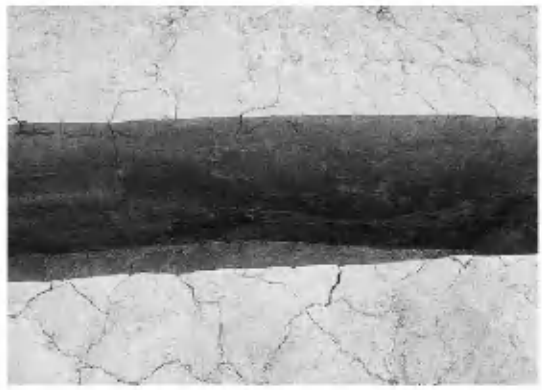


1　袋状土壙 161（東から）



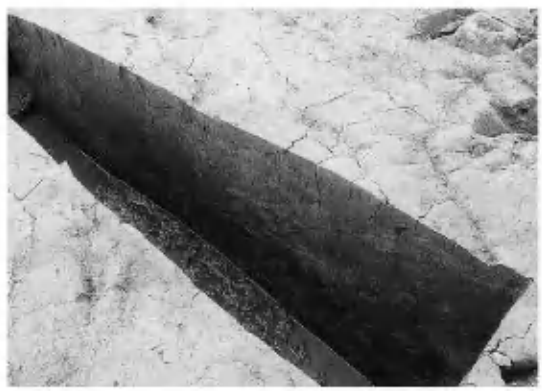
2　袋状土壙 162（北から）

3　袋状土壙 162（北から）



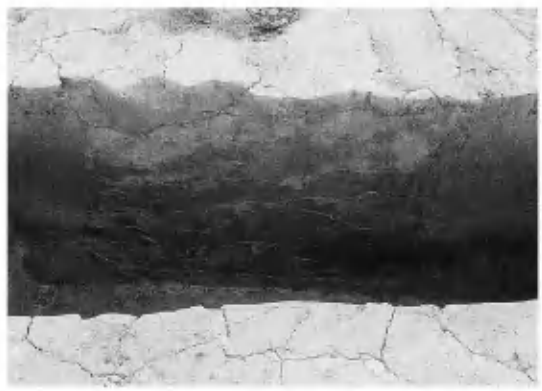
4　袋状土壙 162（北から）

5　袋状土壙 162（南東から）



6　袋状土壙 162・164（東から）

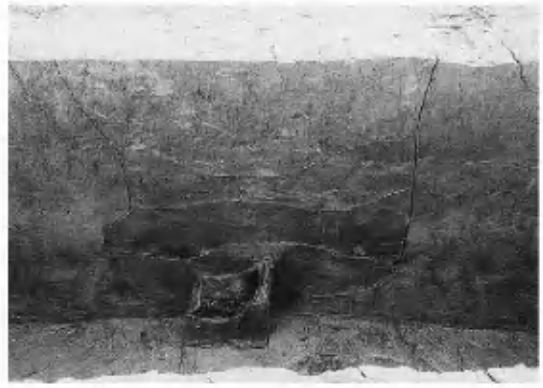
7　袋状土壙 162・164（南東から）



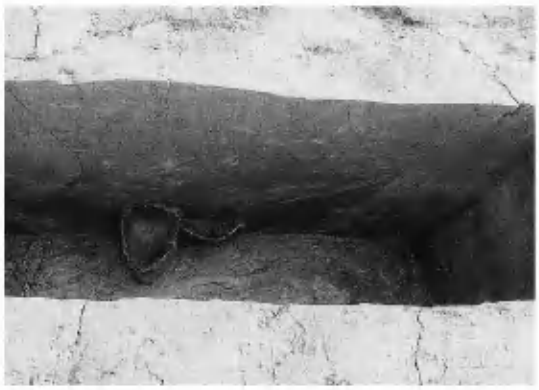
8　袋状土壙 165（北東から）

図版 24

1　袋状土壙 166（西から）



2　袋状土壙 168（北東から）



3　袋状土壙 169（西から）

4　袋状土壙 170（東から）

5　袋状土壙 171（南から）

6　袋状土壙 172（北から）

7　袋状土壙 173（南から）

8　袋状土壙 174・175（北西から）

1　袋状土壙 175（南東から）

2　袋状土壙 175（北東から）

3　袋状土壙 176（東から）

4　第Ⅲ区包含層遺物出土状態（北から）

出土遺物 1

4

26

30

33

76

91

105

110

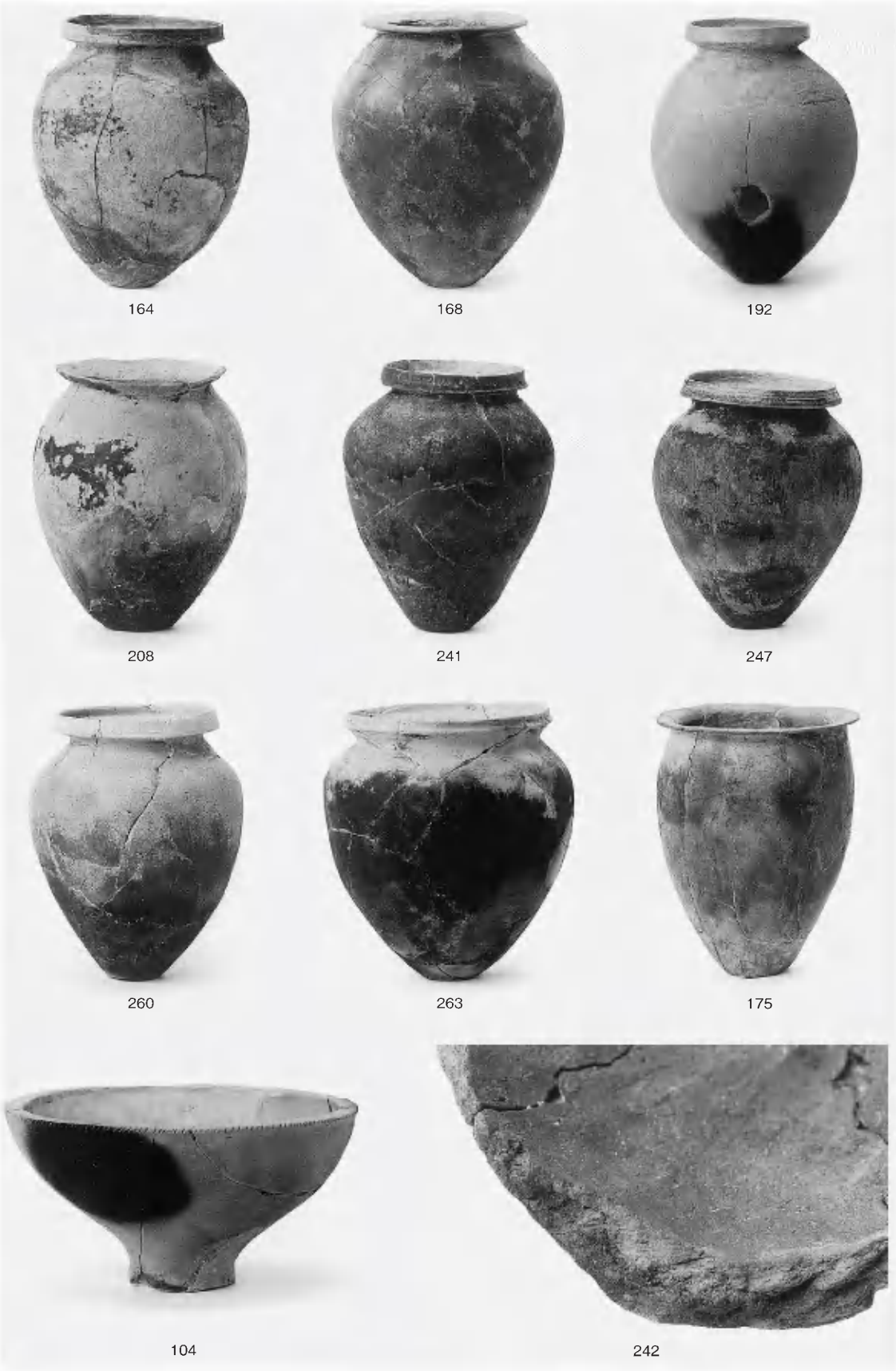
135

139

152

154

出土遺物２



出土遺物３

報告書抄録

ふりがな	みなみがたいせき
書名	南方遺跡
副書名	広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁庁舎建て替えに伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	200
編著者名	下澤公明・岡田博・小松原基弘・水田貴士
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻 1325-3　TEL086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下 2-4-6　TEL086-224-2111
発行年月日	西暦 2006 年 2 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
南方遺跡（みなみがたいせき）	岡山県岡山市南方（おかやまけんおかやましみなみがた）	33201	1499	34° 40′ 07″	133° 55′ 42″	2004. 4.1 ～ 2004.11.30	3,398.49	裁判所庁舎の建て替え工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南方遺跡	集落	弥生時代中期 弥生時代後期	土壙 袋状土壙 溝	弥生土器 石器・土製品・木器	弥生時代後期末の袋状土壙群の密集域を確認

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 200

南 方 遺 跡

広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁
庁舎建て替えに伴う発掘調査

平成 18 年 2 月 28 日　印刷
平成 18 年 2 月 28 日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻 1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下 2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁 871-2

R100
本文用紙は古紙配合率100%の生産を心掛けています

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 200

南 方 遺 跡

広島高裁岡山支部・岡山地家簡裁
庁舎建て替えに伴う発掘調査

平成 18 年 2 月 28 日　印刷
平成 18 年 2 月 28 日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻 1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下 2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁 871-2

R100
本文用紙は古紙配合率100%の生産を心掛けています